THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿七年 第七號

第二百八十號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

體力養成叢書

（一）大澤醫學博士述 **冷水浴と冷水摩擦** 定價二十錢 郵税四錢

（二）二木醫學博士述 **腹式呼吸** 定價廿五錢 郵税四錢

（三）栗本醫學博士述 **海水浴** 定價廿五錢 郵税四錢

（四）樫田醫學士述 **滋養物の攝取** 定價九十錢 郵税六錢

狩野病院長 狩野謙吾先生著 十二版

神經衰弱自療法

定價六十錢 郵税六錢

此書は神經衰弱症治療の專門大家として有名な狩野先生が各種の神經衰弱症例へば**腦**神經の衰弱症**胃**神經の衰弱症**生殖器**神經の衰弱症等の治療法を通俗に而かも詳細に講述せられたものです斯病に惱める不幸な方が是非御一讀の必要ある書物だと思ひます

發行所

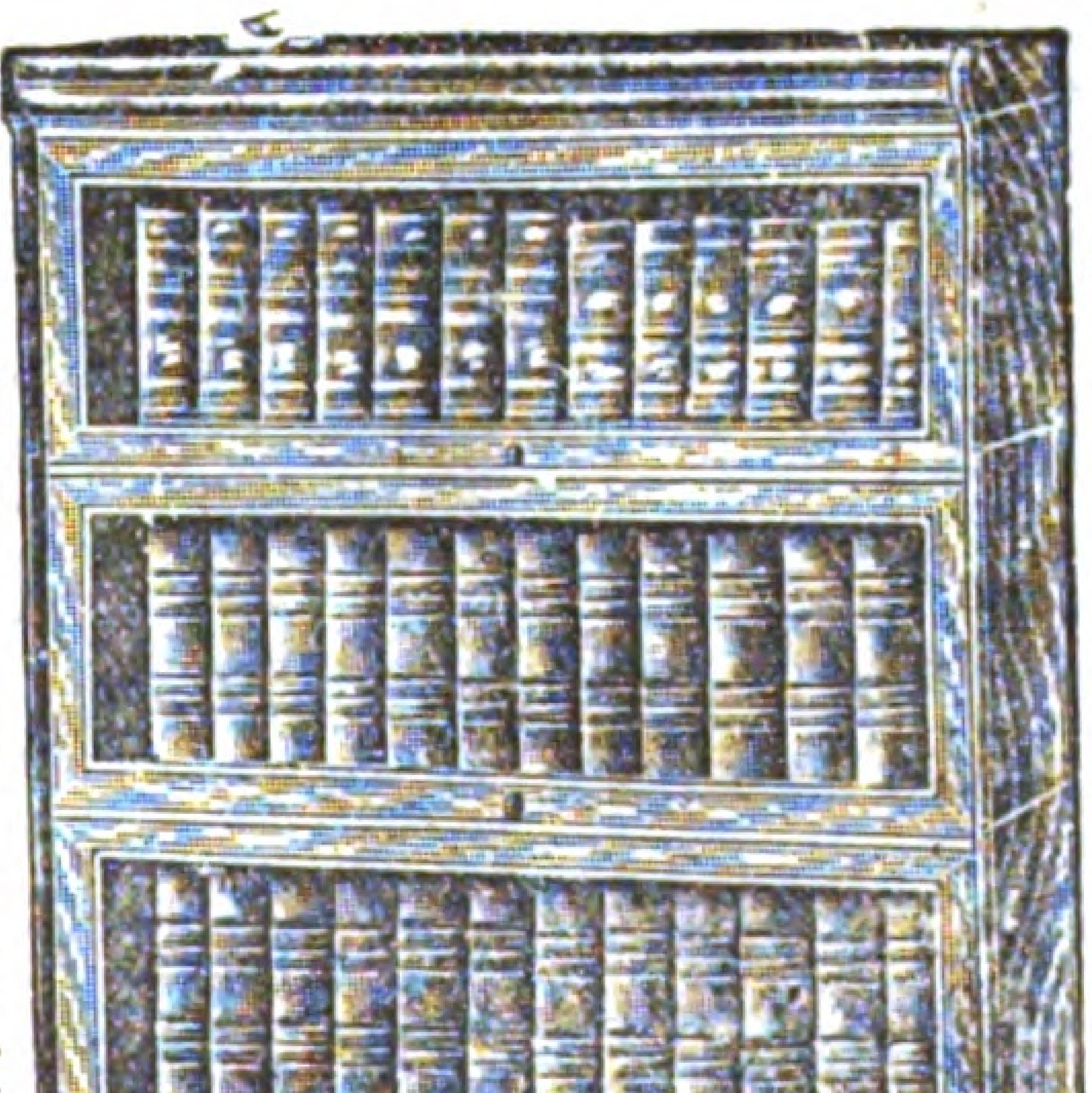
東京市日本橋區檜物町八（振替二一〇三〇番）**文星堂書店**

東京市銀座大通新橋際（振替東京二〇〇〇番）**新橋堂書店**

大隈伯爵家

を始め其他の諸名家より多數御注文の榮を辱ふす以て本器が如何に優秀なるかを知られよ!!

新橋堂式 組合せ本箱



△藏書の增減に從ひ自由に其大さを伸縮し得べし
△室内の構造に應じて適宜に配置し得べし
△硝子戸の開閉に巧妙なる構造を有す
△書物を分類するに最も適當なる構造を有す
△形狀優雅色彩美麗しかも堅牢此上なし

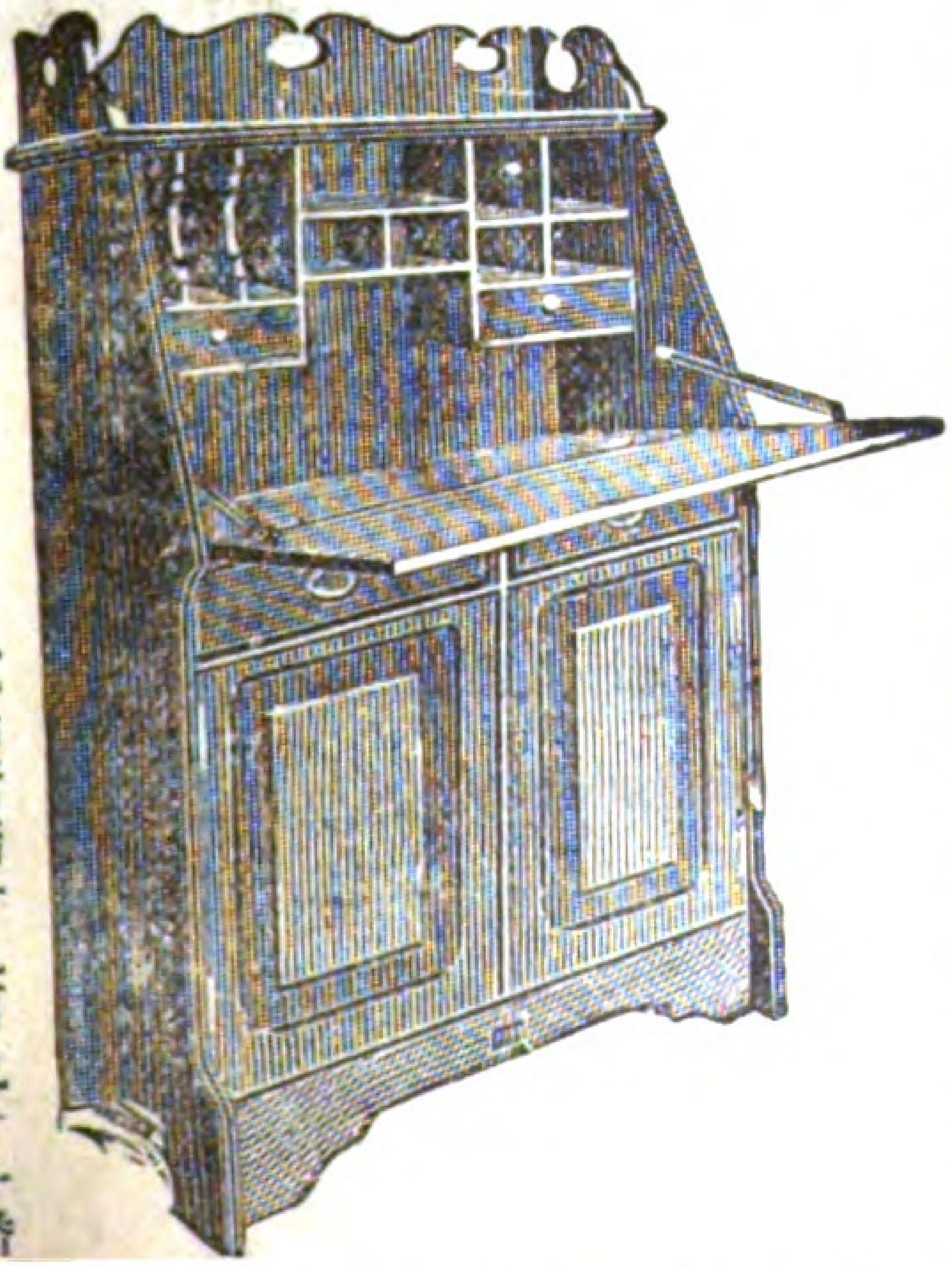
定價
金二十六圓 檜製
金二十八圓 欅製
金三十圓 櫻製
運賃荷造費御自辨

△之れを要するに最善最良の本箱!!
（構造を示せる目錄は郵券二錢封入御申越次第進呈）

理想のデスク

＝事務用定價金廿五圓＝書見用定價金廿二圓＝荷造費各一圓八十錢＝運賃は御自辨

●デスクの上部は事務用又は書見用に用ひられド部は帳簿棚又は書棚に使用するやうに構造されて居ります●夫故日常必要のもの帳簿又は書物を最も手近に配置し得て便利此上もありません●デスク使用後は机板を閉ぢて其大さを短縮する事が出來ます●材料は兩デスク共檜で塗は木地色のラック仕上げてす



發賣元 東京市京橋區銀座大通新橋際 **新橋堂** 電話新橋十九百九十一番 振替貯金口座二百番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

田岡嶺雲先生譯註
(再版)

和譯維摩經

附 和譯般若心經

佛經八萬四千卷、就中啻に方外緇衣の人に重んぜらるゝのみならず、亦其所説の幽緲と其文字の古奥とを以て古より詩人文人の間に喜ばるゝ者、維摩及般若心經の右に出づる者なし、今此二書をとりて逐字譯を施し、別に卷末に原文を添へて一冊となしたる者即ち此書なり、佛教の眞諦を味はんとするもの及び苟も文章に志ある者は一本を座右に備へ、明窓の下、淨几の上、爽晨靜夜香を焚いて之を讀め

全一冊 總クロース
正價七十錢
郵税八錢

高橋五郎先生譯

ベーコン論説集

(十一版)

要目

◎眞理を論ず ◎死を論ず ◎富を論ず ◎美を論ず ◎復讐を論ず ◎逆運を論ず ◎迷信を論ず ◎狡猾を論ず ◎自愛を論ず

◎交友を論ず ◎商議を論ず ◎猜疑を論ず ◎攝生を論ず ◎談話を論ず ◎幸運を論ず ◎稱讃を論ず ◎親子を論ず ◎忿怒を論ず

◎戀愛を論ず ◎旅行を論ず ◎貴族を論ず ◎豪膽を論ず ◎園囿を論ず ◎統治を論ず ◎忠告を論ず ◎遲疑を論ず ◎似智を論ず

◎高地位を論ず ◎無神説を論ず ◎功名心を論ず ◎習慣と教育を論ず ◎青年と老年を論ず ◎結婚と獨身を論ず ◎虚僞と假扮を論ず ◎學問及讀書を論ず ◎名譽と聲聞を論ず

◎邦國の眞偉大を論ず ◎人に於ける天性を論ず ◎事物の變遷を論ず ◎娼妓及羨望を論ず ◎畸形及癈疾を論ず ◎仁愛慈悲を論ず ◎禮式と禮儀を論ず ◎從者及朋友を論ず ▲外十四章

全一冊 總クロース
正價壹圓貳拾錢
郵税拾貳錢

發行所 東京神田雉子町 玄黄社 電話本局二〇九番 振替東京七九五番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

で極めて低廉なる價格を以て頒つ

名辭典

本の現勢を語る■■■■■

を得べし。政治家教育家宗教家實業家軍人の各職業に對して實際の良友たるは勿論、又娯樂遊覽の人にとりて本書は此上なき案内者たるや疑なし。

優先特別販賣

本書の價値の如何に貴重なるかを知りたる諸君は更に本書を利用する事によりて得べき效益の廣大無邊なるに想到すべきを信ず。而して著者が本書を編纂したる主旨とする所は決して書齋の珍玩たり裝飾たらしむるに止まらず。日々活用によりて各自が直接間接に利する所あらんを望むの一事あるのみ。出版者は此意を體して本出版による利益を度外視して玆に特別優先販賣法を規定せり。卽ち著者の盛意及び出版者の名譽として一萬部を限り購買者各位に優先の特權として一部三卷金九圓の廉價を以て提供す。而かも部數の盡くると同時に此の特權を撤回す。好學の士よ希くは此の好機を逸せず迅速に申込まれんことを。

內容體裁價格

全三册 索引共
上等角背皮製 大本
縱九寸横六寸五分
六號活字三十一行四段組
紙數千九百五十頁

定價金拾壹圓
壹萬部限
優先特別販賣價額
金九圓

送料 市內無料 內地金六十錢 臺灣・樺太・朝鮮・淸國 壹圓
見本呈上 送料貳錢

各書店

三省堂書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

五千年間史實の精髓一書に萃まる

文學博士　坪井九馬三先生著

最新刊

西洋史要

菊判美本全一册　四百六十八頁

挿畫四十七個　地圖十八葉入

定價金貳圓

送料内地拾貳錢臺樺鮮滿二十錢

本書は博士が西洋史を講義せらるゝ時、備忘の主旨にて携帶せらるゝ自撰の西洋史要略なり。其記事は上古に起り、一昨年に至る迄、上下五千年に亘れる史實を僅かに數百頁中に藏めたるものにして、說明を補助する爲には多數の挿繪地圖及び原語索引を以てしたれば、一般の學習者には最も適當なる參考書たるべく文部省檢定受驗者、教員諸君並に高等の學生に取りては個强の韜略なりとす。本書は博士愛用の手譯本を鉛槧に附したるものなれば、之を熟讀するの士は、常に博士に親炙するの感あらむ。今や西洋史の參考書は其類頗る多し。而も輕便にして堅實なる、記事のアップツーデートなる、本書の如きは未だ之あらず。是れ弊社が特に博士に請ひて之を公刊する所以なり。

發行所　東京神田　（電本四一三〇　一〇三六　振替五〇一番）　富山房

謠曲の門に遊ぶ人々は本書により逸速く其堂に昇りたまへ、

東京帝國大學圖書館長文學士和田萬吉先生著（前編）（後編續刊）

謠曲物語

菊判 極美本 總振假名
挿畫 彩色木版摺四 コロタイプ四 木版三十

定價金貳圓 送料 内地十二錢 臺樺卅錢 鮮清四十錢

現今謠曲及び能樂の流行空前の盛と稱せらる。此時に當り樂譜即ち諸流の節附本以外に、謠曲を學び能樂を觀る人々の爲に適當なる豫習書なきは眞に斯界の闕典といふべし

本書は著者自らの經驗に基き、謠曲學習者をして每曲の結構脚色を明にし、曲中人物の性格態度に通ぜしめん爲に、原文を平易なる近體文に飜し、謠曲の短所なる冗句繁語を芟りて主旨の徹底を圖りたる者なり。斯道に遊ぶ人先此を以て入門の資とせば每曲に對して的確なる觀念を得て造詣必ず深かるべく能樂を觀る人亦之によりて解眞の捷徑を得ん。

其他謠曲に於て劇詩化せられたる、我古傳說の如何を知らんとする人々は一本を備へて、兒女と共に興話の料となすも妙なり

發兌元 東京 神田裏神保町 合資會社 富山房 電本四二三〇 一〇三六 振替五〇一番

賣捌所 東京神田表神保町 東京堂 振替二七〇 東京日本橋區通四丁目 わんや江島伊兵衛 振替四一六三番 東京日本橋區西河岸四 堀井呉三郎 振替二〇七八八番

前編旬日にて三版に突進し後編盛裝して出づ

故樋口一葉女史遺著・全二冊・

一葉全集

菊判上製總布美本

前編 日記及書簡文範
紙數八百五十餘頁
正價一圓七十錢送料十錢

後編 小說及隨筆
紙數五百九十頁
正價一圓三十錢送料十二錢

故樋口一葉女史の諸作は明治文壇の光輝也。女史が遺せる所の日記四十四卷は、女史が晩年六年間の記錄にして操持不撓なる一女性の立志傳なると共に感情熾烈なる女作家の忌憚無き告白錄也。人生に對する僞らざる觀察誌也、亂調なりし當時の文壇裏面史也。

増訂一葉全集は、從來刊行の女史が諸作に加ふるに、此類なき秘書と女史が小說及隨筆の未だ公刊せられざるものとを收む。前後兩篇合せて千五百餘頁此稀世の女作家の眞面目を江湖に紹介するに於て遺憾なからん。敢て薦む。

後編——小說

にごり江
われから
ゆく雲
やみ夜
大つごもり
經つくゑ
曉月夜
うもれ木
闇櫻
たま襷
五月雨
別れ霜
雪の日
琴の音
花ごもり
軒もる月
うつせみ
この子
十三夜
わかれ道
うらむらさき
たけくらべ
かれ尾花
棚なし小舟

隨筆

森のした草
隨感錄
流水園雜記
ほとゝぎす
そゞろごと
棹のしづく

東京本町 博文館

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

英語教授の大革命

自然的速成教授法現はる



従來の誤れる英語教授法は徒に多くの時日を費して實用に適せざる多くの無用なる英語を教へたるが故に活用し能はざるなり。

本書の新教授法は少數の語を如何に活用すべきかを教え、僅か五十日間にて英字の新聞雜誌を自由に讀み、日常の手紙、會話を自在になし得るに至らしむ。果して斯くの如き驚くべき速成教授法ありや！　然り、有り、

本書の自然的速成教授法

即ち英語自由自在之れなり

而も定價は菊判六百頁の上製美本特價僅に金貳圓二十錢普製上下一册金壹圓なり。如何にして斯くの如く短日間にて英語を熟達することを得るかは見本に就て此驚くべき一大新案法の内容を看よ……東京本郷區大學正門前、英語速成普及會（電話下谷三〇一壹番、電話下谷三三一〇番）へ「ハガキ」にて申込めば内容見本を無代進呈すべし。

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第二十七年第七號目次



松井須磨子と柴田環



" SARGENT "

中央公論



第二十七年
第七號
第二百八十號

桂公の外遊を餞す

(一)

桂公七月上旬を以て、後藤男と歐洲に遊ばんとす、素より尋常觀風の遊に過ぎざらんも、其の十年政局を擔當し、殊に英國との同盟を結びて三たび之を申ね、且つ露國との大戰役を終始したりし當面の責任者たるに於て、歐洲に行きて彼の國政事家と手を握り語を交ゆるに方つて、多大の興味を惹起し來るべく、其の胸襟を啓きて相語るものゝ中、將來に亘る節々の如き、他日何等かの事象を齎らし來るや必然ならん、素より政府公然の使命を佩ぶるにあらざるが故に、直接に我が政局に及ぼす結果なきこと勿論なりと雖も、列國政事家との交情が公と男等との他年政局に立つに及びて、竟に當面に現出し來るや

疑ふべからざるのみ、是れ公の如き有力家の外遊が假令尋常一様の觀風なるにせよ、中外の耳目を吸集する所以なりとす

（二）

朝鮮併合の首勳を擧げば、何人も先づ指を桂公に屈せざる能はざるべし、彼の故伊藤公の如き、朝鮮問題に漸進主義を執り、始めは全く其の併合を悦ばさりき、曾禰子また伊藤公と同論にして、却つて短兵急に併合反對を唱へたるとすらあり、寺内總督と雖も始めは踏躕して暫らく決するに至らざりしも、桂公のみは始めより斷乎として併合を主張し、有らゆる反對論、遲疑説を排して、竟に之を決行するに至りし也

寺内總督の措置宜きを得たりしが爲めに、朝鮮人の併合に反對するものは極めて少かりき、否、殆んど反對運動なるものを發見するにも至らざりき、蓋し陰謀排擠を好むこと殆んど食色よりも甚だしき朝鮮人にして、未だ之を敢てせざる所以のもの、必らずしも日本の總督政治に隨喜するがために非ず、實は併合前後の英斷果決、總て意料の外に出でたりしがために、彼等朝鮮人に取ては恰かも疾雷耳を掩ふの遑なきが如く、殆んど膽墜ち氣沮して爲さん所を知らざりしがためのみ

然れども今や彼等は、總督政治の奧の手までを覗くを得たり、日本の爲す所の究竟程度をも感知し得たり、此の見据既に定まれる以上、彼等は徐々其の手を伸し足を出して以て得意の陰謀を試みんとするや論莫らん、各種の暗殺は、勿論外國人間に出沒して離間中傷を逞ふし、人民を煽動し教唆して官府に反

抗せしむる等幾んど爲さゞる莫きに至らん

故に朝鮮の現狀を以て、安心すべき平和の現象を呈せりと做すは甚だしき謬見也、朝鮮に面倒なる問題の起るは實に今日以後なるを知らざる可らず、勿論彼の朴實なる農民等は、日本天皇の恩澤の優渥なるに感喜し、總督政治の公正寛和なるを謳歌して、幾んど皷腹擊壤すと雖も、政界の寄生蟲にして、人民の蠹惑者たる彼の兩班の一輩に至ては、其の天性よりして凶險なる陰謀を企てゝ、以て平和を攪亂せんとするや想察に難からずとす、唯だ幸ひに嚴密なる警察制度ありて、能く之を抑ゆると雖も、決堤の洪流は永く止む可らず、苟くも一び撫治の術に於て弛むあらんか、毒浪滔々として能く禦ぐ可らざる也、動もすれば今日までの平和狀態を見て警戒を解かんと欲し、或は彼の地に於ける軍隊と警察との警備を寛にし、或は言論の自由を放任すべしと做すが如きは、是れ正さしく大事を謬まるもの也、吾人の斷じて與みせざる所とす

桂公等は果して歐行の往返孰れかに此等の實況を目睹せんとする乎、親しく之を睹るまた大に可也、然れども故伊藤公を暗殺したりしが如く兇徒の何時起るや豫知す可らず、而して到る處斯る徒輩の續出することも亦覺悟せざる可らず、吾人は桂公が深く朝鮮昨今の實狀に鑑みて、苟くも其の戒心を弛むる莫きを希望せんと欲す、若し夫れ我が國民が未た朝鮮問題に安心す可らざるや勿論のみ

（三）

桂公が第一に訪問すべきは露都なるべし、而して此の訪問こそ頗ぶる興味あるものなる可けれ、彼の

乃木大將が英皇戴冠式參列の歸途、露都を過らんとするや、「彼れ武人として純の純なるもの、頗ぶる尊敬するに足るも、旅順陷落の勝者としては、實に露人に取て忘る可らざる仇敵なり」と公言したりしノヴヲ、ヴレミヤ記者は、桂公に對してもまた將た之と同一筆法を用ゆべきや否や

露國皇族の一部、並に武人中には、今も尙ほ復讐戰を期待するもの多かるべし、ノヴヲ、ヴレミヤが『日本との戰爭は、纔かに其の幕を開けるのみ、其の酣なる興趣は寧ろ將來にあり、吾人の子々孫々能く之に當りて之を味ふを得ん』といへるは、確かに其の一部の意想を表明したりしものたるや爭ふ可らず、而して此の意想の今も尙ほ全然一掃せらるゝに至らざるやまた推測に難からず

然れども露國が日本を讐と構ゆるは彼我の不幸也、殊に露國の一大不幸也、抑も露國をして歐洲問題に容喙せしむる時は、勢ひ之をして歐洲中原の覇者たらしめざるを得ず、況んや其の同盟國たる佛國と相呼應し、而して英國其の背後に立つあるをや、少くもバルカン問題の如き總て露國の威令に遵ふの外あらず、故に之を苦痛とするものは、露國をして一意其の東邊のみを思念して、また他を顧みる餘地なからしめんとす、乃ち露國が汲々乎として日本に對する復讐を企畫するが如き、彼等の手を額にして以て黃絹幼婦を叫ぶ所ならざる可らず、語を換ていへば、露國が區々たる日本のみを相手にして、一意專念に復讎戰に苦心するは、其の檜舞臺たる歐洲中原より除外せられて、强者の名實を喪ふ也、同盟國をしては、賴母しからざる味方として其の信用を減せしめ、墺伊土の列國を首め、バルカン半島の諸州をしても、また神經なき獅子恐るゝに足らずとして、座ろに輕侮の心を起さしむる也、是れ豈露國に取て

一大不幸に非ずして何ぞ

故に識慮ある露國の政事家等は、日本と相親みて東方の治平を保ち、平和の間に西北利亞の開發を爲すと共に、西面して歐洲に重きを加へんとす、且つ滿洲問題の漸く紛糾せんとするや、勢ひ日本と協同せざるを得ざるものあり、茲に於て竟に日露協約を締結するに至りし也、思ふに近時支那に革命動亂起り、延きて蒙古問題の生ずるに至て、露國は益々深く日本と握手するの必要を感ぜしなるべし、蓋し支那塞外に於ける日露兩國の利害は、互ひに相矛盾せざるのみならず、腹藏なく協議し商量するに於て、自他共に都合好き解決を與ふべき事情多し、現に露國の識慮ある政事家は乃ち日本との握手を緊密にすると同時に、既に英佛の內同意をも經たりしものゝ如し。此等新たなる事情と關係とは、恐らくば露人の日本に對する感情を融和したると著るしかるべく、彼のノヴヲ、ヴレミヤに由て表明されたりし一部の意想も、今や甚だしく寛和せられたるべしと信ぜらる

此の時に方つて我が桂公の露都訪問あり、吾人は公が一個人として明治卅七八年當時の感情を露國有力家の面前に披瀝して、茲に渙然氷釋の好機を作り、彼の宮廷の一部幷に軍人間の好感情を湧起せしむるを疑ふ能はざる也、況んや露人とは頗ぶる相善き後藤男其の一行に加はり、日露協會のため大に盡力すべしといふをや

（四）

桂公の一行は露國の訪問を終はりし後、スカンヂナビヤ半島を視、更に暑を瑞西の廣原に避け、然る

後爽凉なる秋風と共に同盟國の首都に客となるべし

日英同盟は、桂公が故小村侯と共に群議を排して之を締結したりしもの、其の後三び之を申ねしも、皆公當局の時なりき、英人にして今尚ほ眞に此の同盟を歡迎せば、其の眞情を公に傾倒すべきや論なからん

日英同盟の漸くにして冷却せられんとする傾向あるや掩ふべからず、吾人も曾て論じたりし如く、在印度の英人等が動もすれば日本人を猜視して、之を敵視する形迹ある、且つ日英共に露と相親める今日、幾んど同盟の効なしと爲すものある、皆其の兆證ならずんば非ず

若し露國を以て日英協同の敵と爲し、同盟の目標全く露國に在りしとせば、此の同盟が今や其の態度を冷却すべきは論なしとす、然れども同盟の目的は、其の條約本文に明示せらるゝが如く、全く東洋の平和を支持するにあり、少しく具體的にいへば、支那の領土を保全し、併せて日本及び印度の現狀をして、寸分だも侵犯されざらしむるにあり

支那の將來は實に一大疑問也、今日の支那が紛々擾々として一定する所なきを視ば、何人と雖も其の將來を透見して、確乎不變の判定を下し能ふものなし、唯だ其の紛々擾々のまゝ、何時とはなしに固定する乎、抑もまた各省相分れて獨立する乎、容易に推知すべからずと雖も、列國が外より支那を分割せんとは至難ならざる可らず、孰れの國と雖も、未だ實力を以て支那を分取し、而して之を統御して其の治平を保つことを得されば也、强ひて支那を分割せんとすれば、勢ひ武力に由るの外なきも、列國未だ兵

を支那に出す能はず、出すも能く其の分取したる所を守り、强制的に其の治平を支持するに足らざれば也。

事情果して斯の如き以上、今尙ほ長江沿岸を以て其の勢力範圍と爲すの自信を有し、且つ支那に於て最大なる貿易者たる英國は、兎にも角にも支那の大變亂を防止して其の利益を保護するため、其の領土保全主義を支持せざるを得ざるや論なく、此がため切に日本の力を借るの外なき亦自明の理なりとす、即ち日英同盟の存續の必要なる、最も英國に在り、然り、英國は其の支那に於ける利害上、今日以後益々日英同盟を鞏固ならしめざる能はざるのみ

或は滿蒙に於ける露國の施設を承認する結果、日英同盟の所謂支那領土保全なるもの幾んど空文に歸すべしと做すものあり、我が一二の新聞紙先づ之を唱へ、而して英國新聞また之に和せり、然れども滿洲が支那領土保全の外にあるとは、曩きに英國が獨逸に證言したる所にして、而して日本も亦之に異言を挾まざりし所とす、滿洲既に然る以上、蒙古また然らざるを得ず、理素より同じければ也、然らば則ち日英同盟の支那保全なるものも、之を其の本部にのみ限定すと解釋するを當然とす、近時英國政府が其の議會に於て日露の滿蒙問題に對して反對なきことを言明せしに徵するも、其の形勢の推移略々知るべきにあらずや

吾人は英國人が如何に桂公を待すべきかを刮目して視ん、英國人が日本との同盟に對する衷情は、能く之に由て以てト知するに足れば也、英國人にして、若し日本人の同盟に對する感想如何と問はゞ、桂

公は猶豫なく答ふるを得べし、公の心は即ち日本人の心にして、公が始めて英國との同盟を締結したりし時の感情の今尚ほ依然として渝らざると齊しく、日本人の心も亦渝る所なき也、唯だ公は應さに曰ふべし、英國人たるもの其の埃及にあるも、印度にあるも、將た加奈陀、濠地利に在るも、苟くも日本人を猜忌し嫉視するが如きことある勿れと

（五）

桂公は武人の出なるも、外交財政の才あり、殊に外交は其の得意とする所たり、且つ公や今閑雲野鶴に伴ふと雖も、政事家としての將來は尚ほ多く春秋に富めり、公が一變して政黨首領となるも、將た元帥府に入りて純乎たる元老と成り濟すも、抑もまた再び局に當て閣僚の首班に立つも、政治が尚ほ多く公の意衷より出づるの時あるや論なしとす、蓋し公は西園寺公の如く趣味多方面なる能はずして、幾んど政治を職業とし道樂とし、全く之を生命とす、故に其の地位の如何に拘らず、公は到底其の呼吸の通ふ間、政治より離るゝ能はざる也

斯の人にして外遊し、英露佛獨の有力家と親しく握手し語談す、其の將來に及ぼす所の尋常ならざるや知るべきのみ

後藤男に至ては、曾て餘りに外交を批評するため、故小村侯の如き『彼れ後藤何ぞ外交を解せん』といへるも、其の南滿洲鐵道の總裁として北京に入り、清國の皇室政府と折衝せる氣字と伎倆とを視るに、また好個の外交家たるを證するに似たり、且つ男從來の施設多くは突飛と評せられしも、後に着々

として其の意圖に中り、曾て殆んど失敗するものなきに徴するに、識慮の俗流を抜くや爭ふ可らず、男今や公に随つて親しく列强の有力家と膝を交へて歡談せんとす、形勢を目睹して其の情僞を察するに於て、薀蓄啓發、兩つながら得來る所多かるべし、桂公其の右腕と恃める稀有の名外交家小村侯を喪へる後其の繼承者を物色して果して何を得しぞ、米國の如く全然門外漢のみを捉へ來つて外交家たらしむる素より弊多し、然かも生え抜きの專門外交家のみに由て其の人物伎倆を精撰し得ざるも亦妙ならず、公乃ち或は男を擧げて外政に當らしめんと欲するに非ざる莫き乎、果して然らば後藤男の此の從遊、頗ぶる有意と謂べし、而して公と男との外遊や、益々尋常一様の觀風に止まらざらんとする也

黄金の光益々揚る

（一）

黄金萬能の趨勢彌よ増長せんとす、黄金萬能は即ち資本家階級をして益々得意に、他の階級をして彌よ不平ならしむるものにして、延きて危險思想を促生する虞なきにあらず、警世家の切に注意すべき所とす

（二）

刀筆の小吏たる數年十數年、竟に判任官一二等に昇り得たりと雖も、其の着る所のものはフロックコートと稱する名あるのみ、羊羹色は夙に經過し去りて、今や殆んど飴色を爲し、正さしく前世紀の遺物

たり、其の携ふる所の辨當を開けば、麥飯に鹽鮭は上等の部にして、多くは澤菴か梅干のみ、營養不良の蒼顔憔悴、兀々として簿書堆裏に沒頭するも、尙ほ若干の儲蓄を有して心に安んずる所あり、其の分を恪守して淸廉自から持し、苟くも請托賄賂に動かさるゝが如きことあらず、之を彼の學校を出てゝ直ちに會社銀行員たるものが、洋服に流行型の新たらしきを競ひ、サンドウイッチを腰にするをも卑み、多くは洋食の一二皿の、牛鳥の鍋類を取寄せて晝食に充つるハイカラ振に比すれば、幾んど同日に語る可らず、然れどもハイカラ先生の才あつて而して薄志弱行なるは頼みがたし、我が尊重すべき國民の中樞たるものは、寧ろ彼の朴實粗野、自から耕して自から食ふ中等農夫と、此の判任階級の官吏とに存せざらんや

果して然らば吾人また聊か意を強くする所なくんばあらず、唯だ一世の木鐸と稱せられ、若くは一代の範として信頼せらるゝ階級の人々を擧げて、悉く黄金の前に拜跪し、相率ひて富豪の皂隷たらしめば、其の憂患たるや小ならず、吾人は實に省慮せざる能はざるのみ

（三）

飛耳張目、社會の內情を摘發して許す所なく、苛論酷說、苟くも一點の非を逃さゞらんとする新聞紙に對して、富豪階級の之を操縱せんとするや、新聞社其のもの全部に就て左右することを爲さず、之を爲さんとすれば、其の力を要すること甚だ大なるに止まらず、其の新聞紙が富豪某の機關たること汎く知れ渡ると共に、其の辯護する所總て富豪某に偏せりと認められ、他の新聞紙を激して却つて之に反對せしむる虞なきに非ざれば也、故を以て富豪階級は秘密の間に有力なる若干の記者を買收し、此の記者をして陰

約の間に富豪の便利のために筆を左右せしむるを例とす

此の方法を執るもの、或は知縁を便り、又は交遊を利して記者其の人と往來存問し、或は毎月金額を定め、或は年一回若くば二回と定め、最も疎なるものと雖も記者の必要次第隨時出資して以て其の窮を救ふを例とす、今も尙ほ中立を標榜して公平自から持すと稱する某新聞の幹部に在ては、其の記者が富豪より支給せらるゝは所は、毎月其の新聞社より得る俸給額よりも多しといふ、彼の政府の保護を受くる日本郵船の如きは、政黨を始め、普く新聞社の幹部を買收して苟くも口を開かしめず、故に郵船の保護問題起るや、如何なる新聞紙と雖も侃諤の議を爲すと無し

是れ唯だ其の一例のみ、當時獨立不偏を標榜する新聞の中、記者の總てが富豪に囚はれざるものを物色するも、竟に一も得べからず、即ち必らず富豪階級の或るものゝ機關たらざるは莫き也

（四）

某地方に二個の富豪あり、各々金力を恃みて相下らず、事毎に相咀ひ相抗して勢威を張り、以て十數年來相持せるが、今次の總選擧に於て、其の甲の候補者として立て而して當選するや、乙の之を嫉視すると甚だしく、百方構陷して竟に選擧法違犯問題を生ぜしむ

此の富豪乙と平生相識る所の檢事某なるものあり、屢々乙の家に出入して親しく交はり、常に酒食の饗を享くるは勿論、また屢々金錢の融通をも受く（露骨にいへば返償せざる借財にして、一種のお貰ひに外ならずとす）、頃者乙なるもの此の檢事等を招ぎ、從容として甲に必らず選擧法違犯事項あるを言

ひ、之を檢擧すべきことを內囑す、某乃ち百方甲の犯跡を搜索し。甲の親族をも訊問して爬羅剔抉至らざるなく、竟に甲を拘留するに至れりといふ

檢事と雖も一の裁判官に外ならず、然るに其の人常に富豪の門に出入して酒食金錢を受け、其の意を迎えて人を犯罪者たらしめんとす、若し反對に其の富豪自身に犯跡あるか、又は富豪の親族知緣間に罪跡あるも、富豪にして苟くも請托する所あらば、其の檢事は敢て之を看過し容認すべきこと、理に於て必無なりとす可らず、即ち犯罪の檢擧さるゝと否と、刑罰の行はれざると行はるゝとは、一に富豪の意のまゝと爲るに至るべし

裁判は神聖也、行政には假令何等かの手心あるにもせよ、事苟くも裁判所の手に移らば、公正嚴直、曾て枉ぐる所あらずとは、我が國民の平生相稱へて以て裁判官を信賴する所にあらずや、然るに罪人のために原告となるべき檢事にして、富豪のために或は爬羅剔抉し、或は掩蔽し隱匿して檢擧せずんば、刑罰果して公正嚴直なるを得るや否や、多言せずして知るべきに非ずや

故に此の事實は、小に似て小に非ず、實に重大なる問題也、富豪階級にして新聞紙を左右し、輿論の口を箝するに止まらず、更に至嚴至正にして、天皇の御名に於て行はるゝ裁判をも意のまゝにするに至らん乎、憲政上恐怖すべき結果を見ずんば幾んど止まざらんとす

黃金萬能の極、富豪階級をして茲に至らしむ、是れ國家結合の綱紐を弛廢する也、必らずしも危險思想を醞釀し來るに止まらざる也、君子は之を機微に箴む、識慮あるもの深く考へざる可らず、而して富豪自身に於て切に省慮し、之に近くもの、また戒愼する所を知らざる可らざる也

太閤論

福本日南

凡人の淺ましさは、此兩月來地方俗論に波を揚げて居たので、暫く中央公論に御無音した。幸に此頃天公少閑を與へて與れたから、お勸めに從つて曩の太閤觀察を續けて見やう。

彼の度量

古來今往日本人の中で、天空海濶の度量を有した者は誰れ歟と問へば、矢張太閤が第一である。彼の大腹中には容れざる所なく、其部下の諸將に觀ても、加藤清正・福島正則等の如き武邊一圖の猛將連も容れゝば、竹中重治・黑田孝高等の如き智謀深遠な參謀連も容れる。石田三成の如き政治家も容れゝば、長束正家の如き財政家も容れる。是等の人々たる、相互の間は概ね仲惡るの連中である。一方からは、彼奴等が雜兵の首一つも取つた事の無い癖にと輕蔑すれば、他方からは何彼猪武者のイケ〳〵連がと嘲笑する。それを太閤は皆容れて、それ〳〵用を爲させたのである。それで看たまへ。太閤一たび目を瞑すれば、彼武斷派・文治派は其日から喧嘩を始めたでは無い歟。獨り是のみでは無い、九州の島津なり、中國の毛利なり、四國の長曾我部なり、東奧の伊達なり、其他海內の大名小名、前日まで半ばは對敵であつた者を、一たび降れば、大封を與へ、之に任用して疑はぬ。最も腹黑い淵底の知れぬ德川家康にまて腹心を敷いたのである。

其一二の例證を擧げれば、小田原北條征伐の際てある。彼は二十二萬の大軍を起し、親ら將として進發する。それて都の留守大將を要する。誰を擧げる歟と覗れば、毛利輝元に一任し、お負けに之を聚樂の殿中に納れ、自分出陣中は天下の政道一切貴殿に委任する。天下殿の意て萬事仕置せられるやうにと談じ、畿内・關東の繋ぎの爲即ち後方連絡の爲には。尾州の淸洲城に小早川隆景を配置し、參州の岡崎城には吉川廣家を配置して、之が守備を委せたから、關より以西は一時毛利家の手に歸したやうな姿てあつたが、之を放任して、自身は得々として出陣した。（甫菴及川角太閤記）

又大陸遠征の擧を發した翌年文祿二年の事てある。明使沈惟敬等來つて媾和を議したので、條件を授けて遣り還し、太閤は名護屋（肥前）の本營に在つて、今か〱と其復答を待つたが、何時までたつても返辭が來ぬ。すると彼は勃然として怒り、好し〱此上は更に三十萬の大軍を發し、其中十萬を一軍として、加賀宰相を總督とし、又十萬を一軍として、會津宰相を都督とし、最後の十萬には乃公自ら將として、彼岸に押渡り、朝鮮八道を席卷して、直ちに北京を擣き四百餘州を平定しやう。國内の政治は江戸亞相に一任し行けば、何の顧慮する所も無いといひながら、既に決行しやうとしたが、其間に種々の故障が發したので、遂に之を見合せた。淺野長政が殿下には狐が憑いたと罵つたのは、則ち此際の事てある。蓋し長政の語意を察すれば、當時海内一統に歸したとはいへ、昨日までも敵てあつた豪傑連は所在に居る。殊に德川家康の如き者に留守を托せられたら、如何なる陰謀を企つやも測られぬ。それに人もあらう、此老爺に内政一切を委せるなんて、正氣の沙汰ては無いと考へたらしい。如何にも常人の常情から察すれば、それに違ひ無い。然も太閤に在つては更に之を頓着せぬ。又太閤にして目の黑い間は、設ひ家康に内政を放委せられても、足を揚げ得なかつたてあらう。が、太閤の大度洪量は是に由つて益〻見る可きてある。次には

彼の膽勇

膽力と勇氣とは親密な兄弟分であるから、兩つを合せて觀察しやう歟。彼太閤の膽氣と來たら、如何にも豪膽であつたが、又其勇氣に觀れば、天下の大勇であつた。其一例は天正十一年、柴田勝家との牟盾となり、彼は北陸からの上り口江州柳ヶ瀨一帶に押への諸塞を置き、自身は濃州に討入り、織田信孝の居城岐阜を壓して之を攻圍しつゝある眞最中、四月二十日、舍弟羽柴小一郎秀長から飛脚到來し、柴田修理大軍を發して柳ヶ瀨に押寄せ來たと報告するや、秀吉は衷心から歡び、スックと起ち揚がり、腰なる佩刀をスラリと拔いて、眞甲に押當て『弓矢八幡、戰は慥に勝戰ぞ。素破出陣の用意せよ』と全軍に令を傳へるや否や、自身眞先に馬を進め、續け〱と呼ばはりながら、江州路へと志した。（太閤記、碎玉話、家譜等）賤ヶ岳の大勝は實に此膽勇に基因したのである。

彼は旣に賤ヶ岳に佐久間盛政を討取り、續いて柳ヶ瀨に柴田勝家の軍を潰亂させ、勝に乘じて懸軍長驅し、先づ差掛つたのが、越前の府中（今の武生）である。此處の城主は前田又左衛門利家、此度勝家に應じて、一旦は出兵したが、日頃秀吉と親密の間柄であつたから、早く秀吉の勸告に從ひ、忽ち兵を引いて、謂はゞ中立の態度を取つた。然るに秀吉の軍は今大勝に乘じ、堂々として押して來るから、或は便手に城を蹈破られるかも知れぬ。それで防備を嚴にして居る處に、秀吉の前軍はきほひにきほひ、城門近く押寄せたから城中よりは一齊に小銃を放ち掛けた。秀吉遙に之を望み、兵を麾いて、三町許退却させ、馬標だけを前方に押進めて、己只一騎銃火の下に馳來り、城に向つて大音聲『放つな〱！筑前守ぞ』と呼ばはり、射擊を沈默させるや否や、其儘城に入つて、利家夫妻・親子に會見し、湯漬を所望して、快く空腹を充たし、利家を伴うて、直ちに北庄へと馳向うた。其間恰も平和の日に雨でも冒して、知音を訪ふと一般の有樣であつた。（川角太閤記）

それから中間一年を隔てゝ、天正十三年四月、彼は

越中に討ち入つて、佐々成政を降伏させた。其頃までに越後の上杉景勝との間には、一二回の聘問は通じて居たものゝ、上方筋と北國の睨合はまだ〳〵融和せぬ。然るに五月、秀吉は左右僅に三十八人を隨へて、兩越の國境越水の城下に抵り、一使を城將須田修理に送り、上杉殿に直々拜謁し、主命を申達致さんが爲に、木村秀俊此地まで參じ候ふ。此旨主公へ御取次を願ふと申入れた。此秀俊は前年も秀吉の使節として越後に往來した者であるから、修理は早速城下の客館に請じ、乃てそれと會見すれば、使節は木村秀俊で無いから、修理は頗る不審の體。すると使節は微笑を湛へ、自分實は羽柴筑前守、前年來貴國とは音問を通ずる間柄となつたから、此度越中へ下向の叙次、其方御主人の見參に入らんと存じ、此處まで微行しまゐつたのである。春日山への案内宜く頼み入ると陳べられたから、修理は實に愕くりした。扨は筑前守殿にておはしますかと、直ちに城内に請じ入れ、急使を立てゝ、之を景勝の許へ報道した。是より先き、景勝は叛臣の立籠つた新潟城を攻めんとて、一軍を率ゐて發行の途中、秀吉の大軍越中を壓すと聞いたから、それは容易ならぬ、彼は前年來聘問を通ずれど、其心情は未だ測られぬ、豫め之に備へねばならぬと、八千六百の軍を將して、糸魚川まで來り、此に宿陣せる處に、修理の急使は來て、秀吉の來情を告げ、且つ修理の密旨を齎らし、唯今筑前を城中に留め置きますれば、彼は籠中の禽、嚢中の鼠も同樣、御意次第にて如何やうにも致しませうと申出た。危機は一髮の間に在つた。併しながら景勝も流石は謙信の後嗣、慨然として之に答へ、方今海内擾亂して主従の間さへ測られざるに、身は數道を經略して、覇を中原に稱しながら、前約を頼んで來訪せられるとは、天晴の大將、然るを此方より盟約に背きては、弓矢の恥辱、一旦相見て、兩意投合せずば、堂々の陣を整へて、雌雄を一擧に決せんまでとて、乃て是も全軍を城中に遺し、左右數十騎と越水に赴いた。秀吉の擧は、景勝仁義の將たるを見透した上の事とはいへ、其膽天の如しと謂ふ可きである。

是は又慶長元年七月十二日の事てあつたが、近畿一帶の大地震に、伏見城の樓閣半ばゝ崩壞した。徳川内府急ぎ太閤の機嫌伺にと出仕し、斯かる變災て御坐れば、禁裏へは御使にても立てさせらる可きやと問うた。太閤首肯いて、主上の御驚きさもこそと存じ奉る。使を上る可き處て無い。自身參内して天機を伺ひ奉らう。貴殿も同行せられよとて、其儘徒歩にて立出てた。が急遽の事にて、太閤は單身、家康には井伊兵部直政と本多中務忠勝との二人が隨從するのみてあつた。斯く行くこと數町にして、太閤は立留まり、近頃歩行致さぬので、寔に腰が重い。之を貴殿の家人に持たせられよといひながら、佩刀を脱して、家康に交付した。家康受取り、携へ行かんとするを視て、それには及ばぬ、貴殿の家人へ持たせられよと達て言はれるので、乃てそれを井伊直政に渡した。太閤は實に平氣なもの、途途家康と雜談しながら、更に行くこと數町にして、彼の從者腰輿を舁かせて、喘ぎ〳〵驅着けた。斯くて乘輿して參朝し、天機伺濟んで歸邸の後、忠勝を召されたから、何御用と伺候すれば、太閤は微笑しながら『其方は中々元氣者の主思ひてあるから、今日乃公の佩刀を内府が其方に渡さなかつたのを、さぞ歯がゆく思ふたてあらうが、其方の主人は大氣者、其方などのやうな小氣者には分るまい』といはれたので、流石の忠勝圖星を指され、只管慴伏して退出した。(家譜、實錄逸史)亦是れ越水の會合と一般、智能く人を知り、度能く人を服するの結果とはいへ、其大膽さも亦想ひ見る可きてある。

彼の志業(其一)

有史以來、吾國に英雄を出したことも尠からぬが、世界の統一を志した者は、古來今往唯太閤一人のみてある。然も彼が此大志を抱いて居たのは、決して一朝一夕の事て無い。幵を如何にと顧るに、天正五年十月廿三日の事てある。織田信長は諸將の中から特に彼羽柴筑前守秀吉を抽んでゝ、中國征伐の總大將に舉げ、取敢へず播磨一州を加増せられ、殊に節刀の代りとも見る可き朱傘を賜ひ『此度の征伐に就いては、臨機應

變の處分擧げて其方に一任する。見事征伐の功を立てたらば、中國を其方に充行ふ可し。而る上は進んで九州を切取る可し。援軍の如きは申出次第、續々後より送り遣はさう」と申聞けられた。其時秀吉は謹んで命を拜し『御諚忝けなう存じ奉る。殊に御傘をまで允させられた上は、所存のまゝに諸軍を下知し、中國を截從へることは、秀吉が方寸の裏に御坐りまする。熟々考へますれば、御近侍中野々村・福富・矢部・森等の面々、是迄尠からぬ功名を立てながら、未だ重き御恩賞にも預からざるは、遺憾の次第に存じますれば。秀吉中國を平定仕らば、此地を分けて、以上の面々に領知させられまするやう。秀吉は御諚の如く九州に討入り、屹度西海を切靡けて御覧に入れ申す可し。然る時は九州一年の歳入を申請け、糧食を蓄へ、兵船を仕つらひ、直ちに朝鮮に攻入り候はん。其際秀吉への御恩賞として朝鮮國を賜はらば、此國を平定したる上、八道の兵を率ゐて大明を擣き、四百餘州を征伐して、御手に入れたき所存に御坐りまする」と臆した氣色も無く言上した。信長之を聞いて大いに笑ひ『筑前が又例の大言歟。好し〳〵思ふ存分に働いて看よ』と封拜の權まで托された。(繪本朝鮮記、日本外史)之に就いて由來の歷史家といふ歷史家は概ね說を爲し、信長は平生猜忌の大將である上に、斯かる拔擢を蒙つたから、左右の嫉みも畏ろしい。それて斯くは大言して、中國を吾物にする意の無い事を見せたのであらうと斷定した。遠慮の秀吉であるから、其邊の用心も多少はあつたらう。併しながら、中國を定めて、九州を平らげ、雞林を略して、明國を合せんといふ、其言の一々順敍あるのと、後年の計畫とを併せ考へれば、恰も符節を合せるやうである。即ち彼が筑前時代から既に此大志を抱いて居た事が知れる。顧ふに當時『筑前が又例の大言歟』と信長の大笑せられた際、秀吉も亦心中に『此殿も亦乃公の志は知られぬな』と窃に一笑したてあらう。

それから彼の關白に任せられたのは、前にも申述べた通り、天正十三年六月の事であるが、此歲(西曆千五百八十五年)西敎師のガスパル・ゲロが始めて關白に謁見した時、關

白は西教師に對し『自分此日本國内を平定したらば、直ちに支那に押渡り、彼國を征伏して、吾皇國の版圖に收める心算ぢや。それて今國内の船材を切取らせて、軍艦二千艘を建造させやうとする所。就いては堅牢にして武裝した葡萄牙製造の大艦二艘ほど周旋を賴みたい。代價は幾何にても望みに委せる。此義相調はば、寔に頂上ぢや、其の代りに吾國内にても、支那にても勝手次第に布教を許すてあらう』といはれたと、「西教史」に見える。

次には其翌十四年、九州征伐の先鋒を發する際の訓令書中に『一、唐國までなりとも仰付けらる可しと思召さるゝ御存分通りに候條、島津御意に背き候處、幸の義に候間、堅く仰付けらる可き儀淺からず候』とある。而うして又其翌年即ち天正十五年、彼九州親征の際、此歲六月五日、肥後八代の行營から北政所に贈つた彼が鐵釘一流の手柬に看よ。お小人頭以來の戀女房たるお禰々の方に寄せて、自家の方寸を告げるのてあるから、是れほど赤裸々な物は無い。其書に、

『ゆき・つしまのくにまで（即ち壹岐對馬の國まで）人じちをいだし、じゆしん申（即ち隨身申）事にてうらいのほうまで（即ち殊に高麗の方まで）にほんの大いりゑ（即ち日本の內裏へ）じゆし（即ち隨し）申すべきよし、はやふねをしたて、申つかわせ候。じゆし申さず候はゞ、らいねん（即ち來年）せいばい（即ち成敗）申すべきよし、申つかわせ候。からこく（即ち唐國）まで、てにいれ（即ち掌握）我等一ご（即ち一期）のうちに申つくべく候さげすみ（即ち決心）をいたし候へば、一だんほねをれ申候』

即ち所謂唐國までを手に入れんとするは、一期の希望さげすみの在る所を觀るに足る。且つ又同じ六月十五日には、宗對馬守父子に訓令して、朝鮮國王に對し、早々入朝して。臣服を表するやう、否らざれば直ちに征討の軍を發して、其罪を正す可き旨を諭せとの敎書を下して居る。加之、此歲博多の豪商にして茶博士てあつた島井宗室に朝鮮八道の探檢を命じ、小早川隆景の家士十餘名を之に從行させ、各々行商の姿に身を扮して、仔細に同國内の地理及防備を調査させて居る。

越えて四年め、天正十八年、彼が關東を平定して歸

京するや、會宗義智、朝鮮國使黄允吉等を導いて京都に到り、關白の歸洛を待つて居たので、乃て謁見を賜ひ、其使節の歸韓に附して、左の國書を贈つて居る。

「日本國關白秀吉、書を朝鮮國王閣下に奉ず。雁書薫讀、卷舒再三。抑く本朝、六十餘州たりと雖も。比年諸國分離亂爭し、綱廢紀紊して、朝政を聽かず。故に予は感激に勝へず。三四年の間に、叛臣を伐し、賊徒を討じ、異域・遠島に及ぶまで、悉く掌握に歸せり。竊に事跡を按するに、予は素鄙陋の小臣也。然りと雖も予や托胎の時に當りて、慈母、日輪の懷中に入るを夢みたり。相士曰く、日光の及ぶ所は、照臨せざる無し。壯年の日、八表、仁風を聞き、四海、威名を蒙る者、其れ何ぞ疑はんやと。此奇異あるに依りて、敵心を作す者は、自然に摧滅し、戰へば即ち勝たざる無く、攻むれば即ち取らざる無し。既に天下大いに治まり、百姓を撫育し、孤獨を憐愍す。故に民富み・財足り、土貢千古に萬倍せり。本朝開闢以來、朝廷の盛事、洛陽の壯觀、此日の如きは莫き也。夫れ人の世に生けるや、長生を歷ると雖も、古來百年に滿たず。鬱々として久しく此に居らんや。國家の隔て、山海の遠きを屑とせず、一超直ちに大明國に入り、吾朝の風俗を四百餘州に易へ、帝都の政化を億萬斯年に施かんもの、方寸の中に在り。貴國先驅して入朝したるは、遠慮あるに依りて、近憂なきもの乎。遠邦・小島の海中に在る者、後れて進む者は、許容を作す可からざる也。予、大明に入るの日、將士を將ゐて軍營に臨まば、則ち彌く隣盟を修む可き也。予の願ひ他なし。只佳名を三國に顯はさんのみ、方物目錄の如く領納す。珍重保嗇。（原書は漢文、續善隣國寶記及其他に見ゆ）

天正十八年仲冬日　　日本國關白秀吉」

以上列擧した諸例證に照して、御覧なされ、彼が世界統一の志望の一朝や一夕の事で無いのが明々白々であらう。然るに世には愚史家があつて、從來大閤傳の作者輩、動もすれば此大陸遠征の原因を以て、關白が其愛兒鶴松を喪ひ、憂悶の遣瀬なさに、斯かる無謀の

事に出てたといひ、遂には太閤自身にまで左樣言つたかの如き辭まで揑造して居る。世に愚史家・俗史家ほど仕方のない者は無い。彼鶴松の夭折したのは、天正十九年八月である。而うして秀吉が始めて大陸征伐の大志を信長に披瀝したのは、上に述べた通り、是より十有五年前即ち天正五年十月の事ては無い歟。それを若し朦朧とするならば、同十三年六月に西洋の宣教師に漏らした意向、同十四年に九州征伐の先鋒に下した訓令、同十五年六月五日に北政所に贈つた手束、同月十五日に宗對州に與へた訓令、同年島井宗室等の朝鮮派遣、殊には同十八年十一月に朝鮮國王に贈つた國書等を如何にする。蓋し惟ふに德川時代の俗史筆等は能ふだけ太閤を傷つけて、英雄一代の志業を無意義にし、そして幕府に媚びんと欲し、斯かる誣罔を加へたのである。が、英雄是が爲に毫末も傷つかずして、偶々俗史愚史輩の卑陋を表白するに過ぎなかつた。天に向つて唾きする者は、昔から皆斯くの通りてある。可笑しさも可笑しい。

彼の志業（其二）

太閤當時の西教師等が親しく其人に接して『太閤の志は世界統一に在る』と評して居る。西教史然り、我等も世界統一に在つたらうと思ふ。斯く言はゞ、人或は彼の志業は東大陸を出てぬ。隨つて東洋征伐とは謂へやうが、世界統一とは大袈裟過ぎるといふ者もあらう。併しながら當時に溯つて之を思ふに、國人一般を籠めて、太閤の腦裏に明白に現映した世界は、喜馬拉以東の大陸と、南洋に散布せる諸島國とに在つたのである。印度及印度以西に歐洲あることを、全く知らなかつたては無いが、未だ多く其思想を衝動するまでに至らない。是れは恰度亞歷山大王の世界が、希臘を中心として、歐洲東部・亞洲西部・北阿一部と及地中海とに限られたのと一般である。從つて彼太閤は一方には明韓兩國の征伐を企てると同時に、他方には太平洋に在る琉球及フイリピン諸島の經略にも留意したのてある。現に琉球には天正十五年の九州征伐以後早く外交

の手を著けたので、同十七年には其入貢を覩るに至つた。外國往來書

それからフイリッピンへは、當時其地に出入した冒險的殖民派の急先鋒原田孫七郞を遣はして、同國の內屬を促した。西教史 其公文は實に左の通りてある。

『夫れ吾國は百有餘年、群國雄を爭ひ、車書、軌文を同じくせず。予や誕生の時に際し、天下を治む可きの奇瑞ありしを以て、壯歲より國家を領し、十年を歷ずして、彈丸黑子の地を遺さず、城中悉く一統せり。之に繇りて三韓・琉球・遠邦・異域、塞を欵きて來享せり。今や大明國を征せんと欲す。蓋し吾の爲す所に非ず。天の授くる所なり。其國の如きは、未だ聘禮を通ぜず。故に先づ群卒をして其地を討ぜしめんと欲すと雖も、原田孫七郞商舶の便を以て、時々此に來往せるが故に、近臣に紹介して曰く、某早々其國に到りて、備に本朝發船の趣を說く可し、然らば則ち辦を解き箆を獻ず可しといふ。帷幄を出てずして、勝を千里に決するは、古人の至言也。故に褐夫の言を聽きて、暫く將士に命ぜず。來春は九州肥前に營す可ければ、時日を移さず、降幡を偃せて來服す可し。若し匍匐膝行遲延するに於ては、速に征伐を加ふ可きや必せり。悔ゐること勿れ。不宜。原書は漢文

天正十　年季秋　日本國關白』

此書は伴信友の「中外經緯傳」にも載せた。但だ信友の看た本朝鮮征伐記に如何にして書誤つた歟、天正十一年季秋十五日とあつたと見えて、之を十一癸未年の事としたのは、信友にも似合はぬ不詮議てあつた。十一年までは、彼秀吉はまだ〳〵關白にならぬ。惟ふに文中に『來春は九州肥前に營す可し』とあれば、多分天正十九年の事てあらう。それから信友の看た本に此書を小琉球に贈つたとあつたと見えて、信友は小琉球を琉球の事と速了した。が、小琉球が琉球なら、何ぞ書中に『三韓・琉球……塞を欵きて來享す』といふ可きや。全體小琉球とは支那人が臺灣に附した名稱てある。併し此書は臺灣に寄せたものでも無い。其れがフイリッピン太守に贈られたのてあつた事は、「西教史」に詳かて、

同島太守は之れに驚いて、早速使節教師を來朝させ、亞拉比馬其他の方物を獻じて、太閤の氣嫌を取つたので、一時の難を免かれた。其中に大陸遠征の擧が發し、それに忙殺せられたので、自然此方の征討は立消となつた。蓋し太閤の意圖中には、是等の小國は問題にならなかつたのである。大陸の大部分さへ方づければ、南洋諸島ぐらゐは一令の下に招致す可しと思つたのであらう。

尚ほ彼太閤の志業に就いては、西教師の見た所が最も肯綮に當つて居る。彼等の書遺した所に據れば、『殿下は政教などには毫も頓着なく、自分自身神とならうと欲し、且つ歐洲諸國までも征略し、一期の名譽を輝かさうとの大野心ある人である。適評殿下は支那の大君主となる大希望がある是れだけは當らずので、先づ朝鮮侵撃の準備として最も有勢な海軍を整頓した。……朝鮮は日本を隔てること僅に二十五里に過ぎぬ。それで先づ朝鮮を取つて、而る後ち支那全國を征伏するの目的である。それから彼は尚ほ又一層其慾望を擴大して、フイリツピン諸島にまで及ぼし、葡萄牙人をして己を其君主と仰がせ、入貢させんと企て、兩國間に先づ貿易を開始したが、併し彼殿下の慾望は利益よりも名譽に在る。即ち彼は雄略武功の神と仰がれ、人榮を極めて、萬國を足下に踏まんと欲するが故に、フイリツピン太守にも巨萬の金を贈り、己を君主に仰いで臣事させ、其船舶からは葡萄牙の國旗を撤去して、彼殿下の旗章を建てさせ、臣と稱して入貢す可き旨を命じ、若し此命に服從せずば、全島の官民を問はず、悉く殺戮すると申遣はした。此書の達したのは千五百九十一年即ち天正十九年であつた』西教史といつて居る。恰度前の原田孫七郎に持たせて遣つた國書に符合する。太閤の雄圖大略は是に由つて益々見える。

而うして彼が斯かる大壯圖を多年蓄へて居た事は、外征以前に於ける彼が內地經略の方面からでも亦察することが出來る。それは彼が群雄駕馭法の極めて寛大

に、極めて大まかなる事實である。其を如何にといふに、彼は南海征伐に於て、長曾我部元親を土佐の隅まて追詰めながら、兜を脱いで降人になれば、直ちに免して、土佐一州を當行つたのが、其の一つ。次に北陸征伐を見れば、佐々成政は柴田勝家の同盟として、織田信孝にも加擔すれば、徳川家康にも連なり、隨分秀吉太業の妨碍をした敵將である。之が爲には北陸まで再征の軍を動させて居る。然るにも關はらず、勢窮して、髮を剃落し降伏を請へば、即時に助命するのみならず、新たに肥後守にまで任じたのが、其の二つ。次に徳川家康と來たら、宿敵中の最强敵で、現に小牧の役の如きは、大局の敗てこそ無けれ、彼秀吉の賴とする池田勝入父子までを長湫にて遣られた憾もある。それて秀吉得意の勝算押即ち所謂位詰にして、是非攻滅ほす可き所てある。然るに此宿敵に扱を入れ、一旦之を羅致すれば、ズン／＼寵用して、軍政にまで參與させたのが其の三つ。次に九州征伐は如何に、島津父子の頑强にして、命に抗したことも多年である。お負に關白の使節に對して、散々關白其人を惡たい、其上關白の前軍までも攻破つた。實に恕す可からざる敵である。爲に秀吉は傾國の大軍を發して西下したのであるから、此行義久父子の首級を擧げねば、軍を旋しそうも無い事てあるのに、緇衣を披いて轅門に降參すれば、其儘赦免するのみならず、三州安堵舊の如しと沙汰したのが、其の四つ。秀吉の寛大斯くの如くなるは、彼が天性の大度洪量にも由つたらうが、一つには速に海内を平定して、畢生の大目的たる世界統一の大業に、一日も早く取掛らんが爲であつた。

それから最後に彼が大陸の經綸上、懷抱して居た理想の一端に言及せねばならぬ。それは文祿元年三月、京都を發して、其大本營肥前の名護屋に赴く際てあつた。左右の一人彼に向ひ、此度の御征伐は、何さま大明・朝鮮との御取合に御坐れば、兩國と文書の徃復等に就いて、自然漢文の必要が御坐りませう。誰ぞ其道に通じた能文の者を御選出しの上、御召連れなされずては協ひますまいと申出た。すると彼は打笑ひ『何んの／＼

漢文などが要るものか。是から彼邦に假名を教へて、毛唐人どもに伊呂波を用ゐさせるのぢや」といつたのて、人々其氣宇の雄大に驚いたといふことである。太閤の太閤たる所以のものは、實に此に在る。邦土を併合すれば、其地方に本國の言語・文字を施行し、其住民をして本國化せしめんとするは、今日世界列强の何れも務める所ぢやない歟。露國がパン・スラヴイスムを取り、獨逸がパン・ゼルマニスムを主張し、佛國がパン・ラチニスムに熱衷し、米國がパン・アメリカニスムを强行せんとするものは、皆此太閤の遺意に外ならぬ。太閤豪と謂はざる可けんやだ。

彼の細心

彼の快活、彼の度量、彼の膽勇、彼の志業や、斯くの通りてある。但だ總別此種豪放の人に缺ぐる所のものは細心であるが、彼に至つては、彼豪放を以てして、又中々の細心をも兼ねて居た。其一端は現に帝國圖書館に藏する「豐太閤自筆日記」に由つても徵せられる。彼れほどの大英雄・大事業家であるから、日記などを注けそうにも思はれぬが、其書を披けば、金穀の事・節度の事まで、何くれと無く書きつけた。尤も身に一分の餘暇も無い上に、文筆の人て無いから、ほんの一つ書き、而も心覺えの記憶の爲らしい。それて其の筆する所の何事てある歟を判じ兼ねるものも多い。併し自家の詠歌などに至ると、幾度も修正を加へて居る痕が歷々てある。例へば其一首として、

「月みればもろこし人の心さへ空に知らるゝ秋の夜はかな」

と詠み出るまてに、末句をば『秋の夕暮』かとも遣つてみたり、『夜ははの秋風』かとも書いて見たりして、終に『秋の夜はかな』に決定したらしい。英雄自ら閑日月あるが中に、其細心の處が見える。而うして此什を得たのは茶室の庭前ての事らしい。それて一首を書いた後に『庵前にて……よからんとおぼしめす』といふ自家の意衷までを記して居る。彼英雄が逍遙しながら、末句を推敲した樣が坐ろに眼前に依稀みえる。

それから彼が對大陸の經綸上にパン・ジャパニズム即ちジャポニホーゼの大理想を有して居た事は、前にも述べたやうに、大明でも・朝鮮でも伊呂波四十七字を用ゐさせるといつたのでも知れるが、然らば一切漢文家を連れて行かなかつたかと顧みれば、理想は理想として、目下の必要は缺かれぬから、矢張當時能文の聞えがあつた五山の長老中から、永哲・靈三・承兌の三人を選拔して、隨行させて居る。(家譜、實錄、室町殿日記、續史愚抄)

而うして開戰前から、畫工に命じて、大陸の地圖を屛風に畫かせ、朝夕之を眺めて、大陸の地理を研究し居た。殊に朝鮮八道の如きは、一道毎に之を色別けにさせた。既にして開戰となつたから、渡航の諸將には之が寫を銘々に一枚宛頒附した。それで諸將は此圖の色別けに據つて、八道の各地を赤國だの青國だのと呼んで居た。(實錄參酌)今其遺圖を觀るに、如何にも簡單ではあるが、併し其中には釜山の埠頭から・京城・平壤・義州・遼東を打通して、北京に至るまでの各驛間の里程を一々注した圖も殘つて居るといふ事である。是等は前に島井宗室等を朝鮮に遣つたり、後に内藤如安等を北京に遣はしたりした際に、實地を踏査させた結果であらう。此圖に就いて、嘗て一軍人から聞いた事がある。日清戰爭の際までは、從來の大陸地圖として在つたのは、大概杜撰な物ばかりであつた。其中で唯一つ里程の慥かであつたのは、太閤の諸將に授けた右の古地圖のみであつたといふことである。彼の用意も亦察す可しだ。

獨り是れのみで無い。今日まで留存する彼が遺愛の扇面(古渕氏秘藏)を觀るに、表の一面には、東洋一帶の地圖を畫き、日・明・韓三國の山川都邑を尺幅に收め、把玩の間に、一瞥して、三國の形勢を審かにされる。而うして裏の一面には、平假名を以て、上段には明語を記し下段には其譯語が書いてある。それは即ち左の通りである。試に今日までに人の按じついた原字までを注して、一覽に供しやう。

「もつくわい
御禮申なり

たじロん口(多時)
このほと御めにかゝらず

しん〳〵 進々　こなたへ御いであれ
きうれう 久了　ひさしい
むくんふ 沒工夫　ひまない
うくんふ 有工夫　ひまある
きれう 歸了　いにたい
たうれう 惱了　はらたつ
ふき 不歸　かへるまい
なさらい 拿茶來　ちやもつてこい
なちうらい 拿酒來　さけもつてこい
なひゑんらい 拿硯來　すゞりもつてこい
かうれう 好了　よき事
ふかうれう 不好了　あしき事
くんれい 困了　ねたい
かんふかん 敢不敢　そかそでないか
なほんらい 拿飯來　めしもつてこい』

即ち是れは納涼の裏に、知らず識らず明語に通曉しやうと心掛けたのである。其用意の周到も亦驚く可きでは無い歟。願ふにそれは萬事に亘つて、皆此の通りであつたらう。彼豪故に加ふるに、此細心あり。彼一代の大業を成した所以である。柔も茹はず剛も吐かず、酒の脊に餅も結構とは此英雄の謂ひてもあらう歟。

彼の堅忍

旣に彼の細心を言つたから、それと自ら關連する彼の忍耐力而も人より强い彼の堅忍に言及せねばならぬ。全體一つ畏ろしく强いものがあると、それに掩はれて、外のものは見えかねる。太閤の堅忍の如きも其の一つである。餘りに彼の天性と行事とが磊々落々てあつた爲に、其人堅忍の處は世に多く知れなかつた。併しながら其實は決して左樣で無い。

彼は無論「論語」などを讀んだことはあるまいが『小忍びざれば、大謀を亂る』といふ意味を、自然に會得し居た人であつた。彼がまだ少年の時である。朋輩に馬鹿徒らな悪少が居て、彼の小兵なのを侮り、一日泥溝の中に擠したから、彼は全身泥塗れとなつた。が、彼は敢て爭はぬ。『馬鹿のする事だから、爲すがまゝに

委せて置く」といひながら、澄まして居たといふ事てある。野史所引異說區

彼は何處までも此堅忍を失はぬ。それて前にも述べた通り、信長に奉公の初、此ヤンチャ大將に頭から小便をしかけられた時も、一旦は腹立てたものゝ、日頃信長を非凡な主人と見立てゝ置いたから『小忍びざれば大謀を亂る』のは此ぞと觀念し、其儘忍耐して勤仕を繼續した。

殊に彼に敬服する所は、十八歳にて淸洲に就いてから、三十二三歳に至るまて、十五六年間の謂はゞ無駄奉公てある。彼が如き不世出の英才を以て、此間の心抱は何程辛らかつたか知れぬが、階級を向んだ社會の裏から、氏なくして他年一日爲すことあらんと欲すれば、次第に其地位を築かねばならぬのて、如何なる無理難題にも耐へて來たのてあつた。永祿六年といへば、彼奉公後既に十年てあるから、一小部隊ぐらゐは預る身分となつて居たのてあらう。此歳八月、信長兵を美濃に出されたので、秀吉も從軍した。花やかにして出色の事を好む彼の事てあるから、自家の部隊を標する爲に、分不相應な旗を飾へして居たものと見える。一日風とそれが信長の目にとまり、見慣れぬ旗差物、あれは誰の手ぢやと、左右に尋ねられた。木下藤吉郎の手て御坐りますると答へるや否や、信長勃然として憤り、乃公が允しもせぬに寛怠至極、生意氣な眞似をするとて、諸軍の撮視して居る前にて、其旗竿を切折らせ、以來箇樣な眞似をしては相成らぬと叱斥された。太閤記、家譜、實錄 彼が心中如何に遺憾てあつたらう。併し彼は些とも不平な顏色もせず、恐入り奉るとばかりて、依然軍事に精勤した。

斯くの如きは啻に一再のみては無い。天正五年彼が中國探題として播州に下向する歳までも、彼は尙ほ信長から御叱りを蒙つて居る。此歳八月、秀吉は柴田勝家の軍に續いて、北陸への進發を命ぜられ、加州まで討入つたが、其頃から既に勝家とソリが合はなかつた歟、若くは他によく／＼の事情があつた歟、自分の軍を拔いて、無屆て歸陣したので、是が又信長の逆鱗に

觸れて、忽ち勘氣を蒙つた。が、例に依つて爭はぬ。謹愼して後命を待つたので、信長も乃て怒を釋き、彼の大用す可きを知つて、終に中國押への總大將にまで任じたのである。信長公記

但し此頃までは彼の不得意時代であつたから、其忍耐も左まで不思議は無いと謂へばいへやう。さらば關白以後の彼は如何に。彼德川家康とは小牧以來の恨がある。而うして身は既に關白となり、天下の大勢は彼の一身に集中し來つたのであるから、彼が得意の戰略位詰を用ゐれば、結局家康に打克つことは明々白々である。唯此擧に出づる時は、一年か二年を費さねばならぬ。斯くては前途に有する一期の壯圖世界統一の障碍となるので、行掛りも舊恨をも忘れたやうに脫却して、扱を入りて招撫して居る。亦是れ『小忍びざれば、大謀を亂る』からである。

最後に最も彼の堅忍を見る可き一事を擧げやう。それは彼が茶讌を開いて、諸將を招饗した際の出來事であるが、彼は自身の手前にて茶をたてゝ、諸將の列に侑めたのである。諸將はそれに口を着けながら、それからそれへと回して、大谷刑部少輔吉隆の前に到つた。處が吉隆、斯人にして斯疾ありて、ひどい癩病の先生であつた。日頃から兎もすると血膿が洟となつて出る。今や吉隆は茶碗を取擧げ、それに口を着けやうとする一刹那、折も折、時も時、例の洟が覺えず知らずトロ〱と茶碗に落込んだ。打物取つて萬夫の勇も、是れには礑と當惑した。諸將は未だ氣がつかぬ。すると炯眼の太閤は早くも之を看出したが、素知らぬ顏にて『刑部！其茶は湯加減がまづい。今一度たて直すから、此方に寄こせ』といひながら、茶碗を取つて只一息、グッと飮乾して、新たに茶を易え、更に之を回したから、何の失體も無く、其式は終り、吉隆一期の面目を全うして、ホッと其席を退出した。一個の豪傑吉隆が心身を擧げて、之を太閤に捧げたのは、實に此一碗の茶にあつた。自分は太閤の傳を讀んで此に至るごとに、悚然として毛髮を立たしめる。凡そ血誠ある男子にして、斯かる一期の窮境に際した時、此救護の人に會ふ。身

命を捧げずして何とせう。彼太閤が匹夫より起り、天下群雄の心を收攬し、彼が如きの大事業を成功した一つは、此堅忍の力てあらう。

彼の機敏

彼の機敏と疾速に至つて、亦一代に冠絶して居た。それは當時に名を得た諸將に比して、最も明かに之を見ることが出來る。天正十年六月二日の朝、明智光秀の爲に織田右府御父子本能寺に於て不慮の御最後を遂げさせられたとの變報が、備中高松城攻圍中の秀吉の本營蛙ケ鼻に達したのは、翌三日の夜の子の刻（夜半の十二時）てあつたから、同じ變報は近畿に在る織田家の一門乃至宿將の許には、無論之と前後に達したに相違が無い。是時に當つて直先に義兵を擧げ、所謂弔合戰をして、光秀を退治した者に、天下の大權が自ら歸す可きは、何人も等しく見得たてあらう。其中にて比較的困難な地位に立つて居たのが、即ち彼秀吉てある。何となれば備中高松から京都までは、濃州の岐阜や越前の北庄からそれまでに比べれば、第一に距離が遠い。お負に毛利の大軍を眼前に控へて居る。右府の薨去敵軍に聞え、吾軍退却といふ事になれば、敵の追躡は言はても知れて居る。之と接戰した日には、彼の武器にて好し壞敗を取らぬとしても、多く時日を要するも、亦論を待たぬ。而うして時日にして遷延すれば、上國の大事は去るのてある。彼の明敏は直ちに此機を察し、飛脚を部下の一將に預けて、他人との接見を禁じ、次いて到る可き諸飛脚を、人を出して途中に留め、神秘の間に、敵將清水兄弟の切腹、高松の開城を處理して、四日に毛利氏と媾和條約を結了し、五日の未明から全軍の退却を始め、八日には自家の封國播州姫路の治城に入つて、大いに軍容を整へ、九日の午前東天未だ明けざるに、早や進軍。十一日には既に攝州尼ケ崎に達し、十三日には山崎の戰闘を開始し、僅に一日にして明智の全軍を破碎し去つた。

此間に光秀は何を爲しつゝあつた歟。彼既に信長を弑し、旗を京都に建てた以上は、來つて彼に對抗す可

き者の秀吉である事は、彼自身にも熟知する所である。然るにも關はらず、二日間京都に滯在して、將軍宣下を申請けたり、安土城に入つて、蓄積の金銀財寶を數へたりなどして、十日に阪本城に來つたのである。而うして此にて十二三日頃には秀吉の軍東上し來ると聞いて、大いに其疾速に驚いた。秀吉の勝利、光秀の敗績が天意人心の歸する所とはいへ、未だ開戰を待たずして、勝敗の數早く見えたのは、前者の機敏と後者の緩稽とに在る。光秀は到底秀吉の敵では無かつた。

次には柴田勝家との抗爭である。勝家は第一着に弔合戰で秀吉に機先を制せられたから、悔やしくてならぬ。そこで第二には自分織田家の元老を笠に着て、同家勳舊の諸將を岐阜に召集し、故右府の庶公子神戸信孝を押立てゝ、權勢を振はんと企てると、又秀吉の主張した嫡孫三法師擁立説に破られ、お負に秀吉が傅役となり、三法師を掻抱いて、勝家等に拜謁させたから、手も無く秀吉に三拜の禮を執つたやうな姿となつた。餘りの腹立たしさに、強て秀吉に詰腹を切らせやうと巧めば、機敏の秀吉は早く長濱に歸城して、途中からの病氣届に、亦鼻をあかせられた。さらば今度は故右府の御法會を申立てゝ、秀吉を京都におびき出し、其處で彼を取緊めやうと謀り、殊勝らしく法會開催の事を姬路に申遣はせば、機敏の秀吉は早くも其陰謀を看破しながら、表面には大贊成、それに就いては、總見院殿の大御法會に一大寺院の新建なくては副さはしからぬと申立てた。勝家は裏の裏を掻かれるとも知らず、今度は吾計其圖に中つた。來るといふなら寺院も建てよと、工夫を督して建築に取掛ると、秀吉は其間隙を利用し、大いに軍を整へて、兵威堂々上國を指して押上つたから、勝家の陰謀は畫餅に歸したのみか、秀吉の爲に取て押へられる虞があるので、風を喫つて、都から退散した。時は既に十月である。勝家憤恨骨に徹するも、是から本國の軍を整へ、打て出てやうとするには、積雪時期に差掛るので、如何ともすることが出來ぬ。そこで今度は又手を換へ、人質まで送つて誠意の媾和沙汰。すると秀吉は心中に喜びながら、直ち

に同意し、使節の饗應勝家への贈遺に善美を盡したので、勝家手を拍つて喜んだが、それが亦糠喜び、翌年四月、解雪を待つて、北庄から軍兵を傳發するまでには、江越の國境柳ヶ瀬の一帶には、連珠の如くに諸堡塞竣功して、秀吉の諸軍は此に充實し居た。それて勝家の軍が愈〻出たと、秀吉岐阜にて聞いた時に、前にも述べたやうに、腰なる佩刀をスラリと拔き眞甲に押當て丶『弓矢八幡、戰は慥に勝戰ぞ』と雀躍りし、一騎驅けに賤ヶ岳に馳向ひ、彼が如き大勝を博して、一擧に勝家を滅ぼした。『機を見ること神の如し』の語、亦秀吉に於てこれを觀る。

彼の戰略

戰略といへば、今の兵用語に照らすと、戰術に對する戰略となるから、意義が些と局限せられて、少々此には當篏りかねる處もあれど、外に適當な語を思ひ得ぬから、暫く之を用ゐるが、孫子に所謂『算多き者は勝ち、算少なき者は勝たず』の其「算」の意義から彼太閤を觀るに、其多算も亦當時に匹儔が無い。彼は其の當時に所謂「はかをやる」といふことを第一に心掛けた。即ち餘り要ても無い小競合などに齷齪せず、戰局をズン〳〵進捗せしむる謂ひてある。從つて何時でも、又何事ても、全般の上に眼を着け、全局の勝を制するに心力を傾倒した。それて彼の手が旋るやうになつてからは、謂はゞ倍加の力を以て敵に臨み、敵をして到底兜を脫いで降伏せねばならぬやうにしたのてある。當時の語て之を「位詰」と稱して居た。

此「位詰」てグン〳〵と敵を壓するから、彼の一生に未だ嘗て一度も敗軍した事がない。それは比較的に難戰てあつたと傳へられて居る小牧の役ても見ることが出來る。此役、敵は名に負ふ海道きつての豪の者德川家康て、而も多年實戰に實戰を重ねた駿・遠・參三州の精鋭を竭して出て丶來たが、秀吉は十二萬の大軍を以て、之を壓して小牧に陣を布いた。時に秀吉の麾下池田勝入は氣を負ふ者、戰局の長びくのをもどかしがり、當時の所謂「大中入」即ち大奇襲を建策した。是は敵の

大いに出てた虚に乘じ、岡崎を擣かうとの策てある。此策たる、危道は極めて危道てあるが、敏速に行ひて、可怜其圖に中れば、亦奇功を奏す可きものてあるから、秀吉は之を納れ、小功を貪らず、眞一文字に岡崎を擣く可き旨を懇諭して、其兵を發せしめた。すると勝入齋其途に當る岩崎城を蹈破り、果して小功を貪つて、長湫の邊にて首實檢に時刻を空費し居る間に、機敏の家康其軍を督して殺到したので、勝入父子は其場に戰死し、殆ど奇襲軍の全滅となつた。德川氏の時代に成つた戰記といふ戰記に、東照公長湫の御勝利と稱し、秀吉全軍の敗績てゞもあつたかのやうに吹立てたのは、即ち此役てある。が、其實秀吉は此報を得るや、袂を投じて立揚り『敵は必らず勝に乘じ、此方に向つて追撃し來るてあらう。家康を討取るは、此一擧に在る』と歩騎二萬を督して、飈風の如く長湫まて押出した。此際家康にして勝入の前轍に倣はせたらば、德川氏の運命は此日に盡きたてあらうが、彼の智術は秀吉と相當つたので、長追すれば、秀吉の術中に落つ可きを思ひ、勝入軍に勝つや否や、直ちに其軍を引揚げたから、秀吉は空しく柏井まて吾軍を收めた。之に就いて「太閤記」の作者は左の如く評論した。

『逃るを强く追ふは、古今不易の人情なり。今十町も追過ぎなば、秀吉卿の先陣と寄合ひがしらに遭ふて、復た合戰あらば、上勢は新手といひ、多勢といひ、三河勢は事に會ふて疲れたる勢といひ、小勢といひ、旁以て危かる可き歟。家康卿流石の名將にて、長追すなと早く制し給ひつるに由つて、勝利を全くせし事は、龐涓が飽くまて追過ごし、孫子に討れしを以て歟。愼みはある可きものなり。又先陣は打負け、大將三人討死しつる由注進あると等く、秀吉卿急に勢を出し、小幡へ取入勢の首を且つ見給ひしは、猛將なり。聊か躊躇ふ心ましまさば、斯くはあらじ。何れも〳〵劣らぬ名將なり』

とは、評し得て肯綮に中つた。

而して其全局は何となつた乎と顧みれば、家康用兵の妙も、結局秀吉の「位詰」に敵するを得ず、所謂「扱」

の媾和を機會に、秀吉の草履を摑むに滿足するに至つたのである。

　それから最も能く「位詰」の戰略を觀る可きは、九州の島津征伐の役である。當時島津氏の勢は九州を壓し、關白の先發した長曾我部・仙石等の前軍をも破り、兵を筑・豐の野に耀かして、猿面郎設ひ如何なる大軍を催ほし來るとも、上方勢の華奢士、何程の事かあらんと競ひ居たのである。然るに天正十四年十月朔日に至り、今度九州御征伐として、愈々明年三月朔日を期し、關白御進發あらせらるゝに就き、畿內五箇國・北陸道の內五箇國・近江・美濃・尾張・伊賀・伊勢の五箇國・南海道の六箇國・山陰・山陽・兩道の十六箇國より軍勢二十萬人を徵せらるゝ。近畿及是より以東・以北の者は、來る二月廿日より以前に、攝州に馳聚まる可しとの動員令を發すると共に、それ〳〵人員を割附けた。それと同時に石田次部少輔・大谷刑部少輔・長束大藏大輔を兵站奉行とし、小西隆佐・建部壽德・吉田清左衞門・宮本長次を運輸奉行とし、兵三十萬人の糧食・馬二萬匹の飼料而も壹箇年分を準備回漕す可き旨を命ぜられた。（甫菴太閤記）すると乃て是等の兵食馬料を積載した船舶は幾百千艘と無く、舳艫相含んで、赤馬關・門司關邊に到着し、それ〳〵兵倉に入れられる。之を探知した義久父子は先づ之に仰天した。如何に上方勢と見くびつてみても、二十萬餘の大軍が一箇年の兵糧の蓄へを爲して寄來る日には、何と計算をしても、之に打克つ可き策が立たぬ。そこで前勝にも關はらず、先づ本國へと引つぼんだ。果せる哉翌年關白の大軍九州に臨むの日、平押に押詰められ、流石の豪傑義久も髮を剃落し、關白の轅門に降を乞ふの已むを得ざるに至つた。亦是れ「位詰」の結果である。惟ふに太閤から四世紀後の今日、世界列强の雄飛雌伏、其の分れ目は亦皆此「位詰」ならぬは無い。太閤千古の英雄たる、是に由つても知られるであらう。

彼の豪放

彼の天性卓落不羈にして、而も膽勇快活の人であつ

たから、其言行の豪放なる、亦往々人の意表に出づることが多かつた。彼が尙ほ柴田・明智・丹羽など、肩を駢べて、織田右府の幕下に在る頃であつた。が、此頃から右府沒からん後、大いに爲すことある可き者は、乃公と光秀の兩人であると、夙に思量し居たらしい。（然く思量した證左があれど此には略す）但し兩人の性行は甚だ殊にして、秀吉は豪放にして、言はんと欲する所を言ひて、毫も忌憚する所が無い。之に反して、光秀は沈深にして、一言一行も苟もせぬといふ風であつた。其中光秀は丹波に封ぜられて、龜山を治城としたが、彼は此時分から既に一大野心を有して居たものと見え、私に龜山城を周山と呼ばせて居た。蓋し彼は學問があつたから、自ら己を周の武王に比し、何時か一度は放伐の擧に出てやうとの下心と推せられる。すると一日秀吉は光秀に會見して、笑ひながら『此頃聞けば、貴殿は彼周山に夜普請して、謀判を企てらるるとの事、專ら世間で風聞があるが如何が』と問うた。光秀如何にも迷惑そうな顏をして『何を言はれるかと存ずれば、益たいも無い事を申される』といひながら、苦笑ひして居たと云。（言行錄所引）是時光秀は定めて冷水の三斗も浴せられた心地したであらう。

又天正十年の春、織田右府攻めて武田勝頼を滅ぼされ、甲信兩州平定の報、乃て秀吉の許に達した。時に彼は中國に在つて、毛利氏と對陣中であつたが、此報を聞いて『吁可惜ら事をした。自分軍中に居たならば、强ひても勝頼の一命を申請け、甲信二州の本領を安堵させ、彼驍將を先陣として關東に向つたら、東國は平押にす可きものを』と繰返し／＼痛嘆した。（仝上）彼の大度量と及「はがをやる」大英略から視てさもある可き事である。或人此事を評して『驚絕、駭絕、此一著は、織田・德川・二公均く爲す能はず太閤獨り之を爲さん』といつたのは適評であつた。

是より先き、天正五年の冬、信長から彼は中國征伐の大將を命ぜられた際、節刀の代りともいふ可き朱傘を允された事は、前にも述べたが、彼は之を拜領して、退出する途すがら、早く既に其傘を差翳させた。信長

之を樓上から望み見て『筑前がモー彼傘を用ゐるよ』と笑はれたといふ說もある。彼人としてはありそうに思はれる。

それから天正十年の六月十三日、山崎大戰の際、故右府の庶公子神戸信孝の手、敵軍の猛擊を受けて、既に危く見えた處に、此日の先鋒に當つた中川瀨兵衞清秀、其衆を麾いて、敵軍を橫擊したので、信孝も頹勢をもり返し、遂に此手の勝利に歸した。それで信孝は大いに喜び、清秀の手を把つて感謝して居た。折柄差掛つたのが秀吉、乘物の上から『瀨兵衞骨折り苦勞苦勞』といひながら行過ぎた。清秀目を瞪り『筑前がモー天下取りの氣になつて居る』と呟やいだ。(野史所引)秀吉の眼中既に人なし。其氣早く一世を吞んだ。而うして清秀は然く瞋り、然く呟やぎながら、其後も此人の用を爲し、翌年終に彼の爲に賤ヶ岳にて戰死した。秀吉人に上たるの資質は是れても分る。

又天正十七年の秋、小田原を平けた後の事てある。一日鎌倉を巡遊の際、白旗宮に詣てゝ、源賴朝の木像を觀た。其時彼は木像に打向ひ『往古から今日に至るまでの間に、流浪艱難の裏から奮ひ起つて、天下を取つた者は、唯御身と自分だけぢや。然りながら御身は鎭守府將軍賴義の後裔、關東八州に賴義・義家以來の恩義を思はぬ者は無い。それて御身は流人となられても、諸人私に心を寄せたれば、功を成されることも容易てあつたが、自分は御承知の微賤から起つて、終に四海を掌握したのてあるから、自分の働きの方が御身より勝つて居らう。併し天下を取つたのは御同然、御身と自分は隔世の親友ぢや』といひながら、木像の背を撫てゝ、心から勞はり、莞々として立出てた。(野史及言行錄所引)

それから東奧の征伐へと東下しつゝ、一夕宇都宮に宿陣した時に、佐野の天德寺了伯を召して、往昔の武功談をさせて、徒然を慰めた。其時彼は了伯が上杉謙信・武田信玄の事を語り出て、盛んに其武略を稱するを聞いて居たが『ヤア天德寺、其謙信・信玄の兩坊主も早う死んだから仕合せした。其奴等生存らへて、今日まて居たならば、吾乘物の先へ立て、朱傘を擔がせて、

歸洛の供させる處であつた。車懸や、座備や、何の小供の徒らぢや」とハツ〳〵と笑はれた。（同上）

是れは又大陸遠征中の事であつたが、開城府駐屯の小早川隆景は家臣曾根兵庫を名護屋の大本營に遣はして、太閤の起居を候問させた。太閤乃て之に接見し、隆景何ぞ建議は無い歟と問うた。兵庫畏こまり『其事に御坐りまする。隆景所存は、只今の分にては所詮兵員不足にて、思召すやうにはか參らず。就いては今十萬の御人數渡海仰付けられまするならば、それを繫ぎの城々に入置きまして、現在々陣の十三萬を以て、隆景御先手を仕り、朝鮮を押方づけて、大明に打入り、北京を攻取らんと存じますれば、右新手の御人數を願ひ奉りまする』と陳べた。太閤聞いて斜ならず喜び『隆景が氣象では、如何にもさもあらう。德川内府も前田納言も能く聞置かれよ。秀吉縱令齡積り、此征伐中途に死亡すとも、關白を大將に守立て、是非〳〵明國へ懸られたし。其時は吾亡魂惡神となつて、天へ上り、黒雲に乘つて、明國四百餘州の奴原を一度に踏殺し、摑殺して見せる」といひながら、左右を顧み『彼の栢榴を吹いて、火になつたといふ男の名は何といつた歟』と問はる。施藥院秀成傍より『それは勿體ない彼菅丞相の御事で御座りませう』と答へれば、太閤は頷き『それ〳〵其菅丞相のやうな小男さへ一念通ずれば、雷となつたといふぢや無い歟。乃公の念力必らず遂げて見せやう』と放言せられたので、滿座は驚いて、唯だ目と目を見合はせるばかりであつた。（同上）

彼の逸興

天性快活な人ほど氣嫌が好い。それだけ諧謔を好むものである。太閤は最も特出した此種性格の代表者である。彼が大陸へ大遠征を企て、肥前名護屋に在陣した際であつた。長陣の事であるから、諸將も自然に退屈する。彼は「人心をして倦まさらしむ」るの秘訣を兼ねて、一年盛夏水無月の頃（甫菴は文祿三年六月廿日と爲せど是れ恐らく二年の誤ならん）一大假裝會を催ほした。乃て期日ともなれば、本營の一空地に此處彼處茶屋、旅籠屋、瓜屋の類はしつらはれ

た。廊下の三上與三郎は其茶屋の亭主となり、女房には奥女中の常夏が當てられ、派手な浴衣に、繻子の袨衫を着け、今のボンネットに似た南蠻頭巾を被り、愛想よく客を延いて居る。又茶博士の蒔田權佐は旅籠屋の主人役、其の又世話女房には、是も奥女中の藤壺といふやんごと無き女﨟を當てられ、緞子の前垂見えも好く、眞紅の襷を肩に掛け、甲斐／＼しく立働く。

奴も出たは／＼。江戸大納言家康は「簣を荷うて過ぐる者あり」の經語からでも何人か敎へた歟。それとも陣中の土功用品其儘在る物を持出した歟。さも不器用な百姓男、簣を擔いで『簣買はし！／＼』と賣歩く。

續いて出たは丹波中納言秀勝、瓜漬商人の體にて、男といひ、聲といひ、其儘そつくりと人々興に入る。是も漬物桶を擔ぎ『かりもりの瓜や、かりもりの瓜、瓜召せ／＼！』と賣來る。是こそ如何にも武人の商法らしく、聲も似つかず、姿も調はず。彼れては誰れが買ふもの歟、所詮若くては萬事が駄目と評するもあれば、駄目でも年齡は若いに限ると反駁する者もある。

後ろに續いたは遍歴僧の織田常眞、贋弟子の坊に文庫を持たせ、諸國修行の體にもてなせど、右府の實子にてありながら、みす／＼天下を太閤に取られて、其頤使に從ふほどのお人善してあるだけに、遍歴僧も物にならず。「蛇に衣」と人々笑ふ。

次は加賀大納言利家卿ぞと人立ちする。高野聖の笈を負ひ、ノソリ／＼と出來り「行くれて袖打拂ふ方も無し佐野のあたりの雪の夕暮」といふ體にて『宿を――宿を――』と侘聲長く――其處らあたりを見まはさる。其聲いと哀れにて、如何にも高野の御僧へ一夜の宿を御假し申さうなど、此處彼處より大喝采。

次に津川三松は色さへ赤い半帷子を上に着て、其聲おかしく『弦召せ／＼、外に御用の物も候ふ』など、陣中に在つての好趣向。

次に有馬中務卿法印は有馬の池の坊に身を扮し、湯文高らかに讀上げて、湯治の効能を說廻る。お國に人を惹きつける、時に取つての妙案と、是も中々の好評判。

其中殊に立色と見えたのは、前田民部卿玄以である。元來此人長身肥滿、惡さげな顔つきてあるのに、比丘尼に份裝たので、見るから可笑しげてある。されど同人は莞爾ともせず、

『唯念佛を常に申せば、必らず佛になるぞかし。されど先づ此世を第一に心にかけ、來世の事は第九第十に行ひ候ふべし。念佛もむつかしく侍らば、晝寢をして氣を助け、心を正に持直すべし。只管現世が大事なり』

など、淀みも無く打誦せば、孰れもドッと噴出す。其他の諸將、或は禰宜、或は普化僧、或は鉢叩き、或は猿舞しなど、思ひ／＼に假裝して、臍をよらせ、頤を脱させる。

扨今日假裝園遊會の主人公は如何にと見れば、柹色の異しげな帷子に、、黒頭巾、菅笠を背中に掛け、藁の腰簑引纏ひ、瓜屋の老爺に份裝て、店に多くの甜瓜を竝べ『味よしの瓜召され候へ／＼』と店の前に立つ人々を呼込まれる。誰が目に見ても氣釋の瓜商人。假裝の諸將は主公の殿下が御手ずからの御賜與に預からんと、我も／＼と入來る。中にも會津飛彈守氏郷は荷茶賣になり、それと無く其前に差掛かる。主公は呼止め、一杯所望せらるれば、茶賣は頷き、極上の茶を立てまゐらせ、滅法高い代物を強要つた。それは高い。高うは候はぬ。否や高い。高うは御坐らぬ。再三押問答の末に、代價を貰つて立出てる。さも身そぼらしい瓜屋の小店、笑ひの聲に動がんばかり。立ち代つて入來るは、旅の老僧と見せた職田有樂、いと殊勝げに珠數爪繰り『瓜御結緣あらぬ歟』と所望する。主人公立つて『それ御法捨』と瓜二つ手ずから與へられるを遮つて『否やそれはまだら若い。今少し熟した方を』と横着にも取易へさせるので、亦又一と笑ひ。

果は瓜屋の主公も立出て、其處此處となく見廻らるゝを茶屋の與三郎が假女房の常夏は早くも見つけ『お茶きこし召せ。溫かな饅頭もおはしまし候ふ』と呼込んだ。瓜屋は一服して、表に出れば、此度は旅籠屋權佐が店から、今日ばかりの世話女房藤壺ソレと驅出し

來り『お飯まゐり候へ。甘酒も、切麥も御入候』といひながら、瓜屋の手を取つて引入れる。大象も女の髪の毛なり。一世の大英雄引かれながらに、ワッハヽヽヽヽヽと相搆を崩される。甫庵此處を『殊の外の御機嫌にて、布袋の笑めるやうに、目も口もなきばかりに見えさせ給ふ』と狀したのは、さもあつたらうと想はれる。

二十世紀の假装會、西洋傳來と思ひきや、天性快活の太閤が一時の遊興に、早くも此事は吾國に胚胎した。吁是れ眞に一時の諧謔、併ながら其のドン底には『官武一致、庶民に至るまで其志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す』と今上御登極の初に宣せられたる御誓文の要旨は此に在る。太閤の太閤なる所以のもの、此一端に於ても亦見る可しだ。

勞働者の生活問題

稻葉良太郎

緒論

一體文明が進むに從つて、其餘弊を受けて國民の體格が段々弱くなつて行くといふことは各國共に免れざる趨勢であるが、其中でも特に其傾向の著しいのは都會の人である。其原因は種々あらうけれども、最も主なるものは生活の困難に伴うて榮養の不及になることで、之は歐洲の學者も認めて以て國家の深憂とする所である。何故都會の人の體格が地方の人に比して劣弱に陥るかといへば、商工業が段々盛んになるに從つて、人口が都市に集中して來る。然るに都會の不潔なる空氣、狹くして汚く且つ密集したる住居、酒色其他種々の誘惑、物價の高直等はどうしても生活難と不健康とを惹き起さずには置かぬ。のみならず都會の職業は、田舍の百姓の仕事などに比ぶれば性質上危険を伴ふて

居る。此等いろ〳〵の惡るい影響が知らず識らず人體を疲弊させる。其中でも生活の困難に伴ふ榮養の不及の結果は、體力を薄弱にして、勞働の能力を減じ、傳染病や其他いろ〳〵の疾病に對する人體の抵抗力を弱め。又精神力を萎靡し神經を過敏にして剛健の氣象を失はしめる、而して其餘弊は更らに纖弱な體質を子孫後昆に殘すことになる。其害毒實に恐るべきである、けれども其等の害毒は恰かも肺結核か慢性病の如きもので、其惡るい徴候が容易に外にあらはれず、忍びやかに潜んで居るものであるからして、世俗の注目を惹かぬのである。今實例を擧げて見れば、英國の人間は丈も高いし體格もよい、國民の衛生が進歩してをる結果として死亡率が他の列國民に比して著しく少く、自から民族の繁榮を誇りとして居つたが、トランスバールの戰爭があつて一時に兵員を徴集する必要が到來した時に初めて氣が附いて見ると、昔のやうに國民の體格がよくない、そこで政府も國民も非常に驚き、一九〇三年から一九〇四年に跨つて委員を設けて、國民の體格が果して惡るくなつたかどうか、若し惡るくなつたとすれば其原因如何といふ事を講究せしめた。其講究の結果、體格の惡るくなつたのは主として都會民で、其原因は主として榮養の不及にあるといふ事が分かつた。そこで政府は救濟策としては根本的に都會の小學校生の榮養を高めると云ふ策を講じ學校の内に庖厨を置き貧家の通學兒童には無代價で或は價を安くして晝飯を食はせるといふ手段を執るに至つたのである。此等の實例からして各國とも、下層人民の榮養の忽にすることの出來ぬことを感ずるに至つた。てプロイセン王國の國立國民保護局では一九〇九年に都會の小學校兒童の榮養狀態を調査し、又一九一〇年にはプロイセンの各州の食物の生産消費額、州民の榮養狀態及び變遷を研究し、一方に於ては州内の都會地方民の疾病率、死亡率、徴兵の合格率を調べて居る。其成績によつて見ると、國民の食物が段々惡るくなつて體格も生活力も漸次に衰ふることを擧げ、其救策濟に說き及んで居る。又一昨年白耳義のブルツセル府に第二回萬國食餌

衛生會議が開かれ、其委員の議した中で、各國民に食物に關する知識を普及させるやうな方法を採ることを政府に勸告することを全會一致で可決して居る。其趣旨は恐らく下層人民の榮養向上を計つて、體格の弱くなるのを防がうといふのであらう。

顧つて我日本の狀態を考へて見ると、過去四十餘年間に於ける偉大なる國力の發展民族の膨脹の跡を稽ふれば此等の點に就きて今日別段心配することがないかの如く思はるゝけれども、然し元來日本人と歐洲人とを比較して見れば、體力精力は遺憾ながら歐洲人に劣る所がある。而して近頃物價が高くなつて下層民の生活が益々困難となり、其榮養上に於ける打擊も少くない。のみならず都會の人間の體格が漸々劣弱になる傾向も已に明かになつて居る。現に東京市民の體格は之を田舍の人に比ぶればわるい。又徵兵の不合格者の率も村落よりも市に多い。又統計に據て見ても都市には一般に死亡率が漸次殖えて行く。歐洲の各國では死亡率が次第に減つて行くのに、我日本では啻に減らざるのみならず追々に殖えて行く傾向がある。文明の餘弊が已に我々の頭にも迫つて來たやうに思はれる。近頃になつて生活難の叫びや、食物問題が世間の注意を惹くやうになり、新聞や雜誌に此種の題目を見、且つ夫れ〲專門の學者の研究なども發表されるのは甚だ喜ぶべきことである。が今迄の學者の議論は多くは抽象的であつて、實際の下層民の生活生計はどうであるか、榮養狀態はどうであるかといふ具體的の研究は少いやうである。將來は其方面に於て學者爲政者共に協力して調べて貰ひたいと思ふ。

私は下層民の生活狀態を向上改良することが國家の必要事と信じ、近頃或大きな工場に仕事をして居るものゝ生計狀態、榮養狀態を少しく調べて見たから、お望によつて其れをお話して見やうと思ふ。

勞働者の生計狀態

生計の狀態を調べた所を申せば、一體國民の大多數が最も多く所得を費やすものは食物である。收入が少い程、食物に遣ふ率が段々殖えて行く。だから少し食

物の生產供給が少くなつて、食物の價が高くなるとすれば、食物に費やす比率が益々多くなる譯である。夫れ故に下層の人間は勢ひ、粗食に甘んじなくてはならぬ事になり、其結果は榮養の不及を來たし體格の發達を阻碍するのは自然の數である。下級民榮養の狀態を究むるには先づ其生計狀態を知るの必要がある。歐洲の先進國ては或は官廳て、或は工場て、或は個人の學者が此等の關係を取調べて明かにして居るが日本にはまだない。私は主として器械、鍛冶職工の比較的眞面目な生活をして居るもの約八百人について調べて見たが、其中結果の確かなものが六百八十八名ある。之を主働者の平均月收の多少に從つて十圓以上十五圓以下。十五圓以上廿圓以下。二十圓以上二十五圓以下。二十五圓以上三十圓以下の四種類に分けて見ると十五圓以上廿圓以下の所得者の數が一番に多い。全體の四十六パーセントある。そして其平均の月收が十七圓四十錢てある。二十圓以上二十五圓以下の部類の平均月收は二十二圓八十錢てある。十圓以上十五圓以下の平均月收は十三圓七十一錢てある。此二つの部類は全體の約二十二パーセントある。それから二十五圓以上三十圓以下の部類は僅かに總數の十分の一てある。さうして見ると私の調べた中て一番多數なのは十五圓以上廿圓以下の部類で即ち平均月收十七圓位を取るのが約半分位てある。それから家族の數を調べて見ると、獨身者を除いて、一家族を成して居るものは、主働者と合せて平均四名位てある。四名の家族があるから、主働者の收入丈けては生活が出來ぬ。大抵は皆父母あるものは父母、兄弟あるものは兄弟、妻を持つものは妻も工場に行つて仕事をするか或は家に居つて手內職をするかして、一家の生計費を補足しつゝある。今假りに家族の中て十五歲から上のものは皆內職するものとして、一人の內職高を計算すると、第一類の月收十圓以上十五圓以下のもの丶家族は每一人平均四圓。第二類の十五圓以上廿圓以下の家族は平均四圓二十八錢。第三類の二十圓以上廿五圓以下の家族は平均二圓八十錢。第四類の二十五圓以上卅圓以下の家族は平均一圓

てある。さうすると、平均先づ三圓乃至四圓を取るものと認めて差支なからうと思ふ。そこで家族の中で五才から十才までのものは三人で大人二人と見做し、五才未滿のものは三人を大人一人と見做し、一人が一日に費やす生活費を調べて見ると

部類	總支出額	家賃	米代	副食物	薪炭代	理髪入浴代	其他
第一類	二三六・四厘	三八・九厘	六六・四厘	五一・四厘	二三・八厘	二二・一厘	三四・八厘
第二類	二四三・九	四五・六	六五・六	六〇・五	二一・三	二二・八	四〇・五
第三類	二五八・二	四〇・七	七三・三	五八・二	二三・三	一五・九	四七・八
第四類	二五四・二	三一・三	六五・三	六〇・五	二一・一	一三・三	四三・〇

そこで假に薪炭油代の中より一錢を燈火及採暖用と見積れば一人一日の食費

米代	六錢七厘四毛
副食物代	五錢七厘六毛
薪炭代	一錢二厘一毛
合計	拾三錢七厘一毛

即約十四錢となる。今六錢七厘の米代にて、いくらの米を購ひ得るやといふに、一昨年の小賣相場にて二等米一圓に付五升五合とすれば三合七勺を購ひ得るも、昨年來の如き米價暴騰し現今一圓に付三升六七合となるときは僅かに二合六勺を得るにすぎざるとゝなる、我國では中流以下の人民は殆んど穀類計りで榮養を攝りて居ると云ふも差支ない有樣であるから斯の如き米價の暴騰が下層社會民の榮養に與ふる打擊の甚大なるは想像に餘りあるのである

次ぎに生活に要する諸費用の割合を算當して見ると

部類	家賃%	食費%	酒代%	被服下駄代%	理髪入浴代%	教育費%	雜費%
第一類	一七	六三	三	八	五	七	二
第二類	一八	六一	三	八	五	八	一
第三類	一六	五九	四	八	六	三	四
第四類	二〇	五八	四	九	五	二	二

さうすると一般にこう云ふ事が云へる。收入の高が

増せば食物に費やす率は漸次少くなる。家賃に費やす率は、或る程度までは減つてそれから先は殖える。衣服に費やす率は收入の増す程殖え雜費も酒代も亦收入と正比例に殖える。それから敎育費は收入額と反比例すると云ふ結果を得たがこれは偶然收入の高いやつに學齡兒童が少なかつた爲めて、一方からは收入の少なき者の生計の一層困難なる狀況を察せらる。

一體我國一般勞働者の平均賃銀は何程かといふに、明治四十年末統計に依れば、全國を通じて三十一類の諸傭普通賃銀の平均は、(賄付除き)一番高いのは煉瓦積み職工で九十九錢五厘。一番低いのは版摺職工で四十四錢二厘。平均六拾三錢である。東京市に於ける二十七種の諸傭普通賃銀は洋服仕立屋が一番高くて一圓五拾六錢三厘。機織職工が一番低くて三十八錢。平均八十一錢三厘である。若し此中から一圓以上の職人即ち左官、煉瓦職工、經師屋、建具屋、洋服仕立屋等を除くと一番高い奴は家根屋で九十七錢。一番低いのは機織て三十八錢平均六十九錢九厘である。所が勞働者は季節、天氣の具合、職業の都合、お祭り、盆暮れ、また朔日十五日などの休みで仕事が出來ぬ事もあるし、病氣で休業せねばならぬ事もある。勞働者に聽くに一年間少くも八十日、多いときは、百二十日は休業すると云ふ。今假りに休業日數を最下限八十日と見積りて一年間二百八十五日の所得を積算して見ると、年收百八十圓で毎月十五圓位になる。東京の如き賃銀の高い場所では平均二百三十一圓で、月收十九圓七十錢になる。併し若し一圓以上の傭賃を取るものを除けば平均年收百九十九圓で月收十六圓六十錢になる。それ故に一般に云へば職工勞働者の多數のものは月收十五圓內外と見るのが至當と思ふ。して見ればその生活の狀態は私が前に調査した職工の第二類のものと略ぼ同一になる。

歐米と我國との生活費の比較

今歐洲各國の生活費の割合が幾何かといふに、エンゲル氏の研究によれば貧乏人程食物費の率が高くなる。氏が年收に對する食費の關係を調べた所謂エンゲ

ル氏率を擧げて見ると

一家族の年收	食物費
二〇〇フラン	七二、九六パーセント
五〇〇	六六、八五
一〇〇〇	六四、〇〇
一五〇〇	六〇、七五
二〇〇〇	五八、六五
二五〇〇	五七、四五
三〇〇〇	五六、〇九

である。又バウエル氏の統計ては

年收	食物費
三〇〇〇マルク	五七マルク
一五〇〇	六一
七〇〇	六七
三五〇	七〇

となつて居る。合衆國の一八九一年の統計では年收二百弗のものは食物費に四九・六パーセント家賃に一五・五パーセントを費す。一九〇三年の巴里市の統計では年收二千百十フランのものが食物費に四七・四パーセント家賃に一一・八パーセントを費やす。

そこで今彼我勞働者の食物費の割合が何れが多いかといふに

日本（家族の收入を含む）	平均年收	二百四十圓
	一年間食費	百四十八圓
獨逸（家族の收入を含まず）	平均年收	五百三十四圓（一一〇〇マルク内外一八九五年調）
	一年間食費	三百二十五圓
英國（家族の收入を含まず）	平均年收	五百九十五圓（一二二四志一八八七年調）
	一年間食費	二百五十六圓
米國（家族の收入を含まず）	平均年收	八百四十七圓（四百四十二弗一八八〇年調）
	一年間食費	四百七十圓
佛國（家族の收入を含む）	平均年收	八百二十圓（二一一〇法一九〇三年調）
	一年間食費	三百八十六圓

それ故に吾勞働者の食費を一とすれば日本と、獨、英、米、佛との關係は一に對する二・二、一・七、三

二、二・六といふ割合になる。收入を比較すれば日、獨、英、米、佛の關係は一に對する二・二、二・五、三・六、三・四の割合になる。それ故に收入に對する食費の關係は佛最も少なく米と英とそれに次ぎ獨は殆ど日本と同じい。けれども平均年收額の中で獨英米は家族の內職收入を含まぬから實際の年收は前に述べたよりも多い。處が食費の率は收入額が增せば增す程少なくなるから實際家族の收入を含む他の國の勞働者の收得に對する食費率よりも著しく少ない譯になる。のみならず日本人の食ふものと西洋人の食ふものとは甚だしき差異がある。それ等を考ふると日本人の食費率は著しく高い。從て下層民の生活難は西洋人よりも寧ろ甚だしいと考へてもよい。けれども西洋のは二三十年前の統計であるから今の日本と比較するのは適當でないかもしれない。西洋でも勿論物價は騰貴する。併し日本の樣に急激でない。またパンの原料たる小麥の如きは未開の地の開墾に由り年々生產額を增加し交通機關の發達を利用して安く本國に輸入するを得。實際の統計を見ても此の半世紀間に小麥の値段は著しく安くなつて居る。肉も餘り高くならない。そして勞働者の勞銀は次第に高くなつて居る。それやこれやを綜合して見ると吾勞働者は外國の勞働者よりも割合に高い食物を取つて居ると斷じても差支はあるまい。

明治三十二年より四十一年に至る最近十年間に於ける主なる食料品價格の騰貴率を帝國統計年鑑に由りて調べて見ると

米（四十一年は三十二年に比して）	五四、六％騰貴
大麥	三四、五％同
大豆	八、二％同
醬油	四二、六％同
酒	五二、九％同
茶	二六、四％同
砂糖	三三、二％同
鹽	九〇、五％同

と云ふ莫大なる騰貴を示して居る。然るに勞働者の賃銀は三十二年に於て諸備普通賃銀平均四十二錢八厘よ

りよりて四十一年には六十七錢六厘となつて居るが高上の割合は三七、六%に過ぎない。之を以て見ても食料品が著しく騰貴し收入少なき者の生活に困難を告ぐることの著しきを察する。

彼我家賃の比較

又家賃の事を調べて見るに今度の調査に依れば收入の十七乃至二十パーセントを家賃に拂つて居る。收入の殆んど五分の一である。之も甚だ廉くない。例へば一八九一年の米國の統計では年收二百弗の勞働者の家賃は一五、五パーセント。一九〇三年の巴里の統計では年收二千百十フランの勞働者の家賃は一一、八パーセントであるから日本人の割合の方が遙かに高い。そして實際日本人はどんな家に住むかといふに私が五百六十家族に就いて調べた處によると家族の數と(但し五歲以下のものは一人と看做さず)疊數と家賃とを調査し、一人一ヶ月に拂ふ家賃と一人の占める疊を計算すれば家を持つて居る人では一ヶ月の平均家賃が一人宛一圓二拾四錢さうして疊數は最も多い人で七疊半最も少ない人は一疊に充たない、平均二疊半である。すると一人が疊一枚に就いて拂ふ金が五十一錢といふ事になる。極く汚ない、狹い、不潔な家で而かも疊一疊に就いて五十錢乃至六十錢を拂ふとは隨分高いものと云はねばならぬ。家族一人に就いて平均二疊半宛であるが甚だしいのになると九名の家族が八疊に起臥するものもある。かゝる密集的の生活が其衞生、風紀、道德上に及ぼす危害を考ふれば實に悚然たらざるを得ない。

獨身者と成家者との生計の差異

それから獨身の職工が一日に費やす所を略ぼ同一の收入で家族を持つものと比較すれば獨身者の方が成家よりも遙かに多い。一例を擧ぐると獨身者は米代十二錢、副食物十二錢、薪炭料四錢家賃九錢。理髮入浴一錢四厘、雜費十錢で暮して居るが成家者は米代七錢、副食物五錢五厘、薪炭料二錢四厘家賃四錢、理髮入浴一錢三厘、雜費四錢で生計を營むで居る。それだから獨身者が一人に就いて食物の爲めに費やす處一日二十五錢乃至二十八錢で成家者の殆んど倍である。それな

れば獨身者の食物は成家者よりも良いかと云へばさうは行かない。といふのは獨身者の中稀に自炊するものもあるけれどそれでも一人でやれば失費が多い。多數のものは自炊などを面倒臭がり又一家團欒の樂もない所から多くの者は縄暖簾を潜ぐつて酒を飲む事になる。さういふ飲食店の食物は共同厨房に比すれば殆んど倍高い。のみならず飯許りでなく酒を飲むので其結果健康を害する。又素人下宿で食ふにしても、飲食店よりも酒色の誘惑が少ない位のもので其の惡い事は明かである。

職工の健否と一國の生産力

處で健康で熟練な職工を得ると得ざるとは直接に工業の生産力にも影響を及ぼすのである。それ故に職工の生活費を輕減し、充分の榮養を執るを得せしめ身體を丈夫にして、永遠の勞働力を養ふと云ふ事は、企業家の注意すべき事で、歐洲先進國に於ては、工場法を設け或は病災保險法等を制定して。職工を保護し、工場主も亦金融、共濟、救療、教育等種々の機關を設けて自家の職工を優遇して、永遠の利益を收むるを圖つて居る。彼の有名な獨逸のグルップ銃砲製造工廠の如きは其模範とするところで工場村を經營して茲に自家の職工を住居せしめあらゆる便益を與へ順良、熟練にして健康なる職工を養成使用するとに務め、又大厨房を經營して獨身の職工には實費を以て食物を頒ちつゝある、近來歐羅巴の工場では皆之に倣ふて居る樣である、日本でも稀れに共同購買組合を造り市内に特約販賣店を設けて、市價よりも一割乃至二割引にて日々の需めに應じ。金に困る時は資金部より購買切符を受け取り之れを融通して所要の品物を購ひ得る樣に仕組み其他共同の大厨房を場内に設け殆んど實費にて晝の辨當を仕出し、望に依りては一日の賄を仕出すことも出來る設備のある所もある、共同の大厨房に於ては食物の原料を廉價に購ひ炊爨調理等の諸雜費を節約し得る故滋養に富む食物を安く頒つことが出來る。實例を以て示せば(昨年春の調査)或る所で一日拾七錢で以て米一人五合宛。副食物は朝は大抵味噌汁、菜漬或は澤庵、

晝及晩は大抵肴(鰯、鱈、鰈、秋刀魚、鹽鮭、目刺、の如き)と野菜を取合せたものを食はして居るが其一日の食物中に含む養素量即ち蛋白質、脂肪、含水炭素の量を擧げて見ると、

	蛋白質 グラム	脂肪 グラム	含水炭素 グラム	熱量 カロリ
米(五合)	五八、八五	一、二三	五五三、七	二五二三
副食物 (内動物性 二七、〇五 三、七二)	四二、七〇	七、八二	一四、一三	三〇六
合計	一〇一、五五	九、〇五	五六七、八三	二八二九

十七錢でかゝる養價を給することが出來るのを見ても其の大變經濟的であるのが分る。

日本人の榮養問題

一體日本人の一日に要する榮養分は大概幾何かといふに、日本人の平均體量は强壯者にありて、先づ五十五乃至六十キログラム(十四貫六百三十匁乃至十五貫九百六十匁)であるから、仕事をするに一日に取るべき必要熱量は二千八百乃至三千カロリである。之の熱量を蛋白質九〇乃至九五グラム、脂肪一五グラム、含水炭素五六〇乃至六〇〇グラムの各養素より取るとすれば身體の中に吸收されて活用される量は、凡そ蛋白質七〇乃至七五グラム、脂肪一一グラム、含水炭素五五〇乃至五九〇グラムで、二六五〇乃至二八三〇カロリーの熱量となる。先づそれ位でよかろうと思ふ。

榮養問題を論ずる時に何時も第一の問題となるのは、蛋白質の多寡である。何故なれば蛋白質は一番に身體に必要なるのみならず、脂肪や含水炭素に比べて遙かに値段が高いから、脂肪や含水炭素を取る事は容易でも、蛋白質は容易に取られない。それで蛋白質の多寡が榮養問題の最重の問題となるのである。有名なる生理學者ホイト氏は體重七〇キログラム(十八貫六百二十匁)の勞働者には日々一一八グラムの蛋白質を攝り、そうして其蛋白質の三分の一は動物性の蛋白質を以て補ふを適當として居る。私共の研究では日本人には蛋白質は九〇乃至九五グラムが適當と思はれる。動物性の蛋白質と植物性の蛋白質との榮養上の價値に就ては生理的に養價の差異なしといふ人もあるが、併し總て食物から入つて身體の組織に同化する時は一應

胃腸の中て醗酵素(消化素)の働を受けて、構成元基に分かれてそれが後に再生して、身體の蛋白になるのであるから、組織の蛋白に最も近い蛋白が同化する事容易にして且つ有利なる譯である。學者の研究に依ると動物性の蛋白質は植物性の蛋白質よりも、吾々の身體の蛋白に近い構成を有して居る。それは兎も角吾々が單調な不味いものに慊らず成る可く旨いものを食い度いのは生物の本能であつて、文明が進むと共に生活の程度の上るのも亦自然の結果である。况んや工業的の勞働に從事するものは食物の過飽を好まざるが故、成る可く動物性の食物を増して蛋白質と脂肪の供給を豐かにし勞働に必要なる熱量を給する樣に謀らねばならぬ。西洋人は蛋白質の三分の一を動物性にすればよいといふが、日本人は西洋人程肉食せず又脂濃い物を好まぬから、全體の蛋白質の四分の一乃至五分の一を動物性で補ふ事が適當と思ふ。

各種魚肉の榮養的價値

吾々は一體肉といへば主として魚肉を食ふ。私は昨年來魚河岸其他の小賣場て一圓に對して色々な魚を幾何買へるか、其一圓で買つた魚の養素量幾何かといふ事を調べて見た。(勿論食えない部分即ち排棄分を引きたる肉の正味量に就いてなり)。今之れを蛋白質の多いものから順序に排列して見ると、

	肉の正味量(グラム)	蛋白質(グラム)	脂肪(グラム)	熱量(カロリ)
鹽鮭(並)	五九一六	一五四四	一八六	八〇五八
鹽大口魚	六〇七〇	一一二九	九	四七一三
鰹	二九三三	七三六	三五	三三五〇
鹽鰯	二六一七	五八七	一四九	三七八九
鹽秋刀魚	一八八八	五四二	一二四	三三八一
鰤	二三九五	五〇二	三九	二四二四
赤魚	二七八一	四七七	一一	二〇五二
豚肉(下)	二〇八三	四二二	一四二	三〇五一
めじ(鮪)	二四三三	四一五	一一〇	二七二三
きわだ(鮪)	二四二〇	四一三	一〇九	二七〇七
鰍	一八八七	三九四	二一	一八一〇
鯵	一九二五	三七八	一五	一六九一
かぢき鮪	二三一五	三六六	二四六	三七八九
鯖	一六二四	三四三	四九	二一四三
烏賊	一七八〇	三四〇	一〇	一四八九
石斑魚	一五七四	三三一	七	一四二三
鱸	一六四四	三〇六	四二	一六五三

鯔(ぼら)	一二八〇	二七一	四四	一五二二
鰺(あぢ)	一二五五	二六三	九	一一六七
疣鯛(いぼだい)	一一五二	二五五	二〇	一二二九
靴底魚(したびらめ)	一一三〇	二五三	一〇	一一二七
竹麥魚(ほうぼう)	一三八五	二五一	四六	一四五一
鯰	一三三三	二四五	一九	一一七八
鯥(むつ)	一二七四	二二九	七九	一八一五
豚肉(上)	一五六二	二二七	五八三	六三五六
牡牛肉(下)	九三七	一九三	一六	九四二
牛尾魚(こち)	九二二	一八一	三	七七二
鰤	八七八	一六九	一五	八二九
鯉	七八四	一四一	七六	一二八五
鯛	六八二	一二九	一三	六五三

即ち一圓に對して得る熱量は鹽鮭最も多く、上豚之れに次ぎ鹽鱈、鹽鰯、かぢき鮪、秋刀魚、鰹、下豚、めじ鮪、きわだ鮪、鰤、鯖、赤魚、鯥、といふ順序になる。靴底魚、鯛の如き上品の魚は蛋白質も熱量も其割合最も少ない。今擧げた中で牛豚は小賣の相場であるが、大厨房で豚や牛を一頭の儘で買ふ事になれば割合が大變安くなる。兎に角勞働者の食物として鹽鮭、秋刀魚、鹽鰯などは鮮魚よりも値も安く調理も單純であるから最も便利である。又鮪、鰹、鯖の類、豚(下)なども蛋白と脂肪に富み、味も良くて値もそんなに高くないから、適當の食物といふべきである。牛肉なども市中の値段では安くないが、數百人分として牡牛の一頭乃至半頭を買ふ時は、左程高くなく食へる。馬肉は俗に櫻肉といふて下等のものとせられて居るが、之れは脂肪も少なく味もよくなく、豚に比しては劣る。

植物性の食物の養價

植物性の食物でどういふものが蛋白や脂肪に富み且つ吸收がよいかといへば、先づ豆類及豆の製品、麩などである。一二の例を擧げると、鶉豆は小賣拾錢に就いて凡そ一〇三九グラム、其養素は蛋白一九六脂肪一二含水炭素六〇〇其熱量三三七〇カロリである。黑豆は一一三七グラムで蛋白四五七、脂肪二〇七、含水炭素二五〇、熱量四八三〇カロリである。豌豆は七二二グラムで蛋白一四七、脂肪八、含水炭素三八四、熱量二一四八カロリである。而し豆の煮たのは不吸收分多く蛋白は半分位しか吸收しない。

豆の製品即ち味噌、豆腐、燒豆腐、氷豆腐、油揚げなども割合によい。今同じく十錢に就いての養分を擧ぐれば

左

	分量	蛋白質	脂肪	熱量
燒豆腐	一四六五グラム	一九二グラム	一〇六グラム	一七七三カロ
雁擬(がんもどき)	四八七	一〇七	九一	一二九四
豆腐	一七〇五	九九	七五	一一〇七
高野豆腐	二〇八	一一〇	五二	九三七
油揚	三二七	七二	六一	八七〇

てある。味噌は赤味噌て固形分は百分の四十八ある此の内蛋白は一二、五。脂肪は五、三。含水炭素は八位を含む。味噌百匁の價は三錢内外てある、故に假りに一日七十五グラムを汁にすれば、六厘て以て九、四グラムの蛋白。四グラムの脂肪。六グラムの含水炭素を取る事が出來る。一體日本人は朝飯に味噌汁を食ふといふ習慣がある。百姓などの食ひ物を見ると、味噌は一日に取る總體の蛋白質の九パーセント脂肪の十九パーセントを給する。又副食物に就いて見ても蛋白の二十六パーセント。脂肪の三十六パーセントは實に味噌汁から取る。それ故に味噌汁は安くして多くの養分を給する主要なる食物てある。特に味噌汁の實として其中に豆腐、鰹節(これは少々高いが)油揚などを入れゝば最も適當なる食物である。

それから勞働者の食物として野菜て安いのは薩摩芋、南瓜、里薯等てある。例へば薩摩芋は十錢に二六二八グラムて蛋白三五。脂肪五。含水炭素七五六グラム。熱量三二九〇カロリーてある。里薯は二三六〇グラムて蛋白四二。脂肪三。含水炭素三三一グラム。熱量一五六〇カロリーてある。南瓜は三二七二グラムて蛋白三六。脂肪四。含水炭素二一二グラム。熱量一〇五九カロリーてある。それからキャベツは二六四六グラムて蛋白七六。脂肪五。含水炭素二一六グラム。熱量一二五〇カロリーてある。同じ菜の中ても白菜は高く五一五〇グラムて蛋白六五。脂肪四。含水炭素四グラム熱量僅かに三二一カロリーてある。獨活、蕗の如きは最も損て、獨活は一〇四六グラムて蛋白一一脂肪一。含水炭素二六グラム熱量一六一カロリー蕗は一四

九四グラムで蛋白六。脂肪一〇含水炭一素四グラム。熱量一九七カロリーである。

右の研究を參考として價が安くて養素に含む食品を按排調理して給したならば、一般勞働者に向つて安くして滋養に富む食物を與へる事が出來ると思ふ。特に共同厨房で一時に數百人分を買ふ事になれば、益々安くなる譯である。

一ぜんめしやの研究

却說世人は多く勞働者は比較的美食せりと以爲へるが職工及定期勞働者を客とせる所謂一膳飯屋に就て親しく調べて見ると必ずしもそふでない樣である。

先づ朝飯には四錢五厘乃至六錢で、一錢の味噌汁が一杯、飯は大きな椀で一杯小さい椀で三杯で價三錢、それと一皿五厘の漬物を食ふのが大多數である。日傭人夫は一時に錢を得れば肉などを食ふて朝飯にも七錢乃至九錢を投ずるものもあるが、それは稀である。お晝の顧客には職工定期勞働者などは少なく多くは日傭人夫、行商などであるが、これは錢を取つた多少に依つて食物を定めるので食代も定て居らぬ。併し十錢乃至十五錢は上の部で普通は七錢乃至十錢である。夕飯には下級職人が最も多い、大抵四五錢乃至七八錢でお飯の外、野菜、煮〆、漬物を食ひ魚は少ない。かゝる飯屋では如何なる種類の副食物を賣つて居るかといふに私が二軒の繩暖簾に就て調べた所によれば其一週間に賣つた副食物は、大方燒いた鹽鮭、鮫、鱈、縞鯛、鰈、小海老、馬鹿貝ムキミ、馬肉の煮皿(以上動物性)、燕汁、薩摩芋葛掛、煮豆、燒豆腐、雁擬、卯の花、馬鈴薯、里薯、蓮、牛蒡、人參の煮付、澤庵、京菜(以上植物性)等で需用を聞けば味噌汁が一番多く、鹽鮭、澤庵等も亦多い。其他著しい差はないが、概して魚よりも植物性のものが多く出る。

共同庖厨の利益

そこで前に話した共同の庖厨で調理した食物と同じ樣なものを繩暖簾では幾何で食へるかといふに、先づ朝は味噌汁、晝は麵麭の如きもの或は燒豆腐、昆蒻の付合せ晩は鹽鮭目刺、其他三度共菜漬の漬物と御飯と

し、其養素量を計算すると二十七、八錢で蛋白九二。脂肪一二。含水炭素六〇五、熱量二九四〇の食物を得ることとなる。是れを前の十七錢で出來上るのに比ぶれば非常な高いものにつく。それ故に獨身者が假りに共同厨房で食ふとすれば一日十錢丈け多く食へる事になる。處て實際勞働者は前に述べた如く十八錢から二十二錢位しか食物に拂はないのであるから、今の様な食物は食ひ得ない。此値段で如何なる食物を執り得べきやといふに假に朝食に米飯大椀一杯の外に味噌汁と澤庵晝食に飯一杯半鹽鮭一皿夕食に飯一杯半里芋の煮〆一皿と澤庵一皿を食ふとせば其價朝食四錢四厘、晝及夕食各七錢計十八錢四厘にて略ぼ蛋白五九、四(此内動物性一四、八)脂肪六、七含水炭素四〇五、七總熱量一八三五カロリーの食物を得る、もう少しく奮發し二十二錢を出して朝の副食物に味噌汁一杯と澤庵一皿晝に鰈煮付蓮根の煮付各一皿夕に鱈の煮付と菜漬一皿を食ふとせば其價朝四錢五厘、晝拾錢夕八錢に當り蛋白八二、八(内動物性三七、六) 脂肪九、二含水炭素四〇一、四總

熱量一九四九カロリーの食物を攝ることゝなる。それ故普通勞働者が十八錢乃至二十二錢で食ふとすると、熱量二〇〇〇カロリーしか取れない。そこで多くは酒を飲むので熱量の不足分を補ふのであるまいかと思はれる。今細暖簾の酒の賣れ高を聞くに、甲の店では一ヶ月平均一五〇〇人(延べ人員)で清酒、濁酒、燒酎合せて一石五斗即ち一人一合宛を飲む事になる。乙の店では百人に就いて清酒を飲むもの二十名平均一人一合五勺、濁酒を飲むもの三十名一人に付き平均二合位、燒酎は最も良く賣れて酒客の半分は、大抵二錢乃至四五錢を買ふ。燒酎一合の價は六錢で二錢を買ふものは多くは濁酒一合に二錢の燒酎を交ぜて飲むのである。殊に職工は好んでアルコール分の多い強い酒を飲む。其害は非常に酷いもので、西洋の有名な衛生學者が、都會民の生活困難を告ぐる原因は飲酒であつて若し飲酒を避ければ榮養の不足を救ひ、少くも生活狀態を改善する事が出來るといふて居る。勞働者が酒を飲むといふ事は看過すべからざる事であるが、一は食物が高く

て旨いものが食へぬのに原因する。不味いものを食ふのと酒を飲む事の多少と比例するのは西洋も日本も同樣である。

下層民の榮養向上と共同厨房

獨身の勞働者貧窮の下層民が生活困難の爲めに榮養不良の狀態に陷らんとするは、最も憂ふべき事實と云はねばならぬ。そこで物價騰貴を防止し生活費の低廉を圖るは、國民の榮養狀態を高め、延いて强健な民族を作り出す處の根本要義である。これは最も重要なる社會政策の一として爲政家の大に考究すべき問題と思ふ。私は玆に下層民の榮養を向上せしむる一策として多數の職工を雇ふて居る工場には必ず共同購賣組合の如きものを設けて生活の資料を廉價に供給し又共同の厨房を設け、安くして旨い食物を職工に頒ち、食堂には談話室等を附屬してこゝに新聞及健全なる娛樂的書籍若くは道具を備附け獨身者は可成毎日の餐を此所にて食め、此所に寄り集ひて健全なる娛樂を求むる樣に仕向けたいと思ふ。

又都市に於ては公設或は富豪の慈善的社會的事業として民厨(獨逸の所謂「フォルクスキュッヘ」)を開き、事をしたいと思ふ。民厨は社會的慈善事業として、下層民に安くして暖かいものを食はしむる厨房である。是れは一番獨逸に發達したもので、其起原は遠く十八世紀にルンホルト伯爵が巴威のミュンヘンに肉汁舖を設け、勞働者の爲めに暖かいソップを與へたのにある。一八四八年の饑饉の後は此種のものが漸次獨逸の諸府に設けられた。當時そこで與へた食物は肉汁丈けて、養分も微々たるものであつたが、一八六六年になつて慈善家のリンナモルグンスタイン夫人が初めて民厨を置く事を企て、貴顯淑女紳士の賛成を得て數月を出でざるに一萬三千マルクの金額を醵集し同年七月初めて伯林に第一の民厨を開き開業の日には既に百餘名の客ありしと云ふ。此の事業は下層民の歡迎を受け二年も經たぬ中に、伯林市に同種のもの十個も出來た。一八六八年アウグスト女帝陛下が伯林の民厨協會の總裁となり、此事業は益々發展して各市とも皆競ふて之れに倣

ひ。現今では民厨を持つもの百二十市に達した。民厨では多くは晝飯のみを賣て居る。これは獨逸人の習慣では晝に主食として御馳走を食ひ朝は珈琲にパン。晩は黒パン、冷肉等で濟ますからである。併し近頃では晩食を準備せる所もあり又牛乳、珈琲、茶、麥酒等を賣つて居るが强烈なる酒精飲料は頒賣しない。献立は大抵毎食四五種を準備し通常麵包の外肉汁及肉野菜を調理したるもの一皿を好みに應じて賣る。價は通常三十ペンニッヒ(邦貨約十五錢)で一食千二百乃至千五百カロリーの養價を持て居る、私は二年前伯林に居た頃二三度そこで食事をして見たが量がたつぷりで味が仲々好い、肉と野菜丈ならば二十ペンニッヒ、野菜一〇―一五ペンニッヒで其他牛乳、砂糖入珈琲或はカヽオは五ペンニッヒである。夕食を準備せる店では一〇―一五ペンニッヒで腸詰か鱈、鰊か馬鈴薯を配ひたるもの一皿をくれる、普通獨逸人は晝食代として一マルクか一マルク半を費ふ其他麥酒又はサイダー十乃至二十ペンニッヒ給仕夫の酒代として十乃至十五ペンニッヒを要するが民厨では麥酒を飲むともいらねば給仕人に酒代も拂ふ要はない。西洋人の調べた處に依ると、民厨の食物と普通の料理店及下等飲食店の食物とを比較すると、一マルク(約五十錢)について得る熱量は、

	熱量	蛋白質
普通料理店	七六三カロリ	三六グラム
田舍飲食店	一八六二	七三
勞働者飲食店	二二三七	八六
民厨	四二〇〇	一三六(中動物性六四)

の差ひがある。民厨の食物の價は普通料理店の五分の一である。下層民の霑ふ恩惠は實に非常なものといはねばならぬ。現今伯林市には民厨協會の外に下級民若くは細民の兒童に溫食或は肉羮、珈琲、冷肉等を廉價若くは無償にて給與することを目的とする組織が十二以上の數に達し市内の諸所に數十ヶの食店を開きて彼等の需に應じて居る。

獨逸の外歐洲各國共に同樣の設備あり。英國は一八五〇年に始めてドユンデー市に民用珈琲店を開き同七十

七年倫敦市にカッフェー、パブアリックハウス、アッソシエーションなる組合が出來之れより漸次全國に擴がつたのである是等の珈琲店では珈琲、肉汁の外にパン、牛乳、牛酪乾酪、腸詰等を廉價にて賣て居る

佛蘭西、白耳義、瑞西等の各國皆夫々同樣の設備を有して居る。

細民に廉價なる食物を供するが最大急務

近來社會的慈善事業が漸く發達の氣運に向ひ公私團體の經營若くは富豪の寄附に由り既に特殊學校、共同長屋、慈善病院、貧民救療所、無料宿泊所等の開設を見るに至りたるは誠に喜ばしき事なるが物價が著しく騰貴し細民生活難の叫聲愈々高からんとする今日、彼等に廉價に食物を給するの途を開くは眞に救貧の福音であり亦一面には彼等の榮養不給を救ひ體質の變性を未前に防ぎ健康なる民族の發展膨張を期するの途であると考へる。

又適當なる方法に由りて國民一般に食物に關する知識を普及し且つ安くして養素に富むものを旨く調理して食はす簡單なる料理法の研究も極めて必要である。社會は上等のもの許りで成立つて居ない。寧ろ卑近な下等なものが大多數を占めて居る。それ等のものに適應する樣に安く養素に富む食物を旨く食はせる料理法は是非研究する必要がある。ルグネルといふ學者の調べに依ても料理法の研究が行き屆かぬ爲めに食物の排泄分を徒らに多くして之を利用する事をせぬ事實が、數字の上にも顯はれて居る。下層民の生活問題に心を用ふる人は此點に向ても亦注意すべき事と思ふ。(完)

政友會と國民黨

早川鐵治

私は此度對馬て選擧場裡に立ち、福本君と覇を爭ひ、それが爲に諸所て演說もして見たけれども、前座のものは互に色々非難攻擊もした樣だが、私自身には少しも國民黨其ものを惡く言つた事はない。私は國民黨の存在を以て必要として居る、それ故惡くいふ譯はない。由來一黨政治を不可なりとするのが私の意見てある。兩黨對立し、其何れかゞ議會に多數を有するといふ事は已むを得ない。是が憲法政治てある。憲法政治といへば議會に多數を制する一方の黨派が政權を掌握して其理想通りにやるといふ事てならればなければならぬのだからそれが當然てある。それ故今日政友會が議會に多數の議員を有するといふことは勿論宜い。が其極議會は該く政友會員となつて仕舞つてはいけぬ。如何しても憲法政治の運用は絕へず反對黨があつて牽制を加へ外部から監視せなくてはいけぬ。私は立憲政治を目的とする政黨てさへあればその存在を必要と思ふ。夫の中央俱樂部の如きものはいけぬ、單に藩閥派の遺物官僚黨の走狗に過ぎぬ、今日尙ほ昔日の夢を見て居るものてある。此の如きは予の所謂眞の政黨てはない。それ故斯かるものの存在を必要とせぬ。が政友會と國民黨とはそれとは選を異にして居る、共に憲法政治を標榜して其有終の美を濟さんことを目的とするものてある。

唯それ或は積極主義といひ、或は消極主義といふ。が此の如きは一時爲にする所なりといふならば格別、根柢に於ては無意義の話てある。積極主義を取るといつたからとて一國の政治を率ふるに事々物々積極主義て行くものでない。時に消極主義にも出て、稅制整理行政整理もやり民力の休養を謀らねばならぬてないか、といつて又消極主義を取るといふとも、矢張り軍備は列國と對抗し得る程に擴張して行かねばならず。交通運輸の利便益々開かねばならぬとすれば、鐵道の如きも益々敷設せねばならぬてないか、消極主義のみては通されぬ、矢張り其中に自ら積極主義も含まれねばならぬ。元來動もすると方針々々といふが、政治や外交に左樣な方針などのあるべきものぢやない、左樣な杓子定規の動きの取れぬ樣なものがあつて堪まるも

のぢやない。强いていへば唯國利民福を增進するの一事が大眼目で、あとは其精神より派生し、時の宜きに從つて最も賢明なる處置を取るべきだけの事だ。論より證據此度の支那事件で如何である。昨年の春頃迄は何人か支那の形勢の彼の如きものあるを豫想したであらう、獨り我國のみではない、列國何れといつても同樣である。實際神ならぬものの知り得やう筈がないのだ。突然秋に至つて事變は爆發したが、其際に至つても愛親覺羅朝の運命が斯く迄に脆く。共和主義の勢力が斯く迄に强かろうとは又何人も想像し得なかつた事である。が爾來局面は走馬燈の如くに廻轉し、變幻の妙を極めて遂に今日の如き有樣に至つた。此何人にも豫測のつかぬ局面變化の際に當つて果して融通の利かぬ杓子定規を固執し一貫する事が出來るか如何か、又それが國家に取つて利益であるか如何か。それに對する才の鋭鈍それに處する策の巧拙はあるであろうが、所詮は臨機應變でなければならぬ。彼の犬養君の如き、一時盛に對支那策を說き、自らは叛徒に荷擔して騷いで內田抔も大分いぢめられて居たが、局面の變化は夕べ晨に異なり、南北相近づくの形勢あるや苦しきハメとなり、何だか曖昧の態度で歸つてこられたではないか。是は據ない、政治、外交などいふものの性質が左樣である。一定の主義方針などの確立を許すものでない。それ故政友會と國民黨とは一は積極主義一は消極主義などいふ粗雜な分け方で是非し去就すべきものでない。實體を提へて見れば元々同樣のものである。後藤男抔は只韻字が違ふて居る。丈だと云はれたが實に言簡にして要を得て居る只遣り方の違ふ丈である。目的は同じであつても其遣り方に於て是非が分れる。從つて去就も決せらるべきである。が此點に於ても强ち今日の處では孰れを是執れを非と明確に論斷する事は出來ぬ、政友會とても隨分いけぬ處がある。私は政友會へ入つた。けれども全然政友會の遣り方が宜いと思つて居るものではない。國民黨にも宜い處はあろう、が又全然國民黨を以て宜いとは思はぬ。此點に於ても同じ樣なものである。が彼等國民黨には不幸にして今

日の處政友會が多數である。國民黨は今度の選擧の結果でも依然少數である。多數であるが故に政友會は屢次内閣を取る。順境に居る。といふ迄である。

一體我國の政黨者流の理想は英國風の憲法政治であろうが、今日まだそれに及ばぬ事は遠いのである。世界各國に純然たる政黨内閣の國はといつたら英國を措いて外にない。佛國とても純然たる政黨内閣とはいへぬ。稍近いといふ丈である。獨、墺共に憲法政治を行つて居るといつても是は餘程違ふ。日本でも憲法々々といふ、そして政治家の理想とする處は英國に在る樣だけれども、私の考では日本と英國では抑も國體が違つて居る、英國の帝統は元と英人でない。其祖先はヂユーク・オヴ、ノルマンヂーである。即ち他から侵略して來たので、現帝統始まりてからまだ僅々九百年足らずでないか。それに對して我日本の皇室は萬世一系である。此國體の相違が凡てに影響して居る。輙かに彼を學ばんとして學ぶべきでない。元來政治は其國體々々に從つて自ら異なるべきである。現に英國の立憲政體は英國だけの立憲政體であつて決して歐洲大陸の立憲政體ではない。すれば日本とても必ずしも英國風でなければならぬ譯はない。日本は日本の立憲政體であつて宜しい。又强いて學ばうとしても學べる事でもない。彼に倣はんとならば國體を始め、凡て人情、風俗、宗敎、習慣、道德を擧げて彼と同じにならねばならぬ。即ち日本人が凡て西洋人と爲り了らなくてはならぬ、大體身體からが此樣な小つぽけな事ではいかぬ。もつと立派にならなくてはいかぬ。髮の毛も黄金色でなければならず眼も碧でなくてはいかず、そして最も人格の點に於てもつと立派にならなければならぬ、節義を貴び廉恥を思ふ樣にならなくてはいかぬ。もちつと政治家の理想も向上し、眞の政治家らしくならなくてはいかぬ。已に人種を異にし風俗、習慣を異にし、而かも其道德、人格の點に於て彼に及ばざる數等なる我國が如何にして彼と相同じき政體を採り得やう。特に思へば日本は欽定憲法を以て維持し居る國である。英國の如きとは違う。彼の如く、帝王の意思より出てず、騎

士共より無理押しに押し付けて、自己の拵へた憲法を承認させたのではなく、日本には神聖なる天子があり、臣民を見ること赤子の如く、そして憲政を認めて下さつたのである。だから等しく憲法政治といつても根本に於て英國と異なつて居る。すればその政黨內閣なるものといつても亦英國のそれの如くなるを得ぬのは事理自ら當然の話である。英國でも今日にては已に一院制を唱ふるものも多くなり上院の權限も制限せられつゝあるではないか日本の立憲政治は英國よりも今日の處先づ佛國に近くなつて居る。其點に於ては今日の政黨も漸を以て進み、一步一步向上發展しつゝあるのである。誰か憲政の危機を叫ぶか、世には斯かる事を叫ぶものあるも左樣の現狀ではない。革命謀叛といふ如き急激な變化こそないが、漸然秩序的に步調を取つて居るのであるから悲觀すべき事はない。只英國のそれをのみ日頃理想として居る。それを以て我國の現狀を見れば頗る相去る所を認むるのであろうけれどもそれは前述の通てある、彼我國情の相違が之を招致するのてあるから同じにはいかぬけれど、憲法政治は今日着々步武を進めて行はれつゝある。而して政黨內閣も段々出來るのである。理想に向つて進みつゝあるのである。政友會內閣も今其道を辿りつゝあるのである。只それ政友會は始終順境に居るから突飛な言說突飛な行動は自然に愼む事になる。即ち始終穩健に行く、之に反して國民黨は今日逆境に居る。絕へず政府の反對の位置立つから、勢ひ其言動が極端に逸し、往々にして行實すべからざる過激な意見を公にする事になる、が各々其立つ所によりて斯の如くになるのであるから、國民たるものは其間の消息に意を潜めて首肯する所なくてはいけぬ、特にその爲に血氣に逸る若いものど迷のもはされる事のない樣にしたい。

人物の上からいふと、今日の政友會には貳百何十名かの議員がある、其頭數の多い丈に人物もある。けれども其頭數は少いに拘らず、人物の點に於て國民黨には仲々人が多い。即ち武富時敏の如き、行政にも明かに財政にも通じ、豫算に就いても意見がある、而かも

其説が穩健である、斯樣の人は之を政友會に於てするも得難い、惜むらくは斯樣の人が國政料理の任に居らぬといふのは人物經濟の上よりいつて甚だ不經濟であると思ふ。明治三十一年の松隈内閣の時に、大臣、次官、局長などの椅子に政黨出身者が坐つたが、其初より官吏から養はれて來た人間に比べては迂濶千萬であつた。行政も財政も薩張り分らぬ。只其中に於て出色の觀あるものは獨り武富時敏であつた。他の兒飼ひからの行政官と机を並べて少しも恥づる所なく敏活に事務を執つて行つた。私も當時傍に目を側つて居つた、斯かる人こそは政友會内閣に居て働いても適れな人物であると思ふ。又國民黨には大石、犬養などいふ適れな腕利きも居る。犬養の如きは伎倆拔群である、政友會に入つても其人を操縱し駕馭するの腕に於ては適れなものがあろうと思ふ。併し必ずしも大臣として見るてはない。大臣としたなら或は此早川に劣るかも知らぬが、彼の長所はそれよりも寧ろ黨首にある、黨首として一黨を引き廻す點に於て彼は他の及ぶべからざる妙腕を有して居る。大石は元來其出所を顧れば、國民黨に入るべき人でない、寧ろ政友會の人である。故後藤伯の門下で大同團結に居た人である、左樣見ればか形迄も後藤に似て居る。此人は自分では案を立て得ぬけれども、他に案を立てる幕僚があつて其れを遂行するとなると非常の勇氣を以て進む人である、國民黨の老人中此人を除いては此點に於て他に人物なかろうと思ふ。否政友會の老人連とても擇ぶ所がない、容易に彼の上に出るものはないであろう。

通じて言へば改進黨以來の人物は皆辯論が達者で理想が高い。が只勇氣の一點が足らぬ樣である。それに相當の議論を持つ人が多いから、集團を爲す時には妨になる、議論が一致せなくて常に議論倒れになる、六つかしい。大隈伯の總理の時ですら矢張りゴタ／＼して居た。百人皆百人の心がある。それでは政黨は纏りはせぬ。是が改進黨の弊であり、又今日の國民黨の弊であると思ふ。そして此點が漸次に其頭數の減ずる所以であると思ふ、適れの人物が領袖株に揃つて居るに

拘らず、而かも尙且つ黨勢不振を見る所以であると思ふ。此缺點さへなくて居たら、隨分是迄に勢力を成すことも出來たろうし、そして拔目なき桂公や其他の政治家も色目を彼等に遣つたに相違ないのである。惜むべき事である。それは兎もあれ、單に人物を以ていへば今日の國民黨中には實に人がある。大臣になるべき適當な人が多くある。

それから顧みて政友會を見ると、一體政友會は自由黨の昔から、能く議論に歐洲の例を出すものが少く、歐洲の例を出すものは何れかといへば改進黨の方に多かつた、それ丈人間がハイカラでなく素樸の方であつた。その風が矢張り今日にも殘つて居り、一體に素樸て意氣により動く人が多い所以であろうと思ふ。如何いふものか、自由黨が憲政黨となり、それが軈て今日の政友會となつたものだが、矢張り素樸は一貫して居り、單純にして能く親方の一令に動くといふ風がまだ殘つて居る樣である。入黨してから今度初めて一度茶話會があり、强制的に演說も割り當てられてやつて見たが、何となく其間の空氣が濃厚で、皆が胸臆を開き心を合はせて親睦にして吳れる樣である。國民黨の方は現在如何であるか分らぬが左程の親切氣はなかろうと思ふ。大隈伯の幕僚と爲り、伯の掛冠と共に、爾來十有五年間も共に野處して政界の外に遊び、肯て他の黨派に入る事をせず、伯の政黨を去られたる今日に於て漸く私も亦政界に入つて來たが、其間に於て私は進步黨員ならぬ迄も進步黨員と交つては見た。けれども如何もそれ程の情誼は覺えぬのであつた、何となく親睦の度が違ふ樣に覺える。大抵の事には親方の一令に從ふといへば、或は謗りて盲從といふも知れぬけれど政黨が首領株の案内に從ふんでなくては事は運ばぬ。一方に英國流の立憲政治を云々して居ながら領袖株の號令を聞かぬ處が矢張ジャップ根性なのだ、一方內輪に只議論をのみ闘はして居ては事の運ばう筈がない。

此點のみでいふと、一體官僚派なるものは情誼的關係の厚いものである、冠婚葬祭に互に往來し共に泣き共に悲み、又共に笑ひ共に喜び合ふ、私は之を經驗し

た後に大隈系のものと交際して見たのが甚だ淡泊なものである、相逢へば一見舊知の如くであるけれども、只それだけで內實に入つて見ると淡きこと水の如きものである。政友會は此點に於て官僚派に近い。が人の交際は竟畢斯うなければならぬものと思ふ。此點が政友會の能く人を集め能く團結して次第に大を爲す所以であろう。國民黨の若い連中にも頗る不埒のものがある。嘗て窮した時は我輩に泣付いて物を貰ひ置き乍ら、今度は政友會に入るとなつたら事情の如何をも精究せずに輕卒に人を非難する、吠え付く。私は大隈伯の知過を思ふてこそ進退を共にし、十有五年民間に苦節を守つて來たのだが、元來改進黨員でない、又遂に入黨した事もない。伯にこそ義理あれ改進黨とは何等の關係もない。其義理ある伯が脫黨された今日に於て私も初めて又政界に逆戻りしたのである。而かも其逆戻りの際には尙ほ念を入れて伯の意見を仰いだのである。それ等の內情をも知る處なく、徒らに外形によつて昔日の恩誼に誹謗を以て酬ゆるとは何たる事かと思ふ。今少し人間の道なるものを講究せなくてはいけぬでないか。要するに此情誼の點に於て國民黨の空氣の甚だ政友會のそれに比し劣るものあるを遺憾とする。而かもそれあるが爲に能く大なる活動を爲すを得ず、幾多の人才を包容し乍らそれをして政權に携はらしむるを得ず、常に轗軻不遇の境に沈倫するのは、人物經濟の上から見ても甚だ惜むべき事である、主義方針によりてのみ進止するは適れてあるけれども、それては何も出來ぬ。歐羅巴にはない事である。それでやれる様に思ふのは日本の政黨者流の想像論に過ぎまい。

支那に對する孫逸仙の抱負

青柳篤恒

袁世凱に其根城を明け渡し、自から大總統の地位から退いて、廣東の故山に歸臥した孫逸仙は、今後如何

なる働きをとるであらうとは、一寸趣味ある問題で、余の自からも調べて見度し、又世間にも紹介して見たいと思ひ立つた所である。余は茲に孫逸仙自身の演説を土臺として、孫が未來に於ける抱負を描いて見ようと思ふ。

抑も今を距る二百七十年の昔、支那が滿洲の爲めに征服せられてから、支那人中の英雄豪傑の士漢室復興の業を企つたこと幾回なるを知らぬ、其主義とせる所は、皆民族的革命を實行しようとせるものであつて、今から五十年前の太平天國の如きは純然たる民族的革命の代表的事業と見るべきである。乍併、民族的革命なる者は、革命後復たもとの專制を繰返へすことがないとは限らぬ、孫逸仙の意見では、此民族的革命だけでは革命の業全く成らざるを告げたりと見ることは出來ぬといふのである。今から八九年も前のこと、孫逸仙は少數の同志と我日本に在つて同盟會なるものを組織した、其主義綱領として標榜せるものが三個條ある、第一民族主義、第二民權主義、而して第三が民生主義、此の三つであつた。今や清朝退位し中華民國は成立し、民族主義と民權主義の二つだけは、型(かた)だけでも達し得たと見て見られないでもない、但だ最後の民生主義即はち社會主義、更に換言すれば社會革命だけは、まだ丸で手が著けてない。孫逸仙は今後主として此所に力を攅め精神を集注しようとするものらしい。

社會革命といふことは、今日となつては、何所の國でも皆唱へて居るところであるが、支那人だけはまだあまり氣が附いて居ないらしい、今日多數支那人の所謂支那改造といふのは、支那を一の强い大きい國にして歐米諸國の伍班に列せしめようといふだけのことのやうに見える。孫逸仙の意見は少し之とは違ふ、成程今の世、列國の中、富强なるものといつたら英米以上のものはあるまい、文華燦然たるものを求めたら佛の右に出づるものはあるまい、いづれ劣らぬ、揃ひも揃つた美くしい花やかな國ではある、併し此等國民は貧富

の懸隔太甚だしく、始終社會黨なるものがあつて社會革命を成就せんものと百方籌畫しつゝあるではないか、蓋し一度社會革命といふ徑路を經て來た國でなければ、國民は完全なる安樂を得らるべきものではない、幸福を享ける者は極めて少數な資本家、苦痛を受ける者は最多數の普通人民、これでは迚も無事太平に國の治まるものではない、と斯ういふのである。

支那人中には、種族革命や政治革命は容易だが、社會革命ばかりは六かしい、といふのは、種族革命は異種族を驅逐してしまひさへすればそれで濟む、政治革命は機關を改良さへすればそれて目的は達せられたといふものだ、只だ社會革命ばかりは、人民に高い程度の智識がなければ實行の出來るものではない、既に民族革命民權革命に成功した今日の支那は、社會革命だけは今姑く見合はした方が宜からうと、斯ういふ説を立てる者がある、之に對して孫逸仙は言ふて居る、英米の諸國は文明既に進歩し工商既に發達して居るから社會革命が六かしく、支那は文明未だ進歩せず工商未だ發達せざるが故に社會革命の實行却つて容易であるのだ、英米諸國には資本家なる者が既に現はれ、障碍物が既に多いから、之を排斥すること容易でないが、支那には未だ資本家なる者も現はれず、障碍物も未だ發生して居ないが故に、社會革命の實行却つて容易なのであると。

人あり、孫逸仙に向つて社會革命は、武力を必要とする乎と質問すると、孫は斷乎として答へて言つて居る、英米諸國の社會革命は或は武力を必要とせなければならぬかも知れぬ、而かも支那の社會革命に至つては必ずしも武力を必要としない、英米諸國に於て困難なる社會革命が、支那に於ては却つて容易であるといふのは蓋し之れが爲めでもある。支那はもと〳〵貧乏國である上に、今度の革命の打擊を受けて愈々益々民窮し財盡き、中人の家すら多くは得られない位、外國の所謂資本家といつたやうな者は尙更のこと、とてもあるべき筈がない、社會革命を行つても左まで深刻な苦痛を覺えないといふのは此所である。今日の處、其

害毒が顯著でないからといつて、社會革命を度外に措くのは宜ろしくない、既發の病を醫せんよりは寧ろ之を未然に防ぐの優れるに如くはない、吾人は眼光を遠大にして數十年數百年の後を達觀しなければならぬ、人民の程度が高まり、貧富の階級が既に形造られた曉、始めて目が覺めて社會革命を企つて見ても、時機既に晩し、取り還へしの附かぬことであると。

英米各國は以前此所に着眼しなかつたればこそ、今となつては社會問題で苦しんで居る譯である、客冬英國炭鑛のストライキ事件は何よりの證據だ、尤もストライキは一種の暴動に過ぎない、名づけて革命といふことは出來ないのは勿論であるが、英國人は社會革命を行はんと欲して能はず、已むを得ずして暴動の擧に出てたもので、英國の社會革命は今日でこそ行はれなくとも、將來一度は屹度實行されなければ止むまい、只だ實行の當時、何等の激烈手段を用ゆる乎、何等の危險現象を呈する乎が豫言し難いのみである。吾人は民族革命民權革命の成就したる此機に乘じて、後日資本家の出現を豫防するところなかつたならば、今に一度は屹度現はれなければならぬ資本家の壓制手段は、恐らく專制君主に優るとも劣ることはよもあるまい、其期に及んで再び流血伏屍の慘を繰返へさなければならぬ、豈に重ねて國家を戰亂の渦中に投ずるものではあるまいか、とは孫逸仙の心血を傾むけて熱烈に主張する所である。

孫逸仙は其抱持せる社會革命主義實行の第一義として以前から地權平均といふことを主張し、此の地權平均にして成就すれば社會革命の目的は既に其七八分まで達し得たる者なりといふて居る。殊に滿洲の舊政府倒れ新政府の漸く成立せる此間際に、各地主の契約書換の機を利用し、些さか訂正を加へさへしたら、多大な效果を收め得べきことを期待して居る。其發表せる政見に據ると、從來人民所有の土地は之を上中下の三等に分ち面積に據つて徵税し來つたものを、今後は之を改め地價に據つて徵税しようといふのである、土地の差等は啻に三等にのみ止むべきものではない、南京

の土地と上海黄浦灘の土地と其地價を比較したら相去る實に幾何なるかを知らぬ、之を只だ三等に區分するのは公平を得たりとはいへぬ、左れば地價に據つて徴税するに如くはない、價の高い土地からは税も高く取る、價の廉い土地からは税も少く取る、價の高い土地は必ず繁華な處に在り多く富人の所有であるから、高い税を課したからといふて別段虐政とはいへぬ、價の廉い土地は必ず偏僻な處に在り多く貧乏人の所有であるから少しな税を課して置かなければならぬ、從來の上中下三等の階級には此の如き差別はない、譬へば黄浦灘の一畝も片田舍の一畝も同率の税を課せられてある、不公平も亦甚だしといはねばならぬ、若し地價に據つて徴税すれば此の如き弊害はない。今後商工業が發達すれば地價が騰貴するといふことは自然の數である、上海今日の地價を以て百年前と比較して見たら少くも一萬倍も騰貴して居るに相違ない、支那も今から五十年も經つたら數十個處の上海が勃興する、倫敦では少しばかり繁華な土地でさへ一畝の地價實に六百萬元である、將來の支那も矢張此くの如くならざるを得ぬ、此種の重利は皆地主の所得となるのである、例へば片田舍で十畝の田地を有つて居る者が、人を傭ふて耕作して見たところで辛ふじて一人の口を糊し得るに過ぎないが、土地發達の曉には、六千萬元を擁する一大富翁にもなれるわけである、此等の資本は何れも鐵道其他の發達によつて坐ながらにして贏ち得たるところ、決して自己の勞力によつて作り得たる者ではない、數十年も經つての後、土地所有者は皆坐ながらにして此優先莫大なる權利を享有するやうになる。尤も世間には地權を平均ならしむる方法として土地國有を主張する者もあるが、尨大なる支那の版圖を以てして、之を擧げて國家に買收し得らるべきやうもない、先づ地價によつて徴税するより外名案はあるまい、地價一百元に就き税一元を課すると定めて置けば、地價騰貴して一千萬元となれば十萬元の地税を課するわけになり、富豪から之を見れば左程の重税とも思はれまい、此種の地價税法は英國に於ては幾度か議會を解散した

末漸ゝ通過して現行法となり、濠洲の如きに於ても行はれて居る、蓋し此方法の右に出づる良法未だ外に案出せられないからである、とは孫逸仙の所論である。

孫逸仙は此の地價稅法の外に、尙ほ國家は何時にても地劵表記の價格を以て土地を買收し得る旨を地劵の上に明記し置くべき必要を主張して居る。斯うして置けば、人民が若し國家が此土地を買上げるであらうといふので故意に地價を昂げたとする、國家がどんな都合で買上げないと來るかも知れぬ、さうすれば人民は年年高い稅を拂はなければならぬ結果になるといふのを虞れて容易に地價を昂げることをせぬ。若又地價を引下げて高い課稅から免かれようとすれば、國家に買上げられはせまいかを虞れて、亦容易に法外に地價を引下げることをせぬ。則はち此二つの方法をして相表裏して行はしめたならば、特別に地價を定めずとも、地價は自づから相當のところに定まることになり、國家としては地稅の徵收、土地の買上、何れにしても多大なる利益を得ることになる、と斯ういふのである。

孫逸仙は其抱持せる社會革命主義實行の第二義として、今日支那財政上の窘迫を救濟する爲め印紙稅を課することを主張して居る。其說明する所に據れば、以前廣東では百兩に就き九兩の印紙稅を課した、今全國に向つて地劵の書換を命令し、之を機として百兩に對し三兩乃至五兩の印紙稅を課するが宜い、何時まで經つても書換をしない者に對しては、一年毎に稅率を增して行くとしたならば、書換の延滯も自然に無くなる道理である。是れから、地價は昂る一方であつて、國家の收入は殖えるばかりであるから、何も國家の貧乏を患へる謂はれはない、土地は生產の原素、地權の平均を成就したる曉は、社會主義の實行や易々たるのみ、といふて居る。

外債借款の問題は今や支那中心の大問題となつて居ることは人の皆知る所であるが、孫逸仙は何處までも外資輸入論者である。孫逸仙は斯う言ふて居る、今や我支那は大實業を興さんとして其資本の缺乏に苦しんで居るが、外債を借りさへすれば宜いではないか、外

債を借入れて實業を興すといふことは敢て珍らしいことでもない、此間も総理大臣唐紹儀の話によつて見ても、京奉鐵道敷設費として借入れた金の如きは、實は疾くに還へせたのだ、英人が今直ぐ還へして呉れるには及ばないと強ゐて斷はつたから、此口の金を利用して京張鐵道を敷設した譯である、外國人が我支那の實業に投資せんことを希望して居ることも、是れて解かるではないか、然るに支那では一ト言外債と言ふと、之を畏るゝ酖毒の如くてあるのは何事である、彼等一派の人達は外債を借りて不生産的な事業を營めば勿論害があるが、生産的な事業にさへ投ずるならば利益があることを忘れて居るのではあるまいか、米國の發達、日本の勃興、皆外債の力に藉れる實例は歴々として枚擧するに難からざるのである、近く京奉鐵道の例を以て見るも、僅々三個年の收入を以て優に敷設費を償還し得たてはないか、即ち三年以後の收入は全部純利益と見るべきである、若し外債を拒んで之を入れなかつたならば既にして此收入を逸したる譯である、米國の鐵道の如き、毎年の收入無慮七億弗を算へ、其他附帶せる利益としては、之に因て幾百萬の職工を供養しつゝある、即はち之れが經營にして一年を遲からしめたならば、其處に直ぐ幾億の收入を減ずること明らかてはない乎。Time is money とは西洋には有り觸れた諺てあるが、支那には此道理が皆無理解し得られないらしい、昔張之洞が蘆漢鐵道即ち今の京漢鐵道を敷設せんと計畫した時に、外債の輸入を畏るゝどころか、外國から鐵道材料を買入れることまで心配して、漢陽鐵政局といふものを特設した、自分の手でレール等を造らうといふのである、ところが孰んぞ知らん、漢陽鐵政局は屢々失敗に失敗を重ねて巨額の金を注ぎ込んだ揚句に盛宣懷の手に歸してしまつた、鐵道は勿論容易に出來ず、二十年以上も經つて後、とゞのつまり矢張白耳義の手て敷設せられ、材料一切何れも皆諸外國から買入れることになつた、漢陽鐵政局の建設で愚圖〳〵して居る内に、二十年の星霜はドシ〳〵經つてしまつた。其損失や實に莫大なりと謂はねばならぬ、支那人は金

錢を知つて而して時間を解せずともいふべきか、枝葉をのみ顧盼して大體を遺棄すること、比々皆然りてあると。

支那は今尙生産業發達せず、隨つて人民は仕事を求めて廻つても仕事はない、廣東だけで見ても、年に凡そ三十萬人も海外に輸入され、殆んど牛馬同様の勞働に服して居る、若し能く外資輸入の力を藉りて大に內地の工業を振興したならば、支那の勞働者は何も遠く海外に雇主を求むる必要もなく、國の生産力も幾倍增進するか知れない。孫逸仙が嘗て加奈太を通つた時、同地の炭鑛に働いて居る支那人の狀況を視察したことがある、彼等加奈太に於ける支那の勞働者は、機械を用ゐて石炭を開掘するので、一人一日十四噸も掘る、彼等の得る所の賃銀にしても七八元に上り、資本家の所得といつたら少くとも百數十元にも達するといふ、顧みて支那內地の炭鑛に働いて居る工夫を見ると、一日僅かに一噸に足るか足らぬか位しか掘らない、其生産力や微々たりと謂はねばならぬ、若し文明の利器を應用しさへしたら、少くとも十數倍にもならう、生産力が十數倍すれば、富力も亦た比例して十數倍增進し、次第に最も富裕な國になり得るではないか、生産力さへ開發し得れば國即ち富み、生産力にして開發し得ないとすれば國は何時までも貧乏で居らねばならぬ、ツイ昨日までは滿淸政府の壓迫の下に、生産力の開發を阻撓せられて居つたが、共和政府の成立せる今日、如何なる企業も皆自由で、産業の勃興期して待つべきである。只だ茲に一とつ愼しまなければならぬことがあるといふのは、所謂資本家なる者が此機に乘じて支那に出現するといふことである。例へば一の工場で數百人の工夫を雇入れて居る、一人二百元位な働きをするにかゝわらず、貰ふところの賃銀は僅に五元か其處等で、一家の糊口にさへ足らず勝であるとすれば、不平に不平が積り積つて、遂に激發してストライキとなるといふのは、殆んど生産增加に伴ふところの避くべからざる徑路である。故に一面國家の富强を企圖すると同時に、一面には資本家壟斷の弊を豫防することを心掛け

なければならぬ、此の弊害豫防の政策は社會主義の實行—社會革命を置いて外にあるべき筈はない、孫逸仙が夙に國家社會主義の政策を抱持し之を主張するは之が爲めてある。

孫逸仙の主張する所は國家社會政策であつて、獨逸の政策を襲蹈せんとする者らしい。孫逸仙は人に語つて、獨逸では此の國家社會政策を採用し、鐵道にまれ電氣にまれ將た水道にまれ、苟くも國家一切の大實業は、擧げて國有に歸せしめ、一私人の其利權を獨占するを許さない、英米は初め此政策を採用しなかつたばつかりに、今や其弊害大に現はれ始末に困つて居る、其れかあらぬか米國では、鐵道を買收して國有にしようと努めて居るが、如何せん鐵道より生ずる收入餘りに巨額に上り、買收すること容易でない、既に根深うして拔くべからざる勢を成して居る、獨逸は後から興つた仕合はせに、前車の覆轍に鑒み、豫め此弊を防がんとして全國の鐵道を擧げて皆國有に歸せしめた、支那は當さに獨逸を師とすべきである、斯くの如くにして鐵道の延長二十萬里に及んだならば、每年十億の收入を見込むことが出來る、此の一ト口だけでも國家の經費を支辨して尙且つ餘りあるのである。尙又茲に一とつ支那の他國に優つた便宜のあることを見逃してはならぬ、英國の土地は多くは貴族の所有てあり、米國の開發地は大抵人民の手に歸し、未開發の土地に限り未だ盡く私有に屬さないといふだけである。然るに支那に至りては然らず、田地宅地の外、すべての鑛山や山林やは多くは國有である、英國鑛山の租借料は次第に騰貴し每年の收入は巨額に達して居るとはいふものの、此等の所得は盡く皆地主の手に入つてしまうのである、支那の鑛山は國有であるから、何故之を人民に租借して開掘させ以て巨利を求めないのであるか。我が支那にして國家社會政策を實行せしめたならば、第一地稅だけでも現在の收入に數十倍させる位のことは困難でない、第二に鐵道の收入も今から三十年も經つて國家の手に回收し得たる曉は、米國の例に據つて見ても、凡そ十四億位の收入はある、而して第三に鑛山

の租借料約十億を見込んで見ると、以上三口の收入のみを以てして、國家の經費は綽々として餘裕があるのであると、盛んに國家社會政策を呼號して居る。

最後に孫逸仙は斯う言ふことを言ふて居る、現今支那の患ふる所は、前申す通りの次第であるから貧乏といふ點にてはない、成程國家の經費が不足勝であることも心配ではあるが、といふて又、國家の收入餘りに多きに過ぎて、之を用ゆるに所がないといふことも、同じく慮ばからなければならぬ。其處で、前申した國家の收入の餘分を何んな用途に使つたものか、といふに、教育費として使ふのが一番安心であると思ふ。男子五六歳に達すれば小學校に入學させ、それから以後は國家で二十歳まで之を教養してやる、之を支那國民一種の權利と見做す、學校には種々樣々な學科を區分し、學成れる後は獨立して立派な國民となり、參政自由平等等の諸權利を圓滿完全に行使し得るやうな人物を養成する、二十歳を超へてからは特立獨歩、自身の力相當に生業を營ましむる、若し不幸にして半途に蹉跎したものがあれば、五十歳以上の者に限り、國家から養老金を給與することにする、子澤山で到底養ひ切れない者は國家から補助して扶養してやる、此くの如くんば、家家給し人人樂しみ、支那の文明は啻に歐米諸國と轡を併べて相馳騁し得るのみではあるまい、余は何處までも國家社會政策を抱持して、所謂資本家の壓迫より平民を救濟し理想的國利民福を圖らんとするものである、而して將來必ずや此の期望を達し得べき一日のあることを深く信じて疑はざるものであると。

中華民國政府の事業を袁世凱に任せたなり、大總統の冠を敝履の如くに打ち棄てゝ野に下り、南京を後にして武昌城に副總統黎元洪を見舞ひ、今や故郷なる廣東の農夫となつた中山先生孫逸仙は、此くの如きことを眞面目に心に描きつゝあるのである。

借問す、中華民國の今日は、此くの如き數十年數百年の後を慮ばかれる達見を容るゝの餘地があるか知らん。(終)

教育ある遊民の處置問題

社會に需要ある學問を擇べ

法學博士　高田早苗

教育ある遊民といふのは、文部省邊の人や又は高等教育會の議員などが常に口にする高等遊民とかいふ者を指すのであらうと思ふ。其處置といふ問題が起ッたとすると、世間が大分高等遊民の數の多いのに困つてゐて、之をどうかしなければならぬといふ或種類の社會問題が起りつゝあるが爲であらう。自分の考では、高等遊民若しくは教育ある遊民といふが如き者は、全體出來得べからざる筈の者である。さういふものが昨今目にチラックといふのは、畢竟するに一時の變態に過ぎない、従て深く心配する必要はないと思ふのである。

元來新人物に對する社會の需要といふものは、殆んど無限といつても良い位の者であらう。諸種の事業は年々歳々勃興して來る。既に勃興したものゝみならず。人の胸中に計畫されつゝあるものが、どの位あるか分らないのである。而して此等の事業といふものは皆人才を俟つて初めて成立つたものであるが、適所に用ふべき適材が極めて少いが爲めに、起るべき事業が起らずに居るといふのが今日の實際の有樣であると、自分は理解して居るのである。而して適材を作り人物を作るといふのは教育の力であるから、相當の教育を受けたものが社會に輩出するといふ事は、大いに望ましい事であつて、決して憂ふべき事ではない。然るに其相當の教育を受けたものゝ中から遊民が出來て、之をど

う處置したら良からうといふ問題の起るのは、畢竟社會が需要するが如き性質の教育を受くるものが、比較的に少くて、社會の仕事に間に合はない性質の教育を受けるものが多いからであるまいかと思ふのである。即ち高等遊民とか教育ある遊民とかいふものが澤山出來て困るといふならば、其出來る原因は高等教育を受くるものが多過ぎるといふ爲ではなくて、社會の需要せざる種類の高等教育を受くるものが多過ぎる爲めてると云はなければならぬ。然し乍ら其見當違は一時の現象てあつて暫く經つ中には自然となくなるのてある。國家なり公共團體なり若くは私人なりが、相當の設備をして置きさへすれば、學生は自然と世間の需要の多い學問を選ぶ樣になつて、即ち見當違の教育を受くる事を避けて、世間の需要する學問を學ぶ樣になつて、此問題は自然解に決せらるゝのてある。其證據は、自分が管理して居る早稻田大學の入學者について見ても直ちに擧げる事が出來る。

早稻田大學の入學者中の多數は、其昔は政治經濟か文學か將た又法律を學ばんと志したものてあつたが、一旦商科が設けらるゝと入學者の大多數は皆此方面に志す樣になつた。而して近來理工科を設け、電氣、機械、採鑛、建築といふ樣な學科を置く樣になつてからは、此方面に向ふものが頗る多いのてある。而して其結果として年々學校を卒業するものゝ中て、職に就く事が出來ぬといふものは次第に減少して來る。商科の如きは年々三四百人宛卒業するが其過半數は學校自ら就職口を當てがつてやる事が出來るし、其他の人々も結局仕事を見出して、遊んてゐるものは殆んどない。理工科の如きに至つては先づ今日の有樣ては引手夥多と云つても良い位てある。此等の實例から見ても高等遊民又は教育ある遊民なるものに對しての自分の觀察は蓋し誤るまいと思ふ。即ちさう云ふ種類のものが多過ぎて困るといふのは、見當違の教育に胚胎する一時の現象てあると思はるゝのてある。然し乍ら一時の現象としても事實は即ち事實てあらうが、之を救ふ方策は政府と公共團體と而して私人とが協力して時代が要求する

様な、社會が需要する様な學問を敎ふる所の敎育機關を益々增設するにあると思ふ。今日の處高等遊民を作り出す責任は敎育當局にある。各種の官立學校が收容力の乏しい爲に峻嚴なる入學試驗を施して多數の入學志望者を落第せしめ、從て路頭に迷ふものを澤山生ぜしむるといふ事が一大原因であると思はれる。而して此痛ましき事實を幾分たりとも少くし、前途有望の靑年をして迷路に彷徨はしめない様にしたいといふのが、吾々私敎育者の平常聊か心懸けてゐる所である。

要するに靑年の精神的勇氣の問題

黒岩周六

私の議論の立場は、何時でも自由競爭主義であるから、此問題に對しても矢張り同様の立場から論ずるの外はない。社會に自由競爭の强くなるのは必然の勢である。或職業に向つても、相當の敎育ある人が多數に競爭するやうになるのは、それが即ち社會の進步である。それで事業家の方からいへば、澤山の中から選り探ることが出來るし、從つて適任の人が得られる。

只職業を求める方から云ふと、如何にもつらい事であるけれど、人類は總て昔から斯くの如き競爭をして來たので、斯くの如きつらい競爭が無くなれば社會の進步が止むのである。それを學校を出ない中から覺悟すべきであつて、此のつらい競爭を漕ぎ拔ける所に、人生の妙味もあり、悲劇もあり、又男子の眞骨頭もそこにあらはれる。決して職業の得難い事を嘆くべきではない。

斯ういふ風にして人が餘ることになるといふと、其人自ら何等かの發展を他の方面に求めなければならない。斯ういふ人が銘々の發展を自ら求めれば、或は海外に行く人もあらうし、或は今迄着手されてゐない事業に着手する人も止むを得ず出て來るだらうし、詰り社會の事業が進步すると云ふことになる。今日は世

界各國共に總て此有様てあつて、思ふ如き職業を得ない人が、種々の新方面へ乘り出して行くといふとのない國はないのてある。文明の進んだ國程其有様が强いやうに見える。只亞米利加の如き漠大なる空地ある國は海外に移住する人こそなけれ、それても新たなる職業、新たなる方面を目懸けて猛進する青年は隨分あるやうてある。

但し我國の青年の氣象が他から職業を授けて吳れなければ、自ら新方面を開拓するといふやうな氣力がないのならば、之は大問題てある。けれども此問題は職業を授けることによつて解決はせられない。其やうな意氣地のない青年ならば職業を得ることが易くなればなる程益々精神が萎縮する。要するに之は青年の精神的勇氣の問題てあつて、職業を得ることの困難が益々青年の勇氣を増さしめるやうてなくては困るのてある。

三個の解決案

安部磯雄

此問題については根本的の解決法と一時的の解決法とがあると思ふ。根本的解決法といふのは何てあるかといふに、全體日本ては職業を求めるものが非常に多くして、一方には仕事が甚だ少い。其調和の取れないことの原因を研究して見なくては根本的解決は六つかしい。然し之については私にも未だ之ぞといふ斷案はない。勿論ボンヤリしたことは言へぬことはない。全體からいへば、資本が潤澤になれば事業が澤山に起り、從つて人を要することも多いから、遊ぶ人が澤山あるべき筈がない。然るに日本ては働く人が有り餘るのは、資本が澤山ない爲めてあらうとも思はれる。

然し今一つの考は資本が必らずしも足らぬことはないが、どうも日本人は、獨立の仕事をするよりも、使はれて月給を取らうとする考の青年が多いやうに、資本家の側ても、自分て新事業を企畫することを危險と

し、銀行に預金したり、又は株券を買つたりするものが多くありはしないか。私はどうもさういふ風がある爲めに事業も餘り起らぬのでなからうかと思ふ。勿論銀行の預金も、終には資本となつて或事業に投ぜらるゝには相違ないが、然し日本人個々に企業心が盛んになつて資本あるものは直接自ら事業を經營するといふ風になれば、新事業も起り、從つて人を使ふことも多くなるだらうと思ふ。然し此根本的の問題については私は今明白にお答することが出來ぬのを遺憾とする。

現在目前の解決法としては、相當の敎育を受けた靑年が、成るべく人の行かない所に進めば、今日と雖も職業のない事があるまいと思ふ。今私は玆に三種類の解決案をお話して見たい。

第一は小資本を以て獨立の事業を起すと云ふ事。之ならば今日でも幾らも活動の餘地あると思ふ。前にも言つた通り今の學生は直ぐ會社とか政府とかに入つて月給取とならうとする。成程月給取は一番樂な事に相違はない。然し皆此方面に向ふが爲に入り得ないものは所謂敎育ある遊民となるのである。けれども若し靑年が眼を獨立事業に注ぐことになれば、形勢は餘程變つて來るだらうと思ふ。月給取は決して唯一の事業でない。二百でも三百でもの資本を持つて獨立して起業するといふ事が非常に望ましい事である。東京のやうな所ではいくらでも其餘地がある。各方面に於て小さな商賣を初めて活動し得る餘地は充分にあると思ふ。早稻田大學の卒業生の中で、薪炭商をして居るものもあるし、又私の知つて居るもので、或は米屋或は酒屋などを初めやうといふ考のものが段々殖えて來た。之などは非常に喜ぶべき事である。大學を卒業して、そんな商賣を初めるなどはつまらんといふ人があるかも知れないが、小資本で以て新局面を開くことは決してつまらぬ事でないと信ずる。

第二は都會よりも寧ろ田舍に眼を注ぐといふ事。人情の常として都會に住まひつければ、田舍に行くといふ事は困難であるけれども、私は之から靑年の活動の舞臺が田舍に開けるだらうと思ふ。日本でも貧富の

懸隔が甚しいといふ、成程之は誰も認むる所であるが、私は又日本に於て知識の分配の不平等なるに驚く。日本の知識は殆んど都會にのみ集り、田舍には全く缺けて居る。然しながら生産事業にしろ、教育事業にしろ、或は地方自治にしろ、詰る所知識が無くては成功が覺束ない。一番田舍に缺けて居るのは、知識のある、頭腦のよい人であつて、地方の振はざる根本原因は其處にある。さうすると大學教育を受けたものは、東京に成功せぬにしても、田舍に行けば充分活動の舞臺があらうと思ふ。其例を擧げて見れば、私の知人で、京都の法科を出た山下といふ法學士は伊豆の伊東でいろいろの事を經營して居る。彼處は漁業ばかりで、農業をやらぬ所であつたが、山下君は二萬坪ばかりの土地を得て、野菜を作り、將來自分の畑で以て、伊東全體の野菜を供給しやうとして居る。又そこから少し離れた宇佐美といふ所に山林を買ひ、密柑畑を作り、もう已に四千本ばかりも密柑を植ゑ附けた。此等の方面に成功すれば將來は伊東町の政治に盡力して、自治制の好模範を示したいといふ考を持つて居る。而して段々其方面に於て成功しつゝある。多分將來に於ては宗教、教育等の方面に活動する積りで、町の人も同君に同情を寄せ、町の生れの人でないけれども、町に籍を移して奮鬪する覺悟である。

事業が單に有利であると云ふ點から見ても密柑畑などは同君の調べた所では、靜岡縣全體の統計は一反歩の純益が百圓乃至百五十圓あるといふから今日の田地に比ぶれば、其利益が餘程大きい。そして密柑は山の傾斜地のやうな所でもやれるし、殊に伊豆などは氣候もよいから將來非常に有望である。將來此土地にもつと資本を下したならば其利益は益々多からうと思ふ。又今でも眼の明いた人は、都會よりも田舍に有利なる事業のあることを追々看破して來た風があるといふ。

又今一つ私の氣附いた事を申すならば、日本は土地が狹い上に山嶽が多く、從つて水利のない爲めに茫々たる原野がちつとも利用されずあるのが少くない。一昨年私は布哇に行つた時に、ホノルヽにある島など

は水が大變にわるくて、皆堀貫井戸をやつて居るが、其堀貫井戸は千尺から千二百尺位深いのである。甘蔗黍の如きは全く此堀貫井戸の水でやつて居る。日本では從來千二百尺などいふ堀貫井戸は出來なかつたが、今度東京に堀貫の會社が出來るやうになつた。そこで私の考では、かく堀貫會社の出來た上は、今迄水のない處に水を出すことが出來るから、其水で以て、新らしい土地を開墾し、田地、畑、蜜柑畑等を作ることが出來やうと思ふ。かゝる所に着眼すれば、田舍に落ちて居る所の遺利は少からぬと思ふ。私が斯ういつたら青年が或は答へるであらう。我々は資本を持たぬと。然しながら前に話した山下君なども資本を持つて居つた譯ではなかつた。苟くも其人物がしつかりして、又事業の計畫が精確であれば資本は自ら其處に集めることが出來やうと思ふ。

第三は私の宿論であつて、即ち矢張り亞米利加に行くといふ事である。何といつても海外移住は亞米利加に超した所はない。今日では之は一寸困難になつて、旅行免狀を得ることがなか／＼六つかしい。然し其道を以てすれば行けぬといふ事はない。此頃亞米利加には排日熱が盛んであるから勞働者はなか／＼行けない。然し學問のある學生は修學の目的で願へば許さるる。修學と同時に向ふで働いて生活費を得ることが容易く出來る。單に金儲けと云ふことにのみ着眼すれば詰らぬかも知れないが、向ふに居れば語學も出來るやうになるし、又夜學で勉强も出來る。又金を儲けると云ふことでも今日の米國は決して昔よりも劣らぬ。仕事が澤山ある爲めに却て昔よりもよい程であるといふ。然し之は志の堅い青年でないと、種々の誘惑が澤山あるから、餘程六つかしい。一旦惑誘に負ければ十年働いても一文なしで歸らねばならぬ。志の確りした人であればドシ／＼亞米利加に飛び渡つた方がよい。金取りの點からいへば、日本などは殆んどお話にならぬ。私が今玆に持つて居る此手紙は、早稻田大學を半途退學して數ケ月前に亞米利加に行つたものから本日受取つたものであるが、此手紙によれば、「向ふに渡つ

て直ぐ樣自分は製板所(鋸を器械で動かして板を挽く所)に雇はれて其處に三週間働いた。そして或事情の爲めに三週間で其處を止めたが一日の給料一弗九十錢貰へた。それから其處を出て沙市に歸り沙市の奇麗な湖の附近に金持の別莊が澤山ある、其處にある店の賣子に傭はれた。自分はまだ英語も不充分であるけれども、賄も室も向ふ持ちで、外に毎月四十弗貰うて居る」と書いてある。丸で嘘のやうな話で、日本に直せば食料はどうしても三十圓、室代は少くも十圓かゝるからそれに八十圓貰ふとすれば總計百貳十圓の收入がある譯である。日本に於ては早稻田を卒業しても貳拾五圓位のものが多い、然るに其人は半途退學しても百貳拾圓も取れる。皆なが此通りに行くといふ譯でもなく、其れ以下のものもあらうけれども、然しそれ以上のものもあるから、平均先づ之れ位と見てよからうと思ふ。先日私の親しい人が沙市から歸つたから、向ふの仕事具合を訊いて見ると、日本人のやるのでは、自動車の御者は自分賄ひて最下等が七十弗、多いのは百弗も取れるといふ。斯う云ふ形勢であるから、職業なくて困つて居る學校卒業生は成るべく亞米利加に行つた方がよからうと思ふ。高等教育を受けたものが、自動車の御者でもあるまいといふのは、それは日本人の思想で、亞米利加は平民的で、職業に貴賤の區別がないから何等の耻づべきことがない、自分で働いて且つ多少の勉强をし、又金もいくらか殘せるとすれば氣の利いた事と思ふ。夫れ故に亞米利加に飛び出すことは其人の爲めにも又國家の爲めにも結構であらうと思ふ。

最後に一寸一言申述べたい事は、私の考によれば、就職難といふ事は事實に相違はない。然し人間が立派であれば就職難といふ事は起り得なからうと思ふ。よく出來る學生は、こちらから職を求めなくても、職の方からこちらを求めて來る。實際かどうかが分らぬが三井銀行などでは、新らしい人を入れるに、帝大と慶應と高商と早大との一番優等の成績のものを一人づゝ採用するといふ話である。して見れば優等生は卒業しない中から就職口が掛つてゐるといふべきである。之

は一つの例てあるけれども、こちらさへ確つかりして居れば位置は自ら得られると思ふ。其點を今日の學生たる人は考へて置くべき事と思ふ。三井は學問を標準として取るけれども、其外の標準によつても勝れて居りさへすれば必らず職業はあると思ふ。餘程敏捷てあるとか、餘程信用すべき人とか、一つの勝れた特色を持つて居れば日本に居つても亞米利加に居つても成功するに違ひない。夫れ故に一方には眼を配つて成るべく活動の餘地ある所に、突進すると同時に、一方には自分の修養を怠らぬやうにすれば、世間がいふ程の就職難はあるまいと思ふ。

教育ある遊民の處置

田川大吉郎

◎曾て獨逸の經濟事情を研究した米人某氏の著書に、下の如き一節があつた

著者は曾て（其獨逸に在る時）學問ある貧民といふ論議に出會ふたことがある、獨逸ては、此種の人士が甚だ多數て、又其狀態が頗る哀れて、丁度、一般の窮民が、政府の慈善救濟のお世話を受くる如くに、此等の人も、政府から其特別の取扱ひを受くる必要があると一般に認めて居る、米人は、醫師の如き、法律家の如き專門の職業ある者が、其專門の職業に失敗した場合には、ナゼ其外の適當な仕事、例へば力仕事をしてなりとも、窮民とならない工夫をしないかと思ふもので、勿論、どんなに勞働しても、どうしても生活を支へ兼ぬる場合には、米人とてもなく〳〵窮民の境涯に身を沈めはするけれど、然し此場合の彼は、普通の窮民として取扱はれるので、之を學問ある窮民だから、特別に取扱はねばならぬとする思想は米人の理會し能はざる所てある、所が、米人の此氣持考へを持つことは、獨人には反つて不能らしく、彼等獨人は、醫師家業の者が、其生活のため、醫師以外の何かの稼ぎをする、辯護士渡世の

者が、法廷て權利義務の論議をする外に、何かをするといふことは、全く理解し得ぬらしい、それて其生涯に失敗すれば、即ち其全生涯に失敗したとする、それだから、其「學問ある貧民」に對し、是等米人なら、救助を受ける前に、先づ百姓でもせろと勸告する場合に、獨逸人は、之を救濟する特別の待遇を必要とするのてある、現に大統領ローズベルト氏の最初に大學生、次て著者、立法家、警吏、農園主、軍人、大統領といつた如き變化の生涯は、獨逸人の看て最も異樣不思議の感を爲す所てある

◎僕は以上の一節を、之をよその國の如に思はなかつた、之を現實に我國の事てあると思つた、獨逸といふ國は、不思議に我國に似て居る、此點に於ても亦甚だ相似て居ると思つた、而して其現狀、程度如何に立ち入ると、立ち入らざるとに拘はらず、僕は、米人の答へのそれの如く、先づ百姓でもしたらと答へたいのてある、僕は、教育ある遊民の處置に就て、そんなに心を痛めた事は無い、心を痛むる程に、思ひ惱んだ事は無い、即ち、お問に對しても、只あつさりと以上の如く思ふ者てある

◎だが、それに就ては、尚ほ二三の言ふて置きたい點がある

◎第一には我國の學問の仕方が、甚だ贅澤だといふこと、其早分りの話は、學生の學資が多くかゝり過ぎることてある、今日學生として、一ヶ月三十圓の仕送りを父兄に仰ぐ者は、極めて普通てある、然しながら、其學生が、大學を出て、一本立の人と爲つたゝめに、一ヶ月三十圓の生活をすることは到底不可能てある、今日の役所、會社は、決してそれに三十圓の生活を爲し得せしむべく五十圓六十圓の月給を與へない、或は大學を出たから、直に家を持ち、妻を迎へ、子を擧げるのが間違つて居るといふ者もあるが、去りとて其人は既に二十六七歳以上てある、して見ればそれは當然な事だ、それを彼此言ふのは、日本の學制の實狀を知らず、又、人類の自然的約束を知らざる者てある

◎第二には、日本が、軍事の學問に重きを置いた事の

可否は別として、近年に及んでも、所謂、實業教育を奬勵する名の下に、兎角工業教育を二の手とし、先づ商業教育に力を入れたのが間違ゐてある、商業は無論必要だが、工業に較ぶれば、まだ〳〵教へずともやれる傾向を持つて居る、工業の方は、どうしても教へなげれば進まない理由事情を持つて居るものてある、言ひ換ゆれば、工業の教育をさへ施せば(從つて工業が起るものとして)商業は敎へずとも付添ふて進んで往くが、商業敎育を施したゞけては、工業は盛んにならない、故に工業教育を施すことが先て、商業教育は後に廻しても可かつたのだ、否、それが必要なる適當なる教育方針てあるのを、明治の政府はそれをあべこべに逆に施した、これが今日に於て我國運の停滯、困迫せる所因てある、而して其間に教育ある遊民の、即ち無職業の民の、漸く多からんとする理由てある、看玉へ、獨逸ては、所謂商業大學は、五个所あつて、其最初に出來たのが、ライプチッヒて其年が千八百九十八年、今より僅か十四年の前てある、其伯林に出來たのは千九百五年、今より七年前の事ては無いか、然るに所謂工業的大學は、約十个所あつて、大抵千八百七十年、普佛戰爭の頃の創立だ、彼等は其頃から、工業敎育に全力を注いだのてある、現在、其中等以上の學校が、五百六七十もある。第三には我教育に特に世界的教育が缺けて居る、世界を股にかけて、八方に雄飛し、横行する素質を備ふる底の教育が缺けて居る、日本の移民が米國に排斥さるゝといふのは、現に其顯著なる一證だ、移民を出す必要が無ければ已む、苟も必要ありとし、之を出すことが、國家の繁榮發達のために、避くべからざる至當の政策だとすれば、此移民が、世界の出た先々て、歡迎せらるゝ如に、尊重せらるゝ如に信用せらるゝ如に、敎育し、訓練し、啓導するのは、政府としての當り前の注意、責任ては無いか、現に僕は貧家の生れて、到底、自家の費用ては留學し得ない(東京へ)所から、子供の内から、他家の飯の食ひ樣といふことを敎へられた、即ち、其方針に叶ふ習慣、躾といふことを敎へられた、誰ても他家の飯を食ふ程の

者は、自分の費用て育つた者とは、自然と異なつた注意氣心配が要るものてある、米國に往く者も亦然り、濠洲に渡る者も亦然り、今日の日本には、どうしても世界を家とするに足る大規模の教育、濶大の度量、氣品、習慣を要することは疑ひ無い、而して日本の今日の教育は、其方の事を一切閑却して、總ての事、皆日本向き、東洋向き、鎖國向き、我々の祖先が海外に出なかつたから、我々も祖先通り、海外に出ずともいゝといふの方針一點張てある、それてなまじいに、全國民に皆教育を授けたから、土地狹くして、事業少く、遊民が湧き返る筈てある

◎まだ申すべき事はあるが、止めませう、そこて、此様な原因に注意して、こゝに經世的手腕力量のある政治家が起り、之をさつ〳〵とやり換へさへすれば、まだ〳〵太した事は無い、十分に、我が青年に希望を與へて、勇氣に富ませる事が出來る、今日の教育ある遊民といふのは、其數に於ても、其質に於ても、僕は、まだ〳〵太した問題ては無いと思ふて居る、今日は問題て無いが、將來が問題てある、其將來に就ては、僕は、略ぼ以上の如な缺點弊惡を除却したいと思ふて居る、僕は諸君と共に此將來の事を憂慮し、革正したく祈る者てある

但、尚言ふて置く、教育を授けたから、其人皆役に立つべしと思ふのは間違ゐてあらう、明治の時代に、若干の廢人の出るのは、明治の時代にのみ有るのては無く、何れの時代にもあることが、明治の時代にもあるのだ、これも亦知つて置いて貰はねばならぬ

重大なる社會問題

福本日南

教育ある遊民といふ意義は極めて廣い。我國の現狀から見れば高等なる教育を受けて未だ適當の職業にありつかない者は皆遊民の姿がある。之が處分は目下の難問題中の難問題てあらう。我國文化の程度から云へ

は出來る丈け教育は進め度し、といつて世界に稀なる仕事の少い國であるから、年々歳々筍の如く生じ來る無數の學生を如何に職業に就け樣かといふ事に付いては、何人と雖ども一寸首を傾けるであらう。從つて此の處、鰒ぬ食い度し命も惜しゝの感がある。之に付いても羨ましいのは英國若くは米國である。英國に於ては歐洲大陸や我日本などの氣習と違がつて職業に高下がない。それで靴作りとならうが、大工となろうが立派に其仕事をして行くものならばゼントルマンとして受け取るのである。彼の國に於いて強いて職業に品目を着けるなら、小役人若くは會社の小役員などはどちかと云へば少々輕蔑せらるゝ方であらう。其説を聞けば、彼等は自己のイニシヤチーブに由て生活せぬ、人の授けたあてがひ扶持の給料に甘んじて生活するのであるから、申さば餘りに智慧がない。是等のものに對してヅモランは云つた。自家の工夫によつて仕事を爲すものは前途に洋々たる希望が湛えて居る。其方面から進めば大事業家となる事も出來れば大富豪となる事も出來る。處が小役人や小役員の運命はチヤンと極つてゐる。幾年すれば等級乃至給料が何程進む、又幾年すれば老朽の境に入つて恩給を受けて退隱する、一代の運命が皆知れ切つて居る。其中で只知れないと云ふ事は何月何日に死ぬと云ふ事丈けである。人間として餘りに寂しく智慧のない話ではないか。それで此等は左樣結構な職業とされぬのである。斯う云ふのである。

處が日本などに來ると、社會に極めて仕事が少ない。よし人々には相應な氣力もあり、企圖心があるとしても悲しい事には之を事實にする資本がない。ソコデ學問ある俊秀等が相競うて役人にならうとして來るのである。一國の現狀止むを得ずと云へば云ふ者の、實に困つた狀態である。既に役人になると云ふ事が唯一の目的では無からうが、俊秀の大部分の希望である。そこて文官試驗でも開くと云へば、天下の俊秀競うて此門に蝟集し來るのである。而して其採る所は五十人か百人か、それに希望者はと顧れば、何時も數百千人を數へるのである。處で官衙では希望者が斯く多數である丈

けに極めて六ヶ敷しい、實はと云へば餘り用もない科目迄も問題として此等の徒輩を試驗する。從つて文官の候補たらんと欲するものは、種々雜多の課目を涉獵して其れを記憶して行かねばならぬ。併し人間の記憶には程度がある。左樣何でも一人にて知つて居らるゝ事なら、專門學などはなくても良い樣なものだ。然れども受驗者の一身に取つては左樣な事は云つて居られぬ。當面の急務であるから其繁雜な種々の課目を記憶して行なければならぬ。成程人間は靈妙なものであるから、必要とあれば一時記憶せぬ事もない。併し左樣雜多な事が永く頭に遺留するものではない。それでヅモランなんどは是を呼んでChauffage（ショーファージ）即ち附燒刄學と名付けてゐる。自分に云はすれば試驗關門通過學である。關門を通り越す迄は平形であるから、一生懸命でヤット記憶もして行かう。併し無事に其門を通過したが最後、翌日は大部分を忘れて了ふ。それが何になるものか。併し無事に通過したものは、役人といふ職業にありつく事であるからそれで我慢もし樣けれども、右に申述べた通り、採用せらるゝものは五十か百かにして、落第するものは數百乃至千である。其數百千の人間は國に不必要な徒輩であるかと云へば決して左樣でない。此等が未來社會の當局者となるべきものである。今日の有樣では此落第者の多數が實際プロダクチーブの事業に從事するのである。ソコデ困つた話は一國の勢力、一國の命脈たるべき此生産的俊秀は最初から疲れ切つた徒輩である。用も無き關門通過學に頭を痛めて其結果落第し「切角希望した役人にもなれぬ、仕方がないから實業家にでもなろうかな」といつて此方面に入り込む。之れで事業が振はうか振ふまいか。氣の拔けたビールを持つてお客に饗（ふるま）ふ樣なものである。幾何飲むでもポッともせぬ。帝國の振はざる大原因は此處にあろう。

ソレデ未來に亘つて國の運命を興さうとするならば、何んとかして學問ある俊秀を社會の各方面に分配して、各種の事業に從事させねばならぬ。其方法が實に六づかしい。何人と雖ども之に對して此なら結構であるといふ解決を付け得るものは殆んどあるまいと思ふ。併し其方法は官民上下總がゝりとなつて攻究せねばならぬ問題である。官局萬能主義を打破つて、地方分權となすのも其一であろう。何となればナケナシの國の事業の中で、少し目星しいものがあると今日では直ぐに官營とお出なさる。之からが已に一般の事業を

觀奪する一因となつてゐる。其れから中央集權だ。何も彼も中央に收集する。富も權力も人才も學者も皆中央に集中する。爲めに地方は血液の涸れた男と一班、手足共に脂が拔けてバサ〳〵である。試に御覽なさい。百萬以上の資本を持つたものは、都會に出ねば安全有利な投資の途を得ぬ。專門的技術家も亦然りて、都會に來らざれば良き職業にありつく事を得ぬ。學生までが左樣である。地方に一二の大學が出來たが、京都大學や九州大學の卒業生ではチト巾が行かぬ氣味がある。矢張り東京帝大でなければ同じ學士を貰つても學士らしくないと云ふ有樣で、ソレデ此奴も中央に集中する。箇樣にして年々鼠算の樣に增加する學生が多く都會で職業を求め樣とする。此弊を矯めんとすれば何としても地方分權を擇ばねばならぬ。地方分權上の必要條件は差當り府縣の領域を擴大する事である。今の二三縣宛を合して一縣とする。箇樣にすれば一縣の首府は何れも名古屋位のものとはなる。すれば其下に於て種々の事業も起される。資本家も資本を投ずる事も出來れば、學問ある俊秀の徒輩も其地に於て職業にありつく事が出來る。今少し進んで之を云へば、天下の學生輩中央に集らずして地方に於て充分の知識を養ふ事も出來る、といふは其縣の經濟にて立派な大學を其地方に起す事が得るからである。ソレデ斯くの如きは重なる方法の一つであらうと思ふ。

それから次には父兄が今少し青年の俊秀に事業を委ぬる樣に仕度いものと思ふ。小僧では不經驗であるから事業が任せられぬと云へば、幾年經つても任せる時はない。しか云ふ父兄もお釋迦樣ではあるまいし、生れ乍らにして全智全能を具へて居たものでもなかろう。矢張り或時期から事業を委ねられ、不經驗乍らも其れに從事した結果、經驗を得たのではないか。談じて茲に至る時に思ひ出すことがある。故人岩崎彌太郎が三菱會社を起して彼が如き大富豪に爲つた原因は多くの書生を採用したといふことである。それは其頃迄の社會は一層高等敎育を受けた學生を見縊つて商賣なんかは到底出來ぬものとしてゐたのである。それで大學其他各種の專門學校を卒業して實業に從事したいと希望しても彼等はお辭儀をする道も知らぬ、挨拶も碌々出來ぬ、あんな者を採用して何の役に立つものかと、一般に排斥してゐた。處が明眼なる彌太郎氏は夙に茲に考へ付いた。書生の連中は兎も角も相當の學問をして正義の觀念も比較的多ければ、學理には無論通

じて居る。年期上りの番頭手代などの及ぶ所ではない。馬鹿でない限りはお辭儀や挨拶の仕具合位の事は、少し馴れゝば直ぐ出來る。然る上は年期上りの番頭連などより遙かに優等な社員を得る譯である。といひ乍ら慶應義塾や大學の卒業生をドン／＼採用した。此等が初めて採用された當時には隨分おかしい事も有たらしい。今と違つて當時の書生は一層氣を負うてゐたからお辭儀が拙づかつたり、挨拶が亂暴であつたり。稍もすると物笑になつた事も有たさうな、併しれは僅かの間で一度事務に馴れた後は第一に結構な事は、正義の觀念に富てゐて、下等な根性が少いから帳面の尻を胡麻化す等の事は少しもない。其上に相當な新智識を有して居る丈けにニイシヤチーブに富んでゐる。あの事業は箇樣改良せば一層結構であらうとか、或は新たにかゝる事業を起したならばキツト有利であらうとかいふ事を相競ふて献策する。四國の隅から脛一本で出て來た岩崎彌太郎をして終に今日の大富豪の地位を築き得せしめた所以は茲にあつたと云ふ事であるそれで自分は天下の父兄をして成る可く學問ある子弟に事業を分配させたいと思ふ。

其三は今日の俊秀な子弟をして在來の背負うて來た馬鹿々々しい氣習を振落させることである。全體此圖は英國などの如き特種系の社會に非ずして、共同系の社會である丈けに稍もすると職業に高下を付けたがる。みんながみんなとは云はないが俊秀の多數は兎角有形職業を嫌つて、無形的職業に就きたがる氣味がある。官吏になり度い、役員になりたい、辯護士になり度い、判檢事になり度い、新聞記者になりたい、雜誌記者になり度い、どうもインプロダクチーブの食い潰になりたがる氣味がある。それを高尚な事と心得てゐる。之が抑もの大間違である。自分自身の企圖心からする事なら、何んでも尊いではないか。此企圖心で食ひもし、立ちもし、名を天下後世に上げもするので男一匹の價値はあるではないか。此方面に向つての奮發心を起さんことを希望する。

其他にも色々工夫はあらう。ソコ迄は一寸思ひ當らぬから、先づ此邊にて御免を蒙る。



梅毒の歴史

ドクトル 富士川 游

一。

一時に廣く、天下に行はるゝ疾病をば、我邦では昔から疫病と名づけて居るが、西洋の語では國民病といつて居る。これは國民皆病むといふ意味で、疫病の稱とその意義同様の譯である。我邦でも、西洋でも、この國民病は、古い所から、時々盛に流行して、それが人類の生活の上に、文化の發展の上に、多大の影響を及ぼしたことは實に著しい事實で、しかも各世紀に、それ〳〵特有の國民病の著しいものがある。たとへば第十三世紀の癩病、十四世紀の黒死病、十六世紀の梅毒の如きもので、これ等の國民病の大流行が、人類の發展の上に、看過すべからざる影響を及ぼしたことは、記錄に證明せられて居る。中に就きて、梅毒のことは文化の歴史より見て、興味の最も多い問題である。

西暦十六世紀は輓近の人類の產生した時代なりと言はれて居る、所謂文藝復興の時期で、學問も、藝術も、その他すべての公生活も、皆新しい精神を得て、活動し、發見の時代と名づけてもよろしい位に、萬事が革新せられたのである。輓近の個人主義も亦この時代に產れたもので、その理想は固より已に古い頃から存

して居つたのであるが、この時代になつてから固有の獨立的の人生觀が起つたために、それに激勵せられて、個人主義は新に頭を持ち上げたのである。丁度この場合に梅毒が現はれて、その流行の勢を逞ふしたために、輓近の個人主義の發展を助成したことが尠なく無い、梅毒の發現を、文化史上より見て、興味の多いのは、一は全くこの點に存するのである。

ショペンハウエルは、早く既にこの點に著目して、新時代の社會狀態と、古代の社會狀態とを區別して、新時代をして古代に劣るに至らしめた原因は武勳を尊重する主義と、花柳病とである、この兩個のものが相集て人類の生活を腐らしたのであると言つて居る。實に梅毒が人類に害をしたのは身體的方面ばかりて無く、道德的の方面も亦これが爲に著しく不良の影響を受けたのである。

二。

此の如く、人類の身體ばかりでなく、精神的生活にも亦多大の感作を及ぼしたところの梅毒は、何時頃より始まつたか、その起原は如何といふ問題は、醫史學ても久しい間の研究事項て、多數學者の意見もあるが、この疾病が十五世紀の後半に歐洲の一部に始めて現はれたといふことは、今日多數の學者の贊成を得たるものである。

十五世紀の歐洲の人民は、戰亂と、飢餓と、死亡との三大事變て苦しめられたが、梅毒は佛國王カール第八世の伊太利征伐に伴ふて、歐洲全體に蔓延せしめられたと傳へて居る。佛國王カール第八世は已に西班牙及び英國を攻めて、更に伊太利を征服せんものと思ひ立ち、一千四百九十三年の終から、そろ〳〵兵隊を募集したのであるがその兵隊の數は凡そ三萬二千人て、内六千人は瑞西人、一萬人は北方佛國及び和蘭人、五千人は佛國人、殘餘は西班牙、伊太利、英蘭、匈牙利及びスラーヴの人てあつたが、その内に女の兵隊も居り、又賣淫婦らしいものも總勢五百人を下らなかつたといふことてある。カール第八世は一千四百九十四年三月の上旬、リオンにこれ等の兵隊を集め、半年ばか

りの滯陣の後に、行軍を始め、同年の八月二十三日、グレノヴルに達し、その九月一日には伊太利の國境に進み、九月三日にはスサに到著した。同じ月の六日に、カール第八世はヒエリーにて歡迎のために催された演劇を觀たといふことてある。これを以て見ても、カール第八世の遠征の軍隊には風儀のわるい事が行はれて居つたことは確かてある。九月の九日にカール第八世はアスチーまて進み、十三日に病氣にかかつたが、その病氣は痘瘡てあつたともいひ、又梅毒てあつたともいはれて居る。しかし、この時の病氣は、實際左ほどの重症ては無かつたと見えて五日の後には平生に復し、十月の六日にはアスチーを出立した。

一千四百九十四年の十一月十七日、カール第八世はフローレンツに、その軍隊を進め、十二月二日にはシーナに到著し、それよりローマに赴き、ここに滯在すること約四週日、その間に多數の兵隊がローマの賣淫婦等と、不潔の交際をしたことは疑もなき事實てある。・それから翌年の一月二十八日に、カール第八世の軍隊はネアペルの方面に歸り、二月二十二日にそこに盛なる歡迎の會が開かれて、飲むだり、歌つたり、大噪ぎをして居る。ネアペルに滯在すること八旬、遊樂放蕩の限を究めたものと見える。間もなく、この地を去り、六月十三日には再びシーナに赴き、二十四日にはルッカに達し、それより一部の兵隊をゲヌアに送り、二十八日には一部の兵隊を率ひて出發し、七月の三十日にチウランに達し、それよりリオンに歸りしは一千四百九十五年十一月七日て、カール第八世は翌年の六月まて、こゝに滯在したのてある。

兵隊の大部分は、カール第八世が、伊太利を去つた時からボツ〳〵と退散して、それ〳〵その本國に歸つた。その兵隊が、お土産として梅毒を持つて來たといふのてあるから、その頃、伊太利國には梅毒が盛に行はれて居つたものと見える。

三。

この事に關する諸家の報告をしらべて見ると、實際伊太利國には、一千四百九十五年以前に、已に梅毒

行はれて居つたものらしい。ネアペルに始めて梅毒の現はれたのは一千四百九十二年か、九十三年の事てあるが、それより前、既に伊太利國の他の地方に、梅毒が流行して居つたといふことが事實らしい。

しかし、伊太利にむかしから梅毒があつたのては無い、十五世紀の末になつてから、この病は伊太利國に突如として現はれたのてあるが、さてこの病は何れよりして伊太利國に來たのてあるか、その根元に就ては、その當時の醫家の間にも種々の議論があつた。ヂアヅ、ド、イスラは西班牙醫家て當時名高い人て、一千四百九十三年には年齢三十一歳て、醫術上の經驗にも富むだ人てあつたが、その説に據ると、梅毒は一千四百九十三年以前には歐羅巴には無かつた、所がこの頃に、亞米利加から、この病を歐羅巴に輸入した、これを輸入したのは彼のコロムブスの遠征隊て、梅毒の本元はエスパノラ島(ハイチー)にある、それ故に、ヂアヅ、ド、イスラは梅毒を一にエスパノラ島病と名づけて居る。ハイチーの印度土人は本とこれを「グエイナラス」或は「ヒパス」、「タイパス」、「イサス」などと稱して居つた。コロムブスの遠征隊の大部分は、この病に感染して、歐洲に還り、ヂアヅ、ド、イスラはこれを治療したのてあるが、その時、遠征隊のもの等はその何病たるやを知らなかつたといふことてある。コロムブスが亞米利加を發見してバルセロナに歸著したのは一千四百九十三年てあるが、この時、速かに西班牙國に梅毒は蔓延し、間もなくカール第八世の伊太利遠征が始まつて、その軍隊中にこの病は盛に流行し、それから全歐洲に波及したことは、已に前にも言つた通てある、カール第八世の軍隊中に多數の西班牙人が居つたのは固より言ふまても無いことて、コロムブスの遠征隊が亞米利加の土人より新に得て歸りたる病毒が、カール第八世の軍隊のために歐洲全體に廣められたのてある。

四。

ヂアヅ、ド、イスラの説は右の通てある。ヂアヅ、ド、イスラは前にも言つた通、梅毒初現の當時、西班牙に於ける高名の醫家て、リッサボンなる某病院の醫員と

して、多數の梅毒病者を治療した爲に、富裕の身となつたと傳へられて居る。

ヂアツ、ド、イスラの報告の外に、オヴイエドの報告がある。オヴイエドはエンリク第四世の侍臣の子て、高等の敎育を受け、幼時より聰明の聞えがあつた人てある、後には政府の命を承けて亞米利加へも出張して、種々の調査をしたのてあるが、この人の說に據ると、梅毒は中央亞米利加の固有病て、コロムブスと共に來たりたる第一の西班牙人に始めてこれを傳へ、西班牙國へ初めて輸入せられたのてある、故にこれを西印度病と稱すべきてある。ラス、カサスも亦同樣の報告を公にして居る、この人も當時西班牙て有名の人て、その父のアントニオはコロムブスの第二回の旅行に隨伴し、しかも侍醫のシヤンカと同船したのてある、ラス、カサス自身はコロムブスが第一回の旅行より歸りたるときセヴイルヲにてコロムブスに遇つたのてあるから、西印度の狀態を詳に聞いたものと見える。その記錄に據ると

エスパノラ島にて、初めて西班牙人を煩はしたものが二つあつた、その一は梅毒て、伊太利て佛蘭西病と名づけられて居るものがこれてある。大將ドン、クリストバル、コロンが歸國して、西印度發見の報告をなせしとき、これに隨伴して、第一の西印度人が西班牙に來た、現に余はセヴイルラにてその西印度人に遇つたのてある。それてその西印度人が空氣を汚染し、又はその他の方法によりて梅毒を西班牙に傳へたのは確かてある、或は已に二三の西班牙人が西印度にてこの病に感染して、西班牙に歸つて、その病を蔓延せしめたのてある、丁度この時にカール第八世が、ネアペルを征伐して、その軍隊中にこの病が蔓延したから、伊太利人はこの病が佛國から輸入せられたものと信じて、佛蘭西病と名づけたのてある。

と言つて居る。

右の三人の說、即ち梅毒が初めて西班牙國に現はれた當時の同國學者の說に據ると、梅毒がコロムブスの

亞米利加發見と同時に、その遠征隊のために西班牙に傳へられたといふことに一致して居るのである。故に、その說に據ると、歐洲に於ける梅毒の發現と、コロムブスの遠征とは親密の關係があるから、ここにその行程を調査するの必要がある。

五。

コロムブスが第一回の遠征に用ひた船は三隻で、第一は「サンタ、マリア」號、これには大將コロムブス始め六十六人の船員が乘て居つた、醫官はアロンツオといふ人であつた。第二は「ニナ」號、第三は「ピンタ」號、「ニナ」號には二十四人、「ピンタ」號には三十人の乘組があつて、醫官はガルシア、ヘルナンデッツといふ人であつた、總勢百二十人、一千四百九十二年の八月三日にパロスの港を出發し、九月の四日にカナリー島に到著した、ここに糧食を調へ、それから更に進航して、十月の十二日にグアナハニー島を發見し、それよりキユバを經て、十二月六日ハイチー島に到著した、これ即ちエスパノラで、コロムブスはこの島に六週間ほど滯在した。前のキユバ島では西印度土人と西班牙人との交際は稀であつたが、ハイチー島では、兩者の交際は甚だ盛であつた、殊に壯年血氣の若者の多數が、長途の航海の勞を慰せんがために、酒を飲み、色に耽り、放蕩の極を盡したといふことはオヴイエドーなどの記錄に歷々と載つて居る。

ハイチーに滯在すること六週日の間、西班牙人は日々西印度婦人に接觸し、不潔の交接によりて梅毒を感染するの機會は甚だ多かつたのである。一千四百九十三年一月十六日、コロムブスは「ニナ」及び「ピンタ」の二隻の船を率ひて歸國の途に上つた(「サンタ、マリア」は破壞して仕舞つた)、この時、十人の西印度土人を西班牙へ連れて往つた、その内に婦人が居つたと云ふことは明かに記錄はされて居ないが、しかしコロムブスが國王の目にかけるために男女の土人を伴ふたといふことは推定せられる。二月十五日にアツオレンに著いて、こゝに少しばかり逗留したが、しかしこゝでは葡萄牙官吏ジユアン、ド、カスタネダが船員の上陸を許可

しなかつたために、西班牙人と土人との交際は無かつた。二月二十四日にコロムブスの船隊はアツオレンを去り、兩船は互に相別れ、コロムブスが坐乘したる「ニナ號」はリツサボンに向ひ、三月四日タヨの河口に著し、コロムブスは上陸してヴアルパライソの王宮に赴きたれども直ちに船に還り、リツサボンには足を入れなむだ、船員は堅く上陸を禁止せられて、一人も殘らず船に在り、三月十三日に船は錨を拔てパロスの方に向つたのである。「ピンタ」號はピンジオンこれを司配して、西班牙の北東の海岸に向ひ、バヨナ（ヴイゴ河口）に著し、二三日滯留の後、この地を去り、一千四百九十三年三月十五日パロスにて兩船は相合し、セウイルラに向つた。この時一部のものは船を去つて、陸路セウイルラに進むだ。コロムブスは約四週間ばかり、セウイルラに滯在したのである。それからコロムブスの一行が、盛大の儀式を以てバルセロナに乘り込むだのは五月の十四日（一說には十七日）である。前に擧げたオヴイエドー及びチアヅ、ド、イスラはこの一行に接して、梅毒の事を聞いたのである。

六。

以上の所說に據ると、梅毒の病は、古代から亞米利加には存在して居つた、ところがコロムブスの亞米利加見發に際して、ハイチーの土人から、その病を西班牙人に傳へ、西班牙人からこれを伊太利人に傳染したといふのである。それて、セウイルラの人は、初めて梅毒の流行を見て、これに印度病又は印度疹の名稱をつけた、すなはちこの病が西印度より傳はつて來たといふことを示すのである。

諸家の報告をしらべて見ると、梅毒がコロムブスの第一回遠征と共に、初めて西班牙に傳はつた、その第一の地方はセウイルラで、それからバルセロナに傳はつた、それてバルセロナに梅毒の流行したのがカール第八世伊太利遠征の前てあつたといふことは疑もない事實て、一千四百九十四年六月十八日附て、シシワア人のスチルラツスが伊太利マイランドのスフオルツア侯の侍醫ロサツスに贈つた書翰の内に、バルセロナに

梅毒が盛に流行して居るといふことが書いてある。バルセロナから梅毒が、近隣の地方に蔓衍したのは疑もないことで、カール第八世が集めた兵隊の内には、固より梅毒の傳播者たる西班牙人が、尠からず交ぜつて居つたのである。又西班牙人がネアペルに赴むいて、こゝに梅毒を輸入したことも、當然あるべき筈のことである。

しかし、梅毒が亞米利加から歐洲に傳はつたといふ說には反對の論がある。その理由とするところは、第一にコロムブスの遠征隊がバロスに歸著したのは一千四百九十三年の三月十五日であるが、此年には已に、伊太利國には梅毒が存在して居つたといふことである。又アングレッリウスの說に據ると、西班牙にも已に一千四百八十八年の頃に、梅毒を見たといふことである。

伊太利國では、この病が佛蘭西より傳はつたとして、これを佛蘭西病と名づけて居る。しかし多數の學者は、西班牙よりネアペルに輸入せられたものと言つて居る。

七。

兎角の議論はあるが、しかし、十五世紀の前半若しくはそれより以前には、梅毒の病は歐洲にはなかつたらしい。コロムブスの遠征の土産の一部分として、亞米利加から始めてこの病を西班牙に傳へたといふ說も、全く確實であるとは言はれない。又西班牙から伊太利に傳播したといふことも、確定の事實では無い。故に梅毒の根元は頗ぶる曖昧であるけれども、しかし、梅毒といふ新しい病氣が一千四百九十四年から五年にかけて、カール第八世の伊太利征伐の時に、その軍隊の内に、盛に流行して、それから廣く歐洲全體に廣がつたといふことは事實である。

八。

さて、梅毒の根元は、十分に分らぬとしても、この病がこの頃に新に現はれたのは何故であるかといふ疑問は誰人の頭にも浮ぶ筈である。これに就ても種々の說があつて、神が人類の不行儀を罰するためであると

か、人獸相姦(Sodomie)の結果であるとか、星運の關係に本づくとか、或は血液の腐敗によるとか、一種の力の作用によるとかいふやうな説明がある。今少し進むだ所では、これまであつた病氣が相集つて新たに梅毒を作つた、すなはちパラツエルズスの說に據ると、癩病と「カムブツカ」との二種の病が集つて梅毒となつたのだと說いて居る。又はこれまであつた病氣が、何等の作用のために、俄にその病狀を變じたのである、又は佛蘭西の兵隊が、陣中で癩病患者の血液を交ぜたる葡萄酒を飲ませられたために梅毒にかゝつたのであるといふやうな說もあつて、固より明白の理由はわから無いのである。しかし、梅毒が不潔の交接によつて、人から人に傳へらるゝといふことは已に一千四百九十六年、梅毒初現の當時ウルセニウスが唱へた說で、一千五百年頃には、梅毒の傳染說は、盛に人々の唱ふるところであつた。

九。

一千四百年代の末に、梅毒が始めて歐洲に現はれたことは右の通であるが、その蔓衍は頗ぶる迅速で、その後數年ならずして、歐洲全體に波及したのである。その原因は何ぞといふと、第一は梅毒に侵されたる兵隊が各國にこの病の種子を撒きしこと、第二は病症劇烈にして、且つこれまでに無き病なるが爲に、人々のこれに侵され易きこと、第三はこの病は人類の弱點たる性慾に關聯して傳播することが、その主なるもので、當時の醫家が梅毒の何物たるを知らずして、治療が不適當であつたといふことも、大にこの病の傳播を助けて居る。

十。

佛蘭西に梅毒の始めて現はれたのはカール第八世が伊太利遠征より歸り、兵隊がリオンに滯在して居つた時である。リオンの女子は淫奔で、リオン女といへば賣淫婦と同一の意味に解せらるゝほどで、彼のカール第八世の伊太利遠征軍隊中に、このリオン女が多數に加はつて居つたのであるから、それが梅毒を佛蘭西に持つて歸つた。兵隊がこの病を持つて來て國内に傳播

したことは無論で、一千四百九十五年には佛國全體に梅毒が廣がつたものである。

獨逸に梅毒の始めて現はれたのも伊太利及び佛蘭西から兵隊が歸つて來た頃て、カール第八世の軍隊に居つた兵卒ばかりでなく、マキシミリアン第一世の配下の兵卒も、共に梅毒を獨逸國内に輸入することになつて居る。一千四百九十五年より九十七年までの間に梅毒は獨逸國内に蔓衍した。

澳國の維也納には一千四百九十六年に梅毒が傳はつた。瑞西は一千四百九十五年、英蘭は一千四百九十六年、カール第八世の軍隊に居つた兵卒の歸國と共に、梅毒が輸入せられた。蘇格蘭には一千四百九十七年、和蘭には一千四百九十六年、嗹馬には一千四百九十六年、波蘭には一千四百九十五年、當時交通の不便てあつた匈牙利及び露西亞にも、一千四百九十九年には、已に梅毒が傳はつて居る。一千四百九十五年カール第八世の伊太利遠征の軍隊が梅毒を傳へて來てから、僅に四年にして歐洲全體に蔓衍したのてある。その流行が猖獗て病勢も頗る劇烈てあつたばかりでなく、この病は前代未聞のものてあつたので、何れの國でも、その國民が、この病を傳來したと認むる國の名を冠して病の名稱とした。すなはちガリシア病、亞米利加病、印度病、印度疹、佛蘭西病、伊太利病、西班牙病、ネアペル病等これてある。

二。

亞細亞には土耳其あたりから漸次に蔓衍したものらしい、波斯亞ては梅毒のことを「ベデフランギー」(即ち佛蘭西病)又は土耳古病と名づけて居る。

印度に梅毒の始めて現はれた年代は、十分詳にないが、支那に梅毒が始めて現はれたのは弘治の末か、正徳の初かてある。

續醫説(兪辨著)卷十、萆薢の條に、『弘治末年、民間患ニ惡瘡一、自ニ廣東人一始、吳人不レ識、呼爲ニ廣瘡一、又以ニ其形似一、謂ニ之楊梅瘡一、若病人血虛者、服ニ輕粉重劑一、致ニ生結毒鼻爛足穿一、遂成ニ痼疾一、云々』本草綱目(李時珍著)土茯苓の條に『近時弘治正德間、因ニ揚梅瘡盛行一、

亟用ニ輕粉藥一取レ效、云々』同書又曰ク『近時起ニ于嶺表一、傳ニ及四方一、蓋嶺表、風土卑濕、嵐瘴薫蒸、飲啖辛熱、男女淫猥、濕熱之邪、積蓄既深、發爲ニ毒瘡一、遂致ニ互相傳染一、自レ南而北、遍及ニ海宇一、云々』、石山醫按に『近有ニ好淫人多病ニ揚梅瘡一、藥ニ用輕粉一、愈而復發、云々』按ずるに、石山醫案は汪機の醫案を記錄したもので、汪機は明の代の季の人である。黴瘡秘錄（陳司成著）に『究ニ其病原一、始ニ午會之末一起レ自ニ嶺南一、至レ蔓ニ延通國一、云々』

弘治は明の孝宗の代（西曆一千四百八十八年乃至一千五百五年）、正德は武宗の代（西曆一千五百六年乃至一千五百二十一年）の年號で、歐洲で梅毒が始めて現はれた時代と相距ることが遠くない。歐洲で、佛蘭西に梅毒が始めて現はれたのは、前にも度々記載した通り一千四百九十五年で、當時交通の不便であつた匈牙利及び露西亞に梅毒が傳はつたのは一千四百九十九年である、一千四百九十九年は支那は明の孝宗の弘治十二年で、弘治九年即ち西洋の一千四百九十六年には葡萄牙人が始めて印度に航し臥亞に通商した。これによりて見るに、歐洲に梅毒が始めて現はれてから五六年の後には、已に支那の南方にこの病が傳はり、その病が前代未聞のものであつたので北方の支那人はこれを廣東瘡と名づけた、廣東はすなはち此の病の這入つた門戶である。

一二。

我邦に此病が傳はつたのは、永正九年である。當時の名醫竹田月海の雜錄の中に『永正九年壬申、人民多有レ瘡、似ニ浸淫瘡一、是膿疱飜花瘡之類、稀所レ見也、治レ之以ニ浸淫瘡之藥一云云、謂ニ之唐瘡、琉球瘡一』と書いてある。永正九年は明の武宗の正德七年で、西曆の一千五百十二年に相當するのである。妙法寺記にも『永正十年、此年天下にタウモといふ大なる瘡出て、平癒すること良久、其形譬へば癩人の如し、食は達者なる人のやうに進むなり』と記載してある、タウモのタウは唐で、モは疱瘡、即ち唐疱瘡の義で、月海雜錄に唐瘡といふと同樣の義であらうと思はれる。當時梅毒は我邦

に始めて現はれたので、支那又は琉球からこれを傳へたものと認めて、箇様に唐瘡又は琉球瘡と名づけられたのである。梅毒が何れの國でも、此の如く、その祖國と認めらるゝところの名を冠して稱呼とせらるゝのは奇妙といはねばならぬ。

一三。

以上に述べたところは、梅毒の起原と、その傳播の模様との大略である。大醫クラフト、エービングが言つた通り、「チヴイリザチオン」(Civilisation)と「ジヒリザチオン」(Syphilisation)とは相併びて進むもので、文化と梅毒とは相離るべからざるものである。歐洲中古の時代にありて、癩病が廣く行はれて随分時の人を噪がしたが、今日の梅毒は國民病として丁度中古の癩病と同様のものである。その輓近の文化と相伴ふ點に於て、その歷史を研究することは、文化上多大の興味の有ることとであるが、今はそれまでに論及するの暇が無い。

大陸巡遊日記(三)

繞石生

九月十日

昨夜二時過にヂジョン、ボユに停車し、三時半頃にモウシャアに停車したことは微かに覺えて居るが、いい氣持てうと〳〵眠つて居たから其他のとは知らぬ。

不圖眼が覺めると汽車は今し岩山の切通を走りつゝある。岩の裂目からは岩清水がちよろ〳〵流れて居る。殘月が淡く西の空に懸つて居る。明けるに間も無いらしい。窓を開けると冷たい程涼しい風が吹き込む。僕

の居た區劃には向ひ合つて四人づゝ居たのだが、二人は何時何處で下車したのか、片側三人づゝになつて居つた。

日が出たらしい。過ぎ行く左右の野原に、また遠山の巓に、黄金色の朝日影が鮮かに射して來た。が當の日は見えぬ。汽車は正に日に眞向に走つて居るのであらう。

山の無い、否な山の極めて少い英國から來て見ると、殆んど山許りだ。日本のやうだ。野原の草の生え具合森の繁り鹽梅がまた日本のやうだ。

蹈々と、青竹を立てたやうに眞直な、細い杉に似た木が隙間無く蔽ふて居る峻しい山奥を出ると、瑞西一流の、梁、合掌、柱、其他の骨組總てが木で、柱と柱を斜十文字に番へた材木で支へたり、或は三段四段の横木で固めたりして、其處此處に小さな窓を五つ六つ殘して、他は悉く白土又は灰色の土で塗り込めた二階建の小奇麗な家が四つ五つ、離れ〳〵に立つてるのが眼に映る。その中の一軒の生垣の横を、幅二尺許の小流が、その下の家の裏へ飛ぶが如く走り流れて居るのが見える。生垣近く鷄が何か啄んで居る。人影は見えぬ。家々の煙突には炊煙が輕く揚つて居る。瑞西らしい氣がする。

汽車は山と山との峽間を縫ふやうに右へ曲り左へ曲つて進む。時々日が車室内へ射し込む。

山毛欅や樫の茂つた、窓から一寸首出した丈では頂上の見えぬ程高い急な山の中腹を走る。左は遙か下まで、處々大木の突つ立つて居る、谿底まで急な草原だ。牛がその大木の下に、草原に——小さな短い可愛いゝ草花が咲いている草原にじつと立つて居る。谿の底は岩の多い小川で、岩に激する水が白く見える。谿の向側は、例の杉の生茂つた急な山だ　草原の中程まで其の山蔭がきつかり映つて居る。

汽車は又も日に向つて進む。右に近く幾つか重なつた山を抽んでゝ、その後に、雪を頂いた、妙義山のやうな峰が續いて見える。雪が朝日を浴びた處がぎらぎら輝いて居る。

『あゝ、アルプスが見えだした』

と乘合の客が言ふので、僕も『あれがアルプスか』

と獨り心にうなづく。

汽車は速力を緩めた。懷中時計を見ると七時前だ。まだ一時間は斯んな景色が眺められるわいと、緩くり構込んで居ると汽車は停つた。見ると下車すべきロザンヌだ。巴理と此處とは時間に一時間の差があることを氣付かずに居たのだ。

手荷物は二つ共預けて停車場構内を出る。近くにホテル、コンチネンタルと名前は嚴めしいレストランが見つかつたので、サンドヰチを朝食代りにして大にビイルを煽る。空腹のこととて旨いつたら無かつた。

そろ〳〵出かける。今日も無雲の快晴だが、土地の高い所以か涼しい。

ロザンヌは、曲つた胡瓜形のゼネヴ湖の北岸中部にある町だ。大抵斯う行きや湖畔へ出れるだらうと、いい加減に町を曲つて南へ四五町行つたら、果して湖岸へ出た。

幅九哩あるといふ湖水の對岸は直ぐと低くからぬ嶮しい山て、その紫がゝつた濃い色の連山の後に例の白皚々たるアルプスの頂上が起伏して居る。湖は油を湛へたやうに平らだ。日蔽を掛けた三人乘五人乘のボオトが四五艘沖合に漾ふて居る。對岸の山裾は淡靄に包まれて居るが、そのボオトの日蔽は朝日を受けて眼を射る許りに光つて居る。艫の旗はダラリと垂れて居る。沖も風は無いらしい。その日蔽も旗も、鏡に映したやうに鮮かに水に影を醮して居る。

湖畔には花壇のある小さい公園めいたものもあり、緑濃い並木が兩側に植はつた散歩道もある。僕は湖水を眺めながら、あてども無くぶら〳〵歩く。小さなパラゾルをさした、薄色の服裝の女、それに添ふ麥藁帽にフラネル服といふ、さつぱりした服裝の男、或は、涼しげなネクタイを長く垂らして上は純白のシヤツだけて下は半ヅボンの膝が見えるほどのを着け、可愛い編あげの赤靴をひきずりあるく男の子を片手に、同じく涼しげな短いフロックを着け、服と同じ長さ程後へ

垂らした金髪に輕く廣緣の麥藁帽を冠つた女の子を片手に、裾をひきずつて緩かに歩み居る貴婦人らしいの、など避暑客らしい人許り其處此處に徘徊して居る。岸の石に腰掛けて釣を垂れて居る者も居る。見るとウグイらしい、長さ五六寸のが、うぢやく往來してるのが、水が奇麗だから手にとるやうに見える。喰付くのが見えるから、浮は要らぬ程だ。此のゼネヴ湖の東端へは、かのロオン川が泥を運び下るので、川口は濁つて居るさうなが、此處まで來る迄に水はすつかり澄むのだといふ。水の藍、空の青、此岸の草木の綠、彼岸の山々の紫、アルプスの雪の白、色といふ色が總て實に鮮明だ。色繪葉書の色そつくりだ。景色がまた實に平穩だ。並木道の共同ベンチに腰かけて飽かず四方を眺めた。

日はもはや大分高く上つた。湖面は海拔千二百二十呎もあるといふから、巴理の昨日に比べれば涼しいが、でも今日も午後は暑さうだ。尤も僕は間衣でテクく歩いてるのだから暑いのも無理は無い譯だ。

羅馬帝國衰亡史の著者ギボンは、その「自傳及び著作の備忘錄」のうちに

「余は烏滸がましくも彼の書を述作せんと思ひ付きたる瞬時を記錄しぬ。いでや余が最後の放釋の時刻を記錄して之を記念せん。余が、園内の凉亭にて、最後の頁の最後の數行を書きしは、實に千七百八十七年六月の二十七日といふ日、否なその夜、十一時より十二時に至る間なりき。筆を擱いて余は立ちてボルソオ即ちアケシア樹の蔽へる散步道を幾たびか往復しぬ。此處よりしての四山幷びに湖水の眺望甚だ佳なり。空氣は溫暖に、空は澄み渡り、銀盤の如き月は湖面に映じ、天地闃として聲なかりき。余は身の自由を恢復せるを思ひ、余が名聲の樹立せんことを思ひ、衷心喜悅に堪へざるものありしを隱くさんとは思はじ』。

と書いて居るギボンが滯留して居た旅館を一見しやうと思つたが、中々見つからぬ。やつと、ラ、フラアス、サン、フランソアにあるホテルがそれと知つて行

つて見た。

記念に、序てに此處て晝飯を食はうかと思つたが、餘りに堂々たるホテルなので、吝嗇坊の僕少々畏縮してしまつて、その近くのレストラン、コンチネンタアルといふへはいつて、四品に葡萄酒一本て濟ましてしまつた。二フラン三十サンチイムだつた。

このゼネヴ湖岸には行つて見たい處が少なからずある。マダム、ド、スタエルの舊邸コッペ、ヴルテエルのシヤトオのフエルネ、バイロンの詩に名高きシヨンの岩塔など、時間と金とあれば行きたいのだが、行き得られぬのは寔に殘念だ。

手荷物を受取つて、二時半頃、ルッアン行の汽車に乘つた。

汽車は暫くの間、湖水を右に見て、山の中腹を走る。湖水は相變らず漣も立てず靜かだ。空には高く鰯雲が棚曳いて居る。それがその儘奇麗に湖氷に映つて居る。左方の山腹は、隨分と嶮しいのだが、絶頂に少し木がある許りて、其處迄は段々畑て、それが悉く葡萄畑だ。棚一面に纒ひついてる蔓に累々と紫紺の實が垂れて居る。美しい。

やがて湖水は見えぬやうになつて、汽車は東北に向つて、山又山の間を走る。例によつて山は險しいが、處々平たい處もある。

其處には英吉利と違つて畑もあるが多くは葡萄畑ばかりだ。

今度も僕の居る一區劃には僕ともに六人しか客が居ない。頗るゆつくりして居る。昨夜床の上て寢なかつたので切りと眠氣を催す。ついうと〳〵する。

『ベルン〳〵』

と驛夫が叫び廻るので眼が覺める。

一寸下車してラムネ一本立飲する。客車へ歸るとすぐ汽車は動き出した。やがて車掌が切符檢査に來た。出して見せると、獨逸語て

『この汽車はチユウリヒ行てす。ベルンて乘換なさるのてしたに』

と言ふ。先刻までは車掌は佛蘭西語を話す車掌だつた

が、車掌もベルンからは獨逸人が乘込むと見える。
「そりや知らなかつた。どうしたらいゝだらうか」
と英語て訊くと、車掌は英語は分らぬといふ。
「前方へ行つて乘換なさい」
といつて呉れる獨逸語ほどは僕に通じたから、どうなるだらうと無理に安心して卷煙草をふかしながら沿道の景色を眺める。
するとやがてのこと、他の區劃に居た、鼻の赤い肥太つた大きな男が僕の向側の座席へ席を移して來た。キスキイの臭かプン／＼する。いやに僕の顏を見やがる。そして突然
「お前は日本人かい」
と佛蘭西語て訊ねる。虫の好かぬ奴だから、
「私しは佛蘭西語は判りません」
と佛蘭西語て素氣無く返事してやる。
「獨逸語はそれぢや分るか」
と今度は獨逸語て訊ねる。獨逸語は實以て覺束無いのだが
「獨逸語も少しも判りません」
と冷淡に獨逸語て返事してやる。
「それなら伊太利語は話せるか」
と更に伊太利語てやつて來る。伊太利語は單語を二十許しか知つて無いのだ。然しそんなことは臆氣にも出さずに、
「ノン、パルロ、イタリアノ」
とこつちもやつてやる。初から先方は僕を日本人と見て侮蔑して居たらしいが、餘り僕が素氣無いので怒りだしたやうだ。いやに輕蔑的に
「不自由なもんだな。外國へ來て居て一體何語を話すんだい」
と少々喧嘩腰になつて來る。柔道でも少し知つて居りや、喧嘩を買つて客車のコリドアヘドシンと投げつけてやるんだがと思ふが生憎脊負投も逆の一手も心得て居らぬ。然しこんな場合いぢけちや駄目だと、相變らず冷やかに
「英語は少し話します」

と英語で答へると、

『何んだ英語なんか。大陸へ來て英語が何の役に立つ。己なんか、伊太利語でも獨逸語でも佛蘭西語でも自由に話す。己は生粋の瑞西人だ』

と肩を怒らしてのしかゝつて來る。僕に腕力で勝てる見込がありや、

『伊太利語は伊太利亞の言葉だ。獨逸語は獨逸の言葉だ。佛蘭西語は佛蘭西の言葉だ。お前の國の瑞西の國語はどんな言葉だい。日本には日本語といふ獨立した言葉があるぞ』

と言つてやりたかつたが、悲しいかな腕力で勝てさうに無いから、僕は相變らず煙草吹かしながら窓外の景色を眺めて知らぬ顔して居る。大分平地もある。左側に可なり大きな川が見え出す。クック社の大陸汽車時間表をカバンから取出して見る。アアル川――あとでライン川へ入るアアル川らしい。かの男はぶつ〳〵獨逸語でつぶやいて居たが、突然また頗る人を馬鹿にした語調で

『オイ、マッチ貸せ』

といふ。すると今迄の無禮を見かねて居たらしいその男の右側の佛蘭西人らしいのが

『私しが御用立ち申ませう』

と更まつた言葉でポケットからマッチを取出して、擦つてすゝめた。かの男は半分許りで消えた葉卷を不承不承につけた。するとマッチをすゝめた男が、呼吸をはづまして

『あの方は遠い他國から來て居られる紳士だといふとは御承知でせうな』

と、紳士といふ字に力を入れてたしなめるやうに言つた。それから其男と佛語で話し出して、次第に聲が荒くなつて來た。しまひに酒臭い奴は、フンと鼻呼吸をして元の自分の席へ還つて行つた。やりこめられたらしい。

『御迷惑でしたらう』

と慰められて僕は却つて其男に氣の毒だつた。汽車の乘換に失策つたのは僕の外遊中これが初めのまた終だ

つた。そして西洋人に——中流以上の者らしい西洋人に斯んな仕打をされたとも是が初の終てあた。そしてこの時英國人の常に紳士的な言行をしみじみ懷かしく思つた。ロザンヌ發の汽車は、前半部がチユウリヒ行て、後半部がルツアアン行のて、初から後部の客車に乘つて居ればベルンで乘換へんでもよかつたのを、つい不注意に前部の客車へ乘込んだのであつた。

地圖を見ると、途中ランゲンタアルといふ處からルツアアン迄支線があるらしいから驛長に談じて支線を行かして貰はうと思つて　該驛へ着くなり、棚から手荷物をエンヤラと取下して下車しやうとすると、車掌があはたゞしく遣つて來て、

「も少し乘つて居れ」

といふ。その後でペラ〳〵獨逸語で其理由を説明するらしかつたが能くは理解が出來ぬ。と、僕の左側の男が、少し英語を話すからと、拙い英語で車掌の言ふとを通辯して呉れた。こんな時には英語が日本語ほどに有難い。妙なもんだ。がしみ〳〵獨逸語を忘れてしまつたとを後悔した。次のオルテンといふ驛で乘換へると丁度その時刻にルツアアン行の支線の汽車が出るから共に乘るが便利だ。ロザンヌ、ルツアアン間の賃錢とロザンヌからオルテン經由でルツアアンへ行く賃錢の差額の二フランさへ拂へば僕の有つてる切符證明に書を附與してやるといふとだと合點が行つた。二フラン位の損で濟めば上々吉と、その車掌に一フランはづんでやつた。

七時前にオルテン下車。七時十分發のでルツアアンに向つた。日は暮れてしまて左右の山河も見えなくなつた。着いたのは八時半頃だつた。着く前に、線路に添ふた丘の叢に頻りに轡虫がガチヤ〳〵騒いでるのがきこえた。西洋へ行つてから虫の音といふものを久しく耳にしなかつた身にはあの八釜敷い聲が愉快にひゞいた。

手荷物の大きい方を停車場へ預けて置いて、カバン片手に其處いら宿屋を探し廻る。どれもこれも僕には餘りに高等だ。食堂の客は男女共に夜會服で、給仕も

燕尾て居り、シャンペンかワインか知らぬが高價な酒らしい罎を盆に載して持運ぶ樣が外部から覗はれる。或るホテルぢや食堂の片隅で音樂をやつて居る。此邊は全體金持の避暑客相手の宿が多いから、僕等貧乏書生は寄りつかれさうに無い。停車場近くの横丁をあれこれと歩き廻て、やつとオテル、ド、パルクといふ安宿らしいのへ入つたのは九時半も過ぎて居つた。四階目の二フラン半の部屋へ入つた。

カバンを部屋へ置いて直ぐ飛出す。はや夕食の時刻は過ぎて居るとだから、何處かレストランで夕食をすまさうと思つたのだが、何處へ行つても餘り立派で入る勇氣が出ぬ。新橋といふ奇麗な橋を渡る。今迄氣付かなかつたが、洗つたやうに澄んだ靑空に、十六七日と覺しき少しく缺げた月が、遠くの星影まで隱くして皎々と照り輝いて居る。橋から右の、次第に幅廣きルツアアン湖は淡靄がかゝつて居て、何處が岸邊か知らぬが、月の眞下は銀波を躍らして居る。實に絶景だ。腹の空いてるのも忘れて眺めて居た。そして宿へ歸つて、もはや燈火を消しさうにして居た酒場へ入つてミユンヘンビイルをタムブラアに二ハイ貰つて、それで喉を濕しながらハムサンヰチに一時の飢渴を凌いで部屋へ上つたのは十時半頃であつた。少しく明けてある窓から夜風が習々と吹込む。涼しい。いゝ氣持で寢た。

九月十一日

七時に床から下りて窓のレエスの窓掛を絞りあげる。空は晴れきつて居るが、四方の山々は霧が厚く鎖して居る。と見ると、僕の窓の眞正面に當つて、その霧の上に、巨大な塔の頭だけ三つ四つ並べたやうな妙な形の物が見上ぐる許り高く聳えて居る。僕を威壓して高く聳えて居る。何だらうかと瞳を定めて見てみると、それはピラタスといふ、ルツアアンの町から遠からぬ、海拔六千九百餘呎の峻嶺であつた。中腹から下は霧に鎖されて巓だけ朝日を受けて居たのだ。見る見る霧は淡らいて低くなる。山は次第にその皺襞を明かに現はす。捏薯を積重ねたやうな、岩ばかりの山らしい。霧が霽れるに從つて物凄い程高く屹立して見える。

日を受けた部分と、日蔭の皺襞と、濃淡がかつきりついて居る。

宿で朝食をすまして、昨夜渡つた新橋を渡つて右へ湖畔の散歩道を散歩する。

左右に一本並びに植はつたアケシアの並木が、脊丈位の處から日の目を洩らさぬまでに枝葉を繁らして、上では左右の枝葉が交錯してアアチを形成つて居る。アケシヤの木のトンネルを行くやうだ。渚は腰の高さに亞字形の石造の欄干が續いて居る。この散歩道の左側は坦々たる馬車道で、それに接して五層六層の石造の壯麗なホテルが甍を列ねて建並んで居る。シユワイツエル、ホオフなんてのは、宮殿かと見擬ふ宏壯華麗なものだ。

五六町許り行つて。並木の下の鐵製の共同ベンチに腰かけて湖水の眺望を恣にする。

右の方、湖水が俄に縮まつて川となつた處に先刻渡つた句欄の低い瀟洒した石造の新橋が見えて、對岸は橋の左側のバアンホオフを始めとして數層の壯大な建築が、その磨ぎ上げられた大理石又は色御影石の柱や壁を靜かに湖面に映じて居る。町家の後には雜木の端山が見えて、其後に今朝見たピラタスの峻嶺が一バイに朝日を浴びて屹立して居る。

正面はと見ると、長短幾つかの出鼻が水の中から林の浮いてるやうに、濃緑の木を繁らして居る。出鼻の突端近く、杉らしい木が二三本、尖塔の如く聳えて居るのもある。その林が影か、水に映つたその影が實物か分らぬまでに、影が歴然映つて居る。それ程水がまた平らだ。出鼻の後の端山を踏まへて、標高三千四百餘呎と聞くビユルゲンストツクとかいふ山が、テエブルランドの如く聳えて、町の後の處で急な角度を爲して削げて居る。低い雜木に蔽はれて居るのだが、その白茶色の岩の地層が幾段にも斜右に斷續して見える。その後はまたオオベルバウエンとか、シユエルミスとか、ウリロトストツクとか、ブリゼンとか、六千五百呎乃至八千八百呎のアルプス連山の峰々が、雪を頂いて濃紫の肌を露はして居る。空は眞青だ。元箱根から

富士を眺めるよりも尙ほ規模が大きい。實に絶景だ。

湖水の左岸には、或は芝草に包まれ或は林に蔽はれた小山が起伏して居て、別莊らしい小さな建物が湖畔に、山腹に、山頂にちらばら見える。小山の後には標高五千四百呎のリギ山が、まだ淡霞に包まれてその蜿蜒たる姿をほのかに示して居る。

ロザンヌ同樣、避暑客が三々五々この散歩道へ出かけて來る。

此邊に遠からぬ處に、所謂『ルツアアンの獅子』といふのがある筈だがと、ポケツトの案内記を出して見ると、

……… se trouve le célèbre Lion de Lucerne, monument consacré en 1821. par les soins du colonel Pfyffer, aux 26 officiers et 792 soldats de la garde suisse des Tuilleries, à Paris, qui furent pour la plupart massacrés le 10 août 1792. en les défendant.

云々と書いてある。田舍者の大村銅像見物めいてるが、今日は一日此のルツアアンで遊ぶ積りだから、其處へ行つて見ることにする。

小山の横に露出して居る幾十尺四方の岩を削つて、中央を龕のやうに刳つて、其處に巨大な獅子が彫出してあるのである。脊中に刺された槍が折れ殘つて居る。楯を右前足に押へて、それへ右の頰をつけて呼吸絶えて居る。格別感心する程のものぢや固より無かつた。

それよりか之に近い『氷河園』といふのが珍らしかつた。見料の一フランは不廉だが學術上非常に有益な觀せ物だ。

溪間を辷り流れた氷河が、底に凍りついた石で擦つた痕が、研いたやうに平らな岩床へ幾條の線を爲して殘つて居る。處々、深い鐃鉢のやうな窪みがある。其れには周圍に螺旋形の線が附いて居て、底に圓い石が殘つて居る。氷河の底に附着して居た岩が、岩床の堅い岩に引懸つて取れて、その上を辷り行く氷河の勢で岩床を摩擦して凹みを造る。凹みに溜る水が氷河の勢て渦を卷いてその岩を凹みに擦りつける。岩は次第に

角がとれて凹は次第に廣く深くなるのだ。底に殘つて居る石の拳程に小さくなつてるものもある。一つ穴に三つも圓い石の殘つてるのもある。

園內にアルプス博物館といつたやうな物がある。粘土製の、三疊敷大のアルプス連山の模型もある。アルプス特有の動物の剝製もある。其道の人には尠なからぬ興味を與へるものであらう。

午後は、今朝行つた散歩道を對岸に見る湖畔の大道を二哩計り散歩した。急げば暑いが、立停つて木陰に休めば何處からと無く涼しい風が吹いて來る。

道から水際までは芝原だ、右は近く雜木林の丘が綴いてゝ、時々丘の麓までなだらな芝原のある處もある。芝原には多くは杏らしい木が二坪に一本づゝ位に植ゑられて居る、水上からの花時の眺めが偲ばれる。茶が飲みたいのだがいくら行つても茶店が見つからぬ。芝生の木陰へ入つて草の上へ仰向けになつて暫く休む。頭の兩傍から紅花の苜蓿と黄な手莨が三四本ついと突立つてるのが眼につく。空はブルシャン、ブルウを溶かしたやうに青い。山の雜木林に小鳥の啼いてるのが聞えてる。

宿へ歸つて茶を飲んで、今度は新橋から一二丁川下の會堂橋といふを渡つて見る。粗末な木橋で、三段に鍵の手になつて川に斜に架つてゐる。そして粗末な板葺の家根に蔽はれて居る。左右兩側とも胸の高さだけ板圍になつて居る。梁には前後とも極めて古風な繪が額にして吊るしてある。

この村の守護神サン、レゼエとサン、モオリスとの生涯を現はしたのと、瑞西の歷史畫だといふ。全體で百五十四枚あるのださうな。正に嚴島廻廊を行くの感がある。橋の中途に、橋に接して、石を積み上げた六角形の水塔と稱する高い塔がある。

今朝の眺望が忘れられぬので、夕方再びアケシヤ並木の散歩道を逍遙する。納涼がてらの避暑客がぞろぞろ往きつ返りつして居る。暮れ行く湖畔の形勝を寫さうとしきりとコダックをパチ〳〵いはしてる者もある。亞字の石欄に凭れて鱮に似た小魚の岸近く清冽な

水に群を爲して泳いでるのを見入つて居るものもある。共同椅子は隙間無く人が坐つて居る。朝とは餘程の雜沓だ。ピラタスの峰は、沈み行く夕日を脊にして一面たゞ濃いコバルト色を塗つたやうだ。湖水を隔てゝ正面の端山は淡く夕靄がかゝつて淡紫に見え、後に高きアルプス連山は巓だけその雪を夕日にきらつかせて居る。今朝は靄に包まれて居た東岸のリギ山は今は滿山夕日を浴びて皺襞が明かに見える。そして今朝は見えなかつた頂上の窪み〳〵の殘雪が鹿の子斑にきらきら光つて居る。日は次第に沈んで、湖岸は迫り來る夕靄に段々朦朧となつて行く。

夜寢る前に重ねてまた此の散歩道を終點までぶらぶら散歩した。終點には水際に大きな柳が四五本、幹斜めに水の上へ出て居る。月は天心に懸つて滿天一片の雲翳だも無い。月の映つてる湖心は銀鱗を漾はして居る。何處からかモオタア、ボオト――納涼客を乘したモオタア、ボオトの出る音がする。湖心の銀鱗が亂れて長く廣く銀波が湧く。と、それらしい物が矢を射る如く沖を目がけて走る。けたゝましいモオタアの音が次第に微かになる。脚下の水に美しく柳の葉影を印して居た月影が亂れて、思出したやうにぽちやり〳〵と波の音がする。此邊は人も來ないので涙が出る程靜かだ。橋に近い大旅館の食堂で奏するのであらう、多勢のヴイオリンの音が夢のやうにきこえる。宿へ歸るのが惜しかつた。(未完)

大隈伯と三大政治家

（池邊三山の三大政治家を讀みて）

黒頭巾

其一

●今年は入梅後、雨殊に多し。今日は風さへ吹き出て、窓前の檜柏、幹を捻ねりて舞ふ。樹、暫らく靜かなる時、葉末に溜る露の珠、硝子窓を透して皆輝く。鳥、櫻、原三子、約あり、雨を恐るゝに依りてか、未だ來らず。木葉を叩く雨の音ばかり強く聞ゆ。

●暴雨、茅屋を包圍するの時、書窓、特地に靜閑、以て讀み且つ書くに宜し。蓋し、狂へる四圍の中に、ひとり閑天地を占斷するは、殊に、想を練るに適する也。

其二

●新たに開通せる山陰線の汽車は、僅かに一箇月の間に、あらゆる天下の名士を呑吐せり。三千年間、裏日本に僻在せし山陰道は、之に依つて、忽ち一代の智勇辯力を湊合せる、尤も華やかなる演説會と化したる也。而して其の中には、開闢來、稀有の廣長舌も交りて見えたる也。

●古來、英雄の天下治亂の大勢に關係したる者は、未だ山陰道より出でず、山陰の人は、日本海の怒濤の澎湃たるを見るに馴れて、未だ多く一代の智勇辯力を見ず、到處、奇景に富み、天然、海山の刺激は强くして、世運の影響に遠し、中國脊柱の大山脉を屏風として、中原と交通を遮斷し、世波の洶湧するも、容易に、此の難關を飛過する能はざりし也。豈圖らんや、文明の交通機關の德澤は、一朝にして、彼等をして、現代の人物大觀を得しめんとは。

●交通遮斷の堤防を排して、山陰に流入せる中原世波の劈頭に進めるものは、現代の人物なり。戸を開いて風景を見る、先づ、眼に入るものは極めて印象的也。山陰の人は、必らずや、人物觀に、深甚なる興趣を得しならん。

●山陰線の山川をして、「蓄音器の圓板」の作用を爲すものたらしめば、輓近、彼等が聞き得たる大演説は、

深き音波を刻して、永き歳月を渉りて、幾回か繰返し、廻轉せらるゝも、容易に、其の効力を消耗すること無く、以て、山陰人心の將來に、多大の影響を與ふるならん。

◉伯大隈の演説は、殊に、山陰の人を驚かしたるべし。伯の博辯宏辭は、日本海の波響に對抗して、海風を吹き捲くるに足らずんばあらず。彼は、到處に、教育を説き、軍人後援を論じ、一日數回の演説も、多々益振ひ、更に、老境の人とは見えず。恰も出山の釋迦の意氣を現はし、山陰人をして隨喜せしめずんば休まざるの勢を示す。

其三

◉逆境に立つこと三十年にして、地歩を失はざること伯大隈の如きは、吾國の政治史には初めて見るの人たり。將來と雖も、亦た恐くは、此の如き人物は、容易に出現せざるべし。

◉伊藤と大隈とは、維新三傑の後に於ける好個の對照たらずんばあらず。公伊藤をして、伯大隈と地位を換へしめば、互に、彼れ程の事は出來ざるべし。然れども前者は後者の如く、容易に沒落せざるの人、而して後者は、沒落すと雖も樂觀し得る人たる也。

◉成敗の跡より見れば、伊藤は臺閣の政治家にして、大隈は、如何にも民間の政治家なるらし。大隈と雖も、三十年、續けて廟堂に因緣を保たしめば、臺閣政治家と見えざる事もあらざるべし。

◉態度を以てすれば、大隈は伊藤よりも遙かに貴族的なり。伊藤には、書生風ありて、大隈には、大盡の尊大振りあり。伊藤は簡易にして、大隈は贅澤なり。然れども伊藤には貴族性ありて、大隈には野性あり。大隈の貴族的と見ゆるものは、彼の肉にして、其の骨は、野骨なるべし。

◉公伊藤は、薩摩芋を喰ひ、醉歌放吟する中にも、粋あり、通あり、「御前」と呼ばれても、好箇の御前たるを失はず。大隈には、粋も通も無く、一點、嫻雅の氣象を帶びず。彼は野骨の英雄也。

◉維新の人物、品紫評紅の能事あらざるは無し。公伊藤、公桂は言ふに及ばず、公山縣の謹嚴なるも猶ほ清元を歌ふ、清艶の美音、人を驚かすといふ。伯大隈には、些の這般の隱藝あること無し。彼の廣長舌も藝妓の前に、器用に歌ふには適せざるなり。

◉伯大隈は、壯時より一擲千金を好む。彼の豪游は、大盡游びといふよりも大名游びならずんばあらず。明

治の世。舊大名にして豪遊せしは山內容堂侯あり。侯には尙ほ風流韻事あり、時には通人の遊を爲す。大隈は、徹頭徹尾殆んど大名なり、彼の遊び方は、彼の人格を表章す。

◉明治初年、大隈の得意時代、彼が豪游の名、花柳界を動かす。全盛の美妓も、彼を歡迎せざる無し。然れども彼には狎妓無し。彼は、屢來らず、他の諸友の、花街を家とするにも似ず。彼は、一月に、僅かに數回出現するに過ぎず。彼の來るや多くの客を隨へ、多くの幇間を率ゐ、主客一隊、堂々として押上り、彼は、床の間を背にし、脇息に凭れ、美人、坐に滿ち、酒泉の如し。纒頭手に任かせて擲ち、歡聲、絃歌と共に涌く。此の稀有の大名客は、大慧星の如く、時々、突如として出沒すれども、光芒、中天に留まること久し。

◉明治の元老にして帝國ホテルに歡迎せらるゝ者は、小西郷と伯大隈とを推す。公伊藤と雖も、此の二人者には及ばず。

◉公伊藤は、一時、上京する時、帝國ホテルを旅館とす。然れども彼は、眞に、ホテルに宿するには非ず。ホテルの後ろに横山孫一郎の家あり、ホテルの經營者也、公は、此の家の淸閑なる座敷に起臥す。而して公は、ホテルを以て應接室とし、客あるとき、乃ち、手を揮り、悠然として、遠く奧の居室より出で來る。

◉從道侯は宛轉、活脫、能く伊藤、大隈を揶揄し得るまた能くホテルのボーイとも懇親を結び得る。大政治家、貴客の來る、ボーイは憚りて之を敬す。ひとり、從道侯を恐れず。少年瀟洒たるボーイ等、侯を環ぐりて、侯の袖を惹き、互に、詼謔を弄して、嬉々として笑ふ。ボーイ等は、此の大政治家を視ること年來の親友の如き也。

◉ホテルのボーイ等は、伯大隈來ると聞けば、則ちまた歡迎す。伯は、必ずしもボーイ等と接近せず。然れども愛嬌を示して惜まず。宴會に、彼の主人たるとき、則ちホテルのボーイ、コック等に向つて總花を撒く。

◉伯大隈は、逆境に處して、大名の態度を改めざるは多とすべし。彼は、廟堂に處して野骨を發揮し、在野に處して、大名の態度を發揮す。彼は、失敗すと雖も、遂に、第一流の人たるを失はず。

◉吾輩、嘗て、岩倉公の門下たりし政治家より、岩倉公の板、隈二伯の評論といふを聞きし事あり。公は曰ふ、他時、政變あらんとき、大隈は敗るゝと雖も、能

く、獨立して、其の壘を守り得べし。板垣は、恐らくは難からんと。

◉板垣、大隈は、早く、共に參議たり。今の元老諸公に比すれば、先輩たり。當時、二人者の聲望、また群を拔く。此の時に於て、岩倉公の慧眼なる。將來を洞觀して、大隈の才、能く、世と移り、世に先んずるに足ることを豫言したる也。而して大隈の性格、資質は、岩倉公と投合したるには非ず。岩倉公は、大隈よりも伊藤を好みて、之を拔きたる也。

其四

◉伯大隈は、明治の大政治家を以て目せらる。然れども明治四十五年の間、彼が、政權を得たるは、前期の三分一にして、後三十年は失敗の地位に在り。改進黨の首領としての彼は、失敗に畢りぬ。彼は、黨首の器には非る乎。彼の功業の錄す可きは、十四年の政變以前の得意時代に在り。

◉彼の智勇辯力を以て、改進黨を大ならしむる能はざりしは、政治家としての彼の弱點に本づく。然れども、彼が、今に於て、益、其の名聲を一世に維持する所以のものは、彼の智勇辯力に依らずんばあらず。

◉彼は、屢、外交の大才を以て見らる。公伊藤の全盛時に、公の對外軟といふに對比して、伯の對外硬の名、つねに一代の重きを爲す。而して伯が、外交に於ける事歷といふものは、實際には甚だ多からず。

◉伯大隈は、又た、屢、財政の大家を以て聞ゆ。伯は、井上、松方二侯の財政を批評し、其の眼識、二侯の上に出るを以て自から任ずるもの丶如し。二侯の天賦は暫らく措き、其の明治の財政を培養したる功業は、世人の知るところ也。伯には、何等、明治の財政に對して、建設的事業の見る可きものはあらざる也。然れども、伯は、遂に財政の大家たるを失はず。

◉財政の經綸無き者は大政治家に非ず。公伊藤の、明治の財政に於けるは、世人多く其の眞相を知らず、而して伯大隈は其の主義政策は暫らく措き、彼が財政を料理するの手腕は、實に、侮る可らず。

◉彼が財政の手腕を示したるは、廢藩置縣後の大難關の際に在り。廢藩置縣は萬古の大事業、而して其の眼目は財政の一點に在り。井上、澁澤辭職の後を受けて、彼が大藏事務總裁を以て、見事に、此の大難關を乘り切つたるは、彼の手腕也。論者、或は、これを以て大隈の「山を張つたる」なりと言へど、事實に於て、必ずしも「山」とばかり言ふ可らざるものあり。若し、之を「山」

なりとするも、群雄の躊躇するとき、自から此の大難關に當りて、堂々として「山」を張るは、彼に非ずんば能はず。

◉古來、東西の、財政大家といふ者は、必ずしも、建設的主義にあらずして、實に「遣り繰り」の大才に存すること少からず。此の點に於ては、明治財政の危機を繰廻はしたる妙手腕は、井上、松方に歸せずして、大隈に歸せん。

◉井上、澁澤の辭表は、財政の實情を表白して、歳出、歳入を超過し、年々、財政の危機加はると爲す。而して大隈の豫算書には、歳入の歳出より多きこと二百十四萬圓にして、年々、吾が政府は二百萬圓の純餘剩金を積立つることを得て、財政は泰山の安きに在りと爲す。前後、大藏當局者の表白にして、此の如き矛盾を公けにせるは、一時、内外人を驚かしたり。然れども、前者發表せられて、後者の發表せらるゝ無かりせば、後任者が吾が財政の危殆の狀況に在るを證認せるものにして、吾が政府の能く堪ふるところに非ず。唯だ、之を政策として見るも、大隈の樂觀的豫算書發表されずんばある可らざりし也。而して吾輩は、大隈が、突嗟に、此の豫算書を編成したるを以て、大隈たる所以なりとす。

◉實を言へば、當時の財政の眞相は、困難を極めたるに相違無し。必ずしも大隈の樂觀せる如くにはあらず。然れども亦た井上の悲觀せし如くにてもある可らず。悲觀者は、租入の米價をも、成る可く安く見積り、樂觀者は稍高く見積り、其の他、一切の逋税脫税、違算の見當を異にしたるも亦た前後豫算書の大相違を來たせし一要因たらずんばあらず。

◉萬事は措き、大隈が、此の難關を切廻して失敗の迹を殘さゞりしは、彼の手際なり。彼が此の時、税政を整理したるは、其の功とすべし。銀行開始は、大隈總裁の時に成り、彼の一大功業たるも、元と銀行業の組織輸入は伊藤の功に依る。井上時代の研究を經て大隈の時に實行されたるもの。唯だ、彼が、速かに之を咀嚼し、實行したるは多とせざる可らず。

◉大隈、旣に豫算書を發表するの後、租税局長陸奥宗光、歳入減少の件に就き、案を具して來年度豫算編成の指揮を仰ぐ、其の伺書。總裁の檢印無し。此の事項は、當時の財政史に在つて甚だ興味ある事に屬す。吾輩、此の事を以て伯大隈に質す。彼は、日々、陸奥と面接、以て意見を鬪はす、這般の伺書の必要あること

無し。此の如き伺書の提出さるゝ理由ある可らずといふ。吾輩は暫らく記して他日の研鑽に待たんとす。

◎伊藤は當年、金貨本位の主論者たり。銀行の創唱者たり。大藏少輔たりし事あり。大藏長官たりし事無きも、陰に、陽に、彼が吾が財政に獻策し、努力したる事は多し、大隈は、財政上の項目の、彼に由つて、創始されしものは殆んど稀なりと雖も、彼が、實地に、眼前の難關を切開きし手腕は認めざる可らず。

◎明治初年、吾が財政と外交とを惱ましたるものは、贋金問題なり。此の時に當りて、幣制改革、造幣事業の開始等の根本事業は、前後伊藤井上の功勞に屬す。然れども此の問題の難局に當り、外國公使領事と、巧みに折衝して、瓢箪鯰に日を送り、吾が財政をして、陣形を整頓するの猶豫を得しめたるは大隈ならずんばあらず。

◎大隈は、つねに外交と財政とに跨りて、重きを爲せり。難物は外交より甚だしきは無く、西郷、大久保等の諸豪傑と雖も。持て餘したるは外交なり。彼は、外交の手腕を認められしより、つねに外交に據りて内を制し、著々として地歩を占めたり。是れ、彼が發達の眞相なり。

◎大隈が維新前、勤王の名士に非ずして、維新後、頓に頭角を拔ける逕路は此の如し。伊藤も亦た内外に跨りて進みしとは雖も、當時に在つては、大隈は、伊藤よりも先輩たり。一面には、薩長には先進多く、伊藤は未だ急に代表者となるを得ざりし事情もあり。

其五

◎伯大隈は、曾て、三傑を評して、西郷は、大英雄大豪傑に非ずと爲し、木戸を揚げて明治の立憲政治家なりとせり。彼の意は大久保を抑へて木戸を揚ぐ。

◎大隈も伊藤も皆、木戸に認められて勢力と爲れり。木戸は進歩主義の人にして、立憲政治の思想に富み、明治憲政の今日ある、彼、其の素地を爲さゞるは莫し。且つ其の人、快濶にして、襟度あり、氣韻あり、忠誠一圖の人物にして、善と認むれば、何人たるを問はず、身を以て之を推薦す。三傑の中にても、新智識に富めるは、彼なれば財政、外交の事務の如きは、自から彼の擔任に歸するを致す。

◎木戸、大久保の擧用せし人物を見れば、二者の色彩を知るべし。新人物は多く木戸の手に依つて揚げられ、而して大久保の重用せし人には、思想。智識に缺けたるも、蠻勇にして、意地張りの強き人多し、大久保は

實に意地强き人也。彼は天下の重に任じて、毅然として撓まざるところに性命あり。

●木戸は三條公に親しみ、大久保は岩倉公と善し。維新後の木戸は、漸次、健康を害し、内閣の顧問たるに適し、大久保專ら政局の正面に立つの順序となれり。征韓論破裂の際に三條公は憂慮の餘、甚だしく腦を害し、爾來、未だ當年の才幹を見ず。支那人の所謂陰陽を調理するの太宰相は依然として三條公の德にありて政權は、多く岩倉、大久保の手に歸す。

●吾輩、大久保の岩倉公に奉れる一束を見たる事あり。其の要にいはく、昨日、廟議一決せし事を、今朝、伊藤、井上兩人參邸して議論したる結果、公は前議を飜へせりと聞く、今後は、伊藤、井上、如何の論議を爲すとも、必らず廟議決定の次第を以て御諭し下さるべく、斷じて御變更ある可らずと。而して彼は曰く、『此の如く御グラッキ被遊候而は』天下の政務は進行せずと。

●當時、豪傑多しといふとも、岩倉公に向つて、敢てグラッキを攻め得る者は、他に在るべしとも思はれず。而して些もグラックこと無く、斷々として確定議を固守して、敢進する大政治家は、甲東先生の眞面目を推す可きなり。

●地租改正局の議起りしとき、飽くまで威重ありて、舊藩の苦情を排して、遂行するを得る一大人物を首領とすべきに決し、大久保乃ち其の選に當る。識見と品格は松菊を推し、堅忍と精力とは甲東を推す。此の二先生は、明治史の二大頭目ならずんばならず。

●大久保は思想の人に非ず、遂行の才也。彼は寡言にして勇氣あり。彼の人格は、一言以て蔽へば沈毅の二字なり。前後、百千の政治家ありと雖も、一人の善く彼の面目に似たる者をも見ず。

●明治の政海を以て言へば、木戸は「水先き」にして、大久保は、梶取也。梶取りは固く執つて、些もグラックを許さず、此の偉大なる梶取りより見れば、大隈の如きは、或は事務長たるやも知る可らず。事務長は必要の重職なり。然れども大久保の如き、彼岸に達するを專途とする眼には、事務長は船の生命にあらず。彼は、木戸、伊藤を、按針者と見做して、之と謀るを以て足れりとし、岩倉を船長と仰げるならん。

●吾輩、嘗て子渡邊國武に問ふ、明治年間尤も面白ろき人は誰ぞや、彼答ふ、面白の意義如何を知らず、然れども吾輩の知るところを以てすれば、甲東、尤も面

白味ありと。又た深刻の評論たるを失はず。這般の面白味の意義よりすれば伯大隈は、面白味多からず、彼は多く考へ、多く語り、趣味廣く、機軸百出し、言はば、内に包まずして、舘は悉く外に塗られて在り。

其六

◉維新の際の長崎は、維新史の、尤も趣味饒き一節たらずんばあらず。就中、伯大隈の事、傳ふ可きものあり。

◉將軍慶喜、政權奉還の報傳はるや、長崎在留の諸藩學生等、長崎奉行の消滅を主張し、奉行に迫りて事務引渡を強求す。奉行は素早く、汽船に搭して遁れ、學生等、奉行廳に據りて、假りに市政を布く。蓋し國政の一日も荒廢す可らざるを以てなり。彼等は佐々木高行を推して長官とし、大隈は外國事務を管掌す。彼が、外交の衝に當りしは、早く維新政府の成立以前に在りし也。而して長崎假政廳は、井上が九州總督澤宣嘉卿の參謀長として來著せしとき、其の手に引繼がれたる也。

◉當時、外國人、殊に佛國領事、貿易上の一難問を提起し、大隈の白面書生たるを侮り、威丈け高に迫り來る。曰く、此の要請にして拒絶せられんか、砲火あるのみ。本國政府に打電し、速かに軍艦を送り來らしめんと。明治維新、外國人の高壓の態度、此の如きものあり、而して舊幕吏は、つねに此の手段に依つて苦しめられし也。大隈は、則ち冷然としていふ、貴國の隨意に任かす。吾輩は正義に依つて一歩も枉ぐる能はず。

◉那翁三世の全盛時と雖も、領事の一電に依つて戰端を開く可らざるは明らか也。剩さへ、大隈は、早く國際法の一班を解したる也。他日、彼、外務大臣となり、領事も尚ほ吾國に在り。邂逅するや、大隈は、揶揄していふ「當時、君は中々、大きな法螺を吹いたネ」

◉大隈は、朝廷に召されて、參與、外國官判事となる。次いで長崎に浦上村の切支丹信者處分問題起り、引いて國際關係を起し、殊に維新草創の際、吾が政府の一大厄事たり。木戸は爲に、長崎にも往來し、薩の小松帶刀は外國官の主腦たり。此の問題に、大隈は、木戸と小松に識られたる也。

◉維新の三月廿九日、吾が政府は、此の問題に關し、列國公使と、大阪に、談判を開く。會場は淀屋橋西本願寺別院の御堂、玄關には紫縮緬に菊花紋章を染め拔きたる幔幕を張り、水を撒き、砂を盛り、設備甚だ清潔。而して書院の床の間には、狩野家の書の雙幅を懸

け、花を活け、坐敷の中央に大卓を据ゑ、之を圍みて、曲祿及び床几を排置す。時、到り、合圖の太皷に、內外の委員、幕を排して入り來る。維新最初の晴れの外交談判場の光景は實に此の如し。

◉外國使臣は、英國のパークスを上席として著坐す。暫らくして、外國官總裁山階宮晃親王著坐せらる。鐵漿、黑々と頭は大茶筌にて、緞子の羽織に仙臺平の御袴なり、小松、木戶、後藤象次郞、丸山作樂、大隈等羽織袴にて續々、入り來る。東西の禮裝、互に異彩を以て映發す。試みに追想すれば、百年來の事とも思はれず。

◉英公使パークスは、通辯方シイボルトを隨いて、中央の大卓に凭る。彼に向つて折衝の坐に附けるは大隈也。パークスの威嚇も功を奏せず、此の日の談判は、討論會の如くにして終る。能くパークスに對抗し得たるは、新進力士の横綱を投げたらんが如し。白面の大隈、之に依つて、外交の天才の名、一朝にして轟く。小松は薩の先輩、大隈と面識あるに過ぎず。而して彼の病死するとき、大隈を薦めて外交の當局たらしむ。

◉パークスは、背後に英國を負ふの外、また一個の豪傑たるを失はず。性急にして剛岸、且つ識見あり、機略あり、日本に對するの同情も亦た深し、之を以て、吾が外交と財政とに、極端に干渉を試み、威しつ、賺しつ、吾が政府を指導し、啓發の途に急がしめんとす。吾が政府の爲には、彼は極めて六ヶしき。因業なる舅姑の感無くんばあらざりき。所謂、地震、雷鳴、火事、親爺の外の一大難物也、彼の一喝は、舊幕吏を震駭せしめき。大隈は、若輩にして能く彼の鼻柱を挫く。此の痛快事あるに依て、外國使臣の間にも、新朝廷の外交官の、侮り易からざるものあるを感ぜしむ。滿廷の大隈に喝采したる所以たらずんばあらず。

其七

◉大隈と三大政治家とは、不思議にも、刺客の難に逢へり。岩倉、大久保は、內政問題に依つて、伊藤、大隈は外交干係に依つて。而して、伊藤は薨じ、大隈は一脚を失ふ。吾輩は大隈が隻脚伯となるの後も、依然、舊態を存して野骨を發揮し、吹き捲くらずんば死すとも休まざるの慨あるを多とす。

◉大久保の最期は崇高なり、毅然たる大丈夫と謂ふべし。此の時、先づ變を聞きて、駈け付けたるは、今の伯香川にして、續いて急に赴き、萬事を處理したりは小西鄕也。伊藤の最期は燦爛たり。古今英雄、彼の如

き好死處を得たるはあらず。而して之に依つて伊藤が、かねて遭難の覺悟ありし事も世間に知られて、蒼梧の論をして、一層、高からしむ。

◉岩倉公は喰違阪遭難の時、平生の沈勇を現はしゝも、其の後は、稍、謹愼の態度を執り、當年豪宕の風減じて、微行など爲さゞるに到れりと聞く。

◉岩倉公は、大隈の如く、全く書かざる人には非ず。然れども、公は筆を執ること稀に、公の書といふものは秘書の手に成るもの多し。岩倉具行。原保太郎、古澤滋の三人は、公の秘書にして、維新來、公の晩年まで秘書を勤めしは山本俊一也。公は、三人の秘書を侍せしめ、一時に三個の書束を作らしむるに、主意、文言、ともに公之を口授す。理路明斷、三種の文意、口を衝いて流るゝ如し。

◉明治初年、岩倉公の東京に移るの後ち、公は羣雄を駕御する爲には、非常の苦心を爲せり。秘密の相談の爲に、屢、大臣參議の邸に密行し、或は、深夜に、突然、一二の武士を隨へて木戸、大久保などの邸に微行す。歸途、丸の内を過ぐるに、月、中天に在り、人影、地に布く、公は、羽織袴に、大小を落し差しに爲し、後ろ姿、如何にも賴もしき英雄らしし。舊公卿の中よ

り、此の如き、鷙悍の人物を生じたること不思議といふべし。(完結)

人物評論（三十）

松井須磨子と柴田環



松井すま子　柴田環

△須磨子孃と環女史の前途

中村生

藝術家を批判の目標とするにザッと二つの場合がある、その一つは、彼の藝術が漸く批評界乃至社會公衆の眼前に、注意を惹くに足る丈の姿と力とを示し始めて來たといふ際で、恰も新らしい朝日が、正に、水平

線上に輝いた顏を擡げかけた場合と同じ事である、今一つは、彼の藝術が一定の完成の域に達して、批評界乃至社界公衆の讃嘆景仰の一中心點となり、或意味に於て已に確實の地步を占め得たといふ際で、太陽が高く正午に昇りつめて、地上には不安な蔭影らしいものが消え失せて了つてゐる場合である、無論、この以外にも批判の機會は幾らでもあり得やうが、兎に角如上の二箇の點からの見方が最も興味の多いものと假定して置いて、さて近頃急に演藝界で人氣者となつた須磨子孃と、環女史の技藝を批判するとなると、云ふまでもなく、これは前の方の立脚地から立言すべき事で、後の方の場合として云ふべきものでないのは知れ切つた事實である、乍併「まだ評價などするには餘り早過ぎる」といふ異論者もあらうかといふ杞憂から、ワザ〳〵これ丈の事を斷つて置くのである。

須磨子孃の稽古ぶりは自分も可也善く見て知つてゐるつもりだが、常に協會の指導者に從順で、忠實で、それで自分の研究や工夫といふ事も決して疎かにしない、隙さへあれば、獨自で臺辭や科を稽古し、練習する、その技藝に熱心な點は感服の外はない、一言て云へば「恐ろしい勉强家」である、アヽした態度を今後も長く續けて行つて、一歩、一歩に確實な前途を開いて行く用意を怠らなかつたら屹度、將來の演藝界の中天を飾るべき一のスターたる立派な地步を占め得る人であらうと思うてゐる。

又、須磨子孃が「女優としての天才」であるか？何うか？といふやうな事は、それは長い未來の自ら解決してくれる問題であらう、唯、現在に於て、女優としての財產は、あの高い調子も强い調子も自由に出て、そして劇場の隅にまでも透徹する力を持つた聲調である、「ノラ」や「マグダ」の情緒の緊張した方面は、この長所が利用されて巧みに表現された、乍併、優味のある、情の濃い、母だとか、情人だとかいふ、シンミリした氣分の作つた臺辭を遺憾なく表現するといふ工夫は今後に殘されてゐる技藝の分野であらう。

それから又、須磨子孃の眼も、舞臺に立つと不思儀に引立つて來る表情力を備へてゐる、顏面も相當に變化する丈の餘裕を持つてゐる、此等も亦女優としての財產の中に數へ得るものである。

今の處、須磨子孃の「ノラ」や「マグダ」を、外國の名ある女優の演技に比較して、彼是云々せんとするのは無論プロポーションを失した事である、乍併、現在の日本の演劇界に「女優らしい女優」が始めて出たといふ事丈は、最も公平な態度で言明し得られるやうに自分は信じてゐる、而して將來「日本一の女優」に成り得る資格を備へた人といふ期俟を以て、この現今の「日本に於ける最初のActress」の前途を注視したいと思つてゐる。

唯、その前途には、日本の今後の新らしい演劇が擔つてゐると同等の重荷が課せられるべきものだといふ事丈は豫期してかゝらねばならぬ、外國人の服裝と外國人の表情や動作を學んでゐる目下の飜譯劇は到底、一の止を得ざる過程である、日本人の服裝で、日本人の表情や動作を舞臺上に藝術化し得る技術如何が、將來の我國のActressの眞價値を決定すべき唯一の標準である、其處に天才の閃光が發し、獨創の工夫が生ずる

機會に遭遇する、この意味に於て、須磨子孃は、何處迄も油斷せず、休憩せず、常に「恐ろしい勉強家」の心掛を忘れないで、批評家乃至社會公衆の多大なる期俟に對し他日充分の滿足を與へて貰ひ度いものである。

それから環女史がオペラの歌優（シンガー）としての現今の地位は、須磨子孃が女優としての地位と略々相匹敵するものであらう、少くとも人氣の點に於て然らであらう、乍併オペラ方面の事は、音樂上の特別な修養のある人でなくては、正當な批評が出來ないものであるから、玆では、唯、自分の趣味（テースト）の上から思ひ附いた事丈を云つて置くに止むるの外はない。

自分が見聞した西洋のオペラ歌優（シンガー）、殊にプリ、マドンナと、環女史とを比較して考へて見ると、無論、これもプロポーションを失した事ではあるが、第一に體格の大小强弱の差異がある、從て音量の上に懸隔がある、プリマドンナの唇頭から慄え出て、高潮に達した際のメロデキーには、全劇場の群衆の心理を唯一つの恍惚たる精神の流れに熔解せしむる、可也長い瞬間（モーメント）がつゞくが、環女史のは、かゝる瞬間（モーメント）を感ぜしむる事が至つて少い、併し聲調そのものは、日本の唱歌者としては慥かに優れたもので、容易に得難いものであらうとは思つてゐる。

殊に、西洋のオペラの、あの莊嚴な、大規模なオケストラと、日本の現今の、止むを得ざる貧弱なオケストラと、この懸隔も環女史の技倆を引立たす事の出來ない一つの動目となつてゐるのであらう、それから今の處、日本出來のオペラの詞章（リブレトー）も曲譜も、いろんな事情から制限されて、嚴密に云へばパレットから脫化しかけたといふ程度に止まつてゐて、例へばワグナーとかモツアルトとか、ストラウスとかといふ大（グランド）オペラと比較すべき性質のものではないのだから、所謂日本のオペラ問題が此から解決すべき長い未來を持つてゐると同樣に、オペラの歌優（シンガー）としての環女史も、今後にこそ、重大なる責任を擔つてゐるのだと思ふ、切に自己を抑制して、不斷の努力をなして貰い度いものである。

要するに、繰返すやうであるが、須磨子孃も、環女史も、共に花やかな現在を持つてゐるが、寧ろ未來の人、將來の人として考へて見度い、又然うする事が至當な批判の態度であらうと自分は思ふ。

△柴田環と松井須磨子

白鳥

まだ女優の出なかつた時分、柴田環といふ人は、一部の學生間の渴仰のまととなつてゐた。私が本鄕の下宿屋にゐた頃は大學や高等學校の生徒の口から激賞されてゐるのを聞いた。私も時々音樂學校の演奏會を傍聽してゐたが、矢張この人のみが頭に殘つてゐる。

演奏臺に上る時は妙に品をつくつて、如何にも自分が衆目を集めてゐることを意識してゐるらしい風だつた。一度日本樂の演奏會のあつた時女史が私の近くに腰掛けて聽いてゐたので、初めて平生の容貌や聲に接したが、その時は朋輩に向つて浮付いた聲でよく喋舌つてゐた。そして朋輩の誰れよりも、わざとらしい表情をしたがるのに私は目を留めてゐ

た、只さへ虚榮心の强かるべき女が、周圍に稱贊され煽動されてゐるのを見て、この先どうなるだらうと思つてゐると、間もなく普通の結婚をしたと聞いた。矢張日本の女だ、このまゝ落着くのかと、少し物足らぬ氣がしたが、すると、暫く立つて離緣問題の騷ぎが新聞に出た。興味ある事件として注目しながら、こんな女を女房に持つ男の不幸を考へてゐたか、その新聞記者に對して辯解してゐる記事を讀むと、矢張愚痴と虚飾が見え透くやうだつた。そして、夫たる人がもつと手嚴しい人だつたら壓服することも出來、一つの悲劇があつたらうが夫は柔しい物分りのいゝ人だつたらしい。「心の腐つた女に未練はない」と容易に解決をつける日本風の男だつたらしい。しかしそのため女史が華々しい社會へ入つて活動するやうなつたのは、大きく云へば藝壇のために祝福すべく、私達もあの美しい聲の聞かれるのを喜んでゐる。私は西洋音樂はよく分らないが、女史の聲は呂昇の聲と共に、女藝術家の中で最も豐かな天分を持つてゐると思ふ。今の間に、この美しい聲を充分に利用し得るオペラでも何でも製作する作者の現はれんことを切望してゐる。事實か虚言だか、この人の私生活に對していろ／＼の噂を耳にするたびに、どの女藝人でも免かれがたい運命を痛ましく思ふ。

須磨子女史については、オフエリアの拙かつたこととマグダの味かつたことを思ふ。數へられただけではあれだけの藝は出來まい。天分がすぐれてゐるのだらう。將來何處まで發展するか知らないが、今の女優劇でマグダ位の藝を見たことがないから、一流の女優として褒めて差支えないだらう。しかしあまり褒められ過ぎたゝめに、この次の役が却つて演じ難からうし、藝人に免かれがたい嫉妬的反感を受けるだらうが、それを自分の鞭として技藝の進歩を計らんことを望む。

△須磨子孃と環夫人

松居松葉

私は他に自分の事を議せらるゝ事が嫌ひであると同時に、他人の評をするのも嫌ひです。况して松井須磨子孃や柴田環夫人に對しての如く、人物評などをする程の材料をもつて居ぬ場合には、尙更出來る事ではありません。

成程此兩婦人と共に、同じ目的の下に一つ仕事に立さわつた事はあります。したがつて不遠慮に話し合ふ機會はありましたけれど、一體私は女に對しては、どうしても弱者扱ひがしたい、丁寧に待遇する場合でも、可哀さうだからと思つてやるので、彼等とつきあふには、何時でも男子に對する時よりは隔てが多い。隨つて彼等と相知る事は甚だ少ない。

たゞ兩人とも非常な努力家、勉强家である事は相等しい。而して兩人とも物覺えがよくて、覺えたと來たら决して忘れぬ。兩人とも立派な藝術家たるの素質をもつて居る。

私が愚作「蝴蝶の舞」には、環夫人が舞臺に立つ第一の口火であつた。が、あの時は環夫人が天成の美聲だけ出してくれゝばよいのであつたから、

左様干渉はしなかつた。が、今度の『釋迦』は、彼等にとつては背水の陣であつたものであるから、自分も大分世話を焼いた。毎日ではないが、四月から五月にかけて、環女史と相談し合つた日が中々多かつた。而して其度毎に私は夫人の唱ひかたについて批評をするばかりでなく、他の人々の節についても、此人に唱つてもらつては種々批評した。で、夫人は私が首肯しない中は何度でもうたひかへる。素人の私の注文だから、随分無理があつたに相違ないが、それでも悪い顔をせずに、いくらでも直す。而して舞臺の事について相談があると、わたしの店へどんどんやつて來て、大勢居るところでも何でも構はずに話をはじめる。其努力、其勉强、其熱心、實に感服の外はありません。

須磨子孃は孃がまだ、文藝協會の研究生であつた時代に、一つ二つわたしの飜案劇の稽古をした位の事で、久しく一緒に研究をする機會はありませんでしたが、併し其時代から此人の熱心家努力家なる事は見えて居ました。或時なぞは實演の稽古の役割の事で、わざ／＼わたしの勤め先の三越までやつて來た事がありました。そんな風にたゞ稽古の役でも非常に氣を入れてやつて居たものでした。

今度文藝協會で『運命の人』を演すについて、私が舞臺監督の名を冒す事になつて、毎日稽古を見て居りましたが、熱心、努力、勉强の度は、前に比して更に盛んになつて居りました。臺詞を覺える事の早さ、それに間違のない事は、私の知つてる限りに於いて、素人にもせよ黒人にもせよ、河合武雄君を除いては外に比肩すべき人は無いと思ひます。あの長い、多い臺詞を、初めの稽古の日からすら／＼とやつてのける。たまに間違つても、今日は一言間違ひました。二言間違ひましたといふ位に極少ない。それから要所々々について、こゝは如斯してもらひたいと註文を出すと直ぐなをす。而して翌日になつてもう二度と直す必要は無い。それに稽古は彼に取つては一種の快樂であるかの如く、今日はこゝで止めて置きますといふと、いかにも失望したらしい色を見せる。もう世間からはあの位ちやほやされて居るのですから、大きな顔をしさうなものですが、「今夜自宅へ來て下さい、まだ直したい所がある」といふと、大喜びでやつて來る。夜おそくまで大きな聲で研究する。それあ非常に努力です。これについて大笑ひな話があります。或晩須磨子孃と、少尉になる加藤精一氏とが、わたしの家へやつて來て、しきりに大きな聲で稽古をして居ました。私の宅は大分近隣が離れて居るのですが、併しだんだん夜はふける、聲は高いといふので、それが近所へ漏たらしい。近所では私が家内と大喧嘩をして居るのだと思つて、夜ふけの事なり大事にでもなつては大變と、いづれも非常に心配してくれたさうでした。須磨子孃の稽古はそれほど熱心なものなのです。

兎に角兩人とも藝に對して熱心といふよりは、藝そのものを絶愛して、その爲めには何人の前にも跪くを恥ぢとしないほど謙遜になるといふ事だけはたしかに、共通して居ると思ひます。

併し二人の日常生活は非常に違つて居るらしい樣です、環夫人は扮裝道樂の人で、其扮裝は絢爛を極めて居りますが、須磨子孃は氣の毒なほ

ど姿に構ひません。洗ひさらした紺飛白の單衣に、十年も前に流行つたオリーブ色に紅のはいつた友禪モスの幅の狹い帶をしめて、平氣で私演を見物の群集の中へ入つて居る。勿論之は前者は收入も多く、幼少から其樣いふ境遇に育つた爲もありませう。後者は目下の境遇がそれを許さないのと、田舍武士の家庭で育つたといふとですから、さういふ嗜味が鈍いためもありませうが、兎に角妙齡の娘ではあり、殊にいはゆる派手職業(しやうばい)を選む傾向のある人としては、境遇の如何にかゝはらず、おしやれをしたいのは當り前と思はれますが、須磨子孃がその弊に陷らないのは、餘程えらい意思をもつて居て、おのれを制して居るのではあるまいかと思はれます。私はたゞ舞臺及びその周圍に於てのみ、此二婦人と相知つて居るのですから、彼等の人格については何も知りませんが、たゞ何といふ事なしに、私は二人の上に、英の女優エレン、テリー孃と、佛の女優サラ、ベルナル夫人とを思ひ出します。環夫人の藝術以外には、馬鹿に若々しいところが、英國劇壇の明星を思ひ起さしめ、須磨子孃の嚴重に身を守り、意思の力で何事もやつてのけやうとする處は、はじめて女優となつた頃の佛の明星を思ひ出させます。聞けば環夫人は遠州の生れとやら、その磊の落々として大洋の如きは、其故山の風色に負ふ所があるのかも知れぬ。須磨子女史の藝風の峻峭なるは、その故山の信州の俤を見せて居るのかも知れぬ。

二つの名花

小劍

松井須磨子の藝術は秀でてゐるに違ひない、尠くとも益田などいふ人の拵へる愚劣極まる自稱喜劇に弄るやうな非藝術的の女優たちとは選を異にしてはゐるが、併しまだ舞臺に立つてから五年とは經たぬ一少女をば、日本一の女優と稱揚せねばならぬ此の國の藝術壇の哀はれさを、私は先づ切實に感じます。

私は須磨子の舞臺を餘り多く觀てゐない。ノラとマグダと、それから私演の『運命の人』の怪しき貴婦人と、これだけ觀たのだが、彼女の代表的技藝は今のところまアこれで盡きてゐると思ふから、彼女のよいところも物足らぬところも大抵は觀たつもりだ。全體日本の批評壇といふものは甚だ無責任なもので、何かの機會で一人が賞め出すと、皆んなが立つて一時にワッと騷ぎ立てる、胴あげにするやうにして高いところへ擔ぎあげるが、少しくそれに倦いて來ると、一人去り二人去り、擔ぎ手は段々少くなつて、遂には高いところから一時に谷底へ拋り出して了ふやうなことをして顧みない。されば此の擔ぎあげられるといふことは、若い藝術家などに取つては極めて危險なことで、寧ろ一時に花々しい人氣は無くとも、毎日〳〵コツ〳〵と、一尺二尺づゝ自家の領土を拓いて行くやうなやり方の人が、ジミで安全で、永久的生命があるやうに思はれることもある。

須磨子の現在の境遇、名聲は、其の技藝の眞の價値から來てゐるので、敢へて擔ぎあげられてゐるのではあるまいが、何事に依らず自家廣告が成功し、技藝よりも、運動とか策略とかに依つて名を成すに容易なる此の國の總べての社會では、一時の人氣といふものは、宛にタバコの烟りの如きものである。須磨子が今の人氣を揚げたのは、早稻田と言ひ、文藝協會といふ大なる、見事な背景があつてのことであるから、もとより煙りのやうな浮薄な名聲ではあるまいけれど、併し幾分の注意をこの點に拂つておかないと、悔ゆるやうなことがあるかも知れないと、餘計なことながら、一寸言つてみる。また或る人々の間には、須磨子の藝が餘り巧み過ぎて今や漸く素人の域から出て、眞の名優にならうか、惡達者の臭い藝にならうか、といふ危ない分岐點に立つてゐるといふ評もあるさうである、そんな見巧者的なことは、劇壇の門外漢たる私には分らんが、兎に角注意すべき評語のやうにも思ふ。

柴田環氏に至つては、私は何んとも言ふことは出來ぬ。前のことは別として、帝國劇場に入つてからの環氏に就いては、たゞ衆に勝ぐれて聲の美しい、また衆に比して身長の低い、一個の歌ひ手としてより外、私の眼に映つたことはない。あの劇場の歌劇部といふものが將來如何に成り行くものやら、それも私には分らないが、併し環氏がザルコリイ氏と共に現はれて歌つた時など、私はまだ其の面白さを忘れ得ない。

因に言つておくが、日本では今、女優に對して『品行〳〵』と品行の押し賣りをすることが流行するやうで、女優をば教育者か宗教家なぞと同じく、品行を土臺にしなければならぬやうに思つてゐる人もあるらしく、それが爲め新聞紙なぞも、女優の一寸した素行(ウソかホントウか知らぬが)を捉へて大なる事件のやうに扱ふけれど、女優の如き社會の共有物といふやうなものをば、一般家庭の範の中に嵌つてゐる、女性と同じやうな規則の下に縛らうとするのは無理である、況んやこれに律僧の如き素行を求むるに於てをやだ、西洋でも女優の素行などは餘り事々しく詮議立てをせぬことになつてゐるやうである。現に名聲が全歐洲に鳴り響いて到る處プレンセスのやうな待遇を受けてゐるマグダの如きも、『私の關係したのはフオン、ケラー一人ではありません』といふセリフを使つてゐるではないか。素行を彼れ是れ言ふならばモツと外の社會に澤山ある、女優だけが品行の問屋のやうに言はれるのは可笑しい、尤も品行といふことも、人類の絶滅を豫期した絶對禁慾主義まで行けば一寸面白いが如何なシユワルツエも其處までは頑固でないらしい。

△ソプラノ・リヽコに適した柴田夫人

有島壬生馬

……別に心から言ひたい事は現今のオペラに對しても、其の樂人に對しても持つて居りません。第一日本にオペラが創められたとも思ひませんし、創められ相な精神的要求が起つて來たとも思ひません。尤もそう

云ふ機運がないでもありますまいが、それは却つて目下オペラ〴〵と騒がれつゝある中心より餘程變つた方面にあるだらうと思ひます。

柴田夫人とは或る食卓でお近づきになつた御縁もあり、去年カヴレリーア・ルスチカーナが帝劇で登場された際背景のスケッチを作つて與へた御縁もあり、シチリアの服装に就いてお話をした御縁もあり、旁々夫人の爲め一言をも費さないのは失禮かと思つて責をふさぐ丈けの事を申します。尤も遠慮のない公平な事を言ひます。夫れが私の夫人に對して執るべき最上の敬意であらうと考へるからです。

勿論夫人は今日比類のない立役（プリーマ・ドンナ）です。夫れは他に代るべき人がないからと云ふ貧弱な理由でなく、天賦なり才能なり態度なりが今日の聲價を齎したのは適當な報酬でしよう。十年も前に初めて「オルフオイス」が上野で公演された時、既に隆々たる名聲を博された事を回顧すれば思央に過ぎるものがあります。然し同時にオペラ・ゼンゲリンで御座ると云ふには未だ餘り少い經驗を持つて居られる。最近に登場唱歌された「胡蝶の舞」「カヴレリーア・ルスチカーナ」「熊野」「釋迦」等は皆な一小試曲若しくは一小部分に過ぎないので、堂々とオペラとかオペラ・コミックなどゝ云ふ名を冠らせる程價値あるものではありますまい。歐洲でプリーマ・ドンナと推稱される程のオペラの女優は少くも二三十のオペラの歌句と歌曲位は暗じて居る人達です、夫れも大きな名人の作つた大きな歌劇で、中々普通の者はその一つさへ本當には困難なものだ相です。

昨晩「釋迦」といふのを見に行つて來ました。恐らく今日までの第一の出來榮でしよう。樂人が次第に物馴れて來た結果であらうと嬉しく思ひました。夫人も樂々と美しく唄つて居られた。先づ幸福な成功と云はねばならない。然し今度のにしろ、「熊野」にしろ、去年サルコーリ氏と出逢つた「カヴレリーア・ルスチカーナ」の時に比べると藝術的の氣分は餘程低い感が起りました。一つは曲にもよるでしようが夫人の目標とする處が降つたからではないでしようか。あの時は脇で見てさへ息苦しい程夫人は悶き努力して雷鳴の樣なテノーレに敗けまい敗けまいとした苦心が一符一律をして緊張した藝術たらしめたのでしたろう、聲も昨夜などは餘程低く、小さかつた樣に思はれて居ます、私は之を試に十人の人に尋ねて見て私の不正確な耳の保證とする事が出來ました。鷄口となるとも牛尾となる勿れといふ格言もありましようが、サルコーリといふ樣な他山の石が目前にころがつて居るのに、日本のテルラチーニとなる名譽の好機會を徒らに逸し去るのは夫人の爲め、本邦歌劇の爲め、千歳の遺憾とでも云ふのでしようか。

「釋迦」の曲符が餘り〇〇〇の〇〇〇〇〇〇に酷似して居るといふ穿ちは門外漢たる吾々の容喙する限でありますまいが、「熊野」のリブレットが取材に於て失敗であつたとすれば、「釋迦」は折角の題材を形式の發展に於て全く誤つたと云ひたい、作者の帝劇的獨創には敬伏せざるを得ない。以上二者單に試作として樂人の練習にはいゝでしようが決して生命のある作でないのは當然である。原來歐洲で云ふオペラは日本の能樂と同樣で、名作は名作として中々動かす事の出來ない、又しないものであ

る「ホースト」であるとか「ローヘングリン」であるとか「カルメン」であるとか「リゴレツト」であるとか云ふものは至る處で、何十回何百回繰返されるか分らない。見物人も能や長唄や淨瑠璃の樣に、旋律から歌謠までよく飲込んだ上で演奏を翫味して悦ぶのである。夫れを帝劇の樣に興行毎に新作を製造し樣とする興行者の大膽無法、歌謠旋律甚しきは大體の筋も知らずに行つてオペラとは譯の分らぬもの、御經の樣なものと罪を卸つてオペラに着せて終ふ見物の沒識と無茶には唯だ驚くより外ない：：例令ば隅田川や勸進帳や野崎村に比敵すべきものを、毎月々々製造しろ、而して臺灣の蠻人に聞かせた時直ぐ分る樣にして呉れと注文するに等しい、とても相談にならない話である：：愚見では日本に眞面目にオペラを移そうと思ふならば、クラシックとなつて聲價の定まつた歌劇の中、適當なものを撰んでそのまゝ演奏するのが急務で且つ最上の方法である。勿論それは今迄の樣に手輕くは行くまい、從つて利益もあるまいから政府から適當の補助を仰いだらよいであろう。巴黎のオペラですら一興行に數萬フランの補助がなければ成立しない事を考へて見ても、オペラがいかに貴族的な藝術であるかが分る。基礎も何んにもない現今の日本に新らしい歌劇を作ろうなどと云ふのは、夢想狂患者の希望に等しい。假りに「ダンゴペール」と云ふ能樂や、「クレオパトラ」といふ長唄の新作が巴里や伯林で公演されると聞いたら、聞いた丈けで其不可能を悟る事が出來よう。但しオペラの何者たるかを正解し得ない以上今にも眞正なオペラが日本にも創作されるといふ希望を捨て得ないのである。何んたる愚ぞ。

然らば假りに今後本當のオペラが次第に演奏される樣になつて來るとしたらば、柴田夫人にはどんなものが適當であろうか、と云ふ問題になる。夫人はソプラノ唄ひである。ソプラノと一口に云ふうちにもソプラノ・リヽコとソプラノ・ドラマチコとソプラノ・ブッホと分けて考へる事が出來る。一人で三者を兼れ得る人もある、又そのうち一つを撰ぶ人もある。夫人の如きはソプラノ・リヽコに適した咽喉と音聲と感情を持つた人で、今後此方面に發展して行かれるのが成功の順路であろう。「ホースト」のマルゲリツト、「ボエム」のミミイ、「フラデイヤボロ」のゼルリーナ、「マダム・バツタフライ」のお蝶さん、マスネの「マノン」、「カルメン」の中のミカエラと云つた樣な役がはまるであろう。夫等の目的で一つの歌劇研究の團隊でも組織して、藝術的、學問的に徐々に進んで行かれるならば幸福な結果が得られ、或る獨逸の音樂狂が評して、日本國民が夫人の爲め銅像を建設するに至るだろう、と云つた事も單に一場の空談で終らないかもしれない。

夫人が熊野に扮せられた時。熊野たるものが金切聲を張り上げ、首を待ち上げ、口を開いて、唱歌したのがお可笑しいと評した連中が澤山あつた。勿論捕はれ切つた愚論として、その井蛙的見識を嘲笑してやればいゝ、別に辯白する程の價値さへない。又振(チエスト)が下手であるとか可笑しいとか云つたものも少くなかつたが、之もオペラの性質を誤解した評語に過ぎない。原來オペラは唱歌が主である、一も唱歌であり、二も唱歌で

あり、三も唱歌である。オペラの表情は悉く音樂的であれば足りる。表情の說明に振を亂用することがあれば寧ろ恥辱である。この點もよく能に似て居る。尤も立つ時の姿勢、進退の速度、舞臺に占むべき位置等には緊嚴な撰擇が必要であろう。唯だオペラを舞踏と心得て居る連中が少くない樣だから一言するので若し大概のオペラの中に多く「バレツト」と稱する舞踏專門の一齣があつて。立役たるソプラノ若しくはアルトが其場合、席に退いて靜かに傍觀する有樣を見るならば、オペラがトラヂエデイやコメデイと異つた點を明かにする事が出來ましよう。然し芝居にしろ名優と云はれる人々のする處を見るに、所作は簡單に銓じ詰められて居てデイクシヨンとかエロクエンスとかに重きが置かれて居る。松井夫人の藝などを見てもエロクエンスといふ事は困難であり、未だ本當に解決がついて居まいと思はれます。

次に舞臺上の化粧法についてはどうも夫人に讃辭を呈しかねる。今日まで多くの場合失敗に終つたと殘念ながら評せねばなるまい。樂屋で夫人が鏡の前に立たれた時美しくエレガンなものが又舞臺で同樣の結果を生むものではないでしよう。

音羽かれ子孃のロラの化粧はサンツウツアより遙かに優れた印象を公衆に與へ得た。耶子多羅も惡い趣味の着付けである。

最後に夫人の唱歌を短評するとを許されるならば二三のノーテ・アツクーテイを覇持するに困難は是非ないとしても、發音の質も美しく、音量も邦人としては豊かである、發聲旋律の法も研究が積まれて近來長足の進步をされたのは事實である。唯一のプリーマ・ドンナたる夫人の自重自愛、益々勇進されんことは切望にたえない。

歐洲の藝壇では二十日の興行中十九日まで拍手喝采で歡迎されたソプラノ唄ひでも、最後の晚に唯つた一つの符を誤つてすら公衆は承知しないで、口笛を鳴し、床を蹴つて迫害を敢てする相だ。夫れに比べると夫人の目前に並ぶ數百の公衆は盲啞に等しい、然し群盲を聾盲として取扱はず藝術的の良心で導いて行くのが夫人の自覺すべき天職であらうと思ふ。したならば中心から喝采を持つて歌劇を迎ふる公衆を夫人の前に踞せしめる日が必ず來るであらう。

これはつい通俗な、雜駁な茶話の樣な事で貴紙をうづめて失敬でした、

（六、十七）

△松井すま子と柴田環

紅綠

未成品のものを今から評論することは困難である、けれども須磨子と環は世間で當今女優の權威者の如く持囃して居る、輕卒な評論界淺薄な芝居ごろづきの言ふ處元より一笑に附すべきものであるが、併し世間といふ奴は得て廣告術の巧みなものが實力以外の虛名を博することが出來る。そこは重寶なものである。

スマ子も環も西洋模倣の術に長して、又た今日の盛名（?）は模倣から

生み出したものである、私はどうしても斯う言ひたい。飜譯劇の中にも創造(オリヂナリチー)がある、洋樂の中にも創造があると言ふ論者もあらう、けれども其は純然たる創造とは言はれない。

私はノラを見、マグダを見た、脚本其ものが外人の原作で、舞臺上の凡てが外國風である、だから我れ〳〵は幕の開かない中に既に「これば外國人の劇を日本人が模倣するのだ」といふ覺悟をして居る、即ち或る特別の容赦を與へて置く、だから外國劇を見て、最もよく外人劇を模倣し得たものを「大變に巧い」と判斷して了ふのだ、處ろが我々が見て巧いと言つて其れが果して外人の眼から見て巧いと言ふだらうか、其處が疑問である、スマ子を巴里や倫敦へ連れ出して果して彼女をして日本に受けたと同じやうな賞讚を受け得るだらうか、スマ子がノラやマグダを以て外國の名優と比肩し得ないとすれば即ち彼女は和製の洋品である。日本人としては巧い、「としては」なる條件附である。條件附は「純」でない。

併し私が恁ういふのはスマ子が拙いといふのでない、私はスマ子を飽までも未成品であると言ひ度ひために此の前提を持ち出したのである、有望なるスマ子は、外人の模倣丈けで終るとしも思はれない、私はスマ子が外國人模倣劇のヒロイン丈けを演じて、日本人の創造に係る日本劇のヒロインたらざることを惜しむのだ、スマ子を保護し撫育してる、文藝協會に對しても同樣の希望がある。

日本劇に於て日本婦人として其の伎倆の卓絕を認めざる限りは私は今ま倏かにスマ子を名優—世間のいふやうに—とする事を否認する。

環に於ても爾である、オペラ其ものが今の處で日本には無いと言ても宜しい、帝劇でやつた歌劇、私はあれは歌劇の下地位に見て置きたい、當局者も無論其つもりで、多少づつ看客の耳目を〻緣して行く準備だらうと思ふ、さうすれば是は全く未成品である、我が以太利の樂人ザルコニーと共に出席した時、私から見るとザルコニーの相手として餘りに懸隔が甚しかつた、ザルコニーは歐洲では第三流と四流の間位ださうだ、すると環は歌劇の本場所では第七流第八流かも知らん、恁言て私は環を侮辱するのでない、日本人としては第一流—殆ど首腦者したるを認める、丁度、スマ子が外人に及ばないやうに、環が自分の創造力と戯曲と一致せざる中は殘念ながら名優とは言はれない。

恁ういふと日本に名優が無くなる、併し團十郎と菊五郎は名優である、それは如何いふ理由かといふに、日本人として日本の劇に於て創造力を充分に揮ひ得たからである。

歌劇の如きは作曲家と相俟たねばならぬ、非凡な天才は一人にして二者を兼ねるが其は論外だ、日本では作曲家は皆無と言ても宜からう、熊野の時、世間は均しく嘲笑を環に浴びせた、新聞記者も雜誌記者も劇通先生も樂屋の人々も。私はあの時此等の人々の無識なのに驚いた、熊野の失敗は果して環の罪であらうか、私は斷じて爾でないと言ふ、環は歌ひ手である、世間の人々は環の歌に巧みな事は既に認めて居るのだ、熊野の失敗は作曲家の罪である、看客が笑つたのも曲の不調和に惡感を

感じたからである、例令ば花見の人といふのを作曲家は花見の御客で上野や向島で團子の横喰に浮かれ歩く其れの事だと思つて居たさうである、今日の花見の人の光景を以て宗盛時代の花見の氣分に當嵌めたのだ、不調和は怪むに足らん、併しそんな不調和に氣が付かず駄曲に盲從した環が惡いといふなら其れまでの事だ、私は其れを惨酷な評と言ひたい。

歌劇は人をして夢幻的の境地にあらしむるのが目的である、此點に於て新派の芝居とは全然性質を異にして來る、夢幻的境地を作り出すには聲樂の諧調が大事である、西洋の樂器を丸呑にして日本人の頭腦に諧調を求むるは外國人が左り前に日本服を着ると同型ではなからうか、而も日本には樂器がない、歌劇も無い、曲も無い、作者もない作曲家も無い、あるものは凡て西洋の模倣ばかりである、此に於て私は歌劇役者として環の技倆を評する事の大早計なるを信ずる。

スマ子も環も、日本的でない、日本的でないものは私は評論の標準に困る。私は今の處でスマ子と村田カク子との優劣を見出すことは出來ぬ、文藝協會がスマ子に其脚本を與へて而る後スマ子の論をするのが至當だと思ふ。

私は協會の試演に於てスマ子の運命の人を見た、其時私は一種の心配に襲はれた、どうも私はノラの時に於て既に此の杞憂を抱て居たのだ。其れはあの落着のない聲の調子と、それから薄い顋—其れは動もすると皮肉な顏に見えたがる—此の二つである、此の二つあるためにノラの後段が見應がする、マグダの强さが現はれた、併し又此二つがあるためにノラの前半に少しの「色氣」もなかつた、マグダに少しの優しさが無かつた、二つの缺點が運命の人に於て、其の役柄が水も滴るやうに男に秋波を送つたり泣たり笑たり手練手管の有りつ丈を盡して所謂「色氣で持つ役」のチヤームフルな技倆を振ふべきにも拘はらず、頗る荒つぽくて乾からびて無味で、迚もナポレオンをトラカせさうにも見えなかつた、私は此の點に於て世間の人のやうにスマ子を謳歌することを當分差控へればならぬ。

女ならでは夜の明けぬ國、世間や新聞記者が餘りに輕卒だ、幵は今までのイヤな芝居を呪ふ反抗心の盲動でもあらうが、前途遙かなる劇壇の進路のために、一つや二つの小手調べを見て、見ない前から自分の心を醉はしてしまつて未だ〳〵不備の點あるのに心付かずに居るなどは眞面目な態度とは言へない。

△松井須磨子さんと柴田環さんと

岡田八千代

私はどちらのお方にも御交際はございません。從つて舞台で拜見する以外にお二人の御性格等に就いては何にも御話する事は出來ません。私にお二人の中どちらが好きかとお聞きになれば、須磨子さんであるとお答が出來やうかと思ひます。しかし、環さんは嫌ひかと言はれましてもさ

うであるとは言ひ得ないだらうと存じます。環さんは私の小學校の御友達の從姉に當つてゐる方でしたので、ずつと以前自轉車にお乘りの時分からよくお噂を伺ひもし、お寫眞なども拜見した事もございました。夫からその時分、音樂學校の音樂會の時に御聲を聞いた事もあり、環さんのお母さんは私のお友達の家に暫く同居して入らしたのでお目にかゝつた事もありました。そしてまだ環さんを拜見せぬ中はどんなお方であらうとは思つて居ましたが、まだ余り世間を知らぬ私は、女の自轉車乘りといふのに驚かされても居ましたし、また始めて拜見したお寫眞のお顔に、=ほんとのお顔にも=、何處となく曇りのかゝつて居る事や、私の承つて居たその御家庭の周圍の御事情などにも私の心は餘りに引かれませんでした。その後お嫁きになり、また御復籍なすつたり、種々して帝國劇場へ御出勤になるやうになる迄の間には、隨分お氣の毒なと思ふ事もありましたが、さういふ事よりも外に私の心の引かれましたのは、環さんがさう言ふ中にあつてもその御聲の若々しく美しく、清らかであると言ふ評判の決して消えない事でございます。それらは私共にとつて實に心強く實にお羨ましく、實に御豪いと思ふ處でございます。女はある一ッの秀でた事がありましても、大抵はお嫁に參りましたり、又ある何かの事件にぶつかつたりしますと、さうでなくても衰へたの、駄目になつたのと言はれ易いものでございますのに此方に限つて御一身上についてかれこれ言ふ方はあつても、そのお聲についてはかつて、無慘な評を聞いた事がございません、それといふのもよく〳〵其處にあの方の力があり權威があるからであらうと存じます。それ丈が誠に日本ではまれなお方のやうに存じられます。

須磨子さんについては私は何にも存じません。この方の御身の上についても何か新聞に出て居たやうに承りましたが、もう黃色新聞や週刊雜誌の無責任な記事の恐いのを知つた後でしたから、つひ詳しく拜見もいたさなかつたのでございます。一體日本では藝術界の人々に對して、第一期に於てはその人の見てくれが好いと、無暗やたらに賞めたて、第二期に來ると、急に敵にでもなつたやうに惡口を吐きちらし、第三期に入つては、もう大概の上手は藝を見せても拂ひつけぬと言ふ樣な習慣があるやうに存じますが、須磨子さんは今此第一期に居る人で、賞められます賞められます。日本一の女優のやうに賞めたてゝをります。私が須磨子さんを好きなのは、その日本一の女優であるからではありません、只なんとなく好きなのです、一寸斯う舞台で見たマグダのやうな人に一寸姉さんらしく話しかけでもされたら嬉しいだらうと言ふ丈なのです。さうかと言つて舞台以外の須磨子さんに交際を求め度いわけぢやないのです。何と言つたら好いでせうか、私は思ひますのに、私がはじめて貞奴を舞台で見た時、ほんとに好きで〳〵たまりませんでした。その後、いろんな事を聞いてから、崇拜すると言ふやうな氣はなくなりましたが、やつぱり今でも好きは好きなのです。夫と仝し心持で須磨子さんを好くのだらうと存じます。そして今迄の中どれを好いたかと言ひますと、オフイイリアでも・ノラでもマグダでもありません。余丁町の試演場で拜見し

た、「鉢かつき姫」の宰相なのでございます。まだ習ひはじめた跡の手振りを間違はぬやうに、間をはづさぬやうにと、神妙に踊つて居られた、あの宰相がいつまでも私の心に消えないでゐるのでございます。オフイーリアでもノラでもマグダでも、随分人さんはお賞めなさいます。そして今迄にあゝ言ふ役をこれ丈に演つた人はございませんさうです。まだ日本ではノラやマグダを演つた人は須磨子さん丈しかないのです。して見ればまだ／＼あれ以上に役を解してあれ以上の技藝をもつた人がゐるかも知れません。須磨子さんも「ボルクマン」のエルラや「寂しき人々」のマアルや、「タンタヂイルの死」のイグレエヌを演つて見たら、遙かに松蔦に劣つてゐるかも知れません。私は須磨子さんを日本開闢以來の女優と言ふ事は出來ても須磨子さんを日本唯一の女優であると斷言しなくてはならないと言ふ心細い事はしたくないと存じます、まだ／＼もつとほんとうに役を演ずる人が出て來ると言ふ未來を持ち度いと存じます。しかも夫が須磨子さんであつても好いのです、さうなればなほ嬉しいのです。須磨子さんにした處が、今のまゝで日本一であると自信しても入らつしやりはすまいと存じます。

お尋ねに任せましてとんだ失禮を申しました。

△環女史と須磨子女史

秋聲

私は柴田環と云ふ人については、個人的に何にも知つてゐるところはない。女史が生命としやうとしてゐる歌劇其物についても、全然智識がない。餘程以前に音樂學校で、藤井とか云ふ姓を名宣つてゐた時分に、一度其の獨唱を聞いたことがあり、帝國劇場で一度は獨唱、一度は歌劇「熊野」を見たことがある限りである。外の人の獨唱なり歌劇なりを見たことも聽いたこともないから、比較をする譯にも行かない。唯「熊野」のやうな形の古い日本の時代ものを、直ちに西洋式の歌劇に用ふることは感服しない。歌劇はどこ／＼までも、異國趣味の形のものでありたいと思ふ。日本人だから、日本のものをやらなければならぬといふのは、日本人だから西洋の建築のなかに住つては可けないと云ふと同じ筆法になるやうで、愚だと思ふ、言葉の意味さへ通ずるやうにすれば、それで澤山だと思ふ。もと／＼新しい舶來品なのであるから、それを下手に燒直すと云ふことは、其物本來の味なり特質なりを損ふことになるだらうと思ふ。遠い將來の成行は知らず、少なくとも今のところ、然うだと思ふ。

見ないけれど、その點に於て、「釋迦」などはまだしも可いと思はれる。

それから獨唱なり歌劇なりに謳ふあの肉聲であるが、小禽やなぞの木の間に唱つてゐると同じに、それがいかにも人間が語つてゐるようで胸を唆られる。しかし聞なれぬせいか、私などの耳には甘すぎる。光澤を消したり、裏聲を使つたり、聲と感情に節制と鍛錬を加へてある日本の音曲の方が、人に迫る力はないまでも爽かでもあり輕味もある。しかし我々の國民性も變らずにはゐないのだから、其の稀薄で間鈍つこいとを

感ずる時も、やがて來るてあらう。

須磨子女史のことについては、「ホトヽギス」にも一寸書いておいた通りを繰返すより外はない。

女史の技藝がまだ未熟であることは勿論である。殊に今度演る筈になつてゐるとかいふヘッダなどの氣分に乘移れるか如何かと云ふことは頗る疑問てある。しかしマグダになり得たと同じに、ヘッダにも成得る柄だと云ふことは言へるだらうと思ふ。それに玉乘の興行か、娘芝居のやうに使馴されてゐる帝國劇場の女優達のやうに、謂ふところの女優になつてゐないのが須磨子の身上てある。

須磨子の「マグダ」に於ける演技の巧拙は、素より比較上の問題であるが、あれが成效したものとして認める人でも、他の色々の役には融通が利かないだらうと云ふ議論もあるし、藝者や丸髷の日本の婦人役をさせたら、迚も見られないだらうと云ふような說もあるが、そんなことは年功を經た達者か、天才の名優かに求むべきことで、無理な注文であると同時に、慾望が多過ぎるのである。たとひマグダが唯一つの女史の持藝であるとしても、私は他の女優に比べて、此人氣役者を買つてやるべき充分の價値があると思ふ。西洋のことは知らないが、殆んど型ばかりで演ぜられてゐる日本の舊劇にしても、名々の柄があるのであるから、新しいものにも名々の持場があつて好い譯だと思ふ。須磨子の特徵が、若し「マグダ」のやうな性格の役柄に表はれたものとすれば、何處までもそれを發展させるのが至當だと思ふ。

△環さんと須磨子さん

田村とし子

私はどちらに就いても別に何と云つて取りたてゝ云ふこともない。柴田さんの歌劇はいつも拜見してゐる。おもしろいと思つて見る。柴田さんの聲はほんとに美しい聲だと思つてゐる。そうしてあのぶとうな身體の形が、いつ見てもちつとも曲の現はれてこないことに感心をしてゐる。あの丸つこい少しも態のできない身體を、唯そのまゝに舞台の上に抛りだしてゐることに感心をしてゐる。

いつになつたらあのかたの形は見よくなるのだらう。今度のやすだらなぞでも、劍を逆手にして提婆を切りかけるところがある。その手を提婆に押へられると、手を後にして正面を向いて片膝立ちをしてもがくやうな事をする。あの形は舊劇でよくやる形だ。あんな仕科をしないても、新らしい試みと云ふかどで、も一層大膽に自身でいろ〳〵心持を現はす形を工夫なすつたら宜からうと思ふ。其所まで手が届かないてあんな仕科ても誰かに敎はるのなら、舊劇の型でも何でも仕方がないから、せめて其の形だけも、見よくする樣に修練されたらよからうと思ふ。歌劇と云ふものは、聲ばかりよくつて、仰向いて腰を落すやうな恰好て歌ふばかりぢや仕方がない、――のぢやないかと考へる。然し柴田さんの

やうな女流の聲樂家がこの明治時代に現はれたからこそ、私たちは見た事も聞いた事もない歐劇と云ふものゝ大體を知ることが出來たので誠に有難いことだと思つてゐます。

松井須磨子と云ふ名を聞く度に、私は何だか神の皮肉ないたづらを見せられてゐる樣な氣がする。

このかたには二三度逢つた。誠に可愛氣のある、感情の和らかな――もう年はいゝ加減だと云ふけれどもいかにも娘々した人である。このかたが天下の文藝協會をその双肩に荷つてゐる――と云ふやうな形勢になつてゐるのかと思ふと、何だか可愛想なやうな、天つ晴れなとでも云ひ度いやうな氣がする。なりにもふりにも構はずあまり大きくない身體を堅くして、石にかぢり付いても成功すると云つてるところを見ると、涙ぐみたくなるやうである。

松井さんの技藝――それは公演の回毎に進んでくる、いまに押しも押されもしない立派な女優になるに違いないと思つてゐる。

△環さんとすま子さん

小山内薫

オペラ役者としての柴田環さん、女優としての松井すま子さんを、Publiclyにcriticiseするのは、まだ時期が早いだらうと思ひます。personallyにadviceしろとおつしやるなら、申し上げたい事は澤山にあります。私は唯これだけの事をお答へして、世間には斯ういふ事を持つてる者もゐるといふ事だけ申し上げて置きます。

△松井須磨子と柴田環

生田葵

柴田環と云ふ人は多數の敵をも持つて居るが其れ丈け又愛護者を持つて居る。惡評を放つ人は環孃が以前友人であつた學校側の人と、其れから保守主義の人に多い。然うして其の惡評をするのは伎藝の上でなくて、多く其の品行の上から來る、其れも正當に批評するのでなくて、世間から惡評されて居るのを恐怖しての云草に過ぎないんだ。

環孃が品行の惡いのを直接見たものは尠ない。新聞で云ひ傳へられた事を是認して、其れを好奇心に云ひ觸らして居るに過ぎないんだ。這麼會合の中には日本人特有の狹量と嫉妬心が定まつて交つて居るんだ。他人の品行を云々する人達には然うした言葉に依つて自分が品行上潔白であるのを吹聽しやうとする卑劣な心情がある事をも忘れてならない。環孃の仕事が派手である丈けに這麼噂が輪に輪を懸けて世間に響くのである。

私は那麼環さんの噂を世の所謂淑女、貴婦人から時折聞かされる。聞く度に然う云ふ人達を不潔い人だと思ふ。藝術に依て、自己を高めて行くと云ふ事を知らない人だと思ふ。品行とか節操とか云ふ事は補正成や

春日局とか云ふ人を學んで往けば淨山ぢやないか、月夜に響く美しい笛の音を聞いた時、吹いて居るのが賤しい牧童だからつと云つて耳を閉くのは謂れのない事なのだ。品行に依つて其の人の藝術を沒して聽らうとするのは小人世界の仕事だ。環さんは何と云つても今の所日本一の聲樂家だ。世界の上から見て二流、三流、四流かも知れないが、日本では一流に違い無いんだ。大切にしなくちやならない。官學萬能の日本では音樂學校と縁が切れて居るので兎や角ら思つて居る人がある。那麼事は一小事である。事實環さんは音樂學校と關係して居る時よりも現今の方がずつと大きな事業をして居るのだ。日本國民を對手に、惡口を云はれても、嘲罵されても、恐れ怯れず、舞台の上に立つて居る勇氣丈けでも感心する、一つは生活上の都合もあらうけれど、お品よくと云ふやうな弱虫の云草にかぶれずに公衆の前に赤裸々の自分を顯はして居るのが豪い。私は環さんが好なのである、今少し背が高かつたら猶好きなのである。聲量がもつとあつたら猶好きである。艶くやかな頬、大きな眼は拾年來見るが、近頃は少しく血色も惡く、年齢の劣へが見えて來た、此の先何年あの聲が續くであらうと思ふと暗然とする。

突として名聲を博した松井須磨子は今の所現代の寵兒と云つて良い。壹ヶ年前迄は何處に生存して居るか知られなかつた人なのだ。前田と云ふ人の內實で、俳優を志願したとのみ僕等は知つて居たのだ、其れが今日の勝利を博さうとは、一つは身を寄せた文藝協會と云ふ場所が善かつたのだ。ノラに依つて得た成効はマグダに依つて更に光輝を放つた。日本人としては背も高い方で、スラリとした姿勢、眼も割りに大きく面長の整附のにゝ顏は俳優としての此の人の勝目である。併し決して美人と云ふ方ではない、若し此の人にもつて妖艶な所があつたならば、マグダはもつと成効を博し、同時に若者の胸を攪亂したのに違ひ無い。其れこそ其の人の机上に艶書の四五通は毎日舞込む程の人氣を得たのに違ひ無いのだ。マグダの成功は須磨子孃の耳に聞善い、滑な聲調子に一つはあつた。聽いて居て少しも苦痛を感ぜず、どんな苦痛、煩悶を語つて居ても、其の聲調には鳥が囀つて居るやう豊麗な點があつた。

文藝協會の趣旨か本人の嗜好かは知らないが平生は至つて質素な態度で、之が盛名を恣にして居る松井須磨子かと思はるゝ程で、此の生活の行き方が在來の女優とは違つて居る。いゝとも惡いとも僕は云はない。俳優の生命は舞台にあるんで、舞台以外は普通の女性であつたらいんだから奈何でもいゝものゝ、些つと逢つた時は、環孃のあの表情的な容子……異性に遭遇すると、直ぐ私は未だ獨身者の女、乃至は藝術家であると云ふやうな初々しい娘で、間かり違へは頬を染めて挨拶しかねないのに引變へ、須磨子孃は只眼を鋭く働かして居るのみで、平凡な女性と何等變りのない挨拶を交す。併し其れが決して對者に不快を與へると云ふやうな態度でないのは勿論、傲慢な點などは尠ないやうである。

須磨子孃は今大久保の染物屋の二階を借りて自炊の生活をして居ると聽くと全く女優と云ふ派手〳〵しい生活を想像するのとは反對で面白い顯象だと思ふ。世間の女優の欲しがる寶石の指輪も、縮緬の振袖も裝飾

りも須磨子孃には入用がないと云ふ事は、環さんは學ぶ可き事だと思ふ。藝を磨くと云ふ事よりも身の廻りの装飾に滅亡んだ女藝術家の例は尠くない事だから。併し之れは須磨子が文藝協會の箱入娘で、環さんのやうに世間に全く出て居ないのに起因するのも一つの理由だらうと思ふ。

文藝協會の人に聞くと須磨子孃の理解力の鋭いのを賞讃して居る。彼女は宛てがはれた表白書を幾度も讀直し〱、解らない點は解る迄は聽訂し、然うして其れを自己の口に上して、自己の方で其の表白なり、敎えられた役の性格を全く征伏する迄は練習する。俳優となる以上誰でも然らせねばならないのであるが、すま子には熱心と執拗とがあると云ふ事だ。藝を練磨すると云ふ口實の下に良人とも別れたと云ふ其れ程彼れは伎藝に熱心で、其の上豐富な感情を持つて居るのが役の上に常に顯はれて居る。此の豐富な感情が今の所須磨子の生命と云つてゐゝ。だがすま子の豐富な感情にはスウキートなもので他を燒き盡すと云ふ程な熾烈な熱情は無ささうに見える。若し之が藝の上に顯はれて來るやうな役を務めて演じ了したならば、其の時は天才の稱を與へられ、第一の女優とも云へやう。

日本の歌劇は猶未成品である。從つて環孃の歌劇役者とて未成品たるを免れない。だが環孃は須磨子に增した熱情と、虛榮心とを持つて居る其の熱情が今後、何れ丈け藝の上に顯はれるかと云ふ事を見るのは一つの樂みてある。

要慎深さうな須磨子、大膽に自己を表現して行くのを恐れない環孃。外貌から得る感じから云つても環孃が爛漫として咲き亂るゝ櫻のやうなのに引違へて、秋海棠のやうな愼ましやかなすま子孃、貳人を竝べて兩花道に立たして評するのは年功の上から云つても、事業の上から云つても環孃に氣の毒であるが、須磨子には年齡が若いと云ふ點がある。之は餘事ではあるが、須磨子がまだ自己が未成品である時代に技藝の爲めに良人と別れたと云ふ話を聞くよりも、私は、環孃が持つて居る戀愛の苦痛談や煩悶談を聽く方が好ましい。人間は弱いものである。殊に女性は猶更然うである。須磨子孃が良人と別れた事情と、環孃が良人に別れた事情は大分違ふ。良人に別れた後の環孃の戀物語りには生命の甘味があるやうに思ふ。放縱で男なしでは暮せないと云ふやうな下品なのではなく、蒔り懸るものなくては生きて往かれない女子の過失を犯したと云ふのなら、如何にも女性の藝術家らしい優味と涙があるではないか。戀愛の苦痛や煩悶を知らない藝術家が何として眞の藝術が發揮されやう。私は女の藝術家殊に女優などゝ云ふものが恁うした物語りを持つて居るのは好きである。男に對して絕えず甲冑を附けて居るやうなあの何とか組とか云ふ女は美しくても美しいとも何とも思はない。環と云ふ人を思ひ浮べて、何れ丈け戀愛の爲めに涙を絞り苦悶したかと云ふ事を考へるのは私に取つては環と云ふ人が更に美しく見える情調てある。

△御兩人共御研究中の人

市川左團次

〇歌劇研究者としての柴田環女史、女優としての松井須磨子孃。御兩人共何れも御研究中のお方と思ひますから、今日に於て批評をするといふことは出來ないことゝ思ひます。

〇私は西洋の歌劇は少し見てまゐりましたが、今柴田さんのやつて居らるゝものなどをそれに比べて評するといふことは到底出來ないだらうと思ひます。

〇柴田さんは聲樂家としては勿論日本有數の人でありませうが、我々にはそれを專門的に評する力がありませんから、只よいお聲だと思つて聞く丈けです。只先日「釋迦」を見に行つて、アの長臺辭の處を始終いゝ聲でやられたのを聞いて、聲樂家として有名なのも無理がないと思はれました。

〇松井さんも歌劇に於ける柴田さんも今樣、今御研究中の事ですから、此先きどんな事になるか、只今の所では何とも申上かねます。然し私の密かに考ふる所によれば今が最も評判のよい時でなからうかと思ひます。

〇御承知の通り藝事は或所までは誰ても割合に容易く行けるものですけれども、其れから先きへ進むといふ事は、なか〳〵の努力と天分が要るのです。御兩人共非常の勉强家で、且つ天分も薄くないやうにお見受けするけれども、今後の事はどうも分らないと申上げた方が、自分の只今抱いて居る正直な感情です。

△須磨子に對する希望

巖谷小波

柴田環女史の歌劇は不幸にして未だ之を觀るの機會を得ない、有名な「熊野」も見なかつたし、今度の「釋迦」もまた拜見せぬ。それで何とも評し樣がない。只聲樂家としては日本人放れのしたよい聲だと感服した事はある。然し今言つたやうな譯だから、オペラの役者としての評は今はお預りとして置くより外はない。

須磨子の今迄演つた役はオフエリアとノラとマグダと、先頃試演場でやつた「運命の人」の貴婦人と、四つ共觀た。あの人は兎に角非常に熱心に勉强する人てある　ち、何時かの間に技藝も上達し、又世間に名聲もせた。

オフエリアの時は我々は眼にも留めなかつた。がノラに至つては勉强の効があらはれてなか〳〵見應へがあつた。今度のマグダに至つては勉强の効があらはれて、敎へられた事を其通りにやるといふのみならず、又自分の工夫といふものがあらはれて來た。といふのは藝に餘裕が出來て來た。之は實に進境の著しいものとして賞せねばならぬ。

あの人のよい所は、別に美人といふではないが、目の表情の巧みなのと、

聲のよい事である。此二つで成功して居ると私は思ふ。然しまだ天下の名優と許すことが出來ないのは、今迄演つたものは、どうもあの人の藝風に適つたものはかりのやうに思はれる。今少し立入つていへば寧ろあの人の性格に適したる役柄のやうに思はれる。適材を適處に使つたのであらうから、それもよいが、然し名優と許さるゝ迄にはあの人に色々な役柄を勤めて見なくてはならぬ。丸髷の内氣なお奥さんにしたり、品のよいお孃さんにしたり、或は貞操な世話女房、藝者上りの粹なお妾といふ風に、今迄演つた事のない、若しくは演つたものと反對のものを演らして、而かもそれをも立派に演り得てからでなければ名優とはいはれまい。高田が高田式といはるゝやうに、一種類のものに怒ひに成功して須磨子式といふやうなものが出來たら、其れが附いて廻つて却て發展が出來ぬやうになることを恐れる。成程分業の世の中であるから、專門の役者が出來るのもわるくはないが、娘方も奥様風も、老婆も同じ程度位に出來ぬと眞の名優とはいへまい。私一個の希望をいへばどうしても此次の公演には、今迄のとツカぬ他の役柄に於て須磨子を見んことを樂にして居る。

△環さんと須磨子さん

時雨

他の人より一足さきへ踏出した者の前途には、希望も多くあるかはりに、人の知らない困難も澤山にある事でせう。あとから出た者は、前の人が拓開いていつた途を、一息に驅通して、直に前の人の後へ追つくことが出來ます。それだけ前にたつた人には恩があるかと思いますが、何事にかぎらず、さう謙遜して、前の人の後にばかり從つてゐる人ばかりはなからうと、思ひますと、その道の先驅になる人の不安はどんなでありませうかと察しる事が出來ます。さう考へますと、私は松井須磨子女史と、柴田環女史との、お二人の御心中に同情することが出來ます。

松井女史はよい先生と、よい後援とをもつてゐられ、兩三度の當り役に、新女優の第一の人と目されてお出てす、が、もう出來上りきつた藝ではない、これからが眞の修行にはいるのであらうと思ひます。それとちがつて環女史の聲樂は――私に聲樂の方の事はちつとも解りませんが――天才であるといふ定評があります。然かもオペラとなつては、聲樂と舞臺上の動作とがともなひ、完全なものに仕上がるのは、矢つ張り今日後の仕事で、これからが苦心の入るところ、修行であらうと思ひます。一面では松井女史の方が、大層幸福な位置にゐられると思ひますが、また片つぽでは、環女史は兎に角日本の歌劇(オペラ)の創業者といふ御名譽に、私は充分な敬意をもつてをります。只今のところでは、松井女史を讃美する人が多いのに、環女史のオペラをくさすのは、謗るにしても、おとすにしても、あんまり氣が早く、片よりすぎてゐはしまいかと思はれまして、環女史のために悲しい事と思つてをります。此お二人についての望は、どうぞ私達女子のために、どうぞ誇として、立派に、世界の名女優になつて頂きたいと祈るより外はありません。

△二女史の鼻を見よ

青柳有美

柴田環も松井須磨子も、遙に離れた見物席から舞臺顏を見た丈けだ。而も、須磨子を見たのは、須磨子が今日のやうに名をなさぬ頃、たしか東京座に於てゞあつたらしく、六七年も前の事である。

僕は、今、人生の劣敗者として、毎日毎夜『サア〳〵厭な商賣もあつたもの、一日なりと早く廢業して、正業に就きたいナー』と、疲れた溜息を吐きつゝ、田舍新聞に勞働して居る。新らしい氣分とやら色彩とやらいつたやうなものを解すべく、僕は餘りに愚鈍だ。

然し、須磨子に就て、僕の如き人生の劣敗者も今猶ほ記憶に存して居るものが唯一つある。それは、須磨子の鼻だ、環を初めて見また聽いたのは、僕が田舍から二週間、東京の空氣を吸ふに出かけた二年ばかり前のことで、帝國劇場附になつて後のことだ。環に就て記憶に存して居るものゝうちに、矢張鼻がある、外に、環の頭髮も今なほ僕の記憶から失せぬ。

僕は、須磨子の鼻は能く須磨子を談り、環の鼻と頭髮とは、能く環を談るものと思ふ。

須磨子の鼻は、先代菊五郎の鼻に似て少し鼻柱の短い丈けであるやうに記臆する。環の鼻は、頗る猫に似て少し鼻柱が長い丈けのことだ。

猫に若し言語を解する力があらば、聲樂家として必ず成功するに相違無い。俗に、人を魅するに足る美しい聲を、總て『猫撫で聲』といふほどて、猫の肉聲は生れながらにして美しいものだ。竹本小清にしろ、將た此頃、女の浪花節で賣出した吉田小奈良にしろ、名は忘れたが三遊派の寄席に出るザンギリ頭の盲人で、有明節や米山甚句に妙を得た何とかいふ女にしろ、美聲のある女は、多く皆な猫式の鼻で、猫の美音は全く其鼻の形狀に依るものらしい。柴田環に、猫鼻あつて玆に初めて聲樂家としての柴田環あり矣だ。

環の頭髮は、如何にも環が情の人であるのを談つて居る。否な、情の人といふよりも寧ろ肉の人であるのを談つて居る。あの頭髮を見ると、何うしても色慾の強い女であるらしく思はれる。ハリが無い、強いところが無い、色魔の手にでも懸かつたら、前途を棒に振つてしまふやうな事が無からうかと心配する。

須磨子は、智の女である。あの五代目菊五郎式のカッチリした筋の通ほつた鼻は、即ち須磨子が、智の女たるを示す徴象だ。滅多なことで、男の玩弄物になりはすまい。須磨子の今日の名を作すに至つたのは、あのシャー〳〵した人を人とも思はぬらしい憶びれぬ度胸にある事と思ふ。然し、五代目式鼻を中心にした明瞭な輪廓の顏面組織も、素より須磨子に今日の評判を與ふるに至つた要素だらう。たゞ、人世與みし易しと思ひ過ぎて、傲慢が増長するやうなことが無かるまいかと心配する。

田舍新聞で、文筆勞働を商賣にする人生の劣敗者たる僕が、人生の成功者たる環須磨子の兩女史に對する感想は、先づ此んなものだ。

△須磨子女史の特長

島村抱月

私も同じく文藝協會に關係してゐるものであるから、松井須磨子論といふやうなものは書けない。私が親しく知つてゐる範圍での同女史の特長は、白の抑揚、斷續が自由自在である事、聲柄に女性以上の一種の響ある事、感情が極めて鋭敏に體の表情となつて流れ出る事、强烈な氣分と輕快な氣分とを隨意に驅使し得る事、白の暗誦力の優越なる事、自家の藝術に對し熱狂的愛慕の性ある事等で、是等は其の天分に由るものであらうと思ふ。其の他脚本の解釋、形の工風、舞臺度胸等に秀でた點は專ら修養の結果であらう。併し同女史が益々是等の修養や天分やを大成して我が女優壇の運命を定めやうとするには、今後尚幾多の努力が必要である事は言ふまでも無い。

「**教育ある遊民の處置問題**」に對する

澤柳東北大學總長。**福原文部次官**。**建部文學博士**。**向軍治氏**。**吉田文學博士**。等の意見は次號公論欄に掲載せらるべく。尚同問題について**尾崎行雄氏**。**床次内務次官**等にも寄稿を依賴せり。

幸田露伴博士の「**江戸と江戸文學**」及び**田岡嶺雲氏**の「**續歎奇傳**」は次號の本欄を飾るべし。

福本日南氏の「**太閤論**」は次號にて完結すべし。

和歌

尾上柴舟選

○ 内田月城

胸あけて草に伏す日のそらわたる青草山の風ののどけさ

噴水のしぶきにぬれてゆく春の屋上園に黄ざくらがちる

大川の夜のあかりにうつすらとさびしくかげを落す鷺かな

みをくりて野路にわかれぬパラソルのしろがねの柄も汗ばみやせむ

○ 安井竹美

忍びつゝ人をまつ身の手にもてるま白き花がうすやみを吸ふ

合歓の花泣きぬれし眸に蒼々とうつりて寂し酒ほしきかな

いやふかく人に思はれ生きてある身にほのかにも深みゆく夏

うす白く小さき花にしみてゆく人こひしさやものあはれさや

○ 捫垣青花

この別れ怨まじとおもひことさらにちかへばなみだしづかにくだる

人々とはなれてさびしくものおもふ癖つきそめて春も暮れけり

皐月ゆふべ木の花しろく眼にうつる人を待つ間のあまきかなしみ

ものおもひながくつゞきて疲れたる眸にそよぐよ春の木の花

しつとりとにほふ煙草になみだぐみ葉櫻の蔭に人を待つかな

○ 田中清

とざしたる宮の扉に寂しくも花の吹き散る春の夕暮

春雨にいさゝかぬれし屋根瓦たそがれ色につやめくはよし

楠山の楠の若芽のうす赤を海の風來てそよ〳〵と吹く

うら〳〵とかすめる海の砂丘にほしいまゝにも寐たる男よ

○　西村孤舟

その兄と語れる我れを人形の如くすわりてぬすみ見る人

初春の光の匂ふ故郷を汽車にながめて過ぎにけるかな

ふる里の家ののきばに梅さけり櫻つぼめり我が母や見む

人形の中にすわりてある如し酒にうるめる眼に見る人々

○　山本渚貝

春雨のけぶる淋しき夜なりけり多く語りて永久別れぬ

別れけりわれはまことに强かりきされども君はなほ强かりき

見廻せば四方の山は森閑として暮れんとすあはれ旅人

汽車の音聞けば直ちに海思ふ君が袂のひるがへるなど

○　前田黄昏

うら戀し西と東に別れ去るおぼろ月夜の人の下駄音

みのこしし活動寫眞思ふことと冷たき床に横たわること

手をのべて汽車の窓よりなまぬるき牛乳二瓶買ひぬ淋しや

春夕走りしあとの呼吸つかひせはしき丘にさけるたんぽゝの花

○　後藤むくろ

あはれなるわれのこゝろよ死ぬばかり泣くこともえず物を思へり

あらそひの言葉つきたるゆふぐれのうす闇のなかに薔薇の花ちる

たゞれたるこゝろを有てば刺戟なきさくらの花のかゝはりのなき

なに物にふかく溺れてなれ泣くぞ花のひかりのうするゝ夕べ

○　西野白絃

若き日をいと華やかに終らむと妻に秘めてはふみ書く男

泣き濡るゝ生欲りせずと死にむかひその涙ゆゑ

死にも得ざる子

日の暮れぬ夢見る君と醒むる我と默せるまゝに歩むさびしみ

曉の厠に起きて不圖仰ぐ空に眞白の月ある悲し

○　　伊藤錄

君をまつ渚しづかにみおきぬる夕の波におる松葉かな

○

松の花散るもさびしき砂山の月夜をあゆむわがうしろかげ

しみ／＼と夕はわれをなげかしむ渚の松の青きにほひに

○　　山田清美

病める子は老いたる母をひた戀いて相摸の海のあけくれを泣く

子は病めり母は老いたりさり氣なく浮世話をするが悲しき

わが母よわが戀人よわが友よわれなほ死せず悲みてあり

死ぬる可き病此の身にありながら尚死に得ざり悲しきかなや

○　　打田紅雨

此愁ひまた知る人のあらじなど思へばおつるわが泪かな

いつしかに燈臺の立つ丘に來ぬ下には騷ぐ初夏の波

松透きて海のひかるもこゝろよし畑に人なき初夏のあさ

○　　日柳朝街

ひとり行くはてなき砂の淋しさにふと波に追はれもらすほゝゑみ

ふと煙草のみたくなりてたちどまりひるの田なかにひとり燐寸する

よく見ればまろべる山の青き葉のやをらそよげり夕暮れて行く

○　　佐藤綠三郎

天地の小暗き隅に小さなるなりはひをして吾等つながる

はてもなく青がつゞける野の遠に小さき灯うまれて淚をさそふ

ちら／＼と柳の裏葉白く浮く近江の國の春のくれ方

○　　紫陽花

夏の日のあかるき土をはふ蟻をひとりさびしくながむる男

おほらかに君をしたふといふに盡くこの頃われをつゝむこゝろね

夕ざればはかなきことのおもほえてむくつけきまで君をこひにし

○　　伊夢錄

わすれしにあらず君をば思ふにもあらぬ夕のこの涙かな

松並木すぐればはやもさすらひの他國の人とわれのなれか

やけて立つ松の並木の月かげの寂しさをこそ見にかへらまし

○　　籔の人

女とは可笑しき者よ世の中を紅友染の影より覗く

兒と共に居あへぬ母を思ふとき家なきことの寂しかりける

牡丹ちるものゝ哀れさ覺羅氏が三百年の夢のさめぎは

○　　鈴木風影

織らすれば織むら造る哀れさよ春の機女の心のみだれ

菜の花に朝の小雨のかゝるなり雀も啼かずいたく靜けし

春の日や二町先なる畑中の小學校の晝のどよめき

○　　苗加白光

ほのじろう月こそいづれ芥焚く林の中の煙のすゑに

別るゝ日かつてしあらぬ笑みつくり優しきことを云ひ給ふかな

夢にだに逢ひみんことを祈りつゝ生命をかけていねにけるかな

○　　平楡たみ子

『君死なばなどわれ生きむ』かく云ひて眞面目になりし寂しきわれよ

疑はじと相云ひつれどかにかくに君を危ぶむ心となりし

○　　越野花聲

君の家よりのかれかへりておほけくも我を想へばさみしき夜かな

微白う君の頬のうすれくる月夜の森の寂靜(しゞま)なつかし

○　金子秋川

松の花黄なる花粉をおとすころ母いまさねとなつかし古郷

新しき鏡の前に立ちて見るわか十八のうれしくあるかな

○　奥屋白暮

夜ぞ匂ふ霧立ち罩めし高原の樹々の若葉に月したゝれば

愁ひつゝ君が名さへも呼びあへず目を投ぐるとき山も暮れける

○　古家信

おろかなる喜びをもち「嫁」となるわかき女のかなしき臨終(をはり)

ほこりたる處女とわかるゝ悲しみの涙もたぬか最後(いやはて)の日に

○　草名をさむ

いづことも當はなけれど唯歩み疲れつくせば心たるなり

暮れゆきし空のかなたにかすかなる海の音して淋しき夜かな

○　佐久間夢塔

世の中のあらゆる花を手のひらにのせてながめてゐたき春の夜

見るものも聞くものもみな哀愁す二十の春の靜心なさ

○　高田好夫

興奮の後より起る悲しみをじつとこらへて戸(と)による夕べ

松すかす鋏の音のなつかしう部屋にひときて夕暮きたる

○　横田湖峰

執着にたへざる如く春の雨格子に絡み日もすがら降る

下蔭は悲しほろ〳〵椎の花落つるを見れば涙ぐまるる

○　鈴木松之助

白椿散る窓にして何としも判じかねたる悲しみぞ湧く

○　安藤白流

けだもののうすくらがりに物思ふさびしさに

て山暮れてゆく
ゆく春を青き小鳥はなつかしみうすみどりせし
木の芽ついばむ

○　　　　　　　　　江澤虹花

あゝ四月わが新なる悲みを君にかくして旅立ち
しかな
世に堪へて自ら滅ぶ人多き世の片隅に君とわれ
すむ

○　　　　　　　　　須賀紫浪

朝な〳〵樅の若芽をつみて嗅ぐ手すさびごとに
夏深み行く
沈默の悲しくひそむ白ホヤを眺めてありし朝の
室かな

○　　　　　　　　　安口華雫

此頃の淋しさを誰に訴へん頭ふらつきてやすか
らぬかな
九年母のうすき匂のする室にシガーくゆらす吾
淋しかり

○　　　　　　　　　池尾紅花

湯上りのしめれる髪にこゝろよく春の夜更けの
風が吹くかな

こゝろよく晴れたる春の朝なれど何事となく忍
ばれて憂し

○　　　　　　　　　葉浪快三

泣かずしてまたんと迄るをさなごに可愛きうた
をきく野末かな
柔かう若葉の風にもまるゝを小さき鳥のうれし
む日かな

○　　　　　　　　　中里富

青くろき酒の刺戟にひたる夜の花瓦斯に見るか
なしきまぼろし
劇場をいでゝ息つき見上げたる春の夜そらは眼
にさやるなし

○　　　　　　　　　佐藤辰雄

誰が故に出て來し人ぞ口笛を吹けば寂しく川に
石投ぐ
双の手にかたく握りてはなち得ぬ品物に似し尊
き夢ごと

○　　　　　　　　　高桑朝雨

天地に一人の兄とわがあひだうとましの氣のた
つがかなしや
海草の香のかな匂ひふきてくる風にひらめくつ

ばくらの羽

○　大木多喜男

はかなかりし吾が戀に似てたんぽぽの花夜となればしぼむさびしさ

麥わらの帽子かぶればやゝ寂し心いつしか春をはなるゝ

○　和田信義

山佗びし此の明月にてらされて只ほの／＼とあけて行くらし

すい／＼と木の枝などの仄みゆるうす明け空に月のうかべる

○　森青粟

君おもふこゝろとなりて月を見ぬみし宵よりも思はれむとて

春の川そこひに白くひかる石じつとみつめてひとりあるかな

○　ちすみ生

わが衣を縫ひつゝ十の白魚がおのゝきてゐる美しさかな

ほどよかる人とまじはりほどよかる事いひいひてあるがさびしき

○　藤川萍郎

思出に若きその日の日記くればいよ／＼心君にと走る

○　福田雲城

ひとつづゝ春風に投ぐる豆の葉の流るゝ末に君ゐますなり

○　無三武呂

さんざんに言ひ込められて猫のごと大路に出でぬ盗人のごと

○　石井保

おぼろ夜や新開めける街裏の狭き水田に鳴く蛙かな

○　市橋善之助

今頃は海面圓くふくらみてのどかなるらむ海へ行きたし

○　守柳男

讀み飽きて青海（あをうみ）近き丘の邊に仰向にして見たる青空

○　佐々木冬雨

只われを認められんと努力するつよきおのれの執着に生く

○暮れがたの砂丘に立ちて春雨の雫の重き傘ふりしかな　白川茂吉

○郊外を走る電車ののりごゝち君を思ふによろし晩春　松岡波留尾

○基隆の兄がもとまでこの涙とどけよと思ひ沖に眼をやる　高添綠

○薄白う長う續ける塗塀にわがかけのひくたそがれの頃　林小翠

○夕されば裏畑に出て麥の穗のゆるゝばかりに吐息するかなし　宮田麻茅郎

○街をはなれ我が村に入るふた道の砂利に光れる月のさびしさ　小川流葉

○夜は明けぬいざこれよりと身を起し匪のちまたに出づる悲しみ　飯田牧人

和歌應募の注意

○東京市小石川區原町百十五尾上柴舟氏宛
○用紙は半紙大の原稿紙に限る
○封筒の表面には必「中央公論歌稿」と朱書すべし
○氏名住所明記の事

田山花袋氏は新らしき形式にて試作せる長篇小説を本號に寄せらるゝ筈なりしが、期日に間に合はざりし爲め、一先づ短篇を寄せられ、右の長篇は九月發行の「秋期大附錄號」に掲載せらるゝことゝなれり。

八月の小說欄には小山內薰氏の百枚以上の長篇及び永井荷風氏の三四十枚の創作掲載せらるべし

俳句

高田蝶衣選

薔薇

明日を出船の水夫にや薔薇買へる　銀竹
土佐は歌の國司に茨も匂ひけん　同
落日國に佳き民謠や茨咲く　同
蕩兒の心白薔薇の香にや痛むらん　同
戀にやあらん此の哀情を薔薇散りて　同
薔薇薫ず快談裡酒肴運はるゝ　鎮西郎
忌服捨てゝとる鍬重し茨の花　同
箕をさびる時花薔薇に袖觸れて　同
茨白き橋まてと君を送り來つ　同
離宮苑の全景を薔薇咲き晴らす　紫浪
手綱の輪の股木選みや茨の山　同
士の果の花火師や茨に住む久し　同
野茨や繪馬掛樹影澄む池邊　同
子隱しの宿とも聞きぬ茨垣の家　竹柝
辛辣の君が語思ふ薔薇かな　同

悶えては薔薇の香かぐと君が書に　同
辭去して月に卓上の薔薇の香を戀ひぬ　同
棘に似たる客將や茨に一砦を　寢覺草
鵜土間廢めて窓切れり積茨ぬ晴る　同
秘稿なれど薔薇に贈られし君にこそ　同
毒清水埋めける碑文茨野に　柳子
埃旋風の前過ぎて茨ほの白し　同
杖百の刑すめば放つ前の茨野哉　同
微醺歩めば聊か薔薇に詩の心　愛香
義人なき世の劣りなど薔薇に思ふ　同
薔薇咲くや女溺の昔我にあり　同
處女默し縫ふによき日や薔薇曇る　三光鳥
若き女にある郷土病薔薇嗅を　同
曇る山も見るとなく薔薇にまた筆寫　同
旅愁とは婢のみ知れり花茨に雫して　國郎
意征途にあり茨の香を懷しむ　同
茨に蔓絡む池畔鳥雲を追ふ　同
火熨斗仕事の白絹吹くや茨ぬ咲く　竜馬
茨朝な澄む井戸主は歸庵せる　同
はぐれ鴨か花茨の沼の月に見し　同
雨萎えの花茨や學寮の垣　明兮

私校曝書の庭茨根に蟻宮あり　同
矢研ぎ岩の泉邊りを花茨　同
粗文一と條り情動かしぬ薔薇の花　美田
野厠に笠着て入りぬ照り茨　同
香に醉て腰拔かし蟲か凪茨　同
榻に居て薔薇冷ゆ思月の莊　宙斗
丹齋調度も薔薇生けて眞晝明う住む　同
茨咲くや古器堀りし藪に宮造り　同
流し釣りし艪疲れを薔薇に汲む夕　詩泉
花茨切りくるゝ無造作に羞ろへり　同
夜店物なる鉢榮えや花茨　更二
旅愁玆に半歳を數ふ庭の薔薇　同
やから具して野鳩移封す茨の花　不寢庵
新生涯と云へども刑餘茨の花　同
泣蜂の瓶裡にも居て薔薇雨情　三石
薔薇活けてかくて奴婢にも見る品致　同
茨垣を入る藥賣麥刈の留守　石羔
割烹の講習もある家薔薇咲けり　同
尼が淸姿御落胤とも薔薇照れる　百花
薔薇咲くや癈兵に艶話ある夕　同
社垣茨に逸れ路は禰宜が家へ　雨霽人

歡樂の果知る日薔薇頻り散る　同
微醉を縁に坐しけり薔薇の日を膝に　白靑
いさゝかの壁ほてり薔薇見る頬に　同
雨に着きし宿茨折りてあり傘置場　耳山
城に遺せる大釜見る日や茨の花　同
茨垣間番僧が雜仕襷見ゆ　雨春草
城趾祭復活して茨に碑を洗ふ　同
減刑の子の飢を知り咲く茨　神風
詣路に木影たどるや匂ふ茨　同
干潟一目鬼茨の咲く松籟の茶屋　瀧喜智
牧の馬乘るも咎めず茨の花　同
薔薇日記句稿日々來て君の艶忠ふ　象眼
洲尻白薔薇多し笹巻鮓の宿　麻窓子
家なきを悲しうす野に茨吹く　秋灘子
門をなす薔薇咲いて夕べ立つ婦人　紅芙蓉
麥埃破りて薔薇の吹く日訪ふ　四十雀
白薔薇や苦しき思を歌詠みて　一其
茨咲くや實測に頑迷の衆と居て　靑粟
陶に書く啞娘有り薔薇も咲く　馬の骨
蛇毒病むて臥す日頃花茨を眼に　芽靑
凡夫と自覺せる旦薔薇殊に咲く　楊杞子

月に長橋踏み來しが茨香立つ野路　冬湖
道鋪ひの砂塵捲く風茨照る　湖峯
村居訪ふて歸路あつし銅色の雲　竹美
梁漁を祝ふや茨の雨に酌む　葵雨莊
かゝる日は碁によく敗けて茨淋し　杜城
薔薇垣や結ぶ繩目に晴るゝ樹々　胡盧
志士の碑文天下に募る茨の花　蔕柿
花茨に古りにし寶庫日射れり　松薬
野茨の香に研がれ出づや夜明星　眉電

課題　閑古鳥　七月十日〆切
　　　七夕雜題　八月五日〆切
淡路假屋在釜口高田蝶衣宛▽一人卅句
規定　以下▽用紙半紙▽中央公論俳句と表記の事

正誤(六月號)
初夏寒き蘭の雨や川浚◎ひなき　紫浪

評論

大統領候補豫選

米國市俄高の共和黨大統領候補選定會は、五百十對五百六十四の多數を以て略々タフト派の優勢を明かにし、前大統領ロオスエルト氏は二十三日愈公式に分離を宣明するに至りたり、政綱決定と候補選擧、共に未だ終了せずと雖も、大勢の向ふ所、以て推知するに足るを覺ゆ、

何が故に玆に至りたる乎、タフト氏の保守的政策とロオスヱルト氏の急進的主張と相容れざるもの其一に

居らん、前者の冷靜なる性格と後者の熱烈なる人物とが、相衝突せるもの其二に居らん、兩者の味方が行懸りを拋つて相和する能はざるもの其三に居らん、然れども最近の重因に至ては、則ち兩派を調和し得べき妥協的候補無きの一事に出てずんばあらず、

憶起す一八七六年ブレーン、ブリストオ兩派相爭ふて決せざるや、妥協候補としてペーズ氏出て、氏は大會に容れられ豫選を經て遂に大統領に選出せられたりき、又一八八八年シャーマン、グレシャム兩氏相爭ふや、ハリソン氏妥協候補となり、同じく大統領に當選したりき、然るに今回獨り妥協候補に依りて難局を解決する能はざるは何ぞや、蓋しヒュフス（前紐育州知事、現大審院判事）ありと雖ども、自ら出づるの意無く、ハドレー（ミゾリー知事）あるも名聲未だ天下に知られず、就中タフト派の心を收攬するを得ざるが爲め乎、

然れども斯くの如くにして今秋選擧の勝利果して共和黨に歸す可き乎、タフト派は少くとも三分一乃至五分二の得票を失ふに至る可く、ロオスエルト派は少數の共和黨急進派（分離に同意する）を率ゐ、民主黨中の急進派を誘致し、猛闘せんと企つるとも、恐らくは成功し難かる可し、而して中原の鹿、それ遂に或は漁者の利とならん、

民主黨大統領候補豫選大會は二十五日を以てバルチモアに開會す可く、クラーク、ウイルソン、アンダーウッド等の好候補あり、若し急進派のウイルソンを擧げんか、是れ民主黨中の急進派を招致せんとするロ氏の狡策に處する妙計なる可し、又同黨の成功を確實にする所以ならん、兎も角失敗せるは今回の共和黨大會也、然れども同大會にして萬一此處數日間に飜然過を悔ゐ、且つ意外に適當なる妥協候補を發見し兩派を調和するを得ば、是蓋し共和黨の大幸ならん、

（二十三日午後記）

此文を草したる後、共和黨より分離したるロ氏は新たに一黨を組織し、其新黨よりして大統領候補に推擧せられたる旨電報ありたり。

英佛關係の將來

駐英獨逸大使更迭す、舊大使ウルフ、メテルニッヒ伯は協和的外交家にして親英論者たり、排獨政事家多き倫敦に在りて英獨の親交を說き、其接近に力めたる振舞は大に見る可きものありき。唯其辛辣の手腕に缺如たりしを恨みとする而已、之に反して新大使マルシャル、フォン、ビーベルスタイン男に至ては手腕の人也、技能の人也必らずしも協和的外交家にあらず、又衷心よりの英國好きにあらざる代りに、彼は獨逸の爲めには如何なる手段を用ゐ、如何なる詐略を行ひても、英國を其便とする所に利用せずんば止まざる可き也、外紙に男の人物を說くものあり、曰くビーベルスタイン男は獨逸膨脹を理想とするの人、始めカプリフヰ將軍の宰相時代に外相となり、ホヘンロッヘ宰相となりて後も、依然其任に留りたり、而して一千八百九十六年春「南阿トランスヴールの獨立的存在は獨逸の利益とする所」なる旨回文を發し、排英的性質の歐洲同盟を計畫したるもの實に男なりき、蓋し男は獨逸の膨張の爲めに南阿より英國を驅逐せんとを希望したりしなり、男は又頑固なる戰鬪士にして、五年前海牙會議行はるゝや男の銳利なる手腕は最も發揮せられき、即ち男は例の義務的仲裁案につき最初は他國代議員をして全然贊成なりと思はせ置き乍ら、陰に其計畫の失敗に盡力し、終りに見事に佛英委員を背負ひ投げしたるが如き、其巧妙なること言語の盡し得る所にあらず云々と、然り男は誠實なる國士と言はんよりは、狡策百出の卓腕家に外ならざるなり。就中男の長所は新聞利用にあり、其最近迄土耳其に在りて見事成功したる原因の一も玆に在り、然れども、吾人は竊かに疑ふ、如何に辣腕家とは言へ、其長所も短所も十分に英人に呑み込まれ居る男が果して能く滿足の成功を見得可きかを、

蓋し英國の國是は、英佛協商に在り、其進んで同盟を結ばざるは、一朝英獨葛藤の際、最も獨逸に攻擊され易く、又陸戰に於て之に勝ち得可しと思はれざる佛國をも渦中に捲き込むの愚なるを思へば也、(蓋しかく

すれば英國が海上に於て獨逸を破るとも陸上にて佛國敗北し、爲めに平和談判に於て不都合なるとあれば也)然るに男は果して此英國の親佛政針を破壞し得可き乎英人は果して男を信賴して、ランスダウン及グレー兩外相の繼續せる親佛策を放棄す可き乎、兎も角も將來新大使の活動振こそ見ものなれ、て可也、呵々

蘇士運河盛況

蘇士(スエス)運河會社總會(六月三日)報告に曰く過去一箇年に於ける同會社の收入は一億三千八百〇三萬八千法(フラン)(約五千五百萬圓にして)前年度に比し三分二厘の增加を見たり、而して通過船舶數は四千九百六十九隻、一千八百三十二萬四千七百九十四噸にして前年度に比し四百三十六隻一百七十四萬二千八百噸の增加を見たりと、

斯くの如き貿易の發達も亦泰平の餘澤也、莫大の配當を發明せる同會社は宜しく資金を平和運動に寄附し

阿富汗斯旦と玖巴

目下新たに暴亂を見つゝあるもの、東に阿富汗斯旦あり、西に玖巴あり、

阿富汗斯旦の地、面積二十五萬方哩、人口五百萬、印度北方の緩衝國として世襲君主之を統治す、近年國王アブヅル、ラマン、切りに土木を起して、徵稅屢々臻り、民怨勃發、遂に亂を見たるもの、之を今回の叛亂となす、武勇自ら誇るマンガル、ジヤドラン兩蕃族、英領に近きコースト低原及其附近の山丘に據りて、盛んに官軍に抵抗す、而して官軍無力、平治する能はざるものに似たり。

玖巴共和國は一八九八年獨立したる小國、面積四萬四千方哩、人口二百萬、今回暴亂を見るに至れるは黑人の不平に在り、蓋し同島の黑人(ニグロ)は國法の下に於て獨立の政黨を組織するを許されず、大統領候補の如きも

白人の黨派たる保守、自由兩派に依りて推薦せられ、黑人は唯だ賛否を表明するを得るに過ぎず、又た就官上にも偏頗の待遇を受け居れり、故に彼等は數年來歷不滿の聲を放ちたりしが、今年大統領改選に際し遂に破裂を見たるに外ならざる也

然かも此東西相隔てゝ、叛亂を見たる二國が互ひに事情を同ふする一點あり、他無し、內亂の繼續は外國の干涉を促さずんば止まざると是也、

阿富汗斯旦は英國より補助金を受け、事實上其保護邦たる姿なきにあらざれども、一九〇七年英露協約の結果、內政に對しては其干涉を受くると無し、然れども叛亂益盛んに、國內秩序紊亂せば、印度政府の軍隊必らず到らん、玖巴に至ては、米兵已に上陸し、干涉の端緒啓かれざるにあらざる乎、

於是乎、吾人は切りに思ふ、坤輿、國を建つるものは決して弱國となる可からざることを、

其愚や及ぶ可からず

英國陸軍卿ハルデーン卿、大法官(內閣の一員にて上院議長たり)に轉任す、「地方軍」制度の創始者去るは、同國陸軍の一恨事也、

左れば、ハ卿の內閣の席が一より他に移れる故を以て、同國の對獨策變動の結果を說く日東諸新聞の所論に至つては、これ非論理の極、其愚や亦及ぶ可からず。

葡萄牙の風聲鶴唳

葡萄牙に流謠あり、曰く前皇帝マノエル二世國境附近に在つて復位の策を講すと、然かも何ぞ知らん、廢帝此時瑞西の山間に遊んで休養しつゝあらんとは

顧みるに葡國共和政成りてより已に一年八月、民心恂々、其緒に安んぜず、無稽の蜚語紛々たるものは何故ぞや、吁嗟是爲政者に德望無く、誠意無く、技倆無く、一日の偷安を事とするが爲めにあらざる乎。

共和政府建設するや、共和黨公然天下公衆に約して曰く我等は舊帝政の贅澤奢侈を矯正して、租税輕減を謀らんと、然かも其實績を見ば如何、一九一〇年度に於ては約一千二百萬圓の歳入不足を生じたるにあらさる乎、又た本年度の財政は七百萬圓の不足ならんと傳へられたるに係らず、同國上院の調査に依れば、一千四百萬圓以上の不足を生ず可しと稱せらるゝにあらざるか、而して租税は輕減を見ずして、資本税、土地税等の如き却て增加したるにあらざる乎、

葡國共和黨たるもの、若し列國の公認終りたるの故を以て慢心せん乎、誰か能くその政治の永續を保證し得るものぞ、

憐れむ可き瑞典

五月末、瑞典議會に瑞典永久中立案なる議案を提出したるものあり、曰く歐洲は何時亂れんも知り難し、我が邦家の爲めに謀るに、白耳義の如く永久的局外中立國となるに如くは無し、兵馬倥偬は吾人が最も厭ふ所なりと、何ぞ其聲の啾々として痛ましきや、

彼豈兵馬を厭はんや、唯其力無きを奈何、想ひ起す十七世紀の頃、グスタヴス、アドルフス帝が北歐に覇たりしことを、今や恍として一夢也、

南阿內閣動搖

南阿聯邦大藏卿ホール氏辭職す、蓋し同僚ソエル氏との衝突に出づ、然かも更に其原因を探究せん乎、內國に於ける和蘭人對英人の私闘、頗る重きに居るに似たり、

聯邦成立迄は肝膽相照しながらも、難局一たび去れば、互ひに私心を挾み來る、異種民族の混合に成る邦土の政治も亦困難なるかな、

新刊批評

▲數奇傳

田岡嶺雲著
玄黄社發行

「あらゆる書かれたる物の中にて、予は啻だ血を以て書かれたるもののみを愛す。血を以て書け。然らば血即ち精靈なることを見ん」といつたニッチェの言葉を想ひ起さしむる書である。眞に人を動かさうと思へば、血を以て書かねばならぬといふ事が此書を繙けばつくづく感ぜられる。初めから終りまで何處までも眞摯で、何處までも熱烈である。思想に同意が出來ず、叙述に感服出來ぬ節があつても、兎に角動かされる。刺激される。況して津山の女と別るゝ章や。子と名乘られぬ子と相見る節などは絶好の悲劇であり哀史である。「又子は人類の繼續者として意義がある」と叫んだあたりは殆んど哲理であつて而も自然の光を帶びて居る。明治に出た自叙傳の中で最も眞摯なる著述といつてよからう。知己友人十六氏の序文は何れも皆眞面目で義理づくめでないのが嬉しい。之れを以て見ても著者の人格が清くして、何人にも如何に愛せられ、如何に同情を寄せられて居るかゞ分る。此書は讀者も知らるゝ如く本誌に連載せられたものであるが、其補遺は又次號あたりから本誌に連載さるゝ筈である。今此篇にあらはれた氏の性格や行動に一種の結論を與へたと思はるゝ白河鯉洋氏の序文の一節を引用して讀者の一粲に供する。

吾徒は、大學教授たる爲めには、餘りに無策であつた。文學博士たる爲めには、餘りに多才であつた。時流に投んづる爲めには、餘りに臆病であつた。自ら藏する爲めには餘りに衒氣があつた。聖賢の徒たる爲めには、餘りに放逸無賴であつた。社會主義者たる爲めには、餘りに仁義忠孝であつた。廟堂の吏僚たる爲めには、餘りに大志であつた。市井の豪俠たる爲めには、餘りに小心であつた。上流者たる爲めには、餘りに平民的であつた。下層者たる爲めには、餘りに貴族的であつた。政治家たらん爲めには、餘りに風流韻事の想を解した。詩人たる爲めには、餘りに經世濟民の心に富んだ。哲學者たる爲めには、餘りに思索を輕んじた。科學者たる爲めには餘りに獨斷に走つた。村夫子たる爲めには、餘りに輕噪なる雷同者であつた。事業家たる爲めには、餘りに狷介なる孤獨者であつた。良民たる爲めには、餘りに非社會的であつた。謀反人たる爲めには、餘りに愛國者であつた。宗敎家たる爲めには、餘りに俗腸があつた。道德家たる爲めには、餘りに盗心があつた。世を忘れん爲めには、餘りに熱があつた。人と居らん爲めには、餘りに冷かであつた。要するに吾徒は、何をも成さず、何にも成らなかつた。嶺雲に於いて殊に然りである。（定價八十五錢）

▲我が抱負

大木遠吉著
實業之世界社發行

どれも皆元氣がいゝ、カラッとして居る。中には痛快過ぎて議論が少し空疎なやうに思はるゝものもあり、又餘りに自己の性格や抱負や主張やを語り過ぎて、反對者に對する理解が缺けて居るやうに思はるゝものもあるが、それでもちつともイヤミがない。稚氣寧ろ愛すべしとの感を起さしむる。之は大木伯の人格が清高にして、反對者を罵倒しても腹に毒なきが爲めであらう。名門の出、華冑の家に生れて、此縱横の論議をなす。伯や實に一千に近き華族界の珍物にして又一代の快男子といふべきである。伯の如き人は邦家の爲めに自重して、益々社會を警醒するの論議をなし又社會に實益ある施設をも行はれんことを希望する。（定價七十錢）

▲人物評論朝野の五大閥　鵜崎鷺城著　東亞堂發行

曩きに「薩の海軍長の陸軍」を著はして好評を博せる鷺城學人の新著にして、官閥、黨閥、學閥、財閥、門閥の五方面より朝野の人物を縱横論評せり。著者の評論、一個〳〵の人物評として見れば時として見當違ひの事なきを保すべからざるも、筆路暢達にして、一氣に讀了せしむるの手腕と、又諸種の人物を題目の中に拉し來つて、著者の一種の時代評論を纒め上ぐる力量とは決して凡なりといふべからず。面白き讀物として一讀を勸む(定價一圓五十錢)

▲雲のいろ〳〵　與謝野晶子著　梁江堂發行

晶子女史の短篇小説十五篇と脚本一篇とを收めたり、女史は歌壇の鬼才なれども、小説家としては未だ一家を成すに到らざるが如し。然れども中には多少着想の面白きものなきにあらず(定價八十五錢)

▲青年思想論　黒岩周六述　朝報社發行

「青年と政治思想」「魂を拔かれたる道德」「何を誇るべきか」「櫻」「同胞の眞意義」の五篇を收む。靑年の薫陶について多年一日意を用ひられつゝある著者が、其簡淨勁健の筆を揮つて說述したるもの、五篇共皆讀むべし。(定價二十錢)

▲お三津さん　鈴木三重吉著　春陽堂發行

三重吉氏の處女作「千鳥」「山彦」を初め「お三津さん」「お久」「鳥物語」「黒髮」「十字架」等を收む。我等は「千鳥」「山彦」の世に出でし際より氏の風佯の詩想と技巧とに感服したるものにして、世間が最近に至つて初めて氏の力量を認めたるの遲きを訝るものなるが、今此篇を再讀するに、未だ今日の如き渾然たる三重吉式を發揮せざる箇所もあれども、純なる藝術的苦心の跡は却つて今日よりも優るものある心地す。裝紙の清方の畫は凝り過ぎて多少の厭味を感ず(定價六十五錢)

▲謠曲物語(前編)　和田萬吉編　富山房發行

近時謠曲の流行益々甚しきを加へつゝあれども、謠曲の詞意は必らずしも解し易からず。往々其眞意眞趣のある所を解せずして謠ひ居る者を見る。此編「羽衣」以下三十八篇を通俗流麗なる文章を以て書き下し、何人も一讀して、一篇の要領と詞意とを諒解せしむ。此篇を讀んで而して謠曲に對すれば其妙味更らに舊に倍するものあらん。後編の出づるを待つて細評すべし。(定價貳圓)

▲士の經綸　箕作元八著　博文館發行

「西洋史新話」第三册として發行せられたるものにしてエパミノンダスとアゲシラオスとの暗鬪より說き起し、スパルタ會議の光景を細叙し、レウクトラ、マンチネイアの合戰等を詳述せり。西洋史のオーソリチーたる箕作博士の此好著は何人の愛讀をも要求する價値あれども、只卷中の小題の「經國美談」的なるは何となく古臭き心地す(定價八十五錢)

▲血戰　本間陸軍歩兵大尉著　東亞堂發行

旅順攻圍軍に參加して惡戰苦鬪せる本間大尉の著にして、「此一戰」「肉彈」等に比して文學的ならざれども、眞率なる叙述は信を措くに足ることを感ぜしむ。(定價八十五錢)

▲心身鍛錬 靜坐內觀秘法

足立栗園著
東亞堂發行

靜座內觀法の理論、由來等を說述せるものにして、內觀法、靜座呼吸法、腹式呼吸等の人の心身に大功ある明かなる今日、心身鍛錬に志ある人の一讀に値すべし。(定價七十錢)

▲佛蘭西大革命

相杢太郎譯述
興文影堂發行

各學校の西洋史の教科書、參考書に使用せられつゝあるシュウイル氏の「歐洲近世史」の第三期「歐洲の政治革命及び歐洲の改造」と題する部分を譯出したるものなり。(定價六十五錢)

▲新譯演義三國志(上)

久保天隨譯補
至誠堂發行

毛聲山許正の「三國志演義」に憑據して邦文に譯したるものにして、舊譯に比して、現代向なるを採るべし。(定價一圓二十錢)

▲軍政改革論

西本國之輔著
興文館發行

西本陸軍大尉の著にして軍政問題の囂しき今日、一讀の要あり。(定價三十錢)

▲詳註夜船閑話

熊谷逸仙註
寶永館書店出版

本書は何人も知るが如く禪門の高僧白隱の筆に成るものにして、今日よりいへば彼が一種の神經衰弱症を患へて耆婆扁鵲も手を下すべくもなく見えたる折、洛東白河の山奧に白幽先生を訪ひ、それより得たる秘法の次第を敘せるものにて、氣海丹田の間に神を凝すとへるは即ち今の所謂腹式呼吸法ならずんばあらざるなり。只それ理は甚だ解し易しと雖も語は往々にして今人の耳に詰屈の感なくんばあらず、是が累を成して其理迄も亦幽妙、淺學者の齒牙を着くべからざるかの思あらしむる事、本書の普及に取つて頗る遺憾の事なりしが、今此詳註付きの好著出づるに至り、全く此感を一掃す、卷初の所感と附錄の「血液に付いて」は、共に註者の筆になる體育訓にて甚だ有益の文字なり、尙ほ附錄中に「錬丹秘要の一節」、「岸江小語の一節」、「安元法師養生歌」あり。皆救世の福音たるべし。(定價金四十錢)

▲大英國の教育

藤原喜代藏著
文教會發行

歐洲大陸諸國の干涉教育を取るに對して英國の自由教育主義あるは特色ある一旗幟を立つるもの、蓋し我國現在の教育制度は重に大陸特には獨逸のそれに倣へるも、主義としては各一長一短なくんばあらず　干涉主義は劃一主義にて家に不學の子弟なからしむるの點に力あるべしとはいへ、元々是れ薰蕕を一器に盛り、玉石を同架にして、其才の懸隔なからしむるもの、天才を育成し、器の大なるをば十分大ならしむべきの教育は之を自由主義、非劃一主義に求めざるべからず。全然これに倣ふべからずとするも、我の長所の存する所又其短所の伏す所なるを知らば、其處に彼の精神を參酌して共弊を幾分救ふの策に出でざるべからず。是れ模範を大陸に置くとするも一面亦英國教育の實際をも十分研究、調査せざるべからざるの理存す。只それ自由なり、從つて內容の調査は劃一主義の國のそれに比して複雜を極むる丈困難なるものあらざるべからず。藤原君は多年教育記者として教育の事には造詣あり、且つ努力旺盛極めて努力主義の人、外遊二年能く他人の難んずる所に精力を傾到し、仔細に觀察研究を重ね來り、滿嚢の材料茲に順序能く區分せられ組織せられ系統立てられて厖然的千頁に近き此大册子を成しぬ、全卷六大綱に

分たる、曰く、總論、曰く初等教育、曰く中等教育、曰く大學教育、曰く實業及藝術教育、曰く師範教育。更に附錄として教育學術諸團體の一項あり。教育行政家、並に實際教育家に取りて絕好の參考書たるを疑はず。(定價金三圓)

▲現代世界思潮　警醒社發行

世界に論爭の題目となれる諸種の社會問題に對する東西諸名士の說を蒐集したるものなり。(定價五十錢)

▲評釋伊勢物語　窪田空穗著　中興館發行

曩きに「新譯伊勢物語」を著はせる窪田氏の著にして評釋叮寧にして又剴切なり(定價八十五錢)

▲高田屋嘉兵衛言行錄　渡邊修二郎著　內外出版協會發行　定價三十錢

▲米國十大偉人(定價五十錢)　吉田公重編　東亞堂發行

▲頭山滿(定價四十五錢)　吉田俊男著　成功雜誌社發行

▲世界文豪讀書觀(定價三十錢)　高橋五郎譯　內外出版協會發行

▲霧積　小山內薰著　春陽堂發行

現代文藝叢書第十二編として發行せられたるものにして「霧積」「東京へ」「近所」の三篇を收む。何れも氏の才筆を見るべし。(定價二十五錢)



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

天賞印實用懷中時計

本堂歐米特派員特別監製新品



十八金側 十二サイズ斜子紙双中蓋付器械優美タマ（梨地側ハ本價ニ金貳圓増額）
スキン鍍仕上爪石入卷上弩其他上圖參照

甲種 價九拾五圓（惣押石 切天府）
乙種 價八拾圓（惣押石 切天府）
丙種 價七拾五圓（中石入 切天府）

同銀側 紙双片硝子共總 斜子本價ニ壹圓 梨地ハ五十錢増

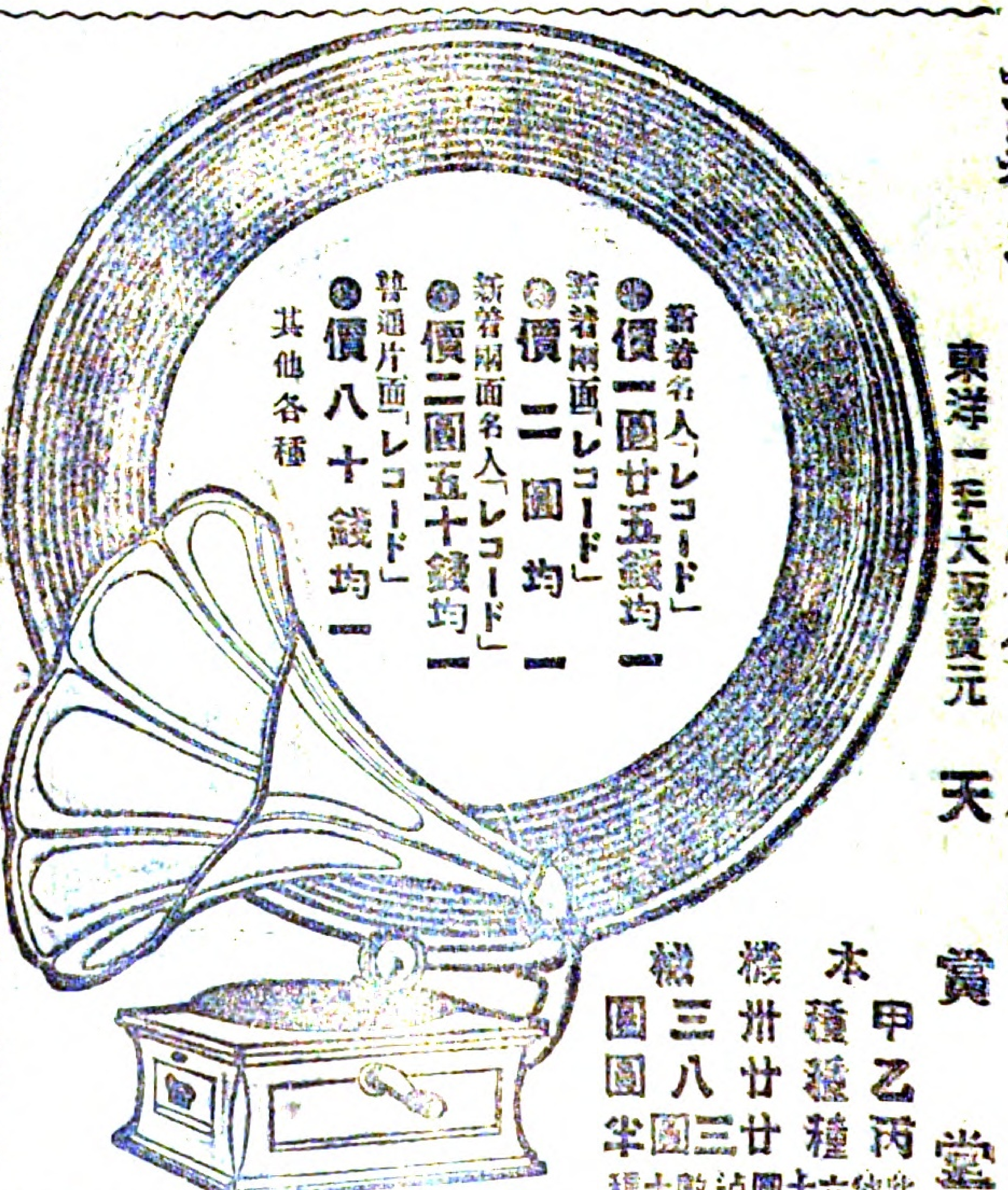
甲種 價拾八圓（惣押石）
乙種 價拾五圓（中石入）
丙種 價拾參圓半（十一石）（片硝子ハ本價ヨリ壹圓減價）

○各種共市外送料金十二錢

以上六種は歐米最近の流行と我邦時流の好嗜とを參酌し瑞西國著名のインバー時計會社に於て特別監製せる物にして外形の優美高雅なる、機關の精巧堅緻なる共に其比を見ず眞に理想的新形たり其指針盤面には商號TENSHODO（天賞堂）又器械にはINVAR（インバー）の銘標あり以て無數の類似品と甄別し易からしむ殊に本品は本堂の一手販賣に屬し今回第一回着荷せしを以て各種共貳拾ヶ年間の保存請合證書を添附し試賣の爲め個數を限り如上の特價を以て汎く頒賣するものとす冀くは愛顧諸君此機を逸せず速に高需の榮を賜へ

米國製最新式寫聲機着荷

東洋一手大販賣元 天賞堂



本機 機
甲種卅三圓
乙種廿八圓
丙種廿三圓半
此他六十圓迄數十種

東京市京橋尾張町二丁目（電話新橋特長三三、三四、三五三）
時計寶玉貴金屬商 美術品内外雜貨商
天賞堂本店

大阪市心齋橋北詰北へ入ろ南側
天賞堂大阪支店 ●電話番號南七三三

東京神田表神保町 電話本局二六〇 天賞堂出張所
横濱尾上町五丁目 電話八七六 天賞堂出張所

（中付の一）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此の廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

現代獨得の地理的活歴史

★史上偉人躍如として目前に顯る

熊田葦城先生著

川村清雄畫伯裝幀

▲好評如湧

最新刊

日本史蹟 大阪陣

菊判特製金字入美本
寫眞數百挿入
紙數五百餘頁

定價金貳圓

五萬部限

特價壹圓六拾錢

郵税内地拾貳錢清朝各三拾錢

徳川家康が難攻不落の大阪城を陷るや計畫慘憺を極め作戰苦心を盡す今古此辛辣の戰なく東西此悲慘の史なし本篇は地理と歴史を融和せる熊田先生獨得の快筆を揮つて其終始曲折を描寫して精采あり光燄あり老雄の面目生動し勇將猛士の苦衷活躍す殊に一々地理を精査して正確なる史實を湊合す三百年前の活歴史なると共に大阪に遊ぶ者の必携必讀の好案内記

★舊蹟古址數百の寫眞は印象殊に深し

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局三六六六 振替東京一七四四

(中付の三)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

鮫島大浪氏著

小說 追懷

定價金二十二錢
郵税金二錢

發賣元 麻布區霞町十四 (振替二一九二九) 好文堂書店

現代の若い女には恁うした秘密が有る——著者はある事實を捉えて其裏面を遠慮なく書いたのが本書である。

三版

鮫島大浪氏著

わかれたる女の日記

定價四十五錢
郵税四錢

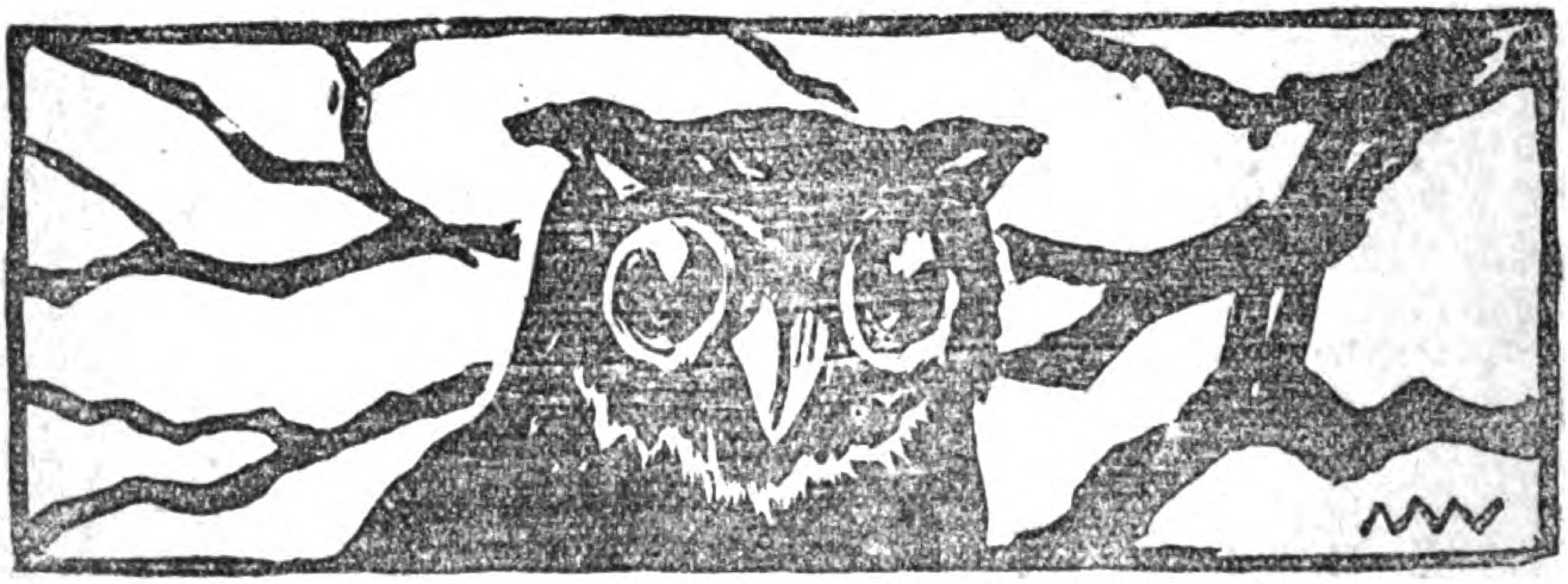
發賣元 京橋區西紺屋町 (振替一四七〇) 良明堂

これはある女の秘密日記。欺かざる自己告白です——其事實と謂ふ處に價値が有ります。

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

しほ子

森田草平



上

嘉久馬は病後の蒼白い顔をしながら、ふらりと病院の裏門迄戻つて來た。一寸散歩がてら新宿の通り迄買物に行つた歸途である。炊事場の前の井戸端て、一人の見習ひ看護婦が逞ましい腕を肘の上迄石鹼の泡に濡らしながら、ぢやぶ／＼と洗濯をして居るのを見て、不圖、此看護婦に訊いて見たらと云ふやうな氣が起つた。今朝から未だしほ子の顔を見ない。昨宵あんな事を言出しただけに、何うも氣に懸かる。途中もそればかり考へて來た。で、何氣なく二三歩行き過ぎて、振向きざま、

「井手さんは如何しましたかい」と云はうとしたが、何となく氣が咎めて口へ出ない。少時立つて見て居たが、看護婦は顔も上げず、何時迄もぢやぶ／＼

と遁つて居る。嘉久馬も思ひ切つて歩き出した。運動場の砂利の中に、五つ六つ飛び〳〵に咲いて居る蒲公英の頭を洋杖の尖で掘りながら行く。

玄關の前へ出ると、荷車の上に夜具を敷いたのが横附けにしてあつて、傍に丁髷の爺さんが一人草鞋穿きで立つて居た。と、奥の方から瘠せこけた女の患者が、寢卷の下に浴衣の襲着と云ふしどけない服裝をして、二人の看護婦の肩に捕まりながら、蟲の匐ふ樣にして出て來た。此女の顏は嘉久馬も偶に廊下で出逢つて見覺えがある。何でも新宿の女郎とか云ふことで、自分よりも一週間程後れて同じ肋膜炎で入院して來たが、其後段々病勢は募るばかりだと聞いたのに、最う諦めて出て行くものと見える。丁髷の爺さんに手を執られて荷車の上へ乘移ると、其儘夜具の中に仰向けに倒れて仕舞つた。顏の色が透通る樣に蒼白い所へ持つて來て、長い間剃刀を當てぬためか濃い兩の眉が一文字につゞいて、一寸見には凄い程美しい。何時の間にやら醫員や看護婦達が大勢玄關へ出て物珍らし相に見送つて居た。嘉久馬も其處に佇立つたまゝ見て居たが、不圖氣が附くと、急に氣耻かしいやうな心持がして、大勢の中を掻分けながら一人二階の病室へ駈上つた。

さのみ遠い路と云ふてもないが、綿入の上からぽか〳〵春の日光に照されたので、しつとりと脊中に汗掻いて、いやに氣味が惡い。て、部屋へ這入ると、直に窓の側へ行つて硝子戸を押上げた。生暖かい風がカーテンを帆の樣に孕ませながらすーつと吹込んで來る。其儘窓の柱に凭つかゝる樣にして、少時立つて居た。

間もなく、がち／＼と砂利の上を軋る車の輪の音が下から聞えた。嘉久馬は眼を上げて、表門の方へ出て行く荷車の後影を見送つた。それが見えなく成ると、急に窓の戸を下して、背後を向けながら部屋の中を見廻した。

最う明日は自分も此部屋を出て行くのだ——三月餘り明け暮れ寐起きした此部屋を。

こんな考へが嘉久馬の心の中に湧いた。あの女と自分とは、一週間許り前後して、同じ病氣で入院したのだが、あの女は彼様して愈々容態が惡く成つて死ぬ積りで出て行くのだと云ふのに、自分は兎に角一通り病氣も癒つて、元の身體に成つて歸つて行く。これが當り前なら、是程目出度いことは無いのであらう。が、一たび八王子の自家の事に考へ及ぶと——家附の妻の亂行とそれを庇ひ立てするやうな姑の心根と、主人て有りながら主人甲斐もない自分の不甲斐なさに思ひ及ぶと——あの女と自分と何方が不仕合せか分らない。思へば、此正月肋膜炎の症候が有ると云ふので、此病院へ釣られて來た時は出入の者と下男との外に隨いて居る者もなく、其後も誰一人見舞ひに來るてはない。一時危篤に陥入つた時も、始終傍に居て呉れた者は矢張擔任の看護婦一人てあつた。其看護婦の眞心から出た介抱の甲斐あつて、漸く生命も取留めた。だん／＼快方に向ふに伴れて、自分の心は次第に其女から離れられなく成つた。傍に居る時は勿論、傍に居ない時ても、自分の心は始終其女の行く所へ行つて居るやうな氣がした。最早自分は其女を離れて自分の未來を考へることは出來ない——

其女の名は、井手しほ子。いよ／＼退院の日が極つた昨夜に成つて、嘉久馬は到頭心の中をしほ子に打

明けた。八王子の家の亂脈はかね〴〵話した通りである。それを思ふと、自分は二たび養家へ歸る氣はない。殊に此病院へ來て、たとへ百日足らずの間でも、暖かな人情の籠つた手に看護られる嬉しさをおぼえては、二たび彼の荒んだ陰氣な家へ歸つて行く氣には成れない。て、しほ子さへ承知して吳れるなら、自分は此儘自家へ戾らないても可い——二人て行ける所迄行つて仕舞ひたい——と。

しほ子は只默つて聽いて居た。返辭のないのは不承知かと訊ねても、いよ〳〵俯向くばかりで物を言はぬ。それぢや、家を捨て妻子を捨てゝ、他し女と一緒に走らうと云ふ自分を見下げ果てた男と思つてか、それなら其樣に明らさまに言つて吳れと迫つた時、しほ子は膝を見詰めたまゝ、口の中て、何卒明日の朝迄返辭を延ばして吳れ——今夜一晩落着いて考へたいからと、途切れ〳〵に言つた。

「ぢや、明日の朝迄？」

「えゝ、屹度——」

しほ子は堅く點頭いた。男が落膽した樣に眼を瞑つて枕の上に頭を落すと、少時其顏を見詰めて居るやうてあつたが、つと立上つて、つか〳〵と廊下の外へ出て行く。眼を開いた時には、最う女の姿は重い扉の蔭に隱れて見えなかつた。

嘉久馬は其時の光景をまざ〳〵と眼に見る樣に思つた。それ限り女は顏を見せない。明日の朝と云つた今朝に成つても——午前の回診の時にも、外の看護婦が代りに來て、到頭しほ子は顏を出さなかつた。如何したのか、何と思つて居るのか——しほ子は何を爲て居るのだらう。

嘉久馬は背後から突飛ばされた様に窓際を離れた。いきなり入口の扉の所へ行つて、把手に手を掛けたが、又思ひ返して部屋の中央迄戻つて來た。そして、寢臺の端に腰を卸したまゝ、がつくりと仰向けに倒れた。天井も眞白に見える。四圍の壁も眞白に見える。毛布も藁蒲團も、何も彼も眞白な中に、自分一人が手も足も眞黑な様に見える。

併し自分はあの女にわれから罪の子に成れと迫つて居るのではないか——妻ある男と通ぜよと。

嘉久馬は自分で考へて自分でひやりとした。勿論、自分では妻が有らうとも家が有らうとも思つて居ない。そんなものは自分には無い。况してこれから家を捨て妻を捨てゝ出て行く者に、そんなものゝ有らう筈がない。其間の苦しい事情はしほ子も知つて居て呉れる。知つて居て、同情して呉れるものと思へばこそ、今度の様な事も言出して見たのだけれど——自分には、最う此上考へる力も如何する力もない。

ぐるりと寢返りを打つたまゝ、嘉久馬は靜平と身動きもせずに居た。半時間程經て、むつくと頭を上げたが、敷蒲團の上を手探りにニッケル側の懷中時計を引寄せて針の在所を見定めた。それから急に遽て出して枕元の小さい卓の上から水藥の瓶を取つて、二三度横に掉りながらごく〳〵と飲下した。そして目の前に飲み差しの瓶を持つて來て、日光に透して見て居たが、やがてそれを元在つた卓の上へ返さうとして、不圖、其處にある散藥の袋の下に、一封の手紙の人目に觸れない様にして置いてあるのが眼に留つた。一目見たばかりて、わな〳〵戰へながら手に取つて見ると、上書は只「成瀨様」とのみ、裏返して

見ても差出人の名は書いてない。くわつと逆上るやうな心持がして、眼を瞑つたまゝ、いきなり封を切つた。二三十行は電光の様に眼を走らしたが、つと手紙を抛り出したまゝ、枕の上に俯伏せに成つた。

少時して、嘉久馬は二たび前の手紙を取上げた。又、最初からそろ／＼と讀み直して行く。

宥して下さいませ。嘉久馬さま。何事も私が惡う御座いました。貴方の御口から今夜の様な言ひにくい事を云はせたのは悉皆私です、私が云はせたので御座います。私は貴方の前に坐つて、貴方の御聲を聞きながら、お言葉の一つ／＼が悉皆私に代つて云つて下さるやうな氣がして居ました。私の心が貴方に通じて、私に代つて云つて下さるのだと思つて居ました。如何云ふものか、始めてお目に懸つた時から他人の様な氣がせず、外の人達の分迄引受けて、成べく御側に隨いて居る様にしました。一時大變お惡く成つた時なぞ、女の眞心を盡すのは、かう云ふ時を措いて外にないと、私は結句嬉しい様にも思ひました。それでも一心が屆いたと見えて、だん／＼御身體が恢復するにつけ、私の心は――今から思へば、私は其時分から今日あることを心の中で願つて居たに違ひない。今日の様なお言葉を頂く日を今日か明日かと待つて居たに違ひない。私はそんないたづら女で御座いました。何卒お宥し下さいませ。それ程思つて居ながら、愈々今日の様なお言葉を伺つても、直樣「はい」と申上げることも出來ず、一時逃れの事を言つて下つて參りました。私の苦しい胸の中を思ひ遣つて下さいせ。あれから――私は夢中で自分の居間へ走せ戻つて、朋輩が出て居ないのを幸ひに、窓の側へ椅子を引

寄せて坐つたまゝ、一人で泣けるだけ泣いて居りました。窓の硝子越しに凝乎と戸外の闇を見詰めて居ると、ほろ／＼と涙が出る。幾許拭いても拭く後から又留度もなく出て來る。私は何時間位泣いて居ましたらう。左樣して居る間に、だん／＼涙も納まつて、大風の吹いた後の樣に心も落着いて參りました。私はいよ／＼筆に書いて御返辭をいたすことに決心しました。夜は最う一時を過ぎて居ますが、夜が明けても書いて仕舞ふつもりで御座います。それにしても何と書いたら可いか、何と書いたら私の心が通じやうか。私は最う云ふことも書くことも知らない。

只一つ——生れて二十六年の間、誰にも云はず、私一人の胸の中に秘めて來たことがある。私の身の上については、たび／＼お話もしたし聞いても頂いた。あれが間違ひだと云ふのではない。あれが間違ひてはないけれど——あれだけ打明けながら、如何しても打明けて云へなかつたことが一つある。今は思ひ切つてそれを云ひますから、何卒それを私の返辭だと思つて下さいませ。そして、何事もひろい御心に思召し宥して下さいませ。

私は信州飯田のもので御座います。これは幾たびも御耳に入れたこと——生れは飯田ですが、育つたのは父の生れ故郷、美濃の國境で石山と云ふ山の奥の小さな村で御座いました。其處に十五の春迄居つたのです。人傳に聞いたのですから能くは分りませぬが、父は近在の名主の家から母を娶つて間もなく、親類中の留めるのも肯入れず家屋敷を稻んで、飯田の街へ出て宿屋を開業したと云ふことでした。慣れぬ業とて、最初は側の人達も危ぶんだが、とん／＼拍子に都合好く運んで、家業は日増しに

盛大に成つて行く。一時は諸國にも名の聞えた旅館の一つに成つた相で御座います。それなら申分は無いやうなものですが、内向きが樂に成るに伴れて、父はそろ〳〵地金を出して、母が參つてから暫らく愼しんで居た放蕩を二たび始める樣に成りました。一つは母が始終病身であつた所爲も御座いませう。それにしても、私が母の胎内に宿りました頃は、妾宅の三軒も有つて、父は殆ど自宅へとては寄附かず、店の事は一切孱弱い母が女の手一つに切廻して居たと云ふことです。そんなこんなで心を痛めた爲か、私が生れる時は、それでなくとも初產の生命にも係はる程むづかしく、やう〳〵身二つに成つてからも、長らく病院へ入つて居たさうな。それから一家の運の廻合せが惡く成つたと見えて、稼業も思はしくなかつたのか、同じ年の冬、折角賣込んだ旅館も他人に讓つて、二たび生れ故鄕の石山へ引込むことに成りました。

私の物心が附いてから、おぼえの有るのは、此石山の家で御座います。何でも一旦人手に渡つた屋敷跡を買戻して、新に普請をしたとやらで、ひろい地面の片隅に軒の低い瓦葺の小家が建つて居ました。其小家の中に、私は父と母と、町から隨いて來た跛の乳母との四人で、他所目にも寂しい月日を送つて居ました。私が知る樣に成つてからの父と云ふものは、年中むつつりとして、無口な、笑ひ顏一つ見せたことのない人でした。用事の外には、誰とも口を利かないが、殊に母とはついぞ談話をしたのを見たことがない。母の方でも、父の前へ出ると、ちり〳〵して小さく成つて居ました。尤も、家事向きの事は母が取賄なつて居ましたが、年の暮と盆との二季に極つた額の小使ひ錢を渡されるだ

けて、其後は幾許差迫つた入用があつても、一切構ひ附けられない。それが爲に母は何れだけ泣かされたか知れないと云ふことです。父はと云ふと、一間に閉ぢ籠つたまゝ、朝から晩迄錢勘定ばかりして居ました。そして、食事も居間へ運ばせてする。其後で、毎時私と乳母とが一緒に喫べましたが、母は如何しましたらう。私は一度も母が膳に向つたのを見たことがないと云つても可い位でした。私の母はそんな可憫相な人でした。始終おど／＼して眞當面に相手の顔さへ見ることの出來ない――何か知ら目に見えぬ黒い影に惱まれて。それを避けやう／＼として居るやうな人でした。勿論、父は私に向つて優しい言葉一つ掛けて呉れたことはない、が、母にしても――そんな事を云つたら不思議に思召すかも知らぬが、私は嘗て一度も――あゝ唯一度有りました、後にも前にも其時を外にして――母の手に抱いて貰つたおぼえが無い。それで居ながら、如何かすると私一人遊んで居る所へ來て、頭の上から凝乎と私を見守つて居ることがある。そんな時には、私は顔を上げて見ないでも、母の悲しさうな、遣瀬の無い眼元をまざ／＼と目に見て居ました。て、怺へられなく成つて、わつと泣出しながら抱附かうとすると、母は顔を背向けたまゝ、兩手で抑戻して、其儘ずつと向ふへ行つて仕舞ふのが常でした。そんな事が度重なると、子供心にも、其裏には何か深い譯があるやうな氣がして、だんだん母の後も追はなく成りました。かうして私は兩親の愛と云ふものを知らずに育つたので御座います。それで頼む木陰と云へば、生れた當座から世話をして呉れた乳母の外にない。乳母一人を杖とも柱とも――何事ぞあれば袖の下に隠れる樣にして、やう／＼生きて來ましたが、其乳母とも別れなけ

れば成らぬ日が參りました。

恰度、私が七歳の時てした。委しい譯は知りませぬ。乳母は眼を泣き脹しながら、一人て行李を縛つたり、大きな風呂敷包みを拵へたりして居て、私が側へ行つても毎もの樣に相手に成つて呉れません。如何したのか訊いても返辭もいたしません。そして其行李や風呂敷包みを持出して、一寸母に挨拶したまゝ、とつとと出て行くのてす。これは屹度置いて行かれるのだと思つたから、私は一生懸命に後を追はへました。泣いて〳〵、誰が何と云つても肯かなかつたことを今ても おぼえて居ます。て、乳母も止むを得ず脊中に私を負つて、村境の崖下の地藏尊迄行つて、其處に私を遊ばせて置いたまゝ、何時の間にやら姿を隱して仕舞ひました。私は一人て泣きながら、何時迄も〳〵其處に待つて居ました。日が暮れて寒い風が吹出しても、自宅へ歸らぬので、村の人に連れに來て貰ひましたが、明くる日も同じ所へ行つて見ました。其明くる日も行つて見ました。が、乳母は其儘とう〳〵歸つて參りませんてした。

それからと云ふもの――私の家には最うかけら程の火の氣も殘つて居ない。父は相變らず澁面をつくつて居る。母は母て、始終おど〳〵しながらやう〳〵其日々々を送つて居る。只一人私のために袖垣と成つて、椽の下から吹上げるやうな冷たい風を防いて呉れた乳母も居なく成りました。私のたよる所は一つもない。餘り堪へられない時には、そつと家を脱け出して、例の崖下の地藏尊へ行き〳〵しました。子供心に、其處に待つてさへ居れば、何日かは乳母が會ひに來て呉れるものと思つたので

御座いませう。たび〳〵其處へ遊びに行く間には、途中で不圖畑を見廻りに出た父と行き逢ふとも有りました。そんな時には、私は遽て丶路傍の茨の蔭などに隱れて遣り過すのが常でした。先方ではそんな氣も附かないのか、兩手を背後で組んで、一足毎に頭を右左に向けながらのそり〳〵と行く。私は一生懸命に息を凝らしながら見て居ました。あの身丈の高い、面長な、ところ〳〵頸筋に斑の入つた老人が――あゝ、父は未だ老人と云ふ年配ではなかつたのですけれど――ふいと私の隱れて居る草叢へ目でも附けやうものなら、私は今にも捕つて喰はれるかと思ふ程怖がつた。これは何日からとも分らない――何日からとも分りませぬが、だん〳〵物心の附くに伴れて、私は此人から可愛がつて貰へぬばかりではない、如何かすると憎まれて居る――と云ふやうな氣がして參りました。時には本當の親子ぢやないと云ふやうな――

　そんな中にも、月日に關守なく、私は九歳の春を迎へました。此歳迄學校へも上げずに打捨つて置かれたので御座います――尤も、田舍では珍らしい事でもないのですけれど。で、村の小學校へ通ふ樣に成つてからは、いくらか日蔭の蔓が日向へ出されたやうな心持もしましたが、それもほんの學校に居る間だけで、私どもの單調な生活には何一つ變つたこともない。家の中に籠つた空氣はだん〳〵陰氣に成つて、だん〳〵息苦しう成つて行く。殊に母は兩の肩に脊負つた重荷に堪へないで、年々前へ屈んで行く樣に見えました。私と母との關係程不思議と云へば不思議なものはない。母はつとめて私を避けやうとする、手さへ觸れまいとする、時には本當に私を憎んで居るのぢやないかと思はれる

やうな事もある。それで居ながら、私は母が心の底で私を愛して居るのだ――私一人を手頼りにして居るのだと云ふことを信じて疑はなかつた。夕暮れ時、うそ寒い臺所の板の間に、二人目を見合せながら默つて坐つて居ると、私は何とも云はれぬ悲しさが込上げて來て、

「阿母さま、何故そんな悲しい顏をして被坐しやるの」と訊いて見たかつた。

それでも返辭をしないなら、

「何故、何うして私達はこんなに――」と、畳みかけて訊きたかつた。

あゝ、「何故」と云ふことゝ「何うして」と云ふこと位、少さい時から私の胸に喰入つて、私の心を惱ましたものはない。それでも――それ位に思ひながら、私は一度も面と向つて訊くことを得せなんだ。何時かは母の方から打明けて呉れるだらう、そしたら私は私で心の中に思つて居ることを云つて仕舞つて、二人とも心底から打解ける日が來るだらうと、そんな當にも成らぬ事を心頼めにして――

ある日學校から上つて來て、そつと自分の居間へ入らうとすると、急にどさ／＼と襖にでも突當つたやうな物音がして、ひ――と云ふ女の泣聲が聞えて參りました。私は吃驚して少時聞耳を立てゝ居たが、何うも泣聲が母らしいと思つたものですから、前後の考へもなく奥の間へ飛込んで行きました。見ると、父は拳を握つたまゝ室の眞中に突立つて、其足許に母が泣倒ふれて居るのです。二人とも何か言ひたさうにしながら、相手の氣合を計つて物を云はぬ。私は只飽氣に取られて、片身代りに二人の顏を見較べた。私の顏を見ると、父は見る／＼眞蒼に成つて、二歩三歩踉蹌きながら背後へ下

つた。私には何事とも解らない。解らない儘に、わつと聲を立てながら、母の背中に取縋つた。「おしほか」と云つて、母は矢庭に私を抱寄せたが、兩手で引抱へたまゝ、つと立上つた。そして逃げる樣に其室を出て、私の居間へ連れて來た。其處で、膝の上へ私を抱上げながら、何時迄も泣いて居ました。私は此時始めて母に抱いて貰つたので御座います。母の膝に抱かれながら、私も一緒に成つて泣いて居た。併し何時迄經つても母は何とも言はない――恐らく何とも言へなかつたので御座いませう。私も何んとも言はなかつた。「何故」とも「如何して」とも訊かなかつた。最う訊かなくとも可い、訊かなくとも解つてるやうな氣がしたので御座います。少くとも訊いては惡いやうな氣がしたので御座います。昔から不仕合な家に生れた子供は、そんな智恵が早く附くと申しますが――私も其一人で御座いました。

明くる日から又元の通りで、別に變つたことも有りませぬ。只、畑中の小徑などでは、ふつつりと父の影を見掛けぬ樣に成りました。尤も、そんな事に氣が附いたのは、三箇月も經つた後のことでした。そして、其の頃には本當に床を離れられぬ身に成つて居たのです。私は日頃病氣なだけに、父よりも母の方を案じて居ました。私を生む時にも殆ど死にかけたと云ふことですし、それからも始終あゝでしたから、左樣思ふのも無理ではありますまい。ところが俄に父の方がいけなく成つたので御座います。左樣成つてから、母は父の居間に附き切りに附いて居ましたが、父の方では母が其處に居るかとも思つて居なかつた樣でした。寢返り一つ打つにも他人手を借りる身に成つて居ながら、未だ自

分の身の廻りの事だけは自分一人で爲やうとする。で、如何も成らぬ時には、「乳母や」と、嗄れた、併し底力のある聲で喚ぶのが常でした。あゝ、未だお話することを忘れましたが、父がどつと床に就く様に成つてから、大工の兄の家に食客つて居た乳母を二たび喚び寄せて面倒を見て貰ふことにしたので御座います。そんな時には、私は窃と乳母の背後に隠れて父の臥て居る座敷の椽側迄行つて見ることが有りました。一度怖々ながら座敷の中を覗き込むと、壁に片寄せて敷いた薄團の上に、眼が落ち凹んで、鼻の尖がつた、全然色の黒い人形の毛を引毟つたやうな病人が仰向けに成つて臥て居るので御座いませう——私はきやつと云つて飛び退いた。そして其邊の戸や障子に突當りながら戸外迄逃出したので御座います。私は一生の間に、あんな怖ろしい相恰の變つた病人を見たことがない——

半年許り煩つて居て、父は到頭此世を去りました。長の看病の勞れと、それから十年此方張詰めて居た氣の弛んだ所爲か、母は一時失神したやうな狀態に陷入つて、お葬式の日にも、何が何やか分らぬやうな風でした。村の中には、昔から親類が幾軒もありましたが、いづれも父の生前中往來をしなかつたので、父が死んだと聞いても集つて來ない。やつと乳母が一軒々々に賴んで歩いて來て貰ひました。がや〳〵と打揃うて遣つて來て、わめいたり怒鳴つたりしながら、何うやら斯うやら野邊の送りも濟まして呉れました。其跡片附けやら何やらで、二三日は大勢集つて飲み喰ひして居ましたが、やがて一通り濟んだと見えて、大波の引いた様に歸つて行く。

私達は又女三人に成りました。一週間許りで母の痲痺狀態は去りましたが、始終うつら〱として、一向私達に話を仕向けるヿもなく、暇さへあれば寺參詣をして居ました。偶に後から隨いて行つて見ると、眞直ぐに本堂へ上つて、がらんとして人氣のない勾欄の前に坐つたまゝ、一時間でも二時間でも額づいて居る。私が側へ行つても、全然氣が附かない。そして、入相の鐘の鳴る頃、口の中で念佛を唱へながら、とぼ〱と野中の徑を歸つて參るので御座います。それを見ると、私はたび〱何とも云はれぬ奇異の感に打たれた。あゝ、母は亡くなつた父を思つて居る――生前あれだけ酷い目に遭ひながら、矢張母は心の中で亡父を愛して居たに違ひない――

ある日、母が寺詣りに行つた留守の間に、私は乳母を手傳つて、二人椽側で日向ぼこりをしながら、里芋の皮を剝いて居りました。三年前には、此の世に乳母さへ有つたら何も要らぬと迄思ひましたが、今は左樣も行かない。兎もすれば、私の心は側に乳母が居ると云ふことさへ忘れ勝ちに成つて行く。すると、不意に先方からこんな事を言出したので御座います。

「おしほ樣、お前さまは亡く成つた先の旦那を何と思つてぢやなも」と。

私は只相手の顏を見返した。少時して、

「何と思ふかつて、如何?」

「本當の阿父樣ぢやと思つてかなも。」

私は只默つて居ました。無敎育の女は、何の顧慮もなく、やす〱と一大事を打明けたので御座い

ます。乳母の云ふ所に據れば、父は戀女房として母を貰つた。一人の女の兒ではあるし、他所へは出したくないと云ふのを、强つて連れて來たので、其當座は一にも二にも母で無うては氣に入らず、近所の目に立つ程仲の好い夫婦で御座いましたさうな。が、それも慣れゝば何とやらで、一時飯田へ出て旅館を營んだ頃には、妾の三人も圍つて置いて、內を外の放埒三昧――其間に私が出來たので御座います。他人から見れば、別に不思議はないやうなものですが、一人晴れ遣らぬは父の胸の中でした――如何しても私と云ふものゝ出來る筈がない。それ程父は母を打捨つて置いたので御座います。勿論、幾許打捨つて置かれたとて、そんな大反れた事を仕出かすやうな母ではない。そんな母ではないが、事實は事實である――如何することも出來ない事實である。父は惑ひもし疑がひもした、果ては氣も狂はむばかりに走り廻つた。卽座に三人の妾も放逐した。併し如何しても母を離別する氣には成れない、又、此儘同棲する氣にも成れない。其間、母は病院で死にかゝつて居たのです。父の顏を見るたび、只宥恕を乞ふやうな眼元で見詰めながら、何とも言はない――そして日に〳〵衰へて行く。それを見ると、父の心は尙更極まらない。左う右うする間に、私が生れたので御座います――迚も助かるまいと思つたのが、母子とも不思議にだん〳〵肥立たので御座いますさうな。て、一旦自宅に引取りましたが、こんな事は人の口端にかゝり易いものと見えて、彼處の家に今度生れた子は主人の本當の子ではない。何時ぞや縣廳の役人が出張して來て長く逗留したことがあつたが、旅のつれ〳〵の出來心から、ある夜若い主婦さんを捕まへて無理無體に手込めに合せたさうな。大方其時に出來た

罪の塊だらうなぞと云ふ噂が立つた。それが父の耳に這入つた時には最う堪らない。俄かに一家を纏めて、山の奥の生れ故郷へ上げ越すことに相成りました。それから後の事は二たび繰回す迄もありますまい。只、父は到頭母を離別しなかつた。そして、私も――私も側に置いて呉れたのであります。

あゝ、私は父の子ではない。井手の家に對しては、何一つ要求する權利のある者ではない。が、それを聞いても、私は格別驚きもしませんでした。如何かすると、そんな話は前から知つて居た――前から自分の思つて居た通りだと云ふやうな氣もして、靜平と俯向いて八ッ頭の皮を削りながら、お終ひ迄乳母の話を聞いて居りました。

併し夜に入つて床に就いてから、大變魘されたことを今でも覺えて居ます。今思つても病院の一室に抑臥したまゝ、身と心との懊惱に勞れて、一刻々々死を待つて居る若い母の姿がありありと眼に浮く。私は其母の胎内に居たので御座います。あゝ、私さへ無かつたら――切めて生れぬ前に死んで呉れたらとは、父も思ひましたらう、も母――母も思つたに違ひない。私はかうして生みの母に迄呪はれながら此世へ出て來たので御座います。私が初めて此世の光に觸れた時、父は何んな憎しみの眼で私を見ましたでせう――其憎しみは父の死ぬ迄つゞいた。母は母で、私の顏を見るたび過ぎ去つた夜の怖ろしい夢を思出さずには居られなかつたでせう。一家の災禍を齎したものは私でした。私の身體の中に災禍の原因が結晶して居るので御座います――あゝ、私は最う堪らない。

父――私の肉體と生命とを與へた父については、一度も考へて見たことがない。何處の誰でも可い、

生きて居ても死んで居ても構はない。私とは他人です――未來永劫他人です。

嘉久馬樣、私が貴方に打明けると云つたのは、これてした。これを打明けた上は、後は大急ぎて書いて仕舞ひます。父の一周忌が過ぎて、間もなく母は父の後を追ひました。生きて居る間から、殆ど死んだも同樣てしたから、これには別に變つたこともない。只、私もこれて此の世の中に一人ぼつちの孤兒と成つたのて御座います。それに別段貯へとてもない。父は生前錢勘定ばかりして居た樣ですが、死んだ後て金櫃の中を検べて見ると、これと云ふ程の纏つた金子はなかつた相てした。て、外に手頼る所もありませんのて、暫らく乳母の兄の家に厄介に成つて居ましたが、十五の歳に縣立病院看護婦見習生の募集に應じて、長野の市へ出ました。ずつと其處に續けて勤めて、此方へ參つたのは一昨年の暮て御座います。

私が看護婦になりましたのは、只女一人獨立して行かれるやうな活業をおぼえましただけのこと。女の身て獨立などと申しましたら生意氣なと思召すかも知らぬが、私には此外に仕樣がない。一旦父母の秘密を知つてから、私の父母を見る眼は變りました。それに伴れて、世間を見る眼も變りました。私は長い間――晝も夜も――堅い、堅い覺悟をして參つたのて御座います。それが貴方のお目に懸つてからぐらついた――ぐらつきながら、なほ御意に從はれない譯は、委しく申さずとも、私が貴方の前に打明けた身の上て察して下さいませ。そして、私の事は何卒此儘これ迄通りにして置いて下さいませ。

何時の間にやら夜も明けました。長い手紙も此處で筆を擱きます。何卒御覧に成つ上は、人目に觸れない樣に火中して下さいませ。そして、私の事は其儘忘れて頂きたいなぞとは申しませぬ。不躾ながら、切めて御心の片隅になりとも、何時迄もおぼへて置いて下さいさせ。そして、折節はこんな女も有つたかと想出して下さいませ。

私は此命のある限り貴方のことを忘れませぬ。左樣なら――嘉久馬樣、左樣なら。

四月廿三日夜の明方

しほ子より

成瀨嘉久馬樣

御前に

嘉久馬は最後の一句に眼を留めたまゝ、凝乎と考へて居たが、やがて兩手て長い文殼を懷の下へ掻寄せる樣にして、がつくりと頭を枕の上へ落した。顔の色は水ても浴びた樣に眞蒼である。

下

午後の廻診の時間が來た。嘉久馬はそれ迄寢臺の上に俯伏せに成つたまゝ、身動きもせずに居たが、急に起上つて耳を欹てた。ぞろ／＼と醫員や看護婦の廊下を歩く足音がして、此方へ近附いて來る樣子

てある。不圖、それが止つたかと思ふと、一つ置いて隣の病室へ這入つた。

あゝ、しほ子が居る、彼の中にしほ子が居る。嘉久馬は何がなしにそんな氣がした。今に此部屋へもしほ子が遣つて來るかと思ふと、譯もなく胸が轟いて、そつと懷の上に手を當てた――しほ子の手紙の這入つて居る懷の上に。併し此部屋へも來て呉れるだらうか――此手紙を讀んだと知りながら、此部屋へも遣つて來るだらうか。午前の廻診の時には代りの女を寄越して顏を見せなかつた。併し現に隣の部屋迄來て居るものが――

又、どや／＼と足音がして、直ぐ隣の病室へ這入つた。何かの拍子に、不圖、しほ子の聲がした。嘉久馬は懷の手紙を手文庫の中へ隱さうとして立上つたが、それを聞くと、急に足が立縮むやうな心持がした。二たび聞えるかと思つたが、最う聞えない。そこへ一人の若い看護婦が入口の扉を開けて、

「あら、起きて被坐しやるのですか」と云ひながら這入つて來た。そして、其邊を取片附けて副院長を待受ける用意をした。嘉久馬は寐臺の上に仰向けに成つて、つとめて平氣な顏を裝つて居た。

やがて、四五人の醫員や看護婦がどや／＼と這入つて來た。副院長は眞先に立つて、にこ／＼と笑ひ掛けながら、

「成瀨さん、今日は如何ですかな」と、側へ寄つて脈を取りにかゝつた。嘉久馬は副院長に左の手頸を任せながら、そつと背後に立つて居るしほ子を見た。しほ子は身丈のすらりとした、色の淺黑い女であつた。二人の眼が合ふと、しほ子は一寸不安相な色を見せたが、直に又元の引緊つた顏色にかへつ

た。嘉久馬は戸惑ひしたやうな心持がして、眼を反した。

「これぢや、お花見が出來ますね」と冗談を言ひながら、副院長は嘉久馬の手頸を離して、衣嚢から聽診器を出しにかゝつた。それを見ると、しほ子は嘉久馬の側へ寄つて寐卷の胸をひろげた。大きな手てはあるが、其指が極めて長い。それから體溫表を取つて見せたり、病床日誌に記入したり、一人で甲斐々々しく働いた。只、最後迄一言も口を利かなかつた。そして、副院長の後に隨いて出て行つた。

皆衆の出て行つた後で、嘉久馬は一人仰向けに成つたまゝ、眼を閉ぢて居た。やゝ有つて、不意にむつくと起上つたが、手文庫から前の手紙を取出して來て、一語づゝ寐ながら讀み返した。長い、長い間かゝつて讀み返した。春の日永の太陽もやう／＼西に傾いて、何處からともなく櫻の花瓣がひら／＼と窓を掠めて散つた。一片、又一ひら――

其時、音もなく入口の扉が開いて、しほ子が窃と顏を出した。外に誰も居ないのを見定めて、室の中へ身體を入れて扉を閉めやうとした時、

「井手さん」と、大きな聲で喚ばはりながら、廊下を駈けて來るものがある。しほ子は把手を握つたまゝ思はず顏を蹙めた。

「井手さん、何處に被坐したの――他人がこんなに搜してるぢや有りませんか。」

後から來た看護婦は室の中へ這入ると、しほ子に向つて、突然左樣云つた。

「何か用てしたか。」

「えゝ、用ぢや有りませんが——用の無い時、井手さんの側へ行つちや惡いんですか。私の方で會ひたくて〳〵仕樣のない時にも——」

「まア如何しませうねえ」と、しほ子は爲う事なしに笑ひながら、「何卒、何時でも被入して下さいませ。」

「だつて——成瀬さんに御用が有るんぢやないの。御用が有るんでなけりや、私も些との間話して行くわ。」

「何卒」と、しほ子は二たび頭を下げた。

嘉久馬は二人の話聲を聞いて、漸くわれに歸つたが、そつと手に持つた手紙を懷へ隱して、

「さ、此處へお掛けなさい」と、椅子を差出しながら、自分は二たび寐臺の上へ這ひ上つた。椅子は一脚しかない。

「井手さん、お掛けなさいな。」

「まア貴方から——」

「私は此處で可いのよ」と、一人の看護婦は寐臺の端に腰を掛けながら、「今朝のお女郎は如何しましたてせうねえ。最う自家へ着いたてせうか。」

「何かい——ありやア如何したんてすかね」と、嘉久馬も返辭の仕手がないので口を挾んだ。

「えゝ、何ても栗橋在のものてすとさ。隨分流行つたお女郎だ相てすけれど、あんな病氣に成つたら

のてすから、迚も癒らぬものと樓主の方でも見込みを附けて、證文を捲いて遣つたんですつて――それて、身體だけ連れに來いと云つて遣つたら、阿爺さんがわざ〳〵荷車を引いて迎ひに來たんですつて――隨分可憫相てすわね。」

「ふむ」と、嘉久馬は思はず溜息を洩らした。少時して、「何てすかい、そんなに惡かつたんですかね。」

「えゝ、最う不可ないでせう。醫局では、栗橋迄歸る間保たないだらうと云ふ話てしたよ。」

嘉久馬は返辭をしなかつた。三人とも少時默つて居た。そして、三人とも別々の事を考へて居た。

「あら、誰か喚んでるよ」と、其看護婦は急に耳を欹てた。「私ぢやないか知ら」と立上つて、入口の扉を明けて覗いて見たが、「左樣なら、お喧ましう」と云ひながら、ばた〳〵と廊下を駈けて行つた。

後は二人と成つた。二人とも、又少時何とも言出さなかつた。

やゝ有つて、しほ子は椅子を離れながら、「今朝の――今朝の手紙を讀んで下さいましたか。」

嘉久馬は枕の上へ俯伏せに成つたまゝ、微に點頭いて見せた。

「あれで承知して下さいましたでせうね。私の心の中も――お分りに成つたて御座いませうね。」

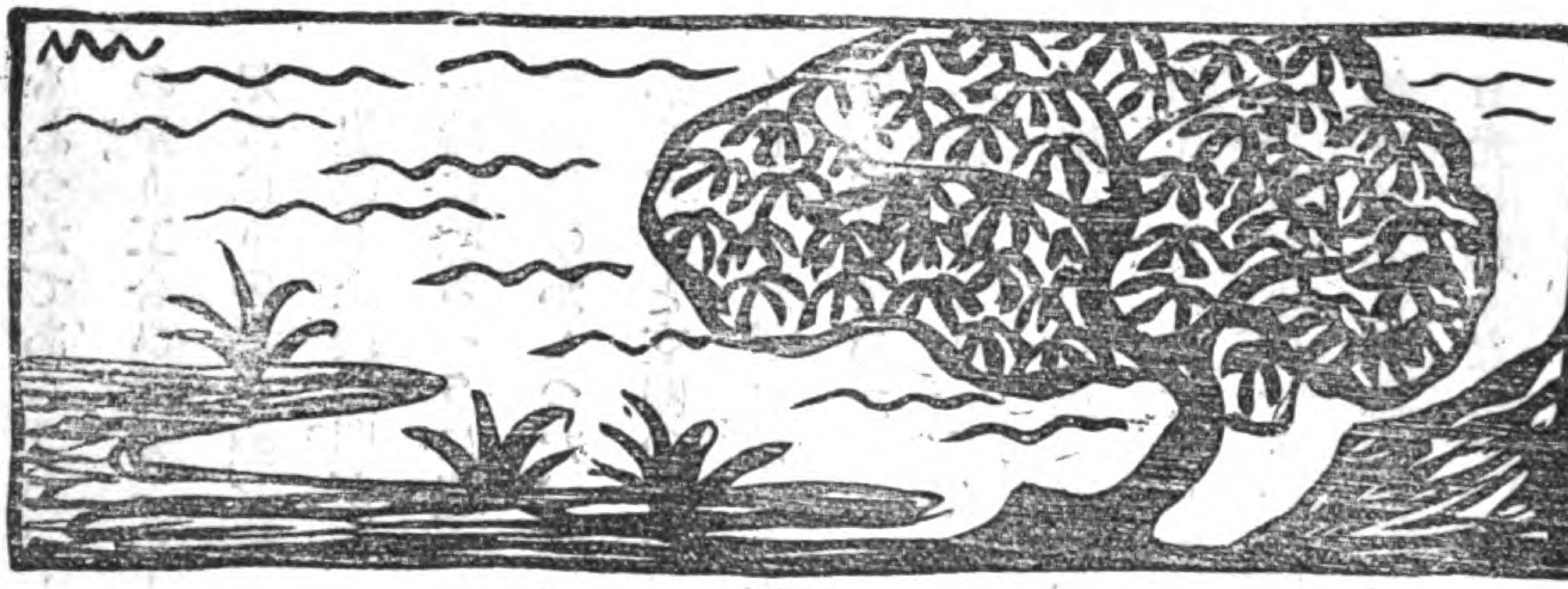
嘉久馬は何とも言はない。何時迄待つても何とも言はない。

しほ子は凝乎と男の容子を見詰めて居たが、つか〳〵と側へ寄つて、横顏を覗き込む樣にしながら、

「如何爲さいまして、え、如何か爲さいまして？

嘉久馬は急に頭を上げたが、つとしほ子の手を執つて脇の下へ掻込む様にしながら、指の尖を唇に當てた——何時迄も、何時迄も離さない——しほ子も其手を引くだけの力が無かつた。そして、片手に顏を抑へながら、ぽたり、ぽたりと涙を落した。床の上に冷たい大粒な涙を——

(をはり)



女犯

上司小劍

一

着物が薄く、粧ひが派手になつて、女の姿が皆婀娜に美しく、直に肉を想はせるやうな時候になつた。屋根の上を通る電車の窓からは、高架線に沿ふた家々の内部の秘密が、今年の夏も容赦なく見透かされる。

胸に病ひを包んだ私は、都の屋根瓦にまだ朝露の乾き切らぬ頃、南の大ステーションから、西行の列車に乘つて、ある山國の、淸らかな淺い川を有つてゐる村の客人になつた。

宿は眞宗寺であつた。對面所と名づくる四十疊敷の大きな室を宛がはれて、『寢るなりと起きるなりと御自由に……』と言はれた時は、遊女になつてゐる姉を尋ねて行つて、妓樓の手廣く美しいのに驚いた奥州の小娘の心は斯うて

もあつたであらうか、と思はれたが、着更へと手廻はり品の入つてゐる嚢を傍に、ガランとしたところの坐り工合ひは落ちつかなかつた。立つて見ても仕樣がなかつた。野原でも歩くやうにブラリ〳〵と、足ざはりの惡い疊を踏み廻はつたが、痒いので氣がつくと、痩せた蚤が向ふ脛に飛びついてゐた。

奥深く上段の間があつた。置いてあるものゝ見分けにくいほどに薄暗いが、冷やりとして、旅の汗は一時に收るやうに覺えた。左の方の衣桁には、黑の法衣や袴らしいものが掛けてあつて、其の下には黑漆の剝げかゝつた、張つた緞子の破れた脇息が置いてあつた。其處に坐つて、其の脇息に凭れて、上段からズッと玄關の方を見渡すと、突き當りの鐘樓の邊までが、レンズに映つたものゝやうに、明るく美くしく、障子を撤つた玄關口の四角な輪廓へ、青々とした芭蕉の葉の覗いてゐるのが、殊にハッキリと冴え切つてゐた。

「其處は暗いが、涼しいのは第一です。後でよく掃除をさせますから、其處で晝寢をなさると可え」

髯の長い、鼻の高い、髮の伸びた、肩のいかつた住職の姿が、何時の間にか背後の暗いところに現はれて、斯う聲をかけたので、私は振り向いたまゝ驚いて言葉も出なかつた。

「下僕、下僕」と、疳の高い聲で寺男を呼んで、住職は私の爲めに一桶の淸水を汲ませたので、それを機會に私は脇息を離れて、對面所の緣端に出た。雨風に曝らされて、節だけの高く盛り上つた厚い板は、日光に熱くなつて、足の裏が焦げさうであつた。

汲淸泉　光明寺

こんな字の書いてある中古の手桶から、綺麗な冷たい水を金盥に汲み出して、顏を洗ひ身體を拭いた。四十疊敷の眞中に白張りの新らしい屏風を立て、紫檀の机に石榴の盆栽の白い鉢を載せ、鍋のやうに耳のついた鐵製の小ひさな瓶かけに鐵瓶の湯を沸らせ、煎茶道具を控へて、キチンと、私の座に着くのを待つてゐた住職の形は、銅像か何んぞのやうであつた。私は其の大道具小道具の飾り付け、並べ方の手早いのに感心しつゝ、住職の前に坐つた。

熱い湯ていれた香ひの豊かな煎茶は、私の血も肉も茶の色に染めるかと疑はれるほど、しみ〴〵と味はゝれたが、私はまた用ゐ慣れてゐる珈琲を忘れ兼ねて、手荷物の中から、黑く煎つた豆と、碾く道具とを取り出し、ガリ〳〵やり始めると、住職はタバコの烟を吐きながら、冷やかな目付きをして見入つてゐた。

いれた珈琲に、持つて來た砂糖を添へて住職にも進め、自分にも飲んだ。住職は一寸一口嘗めるやうにしたゞけで、

『これは野蠻な味のものですな、兎ても茶の香味と風韻には敵はん。……茶も玉露といふヤツを湯冷して冷した湯て溫くいれると、これに似た下品な味になります』と、手早く急須に湯を注して茶碗に移し、口直しと言つた風にガブリと飲んだ。

私は稍煎り過ぎた珈琲を味ひつゝ、フト都の空が戀しくなつた。

住職が炭火の上に摘み入れた白檀の烟が、緩く舞ひ騰つて、廣い室は芳しい薫りに充ちた。

二

夜は住職が尺八を吹いて聽かした。緣端に蚊やりを焚いて、本堂の裏から、引導を渡す時に用うる朱塗りの曲彔を持ち出し、それに腰を掛けて、髯の長い顏を顰めつゝ、この頃漸くこの邊にまで流行つて來た俗謠を吹いてゐる光景が、拙ない音樂を引き立たして、染々と聽かせられた。下僕は蚊やりに燻すムロといふ木の小ひさく割つたのを持つて來て緣先きに控へ、瘦形の色の白い細君は漸う乳を離れたくらゐの兒を膝に載せて、團扇を動かしつゝ、夫の足元の蚊を追ふてゐた。

颯と吹き込んで來た山風に、古風な臺ラムプの灯は消えたが、音樂は途切れもせずに進んで行つた。

月はないけれど、晴れた空の星明りに、一座は互ひに顏を見合ふのに事を缺かなかつた。

都の緣日の晩には、郵便局の屋根の上あたりに、白堊の大劇場にオペラのあつた夜には、露臺の眞上に、鮮かな光りを放つてゐた、美少年にたとへらるゝ大きな星は、鐘樓の下から直ぐ裾を曳いてゐるらしい墨繪のやうな松山の上に現はれて、キラ〳〵と寂しさうな瞬きをした。

白壁の剝げ落ちた痕が、人間の俯いてゐるやうに見える經藏の横の、瘦せた竹林の蔭から、黑い影が現はれて、ガサ〳〵と近づいて來るのを、誰れも氣のつかぬ風であつたが、私は尺八の方を忘れて一心にそれを見詰めてゐた。黑い影は近づくに從つて、尼らしい姿に見えて來たが、

『またやつてるな、火吹竹を……』と、向ふから言つたのは、太い男の聲であつた。下僕は丁寧に其の男に頭を下げ、細君は坐蒲團を差し出して會釋しても、住職だけは頓着せずに笛の方へ力を注いでゐ

た。

尼のやうな男は、ヌッと玄關を上つて來て、敷居に腰をかけ兩足を緣に投げ出してゐる私の前に立つて、凝と私を見詰めたので、私も凝と其の男の顏を見詰めた。視線と視線とが衝突して、互ひに避けまいと力めたが、私の忍耐力は彼の男に負けて、私から先きに視線を轉じた。

『按摩の笛の方が餘ッぽど好え、下手な尺八よりは……。』

太い聲はまた斯う怒鳴つて、住職の前に立ちはだかつたが、住職は矢張り知らぬ風をして笛をつゞけた。

『あゝ暑い』と、吹きかけた一曲を終つた住職は、漸く物を言つて、額の汗を拭ひ、次に尺八の露を拭きつゝ、

『聽人があると何うも巧く行かん、……この間河原の岩の上で獨りて吹いた時は、誰れかに聽かしたかつたが、生憎小供も居らん』と、獨り言のやうに言つた。

細君は膝に寢た兒を庫裡の方へ運んで行つてから、マッチを擦つてラムプに點火した。其の光りて私は尼のやうな男の形をよく見たが、住職よりはズッと若く、まだ老いるには間のあるらしい姿てあるけれど、頭がテカ／＼と光つてゐるのと、チマ／＼と縮つてゐるやうな顏が妙に調つてゐないのとを怪しんてゐると、漸く、頭に毛のないのは剃つたのてなくて、生へないのてあつて、顏には眉毛も睫毛もないといふことが分つた。

蚊やりの烟が細くなつて、蚊の勢ひが增して來た。尼のやうな男は、手にして來た團扇をバタ〳〵させて、

『蚊やりの烟りよりは、團扇の方が良えな、……烟りては、蚊の中の勇士といふやうなヤツが君の御馬前て戰死する氣になつてやつて來よると敵はんが、團扇て煽がれると、如何な關羽ても張飛ても、ナポレオンても廣瀨何んとかても、足溜りが出來ないから、追ひ散らされる』と、太い聲て眞面目顏に言つた。

『けどもな和尙さん、蚊には團扇よりは此品に限る。』

住職が斯う言つて、曲彔の後から取り出したのは、白い長い毛の拂子であつた。それを振り〳〵住職は蚊を追つて、

『これこの通り、此品に打たれると蚊が落ちて了ふ』と、舞ふやうな足つきて黑闇の方へ步き出した。

『門徒坊主は騷々しくて可かん。……拂子なんぞ持つて、お宗旨違ひぢや。』

和尙さんと呼ばれた男は、斯う言つて、またヂツと私を見た。私はこの尼のやうな男が僧てあらうとは察してゐたが、漸く和尙さんといふ呼び名を得て、何か話しかけて見たくなつた。

『拂子といふものは蚊を追ふ道具なんてすか。』

私は先づこんな事を思ひついて、和尙に問ふた。

『蚊ても蠅ても虻ても、座禪してる時にいろ〳〵の虫の來るのを追つ拂ふ道具ぢや。……馬なんぞ生れ

ながら尻に立派な拂子を持つて、始終昆蟲を追つ拂つてる。」

斯う言つた和尚の聲には、腹の底から出て來るやうな強い響きがあつた。

「和尚は嘘つきの名人だから、騙されては可けませんぞ。」

黑闇の中から住職の聲がすると、和尚はニッコリ笑つて、

「嘘つきにも名人があるかなア」と空嘯さつゝ、傍の茶道具を引き寄せたので、細君は手にしてゐた團扇を棄てゝ、鐵瓶の湯加減を見たりなぞしながら、

「あなたのお庭の梅子は、今年は生りましてございますか」と、物靜かに問ふた。

「生りましたとも、ドッサリ生りました。……ちやんと梅干になつて、眞赤な良え色に漬つて生つてます。」

和尚は、ガブリと一口茶を飲むと、斯う言つて立ち上り、下駄を引つかけてツイと暗の中へと出て行つた。

三

長い〱吊手を、二つの隅と眞中の柱二本とから引ッ張つて、四十疊の室に小ひさな〱青い蚊帳を吊つての寢心地は變てあつたが、都の住居て、一時、二時の音を聞きながら眠られずに苦むほどのことはなくて、都の友の家て知り合ひになつたこの寺の住職との交際のことや、名さへ知らなかつた山國の村へ轉地するやうになつた因緣やを考へてゐる中に、うつら〱と夢に入つて、雨戸のない對面所の障

子に赤い朝の色の映る頃まで眠つた。
苔の生へた石の井筒の中から上つて來る、跳ね釣瓶の冷たい水で全身を拭いて、足舂きの糠臭い米で作つて貰つた白粥に朝餐を終つた時、住職は印籠形の煙草入れを片手に、肩を怒らしてやつて來て、「昨夕の和尚のとこへ行つて見ませうか、和尚、野狐禪だが話が面白い」と言ひつゝ、ドッカと坐り、改めて丁寧に朝の挨拶をした。
病ひを癒さうとする爲めに、忘れやうとしてゐたタバコの味を思ふ心が、住職の煙草入れから挑發されて、私は鞄の底に一本の葉卷きを探り、口を切つてマッチの火を移した。
紫の烟がゆら〳〵と舞ふて、得ならぬ薫りが鼻から腦に浸み渡る時、私は私の勤めてゐる都の事務室の光景を、フト頭の中に描いてみた。
「何うだ若いもんぢやないか、何う見たッて六十幾つとは思はれないものね」と言つて、近着の雜誌から見つけ出したサラ、ベルナアルのサアルドー物か何かの舞臺姿を、私の眼の前に突き出した同僚、――それは私にこの葉卷きを呉れた人――の面影や、
「要するに、ヤンキーのフイロソフイだね」と、叫んで、プラグマチズムの長々しい講釋を結んだ哲學者の風貌を、――其の人は、私に、生命が惜しければタバコをやめよ、と勸めたこと――やを思ひ出して、紙屑の中に埋れて、忙しく筆を動かしてゐる人々の狀さへが、紫の烟りの中にあり〳〵と現はれて來るやうな氣になつた。

縞の着物の上へ黒の十德のやうなものを着込んだ住職に導かれて、玄關から本堂の前を、扉の半分取れた脇門を出た。本堂は空屋のやうに戸が締つて、砂だらけの廣い階段には、兒守りの髫髮子が二人立つて私たちを見てゐた。

藁葺きの家の横を三軒ほど通つて、物の朽ちた臭ひを嗅ぎつゝ行くと、細い道の畝り畝つた兩側の泥田には、田植ゑが始まつてゐた。行き逢ふ農夫は皆道を讓つて、住職に朝の挨拶をした。長い髯の端の方と、手にしてゐる尺八の半ばとが突ッ張つて見えて、後から行く私には、住職の十德姿を影繪か何んぞのやうに思はせた。

あらい飛白の單衣に桃色の襷をかけて、赤い帶を締めた早乙女の鮮やかな姿が、青く植ゑられた田の中から浮き出したやうに出て來て、徑に行き逢つた住職に一禮すると、白い顏を伏せ目にして、小走りに駈け去つた。薄い着物に乳房のあたりの盛り上つてゐるのが、殊に私の眼についた。振りかへつて見ると、帶のメリンスの友染の形は古く、結ひ立てらしい島田の根はヒドク上つて居るが、裾端折つた脚絆の姿が甲斐〴〵しく整つてゐた。

遙か向ふにも、這ふやうにして植ゑてゐる同じやうな早乙女の赤い姿が、黒い男の姿に混つて一つ二つ見える。妙な節の田植唄も聞えて來た。

曇つてゐるので、田植笠は皆畦に置いてあつた。野草の露はまだ乾かずに、私の新らしい薩摩下駄の先きを濡らした。

『田舍はもう田植ゑの時節だね、……新らしい下駄でも穿いて、田圃路をブラ〳〵と、柔かい草の芽を踏んで行くといゝな』と、詩を作る都の若い友は一週間ほど前ある新らしい芝居の試演の幕間ひに、隣の席との境ひをなした紅白だんだらの綱を毛脛の指先きで弄りながら、咏嘆するやうに言つたことが思ひ出された。

アスファルトの烟りを立てゝ人夫どもに、舗道を造つてゐるのを眺めながら、繁昌する下駄屋の狹い店で、蔦の縫ひ紋をした縮緬の羽織のよく似合ふ頸の細い何家かの見知らぬ女と、膝つき合はして並んで、番頭が鼻緒をすげるのを待ち合はして居たのは、まだ一昨日の午後のことである。――

そんなことを考へ〳〵しながら、私は住職の後から隨いて歩いた。畦道は直ぐに山坂に續いて、仰げば新綠の間に透いて見える藁葺きの一構へが、昨夕の和尚の寺であると住職は指さして敎へた。

四

坂を登り切ると、大きな松の樹の下に、『海音寺』と白く書いた額が掲つて、柱も扉も骸骨のやうに木理が露はれてゐるが、手入れは能く屆いてゐて、四邊も箒目新らしく、白い砂が光つてゐた。

『和尚さん、……海音寺さん、……』と叫んで、住職は堅く閉されてある扉を敲いた。隙間から覗くと、淸らかな礫が布でも敷いたやうに玄關までつゞいて、其の兩側には緣を取つたやうに赤い草花が咲いてゐた。眞ん圓く毬のやうに造られた青い低い樹も見えた。

『和尚閉門中、……裏へ廻つて下さい』

昨夕の聲が、斯う玄關に聞えて、一尺ばかり開いた障子の間に、頭巾を被つた姿が現はれたが、遠目には昨夕のと同じ人とは思はれぬほどであつた。

『えゝ、面倒臭い、初めての客人だからと思つて表門から來たんぢやが、……』と、住職は舌打ちしつゝ、危なッかしい崖のやうなところを、グルリと裏に廻はつた。其處には別に門もなく、二三本の梅の古木の下から直ぐ裏口になつてゐた。

鏡のやうに拭き込んだ廣い板の間を上つて行くと、青地に金色の紋を散らした襖の一室に、和尚は長火鉢を控へて、ニコ〳〵笑つてゐた。物が皆チャンとして、疊も新らしく、光線も十分に入つて、明る過ぎるほどであつた。

私の葉卷きはまだ長かつた。それを吸ひもせず、消しもせずに、烟りの舞ふのを空しく見てゐると、和尚は、

『あゝ、唐人臭いな。……君、それを吸ふなら吸ふ、棄てるなら棄てると、ドッチかに決めたら何うです。……線香ぢやあるまいし、火を點けて持つてゝも仕樣がないてせう』と、太い力のある聲は、私の病める胸に突き入るやうであつた。私は默つて和尚のツルリとした赭光りのする小ひさな顏に見入りつゝ、手を差し延べて、長火鉢の五德に葉卷きの火を摺り消した。

住職はそんなことに構はず、持つて來た笛を取り直して、ヒユー〳〵と吹き出した。和尚に長火鉢に落ちた葉卷の灰を氣にして、火箸で掻き均らしてゐたが、やがて、

『りきゆーへーおーじやるなーらーわらじはいてーおーじやーれ、りきうーはいーしーはーらーこーいーしーはーり』と、住職の笛に合はして、睫毛のない眼を細くしながら唄ふ聲は、話す時の太い聲とは別の人のもの〻やうに美しく、笛の方がけおされた。

『糸よりも竹、竹よりも肉、……肉聲には敵はないな、……古童が吹いたつて負けんのぢやもの、こんな火吹竹では仕樣がないわ。』

斯う言つて、何時の間にか取り出した黄色い吸口の細い煙管でタバコを吸ひ出した和尚の姿は、急に通人らしく見えて來た。

『和尚さんは酒をあがりますか』と、私は漸く和尚に口をきいてみた。

『わしは、酒嫌ひぢや。』

和尚の答へは簡單であつた。また何か難かしさうなものを吹きかけてゐた住職は、急にそれを止めて、

『けども、あなた、この間山本さんでは二三合も飲んだぢやないか』と、和尚に向つて突つか〻るやうにした。

『嫌ひと飲むのとは別ぢや。飲むから好きぢやといふことはない。病氣になれば苦い藥でも飲むぢやないか。……ナニ酒の二合や三合、……場合によれば二升でも三升でも飲んで見せる。』

和尚の斯う言つた元氣な聲は、住職を壓し付けるやうであつたが、住職も負けてはゐず、膝押し進めて、

「あなたが二升の酒を飲んで見せたら、わしは醬油を二升飲んで見せる」と、詰るが如くつめ寄つた。
「醬油を二升も飲むと、坊主のヲリ燒きが出來るが、酒は幾ら飲んでも醉はない法があるぢや。」
眞面目くさつた風で斯う言つた顏を、住職は睨むやうに見てゐたが、私は、
「何か藥でも先きに飲んでおくのですか」と問ふてみた。
「いゝえ」と、和尙は首を振つて、稍暫く默つて怖い顏をしてゐた後、
「あのブリキな、あれて細い管を拵へて、横ッ腹から胃袋へ突き刺し、樋のやうにして、人に知れないやうに、飲んだ酒を皆盃洗の中へ受けて了ふんぢや。……」と言つた顏は、いよ／＼眞面目くさつてゐた。住職はブッと噴き出して、
「氣をつけてゐたんだが、また和尙のこの術に罹つた」と、腹を押へつゝ笑つた。和尙はニコリともせずに、何か別のことを考へてゞもゐるやうであつた。
「君は御病氣なのですか。……出養生をしてるのでせう、……何處がわるいのです、今流行る肺てすか。」
少しの間沈默のつゞいた後に、和尙の斯うした問ひが、明晰な口調で出た。
「肺もわるいし、腦もわるいし、胃も腸もわるいし、メチヤクチヤです」と、私の答へは自分の耳にさへ寂しく／＼響いた。
「斯う方々がわるいといふ人も珍らしてすな。先づ胃から癒さなければ仕方がないてせう」と、住職は

心の底から私の爲めを思つて呉れるやうに、横合ひから口を出した。さうして、ヂッと俯いた。

『胃病には良え療治法があるが知つてますか。』

住職と同じやうに俯いて、私の爲めに病ひを憂へて呉れるらしい和尚は、ヒョイと頭をあげて斯う聞いたので、私は其處に不思議な靈藥でも現はれて來さうな氣がして、希望の眼を和尚の上に向けると、和尚は、

『毎朝、起きた時に熱湯を、こんなものに一杯づゝ飮むのぢや』と、傍の薩摩燒きの湯呑みを指さした。

『熱湯は熱くて飮めないがな。……咽喉を燒いて了ふ。』

『冷して飮むのでせう……。』

『それぢや熱湯ぢやない。……溫湯でせう。』

他愛もない問答が住職と私との間に取り交はされてゐるのを、和尚は耳を澄して聞いてゐたが、

『熱湯を飮むには、飮む法がある。』と、勿體振つた顏をして、

『口の中から、食道から、胃へかけて、一面にブリキを張つておくのぢや……。』

『またブリキか。……畜生ッ』と、住職は忌々しさうに言つた。

話はこれて盡きて、私は住職と二人、裏口から梅の古木の下を通つて、來た時とは別の、溝の中を歩くやうな赤土の細道を村に下りた。鷄の聲が頻りに聞え、曇つた空は雨にもならず、灰色の雲の中に圓い形が薄く映つて、日足はもう高かつた。

新綠の山々に包まれた青田泥田の中に、あちこちと船が浮んだやうに見える家々は、多く藁葺であるが、住職の寺の一廓と、白壁の土藏を有つてゐる豪家らしい家との瓦葺きが、眼を射るやうに光つた。

「あの家が山本といつて、和尚の生れた家ぢや。長男ですがあんな身體ぢやから、弟が相續して、和尚はあの通り禪僧になつて舌長なことばかり言つとるのです。」

山を下りながら住職は、豪農らしい光つた家と和尚の寺との關係を、私に斯う言つて聞かした。

「あの寺も久しく無住て荒れてゐたのを、和尚が坐つてから、あの通り綺麗になつた。……檀家は弟が一軒て、小僧一人居るんぢやなし、あんな氣樂な坊主は一寸ありませんわ。」

住職の斯う言つた時、私が山の上を振り返つて見ると、藁葺きの寺の軒から緩く烟りが立つてゐた。

「和尚が飯を炊いてる」と、住職も後を振り返つて言つた。

五

其の翌る日も空は曇つて、物は皆じめ〳〵と、梅雨期に入つたことを思はせた。時々雨がパラ〳〵と芭蕉の葉にかゝり、庭の敷石に小紋をおいたが、傘をさして歩くほどの人もなかつた。

住職の案內て、隣り村の鄕社まで散歩に出たが、村は皆田植えて、到るところに、都に近い海の汐干狩りを思ひ出させるやうな景色があつた。

鄕社の門前の、山川に臨んだ茶店に息んて、隅の方に塵埃だらけになつてゐた將棊盤を持ち出し、瓦煎餅て足らぬ駒を造つて、私は和尚と一二番さしたが、格別興味も乘らなかつた。店の方を中止の形に

して、家中が田植ゑにかゝつてゐるらしい茶店の家は、留守番の四十婆が一人て、茶や菓子を出すのに大儀さうてあつた。田植ゑの装ひをした男女が、時々出たり入つたりして、婆に何か言つて行つた。

正午に近づくと、婆がいよ〳〵大儀さうな顔をするのを構はずに、住職は支度を言ひつけたが、暫くすると、早乙女姿の娘が二人歸つて來て、前垂れ姿に着更へて母を手傳つた。

この姉妹は土臭くもなく垢拔けがしてゐて、薄皮の、スラリとした、色白てあつた。運んて來た膳部には鮎の鹽燒きなぞが載つてゐて、幾らか私の食慾を挑發した。

『田植ゑて忙しいか』と、住職は、無器用な手つきて酌をしてゐる姉娘に言つて、丁度酒の代りを持つて來た妹娘をも、姉に並べて其處へ强ひて坐らせた。娘たちは微笑んてゐるだけて何も言はなかつたが、漸く商賣の方に調子づいたやうな顔をした母が、手を拭き〳〵出て來て、

『ナニあなた御院主さん、面白がつて田植ゑにまゐりますので、役には立ちやア致しません』と言つたのを冒頭に、私には交渉も知識もない村の噂さを、いろ〳〵と喋舌り始めた。

都を立つてから、漸く三日にしかならぬのに、私は三年も若い女の匂ひから遠ざかつてゐたやうな寂しさを感じて、二人の田舍娘を何時までも側に引きつけておきたいと思つた。

姉は島田、妹は桃割れがよく似合つて、髪の油も、さまて劣つたものを用ゐてはゐないやうな香ひてあつた。

『海音寺さんはお達者てございますか。』

「ひゝ、息災ぢや。」

「お一人で山の中の一軒家で、お寂しいことでございませうな。……あの方はお身體中何處にも全で毛がないのでございませうか。」

「聞いてみたことはないが、さうぢやらうな。手足に生毛もないもの、……和尙、悟りを開いたやうな高慢を言つとるが、毛の語をしだすと、怖がつて逃げるもの。誰れも遠慮して和尙の前で毛のことは言はんが、わしは一度やつてやつた、和尙、顏の色を變へて逃げた。……何家へ行つて泊つても、風呂は嫌ひぢやと言つて入らんもの……。」

住職と母とがこんな話を始めると、二人の娘は袂の先きで口を掩ふて、クスクス笑ひながら座を立つた。

一二杯、住職につき合つて飮んだ地酒は、私の食後の心持ちを、うつとりと午睡の夢に誘ふた。二人の話を幻のやうに聞きつゝ。

六

行き場所がないので、夕方からはまた二人で海音寺への坂道を登つた。

梅の古木の下から裏口へかゝると、締め切つてある戶に內部からシンバリでもしてあるらしく、引ッ張つても開かない。二三度聲をかけてみたけれど返事もないので、歸らうとしたが、住職はフト思ひついたらしく、橫の方の枝折戶へ廻はつて、泥棒でもするやうに內部の掛金を外し、本堂を兼ねた佛間の裏

に當る物置きの前へ入つて行くと、其の物蔭にジャブジャブと行水を使つてゐる音がして、大きな盥の中に、白い身體の人の背中が見えた。

私と住職とは、殆んど同時にハッとして、引き返へさうとしたが、盥の中に小ひさくなり、あつちを向いて俯ぶいたまゝ、身動きもしないでゐる人の頭に。黑い髮の櫛卷きにしたのゝあることに氣がついた時は、二人とも償ふべからざる罪惡を犯したやうな色を浮べた。

何うすれば可いか。――といふことに二人は當惑しつゝ、たゞ突つ立つたまゝ顏を見合つてゐた。盥の中の人は矢張り石膏のやうに、動かざる背面を見せたなりにゐる。

住職から動き出したともなく、私から歩き始めたともなく、二人はゐざるやうに少しづゝ足を運んで、漸く枝折戶の外まで辿り着いた。惡魔の家からでも遁れ出たかのやうに、其處からは步調を早めて、裏口のところまで來ると、突然內部から戶が開いて、光つた和尙の頭が現はれた。

「ヨウ、……今まで午睡をしとつたもんぢやから、……」と、例の太い元氣な聲で言つて、曇つた空を眺めつゝ、

「もう午睡でもない、夕寢ぢやな。……さアお上り。」と、先きに立つて板の間を足音高く踏んで行つた。

私は住職とまた顏を見合はせて、氣味わるく隨いて上つた。

「君たちは、もう喫飯は濟んだか、……わしは獨りぢやもんて、鼠にでも拵へて貰はんと、自分に飯を拵へるのが面倒で仕樣がない……。」

和尙はニコ〳〵と斯う言つて、早やランプの點いてゐる長火鉢の前で、炭をつぎ足した。
「鼠が行水を使つてゐた――。」
私はこんな言葉を心の中で考へながら、落ちつかぬ風をして住職と並んで坐つた。和尙はまた頻りに、とぼけたことを眞面目臭つた顏で話しかけるけれど、私たちはこの前のやうに可笑しく聞かなかつた。和尙の言葉の切れ目には耳を澄して、彼方に何か物音でもしはせぬかと、それに心を取られてゐた。

一鉢千家飯　孤身幾春秋
冬暖艸莚裡　夏冷橋下流
不空肯不乞　無樂亦無愁
人若問此六　明月浮水中

和尙が膝を叩きつゝ、斯う吟じた中音の聲は、際立つて美しかつた。さうして其の句の意味もまた面白さうなので、私も住職も釣り込まれて、ツイ耳を傾けた。和尙は二度三度續けて吟聲を繰り返へした。
「此六を問はば、の六といふのは何のことですか。」
住職は斯う言つて和尙に問ふた。和尙はニヤリと笑つて、
「人の名です。……五條の橋の下で寢てゐた乞食坊主ぢやから」と、なか〳〵心地よさゝうであつた。

七

歸りには、和尙が點けて借して吳れた提燈を私が持つて先きに立ち、歩きにくい夜の山路を下つた。

二人とも默々として。

住職の寺へ歸り着くと、四十疊敷にはもう私の寢床が延べてあつたが、其の傍の瓶かけの横に坐つて、住職は茶をいれながら、矢つ張り自分の家が一番好い、といつたやうな落ちついた顏をした。

「あの女、……あれは一體何てせうかね」と、漸く私から口を切つた。

「さいな、何んおぢやらう」と、住職の息づかひはまだ荒かつた。さうして其處へ小供を寢かしつけて來たらしい、ニコ〳〵とした細君の顏を見ると、

「お前、海音寺へお嫁さんの來てるのを知つてるか」と笑を含んで言つた。

「あの肥えた尼さんてせう。あの人ならチョイ〳〵來るやうてすが、別にお嫁さんちうことはないてせう。」

「妙海さんかいな、あんな婆ぢやない、もつと若い、髮を結つたの……、」

「へえー、噓てせう」と、細君は容易に信んじなかつたが、私から今日夕方に見たことを一通り話すと、細君は呆れた顏をして、

「まアー……。」と言つた切り、暫く考へ事をした末、

「でも、あゝして一人てゐらつしやると、寂しうございませうし、あんなても、年はまだお若いのですから……。」

思ひやりの深かさうな細君の斯う言つた聲には、濕ひがあつた。

『それなら何も隱すことはない。昔し女犯のやかましかつた時でさへ、禪寺や何かにはダイコク部屋といふ秘密室があつたくらゐぢやもの、……あの和尚高慢な口を利くが、一向早や俗物ぢや、……價値がない。』

斯う言つた住職の口調には刺があつた。

『それはさうか知りませんが、和尚さんは世間へ知れることをお構ひなさらいても、其の女の人が厭やてございませう。あんな不具に身を委してると思はれるのが、何んなに辛いてせう。…人に顔を見られないやうに隱れてるのでございませう、無理はありません。』

細君の言葉には、何處までも同情が籠つてゐたが、

『けれども、そんな女がゐると、何處からか知れて來て、誰れかゞ噂さを立て出すものですが、少しもさういふ評判を聞きませんてしたし、……山本さんては御存じなのか知らん』と、また少し疑ひを挾みかけた。

『和尚の頭はあんなても、女には矢張り髮がないといけないんてせう、尼ては厭やなのてせうね。……あの女が姙娠てもしたら、何んな兒が生れるてせうか。』

私が斯う言ふと、住職は聞くも忌はしいといふやうな風を見せて、耳を掩はんばかりにした。

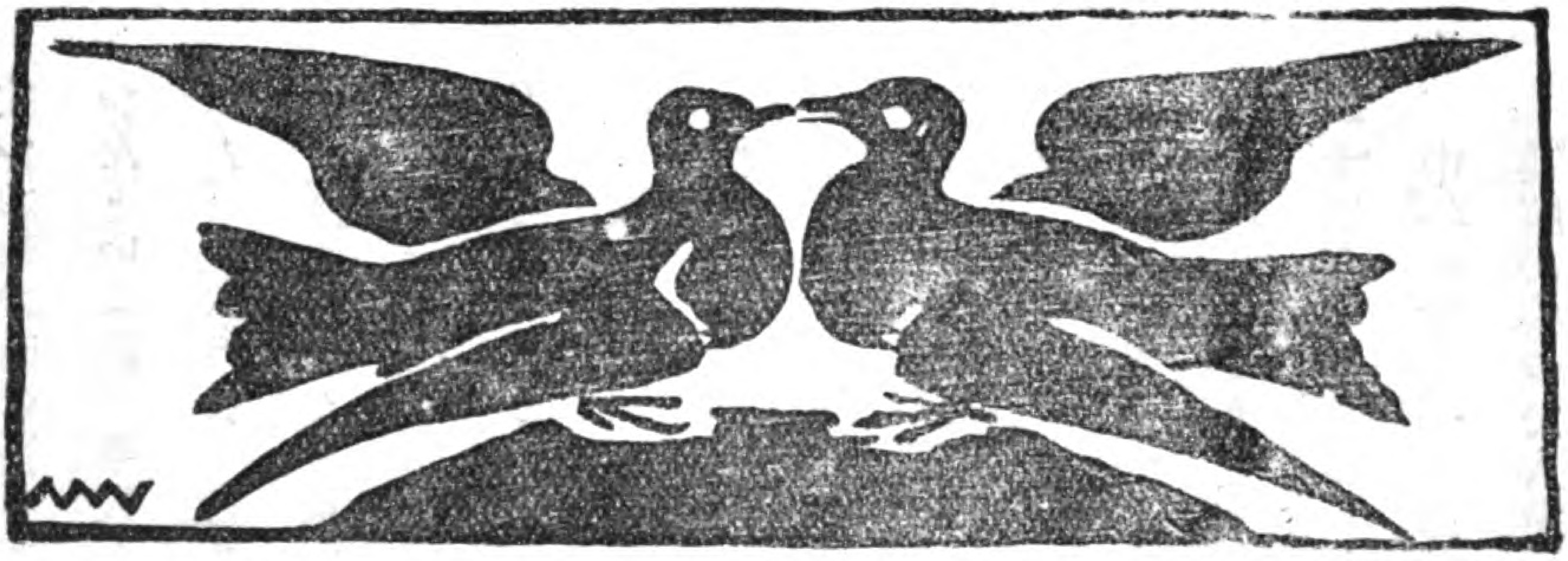
其處へ、私が初めてこの寺へ來た折の夜のやうに、鐘樓の脇から近づいて來る白い影が、直ぐに和尚だと知れたので、三人は默つて顔を見合つた。また雨が降りかけたらしく、和尚の手には傘があつた。

「蚊がヒドくてな、和尚、傘一本て寺を追ひ出されて來た」と、相變らず元氣な物の言ひやうをして、和尚は坐り込んだ。

「あゝ、あなたに郵便がまゐつて居りました」と、細君は私に言つて、立ち上つたが、やがて持つて來た桃色の四角な狀袋は、よく 15 Juin などと、封じ目に書くことを好む、都の友K女史からのであつた。

私は其の手紙の封を開くより先きに、早く都へ歸りたいといふ心が、湧くやうに起つた。

――逝ける友、Mの日記より――



少尉の軍服

田山花袋

一

棺には陸軍少尉の軍服が懸けてあつた。

其の前て人々は通夜をした。白い布をかけた机の上には、團子だの樒だの位牌だのが一杯に乘せられてあつて、幾本となく立てられた線香からは、煙が咽せるやうに一間に充ち渡つた。

「少し籠りましたな」

柱の傍に座つてゐた男は、かう言つて、立つて行つて、徐かに雨戸を一枚開けた。

心地よい冷たい夜の空氣は流るゝやうに入つて來た。

かういふ場合に何處でもするやうな話を人々は既に幾度も繰返した。淡がつ

まつて來た時の話、大急ぎて氷を買つて來て咽喉に入れてやるとがりがりと齒を鳴して旨さうにして食つたといふ話、呼吸を引取る時にはスヤスヤ眠るやうてあつたといふ話、さうした話が盡きずに繰返された。「もう長く寢て居たんてすから、何も殘り多いことはないんて御座いますけれど、まだ、年は若いんだからねえ。世の中の樂みも知らずに逝つたと思ひますとねえ、それが可哀相て――」

この一人子息の長い病氣の看護の爲めに嫁いて來たと言つても好いやうな年を取つたこの家の後妻の眼からは、さういふ度に涙がほろ〳〵とこぼれて落ちた。

『本當にねえ』

傍に居る女達も心から可哀相に思つたといふやうな調子て言つた。

「でも口は綺麗だつた。本當にそれは誰だつてあの眞似は出來やしない。だから、かう長く持つたんだけれど」六十二三になる此家の白頭翁は、かう言つて、長い間天井を仰向いまゝじつとして寢てゐた病人のことを話した。

「何年におなりてした？」

「十四年になりますよ」

「十四年！隨分長い間の御看病てしたね。寢てゐらしつた方も方だが、看病なすつた方も方てすねえ！」

中年の女の一人は、さも感に堪へたと言つたやうな態度て話した。

其處に集つた人達は、大抵は病人のことをよく知つてゐた。かれは幼年學校を優等て卒業して、未來

の參謀官の卵とまで同窓から畏敬されてゐた。數學が達者て、頭腦が明快なので評判てあつた。候補生になつて、隊から學校に歸つて來た時分には、日曜日毎に、よく其處に遣つて來た。

家の同し地所の中に、主人の弟達が住んでゐた。從姉妹達も大勢居た。候補生の軍服姿はいつもその大勢の從姉妹達の群に交つて見られた。

色の白い、丈の高い、立派な若い軍人の姿は誰の眼にも刻まれてあつた。

主人の白頭翁の先妻の妹に當る人も其處に來て居た。

「本當に夢のやうてすよ。まだ、あの時分には、太一は四歳か五歳位て、其處の緣側をよちよち歩いて、危なくつて仕方がなかつたもんですがねえ。それが、かうして、この同じ家で、お通夜をしやうとは思ひもかけませんてしたよ」

かう言ふと、

「本當にあの頃はねえ！」

其時分を知つてゐる主人の弟達の細君が粲々と言葉を合せた。主人はまた主人て、その子息を生むと間もなく肺を病んで、やがて死んで行つた蠟のやうに先蒼白い妻の顏を思出してゐた。

二

其處には長い年月が經つて行つたとは思はれなかつた。依然として其家、其庭、其樹木てあつた。切石て側を組んだ井戸、門から玄關まで長く續いた敷石、それは皆んな主人が若い頃に經營した儘てあつ

た。しかし樹木は大きくなつた。盆栽の鉢から移した楓は庭を蔽ふばかりに深く茂つた。梧桐は二階の屋根の上高く聳ゆるやうになつた。玄關の傍の椿、門の傍のあふち、それから裏の銀杏の樹……一つとして昔のことを語つてゐないものはなかつた。

その一人子息の生れる頃には、主人はまだ世の中の人であつた。いかやうに立身するか知れぬほどの好い地位に身を置いてゐた。若い綺麗な先妻はまだ二十二三であつた。背のすらりとした、色の白い、眼に愛嬌のある、聲のやさしい人であつた。夜など遲く歸つて來ると、その若い細君はランプを持つていつも玄關に迎ひに出て來た。その灯影を見ながら、かれは其處で立小便をするのが例であつた。しかし其頃は家屋が今のやうに立込んではゐなかつた。竹籔があつたり、空地があつたりして夜は淋しかつた。

病院で死んだ妻の顏――それから今の後妻までの間に、かれは妻をもう一人持つた。かれは離れるともなくいつの間にか世と離れてゐた。その妻と別れる頃には、かれは全く閑散な位置に其身を置いてゐた。

總領の娘は年頃になつて嫁いて行つた。其の娘は先妻に似て居た。眼がことによく似てゐた。主人はその頃では娘と子息との他には何も快樂がないやうになつて居た。

入江になつて深く陸地に入込んでゐるやうな海岸――其處に娘の婿は住んで居た。それは海軍の水雷を取扱ふやうな軍廠で、毎日官宅から役所へと通つて行つた。役所の工場からは、時間毎に汽笛が高く

四邊の海やら山やらに響いて聞えた。

役所の埠頭には、いつも白いペンキ塗のランチがかゝつて居た。始めて其處に娘を訪問した時の歸途には、主人は婿と一緒にそのランチに乘せて貰つて、鎭守府のある港へ出かけて行つて、其處で造船中の大きな軍艦を見物した。

碧い海を滑るやうに走つて行つたランチの快よさ！

子息が幼年校の試驗に合格した時には、かれはあることから一時田舍に行つてゐた。その合格を報じて來た時には、かれは裏の畑で草花をいぢつてゐた。

まだ總領の娘が家に居る頃だツた。

「おとつさん！」

呼ばれて振返ると、娘が其處に手紙のやうなものを持つて立つてゐる。

「おとつさん！」

「何だえ！」

「太一が合格したとさ」

「何、太一が……」

娘の持つてゐる電報には、其の喜ばしい報知が傳へられてあつた。父親は奪ふやうにして、娘の手か

らその電報を取つて讀んだ。一度離れた世の中は、子息を通して、また新しい交渉をかれの胸に持つやうになつた。其時のかれの喜悦は非常であつた。かれは久しくやつたことのない晩酌を傾けた。その電報は神棚に上げられたまゝ、薄暮の空氣に白く見えてゐた。

若い未來の參謀官は馬が好きであつた。學課の暇がありさへすれば、學校の側にある小さい練兵場に出掛かけてよく馬を責めた。その練兵場は往來に面してゐた。周圍の柵の下には、春はたんぽなどが咲いてゐた。

何うかすると、父親が其處に通りかゝることなどがあつた。父親は笑ひを含みながら、柵の處に長い間立つて見てゐたりした。

「まだ駄目だナ、手綱が本當に使へない」

次の日曜に子息が家に遣つて來ると、父親はこんなことを言つて笑つた。

少尉の軍服！

それを着けることを、子息も父親も何んなに望んだらう？　學校の試驗が滯なく濟んで、續いて卒業式、續いて少尉任官式！

軍服を初めて着たのは、庭に面した八疊の座敷であつた。總領の娘はもう其時は二人子持になつて、

田舎から東京に出て來て居たが、其日は丁度都合よくそこに來合はせてゐた。先祖傳來の銘刀を軍刀につくらせたが、それももう出來て來てゐた。襯衣、ツボン下、一本金筋の入つた軍服、キラキラ光る軍刀――立派な青年士官の姿が其處に浮び出すやうに鮮かに見えた。

「お母さんに見せたい」

總領の娘はかう言つて泣いた。

主人は亡き妻の忘れ形見が二人ともかう成長く立派になつたのを見て、心を動かさぬ譯には行かなかつた。近所の寫眞屋はやがて其處に呼ばれて來た。庭石に腰をかけた軍服姿と子供を抱いた娘の姿とその後に立つた主人の姿と……

先妻の妹と弟とは、ある日ある處で、次のやうな話をしたことがあつた。

「困つたもんだね、太一にも……」

「本當だね」

「本當に駄目なんだらうか」

「何うも難かしいらしいね。隨分、ひどく血をはいたさうだから」

「矢張、姉さんにさういふ氣があつて、それから出て來たのかしら?」

「さアねえ」

「折角あれまでにして、義兄さんも可哀相だねえ」

「本當だよ、太一があゝなつてから、義兄さんすつかり歳をとつて了つた」

太一は遠い處の聯隊の兵營で血を咯いて、衞戍病院に一月ほど入つて居た。父親は心配してわざわざ其處に出かけて行つた。蒼い顏をして居たが、しかしまだそれほどやつれては居なかつた。間もなく太一は兵營から出て來た。

それからの父親の生活は、子息の病氣を治療する爲めにのみ費されたやうなものであつた。父親は病院から病院へと子息を伴れて歩いた。あらゆる醫師の診察を請け、あらゆる新しい藥を用ひて見た。子息の病氣の爲めには僅かな財産を傾けても好いと思つた。

平塚の海岸、茅ヶ崎の海岸、——鎌倉の病院にも半年ほど居た。蒼白い顏をして、其處らぶら〱歩いてゐる一青年の姿は四邊の人々の注意を惹いた。

子息の生活によつてその生活の復活を期待した父親は、却つて子息の病氣の看護の爲めにその晩年を費ひやさなければならなくなつてゐた。その爲めに父親は今の後妻を持つた。

三

白いシーツに白い枕、何時行つて見ても、其處に仰向になつて病人は寢て居た。藥瓶やコップや驗溫器を載せた溜塗の丸い盆は、午後の日影の中に常に鮮かに見えて居た。新聞や雜誌があたりに散ばつてゐた。

牛乳の時間、藥の時間、飯の時間、それが皆なチャンと定つてゐた。昔、つかつた驛遞の傳鈴かと思はれるやうな古色蒼然とした小さい鈴が一つ枕元に轉つてゐて、用事がある度毎に、かれはそれを取つては振つた。鈴はチャラチャラと鳴つた。

その鈴の音が深夜に烈しく鳴り響くのに驚かされて、慌てゝ父親の飛び起きたのも一度や二度ではなかつた。病氣の重い時でなくとも、――單に機嫌の惡い時でも、その鈴の音は焦れるやうに鳴つた。

「それ、また鈴が……。」

何んな手離されない用事をしてゐる時でも、から言はれると、後妻はすぐ飛んで行つた。血を咯いたり何かして、夥しく苦んで居るのを見る時には、いつそ死んだ方がとも思ふが、少しでも落附いて來ると、「まア、よかつた」と父親はいつも吐息を吐いた。父親は毎朝藥取りに醫師の許に出かけて行つて、歸途には病人の口に適ふやうな食物をさがし〳〵町を歩いて來た。

同じ地所の中に住んでゐた大勢の從妹達は段々人の細君になつて嫁いて行つた。病人が候補生の服を着て其處に行く時分には、また子供であつた娘達も、ハイカラな庇髮に結つて、大きな白いリボンを懸けたりなどして遣つて來た。

「面白い髮の結ひ方になつて來たね、此頃は？」

病人はこんなことを言つて、めづらしさうに移り變つて行く女の髮を眺めた。

仰向に寢た病人の上にも年月は經つて行つた。

毎朝見る新聞、其處でかれは雪中行軍凍死事件や、日露戰爭の宣言書や、旅順攻撃や、奉天會戰や、講和談判や、その他種々の事件と變遷とを見た。同窓で卒業して世に出た青年士官達の大分戰爭の犧牲になつたのをも見た。

「太一さんなぞも、丈夫でゐたら、戰死してゐたかも知れない」

見舞に來てこんなことを言つて行く人などもあつた。「何が仕合になるか知れない」かうも言つた。「でも、矢張、丈夫で、戰爭にでも出てゐたらと思ふねえ」

父親はかう言つて笑つた。

雜誌や小説などを始めは好んで讀んでゐたが、後には昔の書籍を讀むやうになつた。碧巖なとを手にしてゐることなどもあつた。

小説家になつてゐる伯父が見舞に來た時には、『伯父さん、此頃の小説は丸で違つて了つたね。昔、私達が讀んだやうな面白い小説はないかね？』などと言つて訊いた。

十四年！その年月は短かい間ではなかつた。父親は全く白頭翁になり、後妻は段々腰が曲つて來た。姉は七人の子持になつて、總領の女の子は十七になつた。十二と十とになる二人の男の兒は、紺絣の羽織に長い白い紐をつけて、『伯父さん、病氣は好いの？』などと言つて入つて來た。

四

夜はやがて明方近くなつた。

「私、鳥渡、寝るからね」

七人の子持の姉はかう言つて、次の六疊の間に入つて行つた。跡には伯父だの、叔母だの、親類の人だのが集つてゐた。派手な帶をしめた今年十九になる從妹は、幾度となく線香を上げに、棺の前に立つて行つた。

金筋の一本入つた新しい軍服はランプの光の中に際立つて見えてゐる。

もう少し前、父親は墓標を室の眞中に持出して、それに官名と名と年月日とを書いた。昔、習つた父親の山陽ぶりの字は際立つて見事であつた。

傍て見て居た老いた弟は、

「兄さ、矢張上手だ」

「いくら上手でも、この年になつて、子息の墓標を書くのではな」

兄の白頭翁は、こんなことを言ひながら、太い筆に墨をふくませた。

書き終つた墓標は、墨の乾く間、暫し其處にそのまゝにして置かれた。銘旗は長押にかけられたまゝ朝風に靡いてゐた。

空はよく晴れて居た。新綠は漲るやうに古い家を包んで居た。

姉の二人の男の子は、棺の一間に皆なと同じやうにおとなしくして居るかと思ふと、庭へ出て草花を挘つたり、二階に上つて、欄干に凭りかゝつたり何かしてゐた。

其處に主人の翁が上つて來て、
「そんなところで、惡戲をして、もし落ちてもしたら、何うする？　それこそ大變ぢやぞ」
かう聲をかけて行つた。
山の手の朝は靜かであつた。薄く茫とかゝつた朝霧の中から、樹木が影のやうに其の梢を見せて居た。二階屋だの、西洋館だのがところどころに見えて、牛乳屋の車の通つて行く音が四邊に高く聞えた。井戸繩を繰る音もした。
「貴郎も少し休んだら、何うです？」
二階で死んだ子息の日記などを調べてゐる主人の翁の傍に來て、老妻がかう言ふと、
「何に、己は好い。お前こそ疲れたらう」
「いゝえ、私は好いんです……」
かう言つて、老妻は下りて行つた。
朝飯が濟んで了ふ頃には、くやみを言ひに來る人が段々多くなつてゐた。遠い親類の人達も遣て來た。
姉は六疊から起きて來て、
「何うしても眠られない。……いろんなことを考へると、眠つてなど居られない」
かう言つて、帶を緊めて、臺所の方へと出て行つた。
玄關のところで、二疊の隅に小さい机を据ゑて、死んだ人の從弟に當る十八九の青年が、小倉の袴に

黒紋附の羽織といふ扮装で、來る人々の名刺を帳面に書きつけて居ると、其處に、姉の總領の娘の十七になるのが遣つて來て、『もう、そんなに來たの、隨分忙しいわねえ』などと言つて、其處に散ばつてゐる今日の新聞を見たりした。

やがて遠くから來た伯父に當る人がヅカヅカ入つて來た。

『まア、伯父さん！』

其處に居た姉が引取つて、『よく遠い處を來て下さいました。伯父さんは、ふ忙しいし、それに遠いからと思つたんですけれど……』かう言つて、急に聲を落して、『伯父さん……太一も……とう〳〵なくなつて了つて……』

伯父は姉の淺黑い頰に涙のポロ〳〵とこぼれて落ちるのを見た。

二階には、もう大分人が集つてゐた。フロックを着たものもあれば、羽織袴をつけた人もある。白襟、紋附の女の人も一人二人は居た。和尚さんは草色の金襴の僧衣を着て、シャンと座つてゐた。

晴々した靜かな午前であつた。新綠が流るゝやうに人々の顏を照した。と、欄干の處に立つてゐた一人は、不意に、『今日はよく富士が見える！』かう言つて、其方を指し示した。人達は白い夏の雲のかゝつた富士を眺めた。

暫くすると、主人の翁は和尚さんの處に來て、何か一言二語言つた。和尚さんはすぐ立上つた。人々はぞろ〳〵と階下に下りて行つた。

八疊に六疊の二間を打通して、人々は其處に居流れて居た。棺と位牌を置いてある机とを前にして、和尙さんの長い讀經が始つた。高く透る聲と、折々鳴らす鉦の音とが靜かな空氣に震へて聞えた。四歲位になる子供を抱いた姉は眼を赤く泣腫して居た。從妹達の中には、眼を押へてゐるものもあつた。

やがて讀經が濟んで、『では御燒香を』と言つて、和尙さんは座に戻つた。白頭翁の主人はやがて立つて行つたが、燒香を終つてからも長い間頭を俛れて默禱してゐた。老妻は曲つた腰を大儀さうに其前に運んで行つた。

人々は順々に燒香した。

五

閉めて了ふ前に、人々はもう一度その棺の蓋を明けた。

「伯父さん、見て遣つて下さい！」

姉は遠い處から來た伯父を、かう言つて呼んだ。

其時伯父は二階に登らうとしてゐた。伯父はやがて引かへしてその一間に入つて行つた。白頭翁の主人と主人の弟とは最後の名殘を惜しむ人々の爲めに、棺の蓋を明けるべく準備してゐた。

「伯父さん、見てやつて下さい！」

もう一度かう言つた姉の聲は半ば泣聲になつてゐた。

父親はやがて棺の蓋を明けて見せた。白い布を取るや否、

伯父はかう言はずには居られなかつた。

「やれ〳〵こんなになつたか！」

蠟のやうに白い綺麗な鼻の隆い顔が其處にあつた。

涙の雨は再び人々の袖に灑かれた。若い從妹は顏を長い袂に掩つた。

六

棺はやがて棺臺の中に納められた。簾の下からは、棺にかけた軍服の袖の處がわざと見えるやうにして置かれた。

生花一對、造花一對、官名を書いた銘旗はやがて高くかゝげられた。姉の男の兒の一人は位牌を持ち、一人は劍と正裝した軍帽とを持つた。

古い門——其處には、あふちが往還を蔽ふばかりに深い涼しい蔭をつくつてゐた。其處て人足は肩を直した。金襴の衣を着た僧の車がやがて棺の後について行つた。行列がぞろ〳〵續いた。

行列の通つて行く路には、低い石の多い阪があつたり、古い家並の昔のまゝに並んでゐる細い通があつたりした。銘旗や、軍服の袖や、正裝した軍帽などは、路行く人の好奇心を惹くに十分であつた。

誰も彼も立留つて見てゐた。

「少尉……歩兵少尉、豪いんだね」

などと言つて、傍にわざわざ近く寄つて來る子供達もあつた。

ある町の通を通らうとした時には、上さんらしい女が二三人入口の處に立つて見てゐた。

「少尉さんよ、御覽なさいよ。そら、軍服の袖の金筋が見えるでせう。あれまでにして亡くした親の心はまア何んなでせうねえ」

「本當にねえ、やうやく出來上つたばかりですのにねえ、死んだ人も可哀相だが、親もねえ、何んなでせうねえ」

こんなことを話し合つてゐた。

學校――かれの學んだ學校の裏門を通る時には、砂埃が白く風に颺つて居た。周圍に柵を取廻した小さい其處の練兵場では、若い將校が五六人ほど頻りに馬を乘り廻してゐたが、ゆくりなくその行列を見た一人の將校は、馬を乘靜めて、手を擧げて最敬禮をした。

同じ車に乘つた二人の男の兒は、二人ともその持つてゐるものを持扱つてゐるやうに見えた。位牌と香爐とを一緒に落さぬやうに持つて行くといふことは男の兒には容易でなかつた。軍帽と劍と、それもあまり樂な荷物ではなかつた。

二人は顏を見合せたり何かした。

「それ、落ちさうだぜ」

から言つて、兄は弟の位牌を持かへさせて遣つたりした。軍帽の前立の毛は、兄の胸の處に白く見えてゐた。

電車の馳る廣い路は前に長く展けられてゐた。電車は行つたり來たりした。停留場には、派手な蝙蝠傘をさした女だの、袴を穿いた書生だのが待つてゐた。向ふ側の電車ばかり二臺も三臺も通つて行つた。暑い日影がキラキラと線路に照つた。

町の家並の盡きやうとする處には、橋が懸つてゐた。橋の下には、電車の通る路が右から左へとついてゐた。電線のうなりが凄しく四邊に聞えて、車臺の大きな電車は小山を動かしたやうに地響をさせて橋の下を通つて行つた。

白い埃の立つた練兵場はやがて行列の前に開けた。丁度練兵最中で、カアーキ色の服を着た兵士が、幾隊も幾隊も並んで行進して行くさまが、丸で活動寫眞のやうに眼の前にちらついて行つた。指揮をしてゐる士官の軍服姿も明かに浮出すやうに見えてゐた。

て、行列はその廣い練兵場の緣を廻つて行かなければならなかつた。歩いてついて行つた人達の顏からは汗が流れた。高帽子を脫いて、手巾で禿げた頭の汗を拭つてゐる古いフロックコウトの人などもあ

つた。

廣々とした、白く日に照つた道の向ふには、赤い煉瓦の洋館が屹として立つてゐた。周圍には樹木が茂つてゐた。それは陸軍大學であつた。

その前を行列が通つて行く時、父親の胸にも伯父の胸にも、「未來の參謀官」といふ字が浮んだ。陸軍大學に入らなければ、軍人になつた甲斐がない。から口癖のやうに言つた言葉が思ひ出された。

その大學の正門からは、丁度其時馬に乘つた佐官が出て來た。

草花で綺麗に飾られた花屋の店、石塔の澤山並んでゐる石屋の店――それから墓地の茶屋が幾軒となく兩側に續いた。

小さい方の會場には、もうちやんと讀經の準備が整つてゐた。中央に据ゑられた棺の前には、蠟燭がチラチラと風に動いて、生花が見事にその周圍に飾られてあつた。

三人の僧は、和尚を眞中にして、鉦々鳴したり木魚を叩いたりした。讀經の聲は高い天井に響き渡つて聞えた。

やがて和尚が引導を渡して了ふと、人々の燒香がやがて始まる。

父親と伯父と其他の親類が二三人、會場の入口の處に立つて、遠いところを會葬して吳れた禮を人々に述べた。

會場の前の梧桐の葉を透して、日影は群集の衣の上を照してゐた。

「これは深くつて好い」

伯父は傍に立つてゐる主人の翁に言つた。すぐ言葉を續いて、『一體何尺です？』

「一丈掘らせて見たんてすがな」

「一丈！　それぢや十分だ。それに此處等は水が出ないから心持が好いてすな」

かう言つて伯父は首を長くして、もう一度その深い穴を覗いた。

此處まで見送つて來た人達は、その墓の周圍に圈を描いて立つてゐた。袴羽織や、フロックコートや、白襟紋附などが其處此處に際立つて見えてゐた。

人足達はやがて細引を棺にかけて、それをする／＼と深い穴に落して遣つた。と、身内の人達は競ふやうにして、土塊を其中に投げ入れた。霰のやうな音が暫しの間棺の上に聞えてゐた。しかしそれも瞬間であつた。やがて墓は築かれて行つた。人足達は、汗を流して、四邊に積上げた土を元へと戻した。

墓標は其處に立てられた。花立、樒、香爐、新しい手桶――送つて來た人達は、その前に立つて水を手向けた。

誰も仕事を終つたやうな心持をしないものはなかつた。のんびりした氣分が四邊に充ちて居た。

「こちらは、何方のお墓ですか？」

すぐ傍にある大きな墓石を指して、かう聞いてゐる人などもあつた。と、

「それは、今日の佛の母親の墓です。これの三歳の時、死にましたんです」

かう誰かが敎へて居た。

葬儀社の人足達が棺臺を擔いでぞろ〳〵歸つて行くのが此方から見えてゐた。

少尉の軍服は大きな風呂敷に包まれて、十九になる從弟が擔いで家に持つて行くことにした。

「よく似合ふ、よく似合ふ……」

かういふ笑聲がふと墓のあたりで聞えた。何事かと主人の白頭翁が振返つて見ると、それは兄の方の男の兒が、正裝した軍帽をかぶつて、劍をヂャラつかせて、威張つて歩いて來るのであつた。

○定價　金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但清國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但　新年號春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替　にて御送金の場合は　本郷西片町十番地反省社　と指定し拂渡局を　東京市東片町局　と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金　口座は東京三十四番なり、これにより御送金の方は外に登記料一錢を加えらるべし、然らざれば送金額より差引くにより端金となりて却て面倒となるべし

一郵券代用　必ず一割增の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、座ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加えたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委托料及送達料）

一受領證請求　は必ず返信料金を要す

明治四十五年六月廿八日印刷納本
明治四十五年七月一日發行
（禁轉載）

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　藤本兼吉

發行所　反省社
振替口座東京三十四番
電話下谷九一九
電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Times of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter